

一般国道
10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集

池ノ口遺跡

福岡県築上郡新吉富村所在池ノ口遺跡の調査

1996

福岡県教育委員会

池ノ口遺跡

福岡県築上郡新吉富村所在池ノ口遺跡の調査



1. 池ノ口遺跡A地区官道



2. 官道硬化面



池ノ口遺跡B地区全景

序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所の委託を受けて、一般国道10号豊前バイパス建設予定地に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和62年度から平成6年度の間に実施いたしました。

本書はこのうち、平成4年度から6年度にかけて実施した築上郡新吉富村大字垂水に所在する池ノ口遺跡の発掘調査についての記録であります。

この遺跡では古代の官道をはじめ多くの成果を得ることができました。発掘調査の報告としては満足のいくものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、文化財愛護思想の普及、また学術研究における活用の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に際しまして数々のご協力、ご指導をいただいた建設省北九州国道工事事務所、新吉富村教育委員会、地元の方々をはじめ関係各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

例 言

1. 本書は、福岡県教育委員会が建設省地方建設局北九州国道工事事務所から委託を受けて、平成4年度から6年度に発掘調査を行った、築上郡新吉富村に所在する池ノ口遺跡についての調査成果を「一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第3集として取りまとめたものである。
2. 出土遺物の整理については、県教育庁文化課太宰府事務所と九州歴史資料館で行ったが、実施にあたり九州歴史資料館の横田義章と岩瀬正信・豊福弥生・平田春美の協力を得た。
3. 挿図のうち遺構実測図は池辺元明・秦憲二・杉原敏之・笠原勝彦・末永浩一・犬塚カヲル・木下秀子・植山千保子・友田鈴香・是石美知子・原田和代・川野礼子・園田喜代美・椋田幸子・中井美代子・横山康子が実測し、遺物実測図は、池辺・秦・杉原・平田・棚町陽子・岡由美子・久富美智子・田中典子・坂田順子・堀江圭子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子・山本千鶴美・星野恵美・小田和利が実測した。また、図面の浄書には豊福・原カヨ子の助力を得た。
4. 掲載写真のうち、遺構写真は池辺・秦・杉原が撮影し、遺物写真の撮影は九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸一の協力を得た。なお、空中写真についてはフォト・オオツカと(有)空中写真企画に依頼した。
5. 使用した方位は座標北である。
6. 本書の執筆は、B、C地区を池辺が、A地区については秦と杉原が行い、編集については池辺と杉原が分担して行った。

本文目次

I	はじめに	1
II	遺跡の位置と環境	7
III	遺構と遺物	13
1.	C地区の調査	13
(1)	住居跡	13
(2)	掘立柱建物跡	16
(3)	溝状遺構	19
(4)	水田区画遺構	21
(5)	その他の遺構と遺物	22
2.	B地区の調査	25
(1)	住居跡	25
(2)	掘立柱建物跡	77
(3)	円形周溝	78
(4)	土 壙	80
(5)	その他の遺物	81
3.	A地区の調査	84
(1)	住居跡	84
(2)	掘立柱建物	131
(3)	土 壙	136
(4)	溝状遺構	137
(5)	円形周溝	141
(6)	道路状遺構	141
(7)	足跡群	144
(8)	その他の遺物	145
(9)	その他の時代の遺物	148
IV.	おわりに	152

図 版 目 次

- 巻頭図版 1-1 池ノ口遺跡A地区官道
 - 2 官道硬化面
- 2 池ノ口遺跡B地区全景

本文対照頁

図版 1-1 池ノ口遺跡C地区全景（北から）	13
-2 C地区南半部全景（北から）	13
2-1 C地区中央部全景（北から）	13
-2 C地区中央部全景（東から）	13
3-1 C地区中央部全景（北東から）	13
-2 1号住居跡（東から）	13
4-1 2・3号住居跡（西から）	14
-2 2号掘立柱建物跡（北西から）	16
5-1 3号掘立柱建物跡（南西から）	16
-2 4号掘立柱建物跡（北から）	19
6-1 水田区画1（北から）	21
-2 水田区画2（東から）	21
7-1 B地区全景（南西から）	25
-2 B地区全景（西から）	25
8-1 B地区全景（北西から）	25
-2 B地区北半部（南から）	25
9-1 B地区中央部	25
-2 B地区中央部	25
10-1 4・5号住居跡	25
-2 6号住居跡	31
11-1 5号住居跡（東から）	25
-2 6号住居跡（南東から）	31
12-1 6号住居跡カマド	31
-2 6号住居跡屋内土壌	31
13-1 7号住居跡	33
-2 7号住居跡（北西から）	33

図版14—1	8号住居跡	38
—2	9号住居跡	42
15—1	8号住居跡（南東から）	38
—2	9号住居跡（南から）	42
16—1	10号住居跡	44
—2	10号住居跡（西から）	44
17—1	10号住居跡遺物出土状態	44
—2	10号住居跡遺物出土状態	44
18—1	11号住居跡	52
—2	12号住居跡	52
19—1	13号住居跡	53
—2	15・16号住居跡	56
20—1	13号住居跡（北東から）	53
—2	14・15・16号住居跡（北西から）	55
21—1	17・18・19号住居跡・6号掘立柱建物跡	58
—2	17号住居跡	58
22—1	20・21号住居跡	65
—2	20・21号住居跡（東から）	65
23—1	18・19号住居跡（南東から）	61
—2	22号住居跡（北から）	73
24—1	5・7号掘立柱建物跡	77
—2	5号掘立柱建物跡（西から）	77
25—1	5号掘立柱建物跡P 6	77
—2	5号掘立柱建物跡P 8	77
26	5号掘立柱建物跡P 1・P 3・P 9・P 11	77
27—1	6号掘立柱建物跡（東から）	78
—2	7号掘立柱建物跡（東から）	78
28—1	1号円形周溝・2号土壇（北西から）	78
—2	1号土壇	80
29—1	23号住居跡（南東から）	84
—2	24号住居跡（南から）	86
—3	24号住居跡カマド	86
30—1	25号住居跡（東から）	89

図版30—2	26号住居跡（南から）	92
31—1	27号住居跡（南から）	101
—2	27号住居跡遺物出土状態	101
32—1	27号住居跡カマド	101
—2	27号住居跡カマド	101
33—1	29号住居跡（南西から）	107
—2	30号住居跡（南西から）	113
34—1	30号住居跡カマド	113
—2	30号住居跡カマド	113
35—1	31号住居跡（南西から）	117
—2	31号住居跡遺物出土状態	117
36—1	32号住居跡（東から）	119
—2	33号住居跡（東から）	120
37—1	34号住居跡（南西から）	125
—2	35号住居跡（南西から）	126
38—1	35号住居跡屋内土壌	126
—2	36号住居跡（北西から）	128
39—1	37号住居跡（南西から）	128
—2	9号掘立柱建物跡・暗渠（北から）	132
40—1	3号土壌	136
—2	4号土壌	136
41—1	5号土壌	137
—2	2号円形周溝（東から）	141
42—1	足跡群（南から）	144
—2	足跡群検出状況（南から）	144
43—1	官道遠景（北から）	141
—2	官道遠景（西から）	141
44—1	官道全景（北東から）	141
—2	官道西半部	141
45—1	官道全景（西から）	141
—2	官道全景（東から）	141
46—1	官道硬化面検出状況（北東から）	141
—2	官道土層断面（北東から）	141

図版47	官道硬化面	141
48	5号住居跡出土土器	27
49	6・7号住居跡出土土器	32
50	8・10号住居跡出土土器	39
51	10号住居跡出土土器	44
52	10・17号住居跡出土土器	59
53	18・20号住居跡出土土器	61
54	20号住居跡出土土器	65
55	21号住居跡・2号土壙出土土器	71
56	23・25・26号住居跡出土土器	85
57	26号住居跡出土土器	92
58	26・27号住居跡出土土器	101
59	27・28・29号住居跡出土土器	106
60	29・30号住居跡出土土器	107
61	30・31・32・33号住居跡出土土器	114
62	33・34号住居跡出土土器	120
63	35・36号住居跡・3・5号土壙出土土器	128
64	A地区溝(A-2)2・官道側溝出土遺物(上)	139
	A地区出土玉類(中)、その他の出土遺物(下)	147
65—1	B地区出土石器	81
—2	A地区出土石器①	145
—3	A地区出土石器②	145
—4	出土鉄製品	81
66	縄文土器(上) 縄文時代の石器(中・下)	148

挿 図 目 次

	頁
第1図 豊前バイパス路線図(1:500000)	1
第2図 周辺の遺跡分布図(1/50000中津)	8
第3図 池ノ口遺跡周辺地形図(1/2000)	11
第4図 C地区遺構配置図(1/600)	12
第5図 1号住居跡実測図(1/60)	13

第6図	2・3号住居跡実測図 (1/60)	15
第7図	3号住居跡出土土器実測図 (1/3)	16
第8図	1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	17
第9図	3・4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	18
第10図	6～8号溝断面図 (1/60)	19
第11図	溝出土土器実測図 (1/3)	20
第12図	水田区画遺構断面図 (1/60)	21
第13図	水田区画遺構出土土器実測図 (1/3)	21
第14図	水田区画遺構出土瓦実測図 (1/4)	22
第15図	表採・ピット出土土器実測図 (1/3・1/4)	23
第16図	B地区遺構配置図 (1/600)	24
第17図	4・5号住居跡実測図 (1/60)	26
第18図	4号住居跡出土土器実測図 (1/3)	27
第19図	5号住居跡出土土器実測図① (1/4)	28
第20図	5号住居跡出土土器実測図② (1/3)	29
第21図	5号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	30
第22図	6号住居跡実測図 (1/60)	31
第23図	6号住居跡カマド実測図 (1/30)	32
第24図	6号住居跡出土土器実測図 (1/3)	32
第25図	7号住居跡実測図 (1/60)	33
第26図	7号住居跡出土土器実測図① (1/4)	35
第27図	7号住居跡出土土器実測図② (1/4)	36
第28図	7号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	37
第29図	7号住居跡出土土器実測図④ (1/3)	38
第30図	8号住居跡実測図 (1/60)	39
第31図	8号住居跡出土土器実測図① (1/4)	40
第32図	8号住居跡出土土器実測図② (1/3)	41
第33図	9号住居跡実測図 (1/60)	43
第34図	9号住居跡出土土器実測図 (1/3)	44
第35図	10号住居跡実測図 (1/60)	45
第36図	10号住居跡出土土器実測図① (1/4)	46
第37図	10号住居跡出土土器実測図② (1/4)	47
第38図	10号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	48

第39图	10号住居跡出土土器実測図④ (1/3)	49
第40图	10号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)	51
第41图	11号住居跡実測図 (1/60)	52
第42图	12号住居跡実測図 (1/60)	53
第43图	13号住居跡実測図 (1/60)	54
第44图	13号住居跡出土土器実測図 (1/3)	55
第45图	14号住居跡実測図 (1/60)	55
第46图	15・16号住居跡実測図 (1/60)	56
第47图	15・16号住居跡出土土器実測図 (1/3)	57
第48图	17号住居跡実測図 (1/60)	58
第49图	17号住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	59
第50图	18号住居跡実測図 (1/60)	60
第51图	18号住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	61
第52图	19号住居跡実測図 (1/60)	63
第53图	19号住居跡出土土器実測図 (1/4)	63
第54图	20号住居跡実測図 (1/60)	64
第55图	20号住居跡出土土器実測図① (1/6)	65
第56图	20号住居跡出土土器実測図② (1/3)	66
第57图	20号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	67
第58图	20号住居跡出土土器実測図④ (1/3)	68
第59图	土製品実測図 (1/3)	70
第60图	21号住居跡実測図 (1/60)	71
第61图	21号住居跡出土土器実測図① (1/4)	72
第62图	22号住居跡出土土器実測図② (1/3)	73
第63图	22号住居跡実測図 (1/60)	74
第64图	22号住居跡出土土器実測図 (1/4)	74
第65图	5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	75
第66图	6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	76
第67图	7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	77
第68图	掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)	78
第69图	円形周溝実測図 (1/60)	79
第70图	1・2号土壌実測図 (1/60)	80
第71图	2号土壌出土土器実測図 (1/4)	80

第72図	B地区出土鉄製品実測図 (1/2)	81
第73図	B地区出土石器実測図 (1/3)	82
第74図	A地区遺構配置図 (1/600)	83
第75図	23号住居跡実測図 (1/60)	84
第76図	23号住居跡出土土器・鉄製品実測図 (1/4・1/2)	85
第77図	24号住居跡実測図 (1/60)	86
第78図	24号住居跡カマド実測図 (1/30)	87
第79図	24号住居跡出土土器実測図 (1/3)	88
第80図	25号住居跡実測図 (1/60)	89
第81図	25号住居跡出土土器実測図① (1/4)	91
第82図	25号住居跡出土土器実測図② (1/4)	92
第83図	26号住居跡実測図 (1/60)	93
第84図	26号住居跡出土土器実測図① (1/3)	94
第85図	26号住居跡出土土器実測図② (1/4)	95
第86図	26号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	95
第87図	26号住居跡出土土器実測図④ (1/3)	96
第88図	26号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)	97
第89図	26号住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)	98
第90図	26号住居跡出土土器・鉄製品実測図⑦ (1/6・1/3・1/2)	99
第91図	27号住居跡実測図 (1/60)	102
第92図	27号住居跡カマド実測図 (1/30)	103
第93図	27号住居跡出土土器実測図① (1/3・1/4)	103
第94図	27号住居跡出土土器実測図② (1/3)	104
第95図	27号住居跡出土土器実測図③ (1/4)	105
第96図	27号住居跡出土鉄製品実測図 (1/2)	105
第97図	28号住居跡実測図 (1/60)	106
第98図	28号住居跡出土土器実測図 (1/4)	107
第99図	29号 a・b 住居跡実測図 (1/60)	108
第100図	29号住居跡出土土器実測図① (1/3)	109
第101図	29号住居跡出土土器実測図② (1/3)	110
第102図	29号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	111
第103図	29号住居跡出土土器実測図④ (1/4)	112
第104図	30号住居跡実測図 (1/60)	113

第105図	30号住居跡カマド実測図 (1/30)	114
第106図	30号住居跡出土土器実測図① (1/3)	115
第107図	30号住居跡出土土器実測図② (1/3)	116
第108図	31号 a・b 住居跡実測図 (1/60)	117
第109図	31号住居跡出土土器実測図 (1/3)	118
第110図	32号住居跡実測図 (1/60)	119
第111図	32号住居跡出土土器実測図 (1/3)	120
第112図	33号住居跡実測図 (1/60)	121
第113図	33号住居跡出土土器実測図① (1/3)	122
第114図	33号住居跡出土土器実測図② (1/3)	123
第115図	33号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	124
第116図	34号住居跡実測図 (1/60)	125
第117図	34号住居跡出土土器実測図 (1/4)	126
第118図	35号住居跡・屋内土壌実測図 (1/60・1/30)	127
第119図	35号住居跡出土土器実測図 (1/4)	127
第120図	36号住居跡実測図 (1/60)	129
第121図	36号住居跡出土土器実測図① (1/4)	130
第122図	36号住居跡出土土器実測図② (1/4)	131
第123図	37号住居跡実測図 (1/60)	132
第124図	37号住居跡出土土器実測図 (1/4)	133
第125図	8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	133
第126図	9号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	134
第127図	3号土壌実測図 (1/40)	134
第128図	3号土壌出土土器実測図 (1/3)	135
第129図	4号土壌実測図 (1/40)	136
第130図	5号土壌実測図 (1/40)	136
第131図	5号土壌出土土器実測図 (1/3)	136
第132図	A-1・2号溝土層断面図 (1/20)	137
第133図	A-1号溝出土土器 (1/4)	138
第134図	A-2号溝出土土器 (1/4・1/2)	139
第135図	円形周溝実測図 (1/40)	140
第136図	官道側溝出土遺物 (1/3)	141
第137図	足跡群実測図 (1/60)	143

第138図	石組暗渠実測図 (1/60)	143
第139図	A地区出土土器実測図 (1/3)	146
第140図	A地区出土玉類実測図 (1/1)	147
第141図	縄文土器実測図 (1/3)	148
第142図	縄文時代の石器実測図 (2/3・1/2)	149
第143図	黒色包含層出土土器 (1/4)	150
第144図	古墳時代以降の遺物 (1/2)	151
第145図	池ノ口遺跡と官道推定線	155

表 目 次

表 1	一般国道10号豊前バイパス関係遺跡一覧表	2
表 2	縄文時代石器観察表	151
表 3	竪穴式住居跡一覧表	154
表 4	掘立柱建物一覧表	154

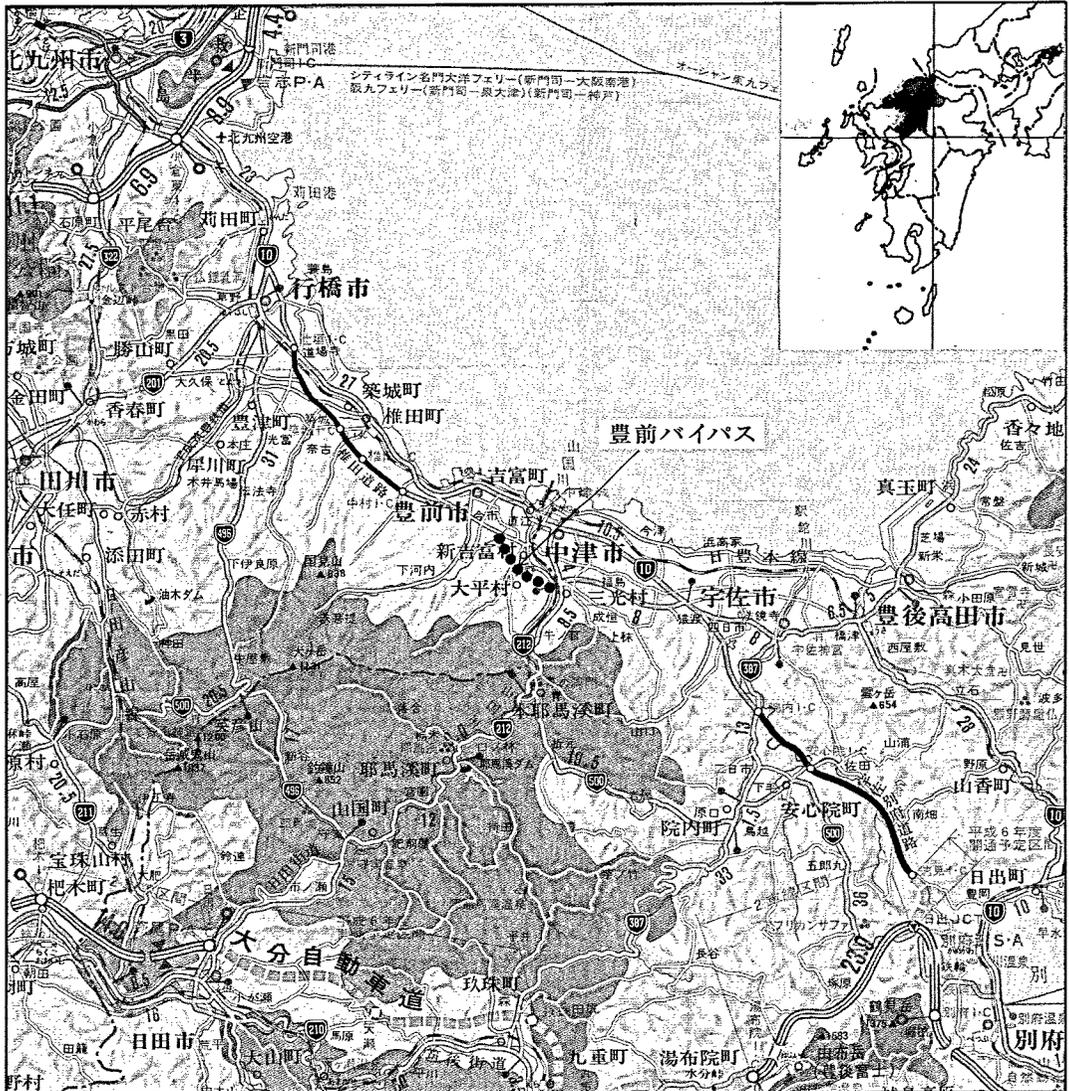
付 図

付図1	池ノ口遺跡遺構配置図 (1/300)
付図2	道路状遺構実測図 (1/100)

I はじめに

調査の経過

一般国道10号豊前バイパスは、築上郡新吉富村大字大ノ瀬を起点とし、終点の同郡大平村大字上唐原までの総延長4.44kmを二村に跨り走っている。そして、そのまま県境となる山国



第1図 豊前バイパス路線図 (1:500000、道路施設協会「九州自動車道」1993.10を改変)

表1 一般国道10号 豊前バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積 (㎡)	調査面積 (㎡)						報告書									
					62年度	63	平成元	2	3	4		5	6							
1-A		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落	40,000																
1-B	池ノ口遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落																	
1-C		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落																	
1-D	三ツ溝遺跡	新吉富村垂水	古墳～平安																	
1-E	長田遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落																	
1-F	宇野垂水遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落																	
1-G	竹ノ下遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落																	
1-H	宇野代遺跡	新吉富村垂水	縄文～平安 集落・墓地他																	
2-A	上桑野遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落・墓地	4,000																
2-B	上桑野遺跡	新吉富村垂水	近世	1,600																
3	桑野遺跡	大平村下唐原	弥生 集落	4,800																
4	大塚本遺跡	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	16,000																
5	小松原遺跡	大平村下唐原	縄文～近世	11,200																
6	上の熊遺跡	大平村下唐原	旧石器～古墳? 集落他	4,500																
7	金居塚遺跡 (旧カネツキ)	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	14,000																
8-A	上唐原遺跡	大平村下唐原	縄文・弥生～奈良 集落	18,000	10,000	2,000														
8-B	郷ヶ原遺跡	大平村下唐原	弥生～古墳 集落	6,500																
計				120,600	10,000	20,000	6,500	13,000	39,600	21,700	14,300	4,900								

川を渡れば中津バイパスと接続する。

近年の人口増加や経済発展による都市周辺への日常生活圏の拡大現象は、国道10号線の走る東九州地域においても認められる。そのような状況下で、北九州市を起点とする国道10号線の整備は当然の課題であった。その具体的な構想が北九州中心部から大分市中心部までの約136km・走行所要時間約4時間を約125km・走行所要時間約2時間に短縮する、「北大道路」整備計画である。

10号線バイパス建設において、建設省九州地方建設局と県文化課の間で埋蔵文化財に関する協議がもたれたのは昭和47年1月31日のことである。結果、ルート選定時に分布調査を行うことが決められ、48年3月26日に予備調査が行われ、50年6月6日には計画にそって分布調査が行われた。さらに、55年11月10日には、豊前バイパスについて、ルート変更の必要性和文化財所在地の記入漏れが無いかについて問い合わせあったが、11月18日にはそれぞれについて問題が無いことを解答している。その後、60年に入り県文化課は事前の発掘調査計画書を北九州国道工事事務所に提出している。結果として、豊前バイパスの発掘調査は、昭和62年度11月から平成6年度6月にかけて行われた。

今回報告のI-A、B、C地点池ノ口遺跡の調査は、平成4年度の9月1日からB、C地点より開始した。12月25日にはB地点の3分の2とC地点の全てをひとまず終了した。

平成5年度4月19日よりB地点の残り3分の1の調査を開始する。

4月20日 I-B地点起点側の遺構検出作業を行う。住居跡4軒を確認、5軒目は水没のため検出不可。

4月30日 池辺に杉原合流。排水用の溝掘りの設置と周辺の雑草除去。

5月12日 23号住居跡完掘。土壌の写真撮影。この日建設省に排水管設置の確認。

5月13日 23号住居の写真撮影を行う。24号住居跡より玉類が出土。埋土を土のうに採取しふるいにかける準備をする。

5月25日 I-A地点遺構確認開始。24・26号住居実測準備。

6月8日 32号住居跡の遺物取り上げ。33号住居跡検出。文化課一行現場視察。

6月18日 杭打ち。雨天のため、25号住居跡埋土の水洗い。梅雨により遺跡水没。

6月24日 I-A地点溝1、2の検出作業を行う。湧水のため作業困難。

7月7日 雨のため現場中止。土器の水流いを行う。

この後、増水による調査区水没と工事の進行状況から、池ノ口遺跡の調査を中断。8月後半からはI-E地点を先に調査する。

12月3日より調査を再開し、2月10日までにI-A地点東半部以南の調査を終了した。

翌平成6年度は、5月16日よりI-A地点西半部の調査開始。池辺・秦で行う。

5月20日 足跡群の検出。

5月23日 安全パトロールにより、文化課一行が現場視察。

5月31日 調査区東半で確認されていた道路状遺構（官道）の掘り下げを行う。

6月17日 I-A地点の空中写真撮影。

6月23日 九州歴史資料館・横田義章参事補佐により、道路状遺構の路面剥ぎ取り作業が行われる。現場の撤収開始。

6月24日 撤収完了。池ノ口遺跡の調査を終了する。

その後、豊前バイパスは平成7年3月に全線開通した。

調査の組織と関係者

平成4・5・6年度の調査関係者は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	4年度	5年度	6年度
所長	竹中 幸生	岩田 秀人	大内英吉郎
副所長	中山 高虎	中山 高虎	平川 輝義
建設専門官	田中 陸憲	安部 純弘	安部 純弘
建設監督官	古賀 義隆	古賀 義隆	古賀 義隆
工務課長	中山 蔵太	中川 博勝	中川 博勝
工務係長	平田 政生	徳重 英紀	徳重 英紀
調査課長	山田 茂利	山田 茂利	田中 光助
調査係長	柴田 智	柴田 智	柴田 智
建設技官	沓掛 孝	田辺 稔	田辺 稔

福岡県教育委員会

総括 教育長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜
教育次長	月森清三郎	樋口 修資	松枝 巧
指導第二部長	松枝 巧	丸林 茂夫	丸林 茂夫
文化課長	森山 良一	森山 良一	松尾 正俊
参事	松尾 正俊	松尾 正俊	柳田 康雄
”	柳田 康雄	柳田 康雄	
課長補佐	石川 元彬	清水 圭輔	清水 圭輔
文化財保護室長	柳田 康雄（兼）	柳田 康雄（兼）	柳田 康雄（兼）
室長補佐	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘
庶務 管理係長	毛屋 信	毛屋 信	杉光 誠

事務主査			安丸 重喜
主任主事	安丸 重喜	安丸 重喜	
調査 調査班総括	副島 邦弘	橋口 達也	橋口 達也
参事補佐	佐々木隆彦	高橋 章	池辺 元明
技術生査	池辺 元明	池辺 元明	
技 師	小川 泰樹	杉原 敏之	秦 憲二

調査補助員・補助 笠原 勝彦（現川崎町）、末永浩一（現大平村）、宮崎亮一（別府大学）
発掘調査では地元在住の次の方々との協力を得た。

東 正吉 小川猪佐夫 辻原 霞 山上キヨ子 黒田トシ子 前田シズヨ 久永 陸子
秋吉 弘子 友松 朝子 平田 小枝 中島ユキ子 二木 光子 桑野 早子 三浦ヤス子
熊谷トシ子 木下チヨ子 熊谷タツ子 熊谷 久子 熊谷 房子 仲 美千子 犬塚カヲル
友田 鈴香 植山智保子 木下 秀子 原田 和代 是石美知子 堀 初美 高木チエ子
小出石朝子 林田スマ子 古原千代子 古原サダカ 安元 香月 保元 文子 吉村 照子
坪根千賀子 末久 治子 則武 敦子 中原三重子 横山 康子 高橋タケ子 高村 光子

調査期間中には、濱嶋三司・宮本工・一川淳江・川本義継（福岡県文化財保護指導員）、小川国男（垂水区長）、宮秋伸一（新吉富村教育委員会）、山村信榮（太宰府市教育委員会）、飛野博文・尾佐本康子（京築教育事務所）、横田義章・小川泰樹（九州歴史資料館）、丹羽博・栗焼憲児・棚田昭仁（豊前市教育委員会）、高尾栄市（築城町教育委員会）、山本健太郎（椎田町教育委員会）、末永浩一（大平村教育委員会）、植田由美（三光村教育委員会）、などの方々のご援助ご指導を得た。記して謝意を表す。

報告書作成の経過

池ノ口遺跡からの出土遺物は、平成6年度から水洗い、接合復原作業を九州歴史資料館において実施した。そして、平成7年度に遺物実測作業、報告書作成作業を実施した。整理は年度調査順に、C・B・A地区と行ったが、平成5年度に調査したB地区北半は整理の都合上A地区と共に整理した。それゆえ、B地区北半はA地区に含め、C・B・A地区の順で報告する。

報告書作成にかかわる、平成7年度の関係者は次のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

所 長	大内 英吉郎
副所長	高崎 寿男
建設専門官	安部 純弘
工務課長	中川 博勝
工務係長	徳重 英紀

調査課長	田中 光助
調査係長	竹下 卓宏
建設技官	田辺 稔
用地課長	桑田 優二
用地係長	川崎 政義

福岡県教育委員会

総括 教育長	光安 常喜
教育次長	松枝 功
指導第二部長	丸林 茂夫
文化課長	松尾 正俊
参事兼文化財保護室長	柳田 康雄
課長補佐	元永 浩士
文化財保護室長補佐	井上 裕弘
調査班総括	橋口 達也
庶務 文化課管理係長	柴田 恭郎
同 事務主査	久保 正志

整理	福岡教育事務所生涯学習課参事補佐	池辺 元明 (整理・執筆担当)
	九州歴史資料館調査課技師	杉原 敏之 (整理・執筆担当)
	文化課技師 (兵庫県派遣)	秦 憲二 (整理・執筆担当)
整理指導員	岩瀬 正信 (接合復原)	平田 春美 (土器実測)
同	北岡 伸一 (写真撮影)	豊福 弥生 (製 図)

整理補助	原 カヨ子 関 久江 土山真弓美 岡 由美子 田中 典子 堀江 圭子
	久富美智子 坂田 順子 藤原さとみ 江口 幸子 山本千鶴美 堀之内久美子
	星野 恵美 古田 千穂 山田 智子 辻 清子 穴見 裕子 小国みどり
	高島 妙子 坂本恵津子 安永 啓子 近藤 京子 森 紀子 安武 道子
	古賀 陽子 竹田まち子 砥上トシ子 武藤 睦子 坂口 妙子 白水マサエ
	若松 和子 辻 光子 渡辺ひとみ 長野 勝子

報告書作成にあたっては、この他にも福岡県教育庁文化課橋口達也・中間研志・小池史哲・重藤輝行・吉田東明、北九州教育事務所高橋章、北筑後教育事務所赤司善彦、筑豊教育事務所水ノ江和同、京築教育事務所飛野博文、九州歴史資料館栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・小川泰樹、新吉富村教育委員会矢野和昭、大平村教育委員会末永浩一、岡山理科大学亀田修一諸氏の協力を得た。

II 遺跡の位置と環境

地理的環境

池ノ口遺跡は、福岡県築上郡新吉富村大字垂水字三ツ溝、池ノ口、池ノ下、横道にまたがり所在する。

遺跡の所在する築上郡新吉富村は福岡県の東南端の中津平野の西部にある。東は県境となる山国川を挟んで大分県中津市と接しており、西には豊前市、北には吉富町、南には大平村がそれぞれ接している。

村の南西には、山岳信仰で有名な求菩提山（782 m）をはじめ、犬ヶ岳（1131m）、雁股山（807 m）などの山々が連なっている。西方の英彦山と共にこれらの山々は、第三紀末から第四紀初頭の火山活動によって生じた角閃石安山岩や両輝石安山岩等の火成岩からなっている。また結果として生じた溶岩台地には、流れ出る水の浸蝕作用によって深く挟られた幾つもの谷地形が確認される。求菩提山にみられる、“ビュート”と呼ばれる円錐台状形もこのためである。そして、このような谷部より流れ出す各河川が中、下流域で扇状地を形成する。そのため山々は、谷部を深く挟まれた舌状に近い丘陵を幾つも残している。^(註1)更新世の堆積層（洪積層）は、その先端にわずかに残るだけで、大半は完新世堆積層（沖積層）下に埋没している。

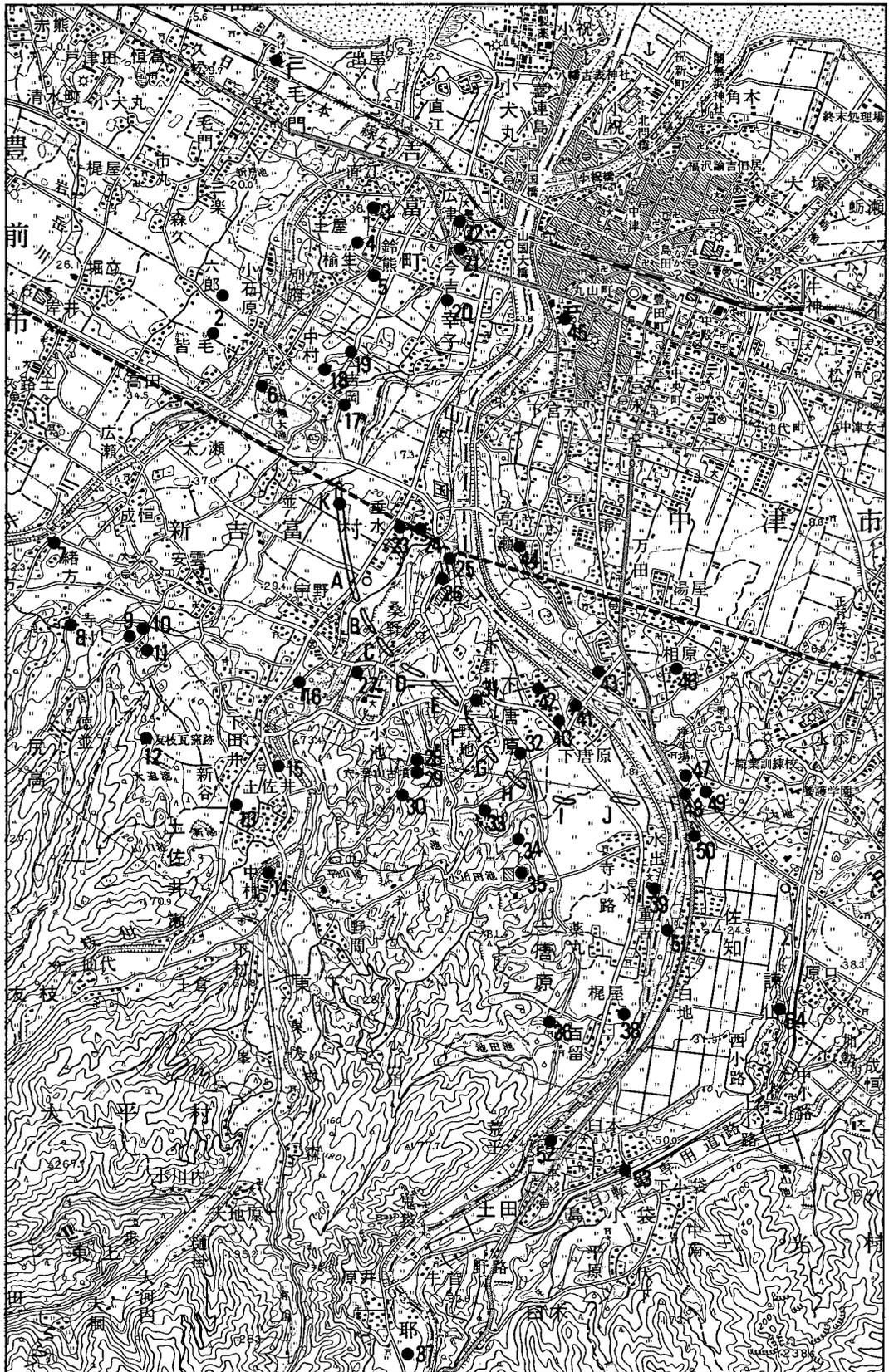
池ノ口遺跡については、黒川の東側にあたる標高約22mの台地上に立地している。

歴史的環境

山国川下流域、特に中津平野西部地域における最近の考古学的成果には目覚ましいものがある。それ等の大半は各種の開発に対する事前調査の結果として得られたものである。

旧石器時代では、層位に基づく良好な石器群が出土した例はまだ無い。それでも豊前市青畑向原遺跡では、ナイフ形石器・剥片尖頭器・細石刃核・スクレイパーが混在して出土しており、大平村桑野遺跡、上の態遺跡、金居塚遺跡でも後世の遺物に混じって出土している。^(註2)

縄文時代に入ると遺跡数は増加する。それでも、草創期～中期までの遺跡は、時期によっては欠落しており、総体的な数は少ない。草創期については未解だが早期については、豊前市吉木遺跡で押型文土器がまとまって出土している。^(註3)池ノ口遺跡の東側、垂水遺跡でも押型文土器が確認されている。この時期の遺構を伴うものとしては距離があるが、大分県下毛郡耶馬溪町粉洞穴遺跡では、早期から後期までの6層もの文化層があり、埋葬遺構が確認されている。^(註4)後期では、明確に遺構が確認できると共に遺跡数も増加する。中津市ボウガキ遺跡。^(註5)大平村上唐原遺跡、原井三ツ江、土佐井遺跡などの山国川流域や、豊前市中村石丸遺跡や、小石原泉遺跡などで竪穴住跡が検出されている。先に述べた垂水遺跡もこの時期の遺跡として認識されてい



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/50000中津)

1. 三毛門遺跡 2. 小石原泉遺跡 3. 鈴熊山古墳 4. 檢生山古墳 5. 今吉古墳 6. 離熊山古墳群 7. 緒方古墳群 8. 尻高畑田遺跡 9. 山田瓦窯跡 10. 山田窯跡群 11. 山田1号墳 12. 女枝瓦窯跡 13. 土佐井ミソノテ遺跡 14. 今藤遺跡 15. 土佐井遺跡群 16. 宇野台古墳群 17. 吉岡遺跡 18. 巨石塚古墳 19. 大塚古墳 20. 矢頭田遺跡 21. 天仲寺古墳 22. 広運寺古墳 23. 垂水庵寺 24. 垂水遺跡 25. 牛頭天王遺跡 26. 中桑野遺跡 27. 桑野代古墳群 28. 穴ヶ葉山南古墳群 29. 穴ヶ葉山南古墳群 30. 穴ヶ葉山遺跡 31. 能満寺古墳 32. 金居塚前方後古墳 33. 上ノ熊古墳群 34. 小山田古墳群 35. 血山古墳群 36. 百留横穴群 37. 原井三ツ江遺跡 38. 百留屋敷遺跡 39. 上唐原稲本屋敷遺跡 40. 下唐原屋敷遺跡 41. 下唐原宮園遺跡 42. 川下遺跡 43. 上万田遺跡 44. 高瀬遺跡 45. 高畑遺跡 46. 相原庵寺 47. 幣旗邸古墳群 48. 上ノ原横穴群 49. 助助野池遺跡 50. 佐知久保畑遺跡 51. 佐知遺跡 52. 城横穴群 53. 臼木古墳群 54. 談山遺跡群 A. 垂水地区遺跡群 B. 宇野代遺跡 C. 上桑野遺跡 D. 桑野遺跡 E. 大塚本遺跡 F. 小松原遺跡 G. 上ノ熊遺跡 H. 金居塚遺跡 I. 郷ヶ原遺跡 J. 上唐原遺跡 K. 池ノ口遺跡

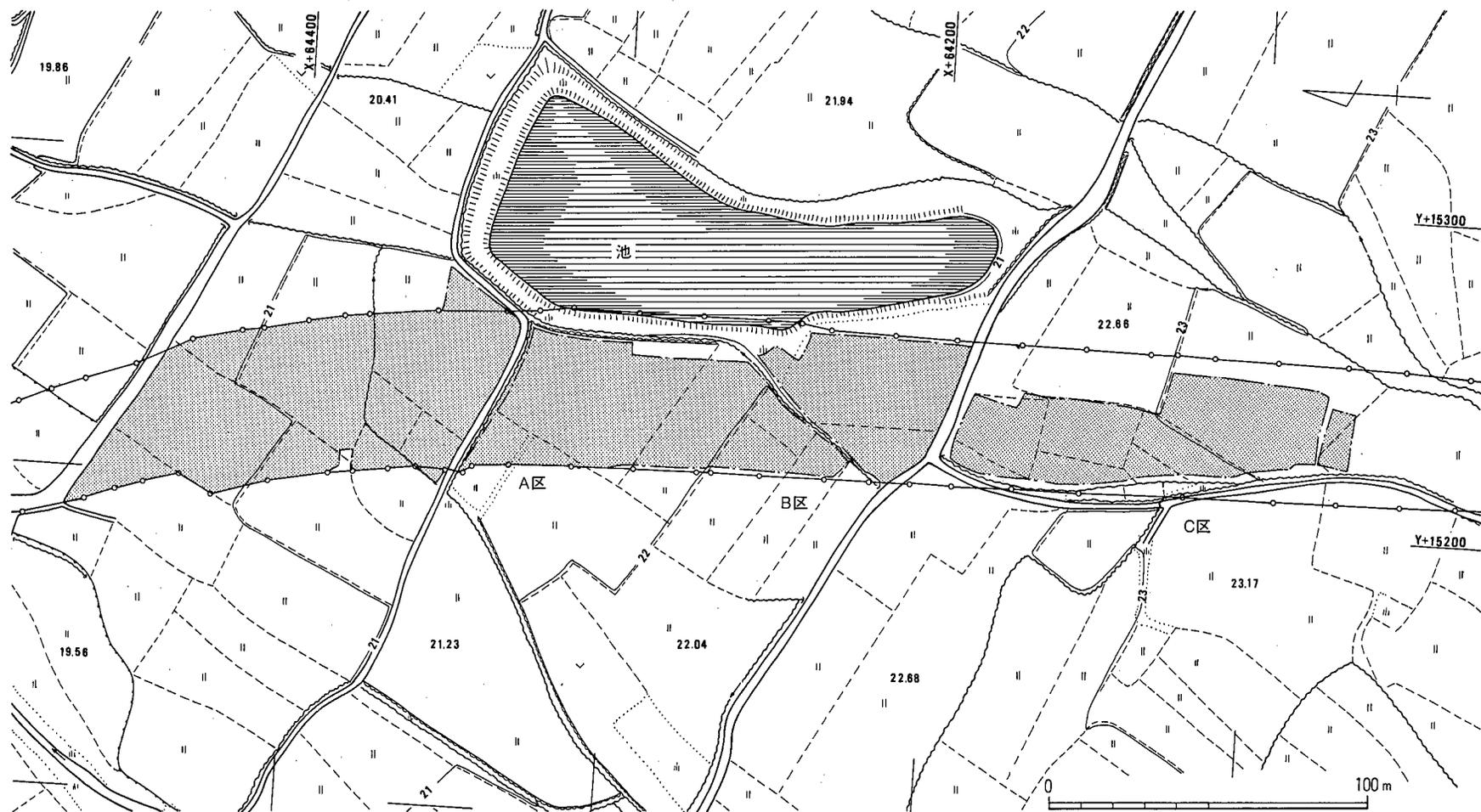
る。晩期についての実体はほとんど不明である。大平村川下遺跡では、晩期中頃の土器と石器が出土している。^(註6)

弥生時代では前期以前の資料は少ない。中期以降の資料が充実している。新吉富村中桑野遺跡^(註7)では、前期末～中期の住居跡群と土壌が、垂水高木遺跡では、中期の住居跡と土壌がそれぞれ発掘調査されている。また、中桑野遺跡の北側の牛頭天王遺跡では、山国川を自然の要害としたその左岸段丘上に大型の掘建柱建物跡が土壌と共に確認された。^(註8)この他に同時期の遺跡としては、新吉富村尻高畑田遺跡^(註9)、大平村土佐井ミゾンデ遺跡^(註10)、桑野遺跡^(註11)などがある。後期から終末期になると中津平野の所々に集落が形成される。大平村上唐原遺跡^(註12)、上唐原稲本屋敷遺跡^(註13)、豊前市小石原泉遺跡、周溝を有した住居跡が検出された中村団後遺跡^(註14)などが上げられる。この時期の住居跡群は一部途切れながらも古墳時代初頭まで続くことが多く、同一の地形を立地条件としたことがわかる。墓地遺構に関しては、大平村大塚本遺跡^(註15)で中期の方形墳丘墓や、穴ヶ山遺跡^(註16)で終末期の石蓋土墳墓群が確認されている。

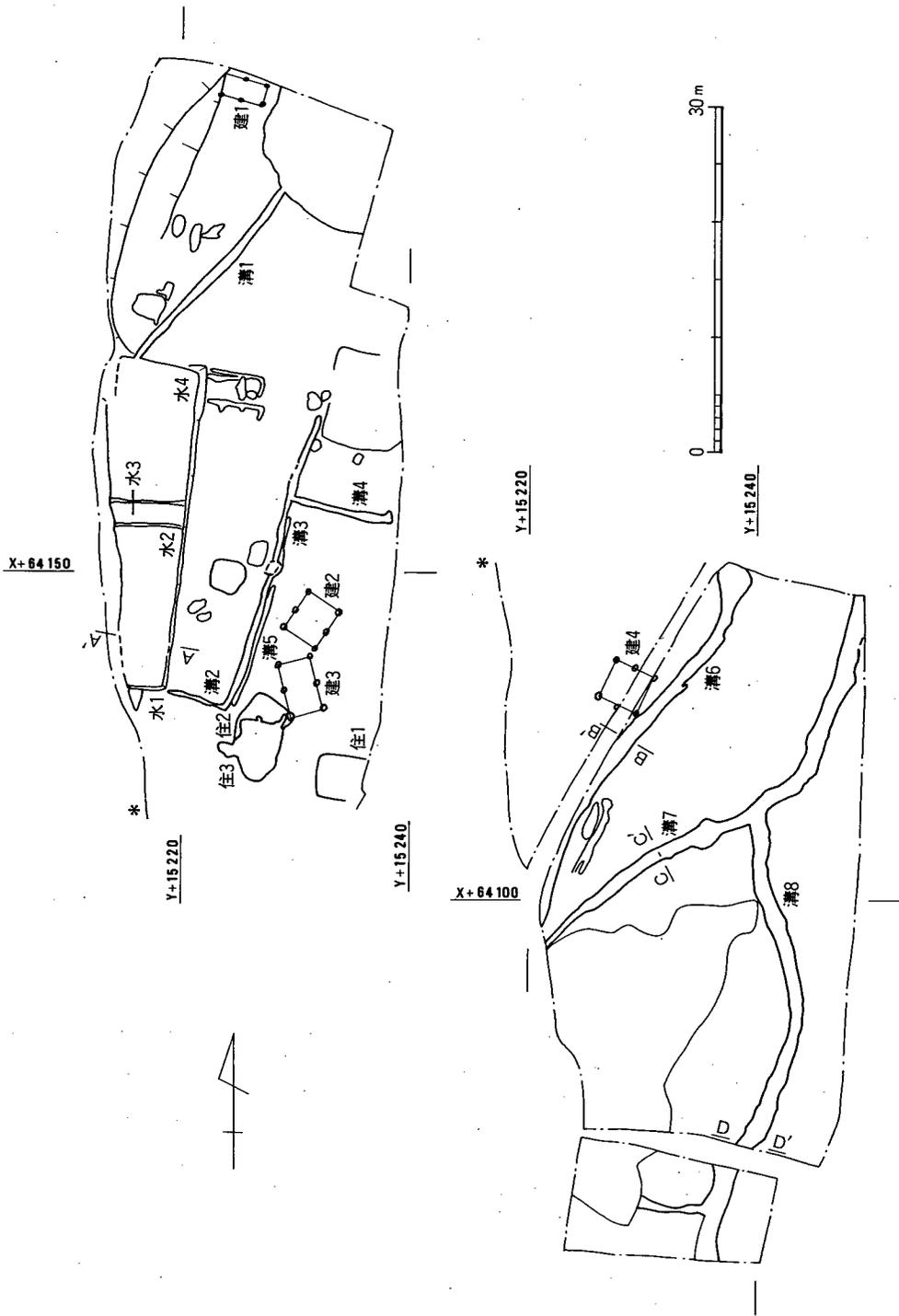
古墳時代に入っても先述した地域には、継続して集落が営まれる。今回報告の池ノ口遺跡の西方の台地上においても転々と住居跡群が確認されている。また、カマド出現の時期は5世紀の比較的早い段階のようである。この時期の集落跡には豊前市小石原泉遺跡がある。墳墓に関しては、まず古式の前方後円墳である能満寺^(註17)3号墳があげられる。在地系の副葬品から、豊前地域における前方後円墳の受容がそう一元的に単純でなかったことを物語っている。中期に比定されている古墳には近年調査された吉富町楡生山古墳がある。後期に入ると山国川流域に群集墳が集中してみられるようになる。大平村上の熊古墳群^(註18)、金居塚古墳群^(註19)、穴ヶ山古墳群^(註20)、新吉富村宇野台古墳群、桑野台古墳などである。また、山国川流域は横穴墓群が集中していることでも有名な地域で、大平村百留横穴墓群や最近調査された金居塚横穴墓群がある。また、対岸の三光村には、5世紀後半代にはじまる総数80基を越す上ノ原横穴墓群^(註21)がある。

律令期に入ると豊前地域には幾つかの寺院が建立される。山国川流域には、西岸に垂水廃寺^(註22)、東岸に相原廃寺^(註23-24)がそれぞれ建立された。ところで、垂水廃寺は新羅系軒瓦で、相原廃寺は百済系軒瓦で著名であるが、この2寺院に瓦を供給した窯としては、垂水廃寺の大平村友枝瓦窯跡^(註25)、山田窯跡群^(註26)が、相原廃寺の伊藤田窯跡群が確認されている。また、これ等の2寺院をつないで東西に走る古代の官道跡が推定されているが、池ノ口遺跡の調査成果によってさらに、補強されたと言えよう。また、平成7年、垂水廃寺の北西にあたる新吉富村大ノ瀬下大坪遺跡^(註28)において、整然と配置された掘立柱建物跡群が検出された。建物跡の規模と配置状況から「上毛郡衙」と考えられている。これ等一連の成果により、古代の役所と寺院が道で結ばれ、そこを往来する人々の姿が我々の目前に浮かんでくる日もそう遠くないだろう。

- 註1 大平村誌編集委員会 1986 『大平村誌』
- 2 小池史哲 1989 「豊前地方の旧石器」『豊前市史 上巻』豊前市
- 3 高橋章編 1989 『吉木遺跡』福岡県文化財調査報告書 第84集
- 4 賀川光夫 1987 「原史」『本邪馬溪町史』本邪馬溪町
- 5 村上久和編 1992 『ボウガキ遺跡』三保の文化財を守る会、中津市教育委員会
- 6 小池史哲 1993 「豊前地方の縄文時代遺跡」『豊前市史 考古資料』豊前市
- 7 馬田弘稔編 1978 『中桑野遺跡』新吉富村文化財調査報告書 第3集
- 8 飛野博文・杉原敏之編 1994 『牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡』新吉富村文化財調査報告書 第8集
- 9 緒方泉編 『尻高畑遺跡』新吉富村文化財調査報告書 第7集
- 10 伊崎俊秋編 1991 『土佐井ミソンデ遺跡』大平村文化財調査報告書 第7集
- 11 福岡県教育委員会が豊前バイパス建設に先立ち発掘調査実施。現在整理中。
- 12 小池史哲編 1995 『上唐原遺跡Ⅰ 一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 2』
福岡県教育委員会
- 13 山国川堤防建設に先立って福岡県教育委員会が発掘調査を行った。現在整理中。
- 14 武末純一 「豊前市地域の弥生時代遺跡」『豊前市史 考古資料』豊前市
- 15 福岡県教育委員会が豊前バイパス建設に先立ち発掘調査を行った。現在整理中。
- 16 飛野博文編 『穴ヶ葉山遺跡』大平村文化財調査報告書 第8集
- 17 飛野博文編 『能満寺古墳群』大平村文化財調査報告書 第9集
- 18 上野精志・小池史哲編 1978 『上ノ熊古墳群』大平村文化財発掘調査報告書 第1集
- 19 酒井仁夫 1985 『穴ヶ葉山古墳群』大平村文化財調査報告書 第3集
- 20 高橋章編 1990 『宇野台古墳』新吉富村文化財調査報告書 第5集
- 21 村上久和編 1989・1991『上ノ原横穴墓群Ⅰ・Ⅱ 一般国道10号線中津バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告』
- 22 森田勉編 1976 『垂水廃寺』新吉富村文化財調査報告書 第2集
- 23 賀川光夫 1955 『豊前中津市相原廃寺調査報告』中津市教育委員会
- 24 栗焼憲児編 1989～91『相原廃寺Ⅰ～Ⅲ』中津市文化財調査報告 第7・8・10集
- 25 高橋章編 1976 『友枝瓦窯跡』大平村教育委員会
- 26 註22に同じ
- 27 栗焼憲児編 1985 『伊藤田城山窯跡群』中津市文化財調査報告 第5集
- 28 1995年現在、新吉富村教育委員会が発掘調査実施中



第3图 池ノ口遺跡周辺地形図 (1/2000)



第4图 C地区遺構配置図 (1/600)

Ⅲ 遺構と遺物

1. C地区の調査 (図版1・2・3、第4図)

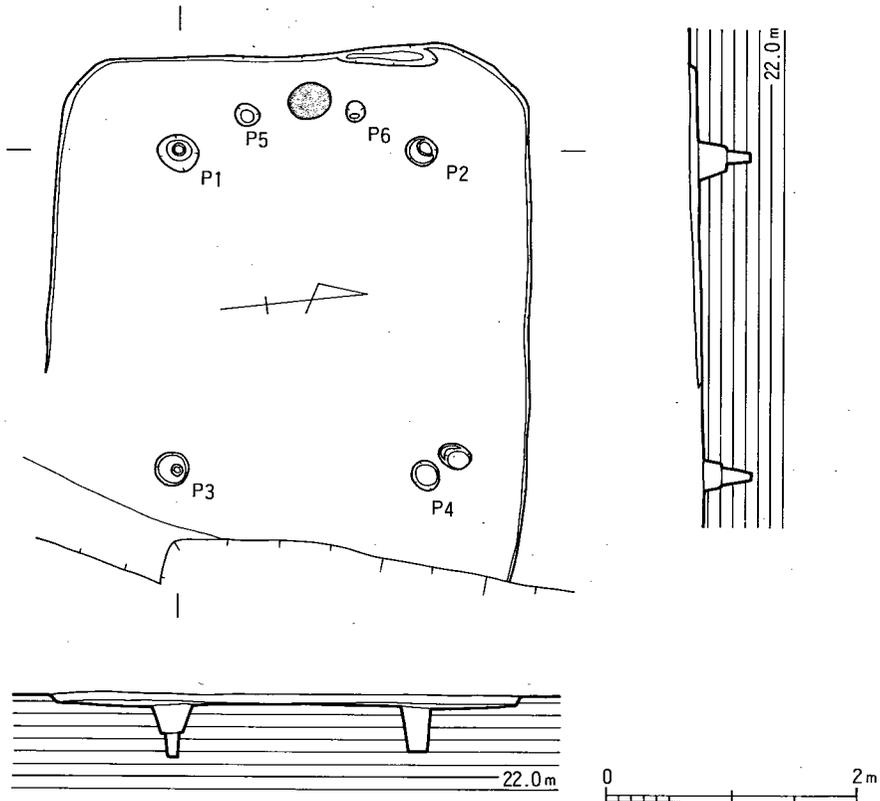
池ノ口遺跡C地区の立地しているのは舌状の微高地である。調査区の南半部は泥湿地でこれを挟んで南側に三ツ溝・長田などの遺跡が存在する。B地区の集落地とは南西側から入っている小谷によって隔てられており遺構も一旦とぎれる。東の垂水廃寺側にも北東側の池に続く谷が入るものと考えられる。

C地区の遺構は竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡4棟、溝状遺構8、水田区画4、ピット群である。以下説明を加える。

(1) 住居跡

1号住居跡 (図版3-2、第5図)

1号住居跡はC地区中央部東側から発見された住居で、東側壁と上部は水田の開墾によって



第5図 1号住居跡実測図 (1/60)

削平されている。平面形態は東西が長い隅丸長方形を呈する。主軸方向はN80°Wを示す。規模は西側短壁で3.7m、北側の長壁は4.1mまで測ることができる。壁高は西側で6cm前後が残るが東側はほとんど残っていない。支柱穴はP1～P4で、直径25～40cm、深さ40cm前後である。P1・P2の柱痕から使用された柱の直径は10cm強と推定できる。西側中央床面で径30cm～35cmの円形に焼土が残っている。この両側に直径20cm、深さ8cm前後の浅いP5・P6がある。西壁の一部に長さ80cmの溝がある。出土遺物もなく、造られた時期等は不明である。

2号住居跡（図版4-1、第6図）

1号住居跡西側約4mから発見した住居跡で南側を3号住居跡によって切られる。また、北東のコーナーは3号掘立柱建物跡P6によって切られており全体の形態は不明である。残存する北辺は長さ3.3mを測る。床面には4個のピットが確認できたが支柱穴は不明である。P3は径約40cm、深さ40cmを測る。東側に幅15cm、深さ5cm前後の溝がある。このすぐ外側に東壁が立上がるものと考えられる。北側壁の内側に示す破線は、掘り下げの段階で土色の変化を確認したところであるが壁の立上りは認められなかった。床面から遺物は出土していない。

3号住居跡（図版4-1、第6図）

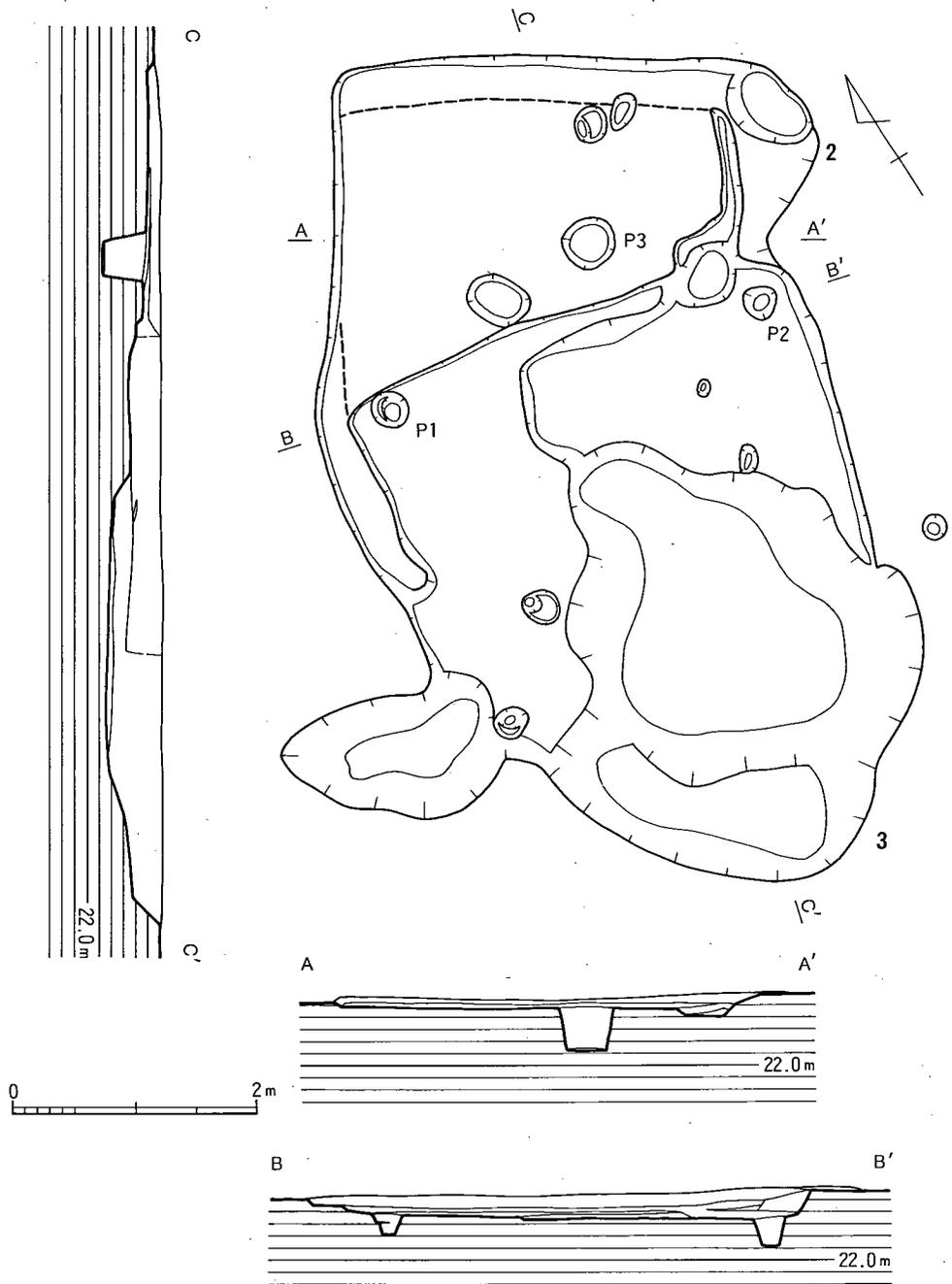
2号住居跡と重複し、2号住居跡の埋没後に造られる。南半部は不整形の土壌によって破壊されている。したがって全体の形態については不明である。残存する北辺の長さは約3.8mを測る。東辺部の残存状況から東西に長い長方形プランを呈するものと推定できる。支柱穴はコーナー内側に残るP1・P2の位置から4本柱と考えられるが確実ではない。直径25cm前後、深さはP1が18cm、P2が25cmを測る。遺物は、遺構検出時に須恵器杯身、土師器壺、南側の土壌埋土から須恵器甕がいずれも小破片で出土した。

出土遺物（第7図）

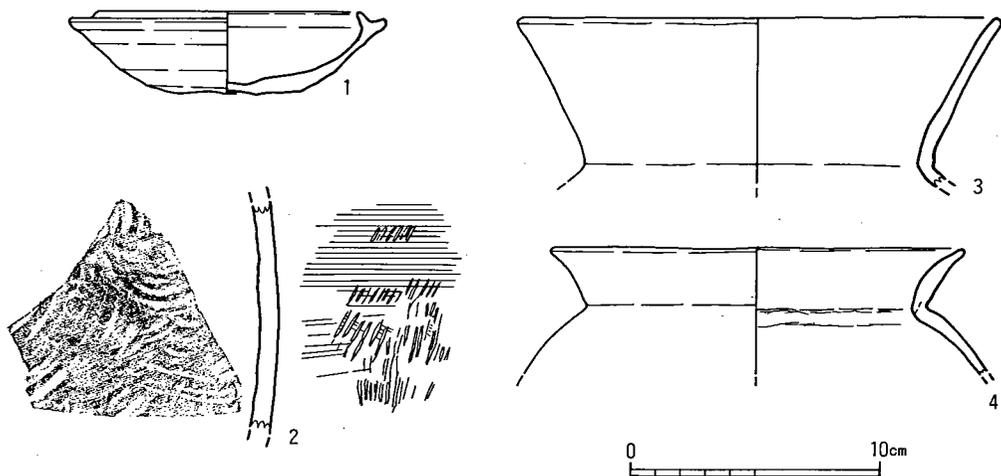
須恵器杯身(1) 蓋受けのかえりをもつ杯身で、底部外面はヘラ切り後ナデ、一部に工具痕が残る。体部外面は回転ヘラ削り、底部内面はナデ、他はヨコナデ調整。灰黄色に焼成されている。

須恵器甕(2) 甕の胴部破片で、外面は平行叩き目とカキ目調整で、内面には同心円当て具痕が残る。青灰色を呈し焼成は良好である。

土師器壺(3・4) 4は直線的に開く口縁部破片で、磨滅のため調整不明、復原口径19.1cm。5は緩やかに外反する口縁部をもつ。頸部には粘土の継目が明瞭である。復原口径16.4cm、灰黄褐色に焼成される。



第6图 2·3号住居跡実測図 (1/60)



第7図 3号住居跡出土土器実測図 (1/3)

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第8図)

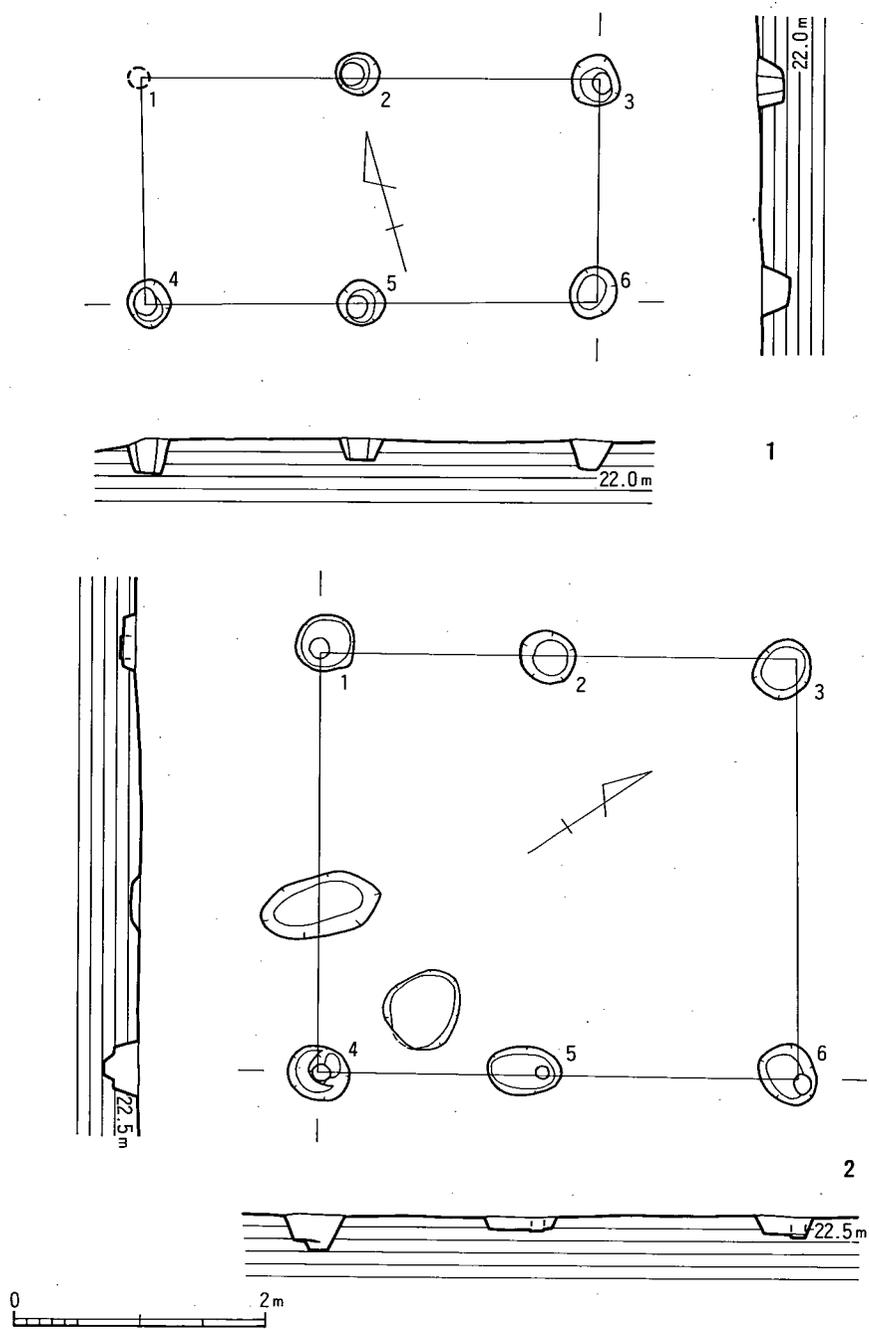
調査区の北端に位置する。東側及び西側は後世の削平によって遺構は存在しない。柱穴のうちP1にあたる部分は確認できなかった。主軸をN74°Wに向ける1×2間の建物で梁間1.7m、桁行3.6mの規模をもつ。柱穴は直径35cm~40cm、深さは15cm~24cmを測る。柱痕はP2・P3・P4・P5で確認することができた。直径15cm前後である。柱穴内から遺物は出土していない。

2号掘立柱建物跡 (図版4-2、第8図)

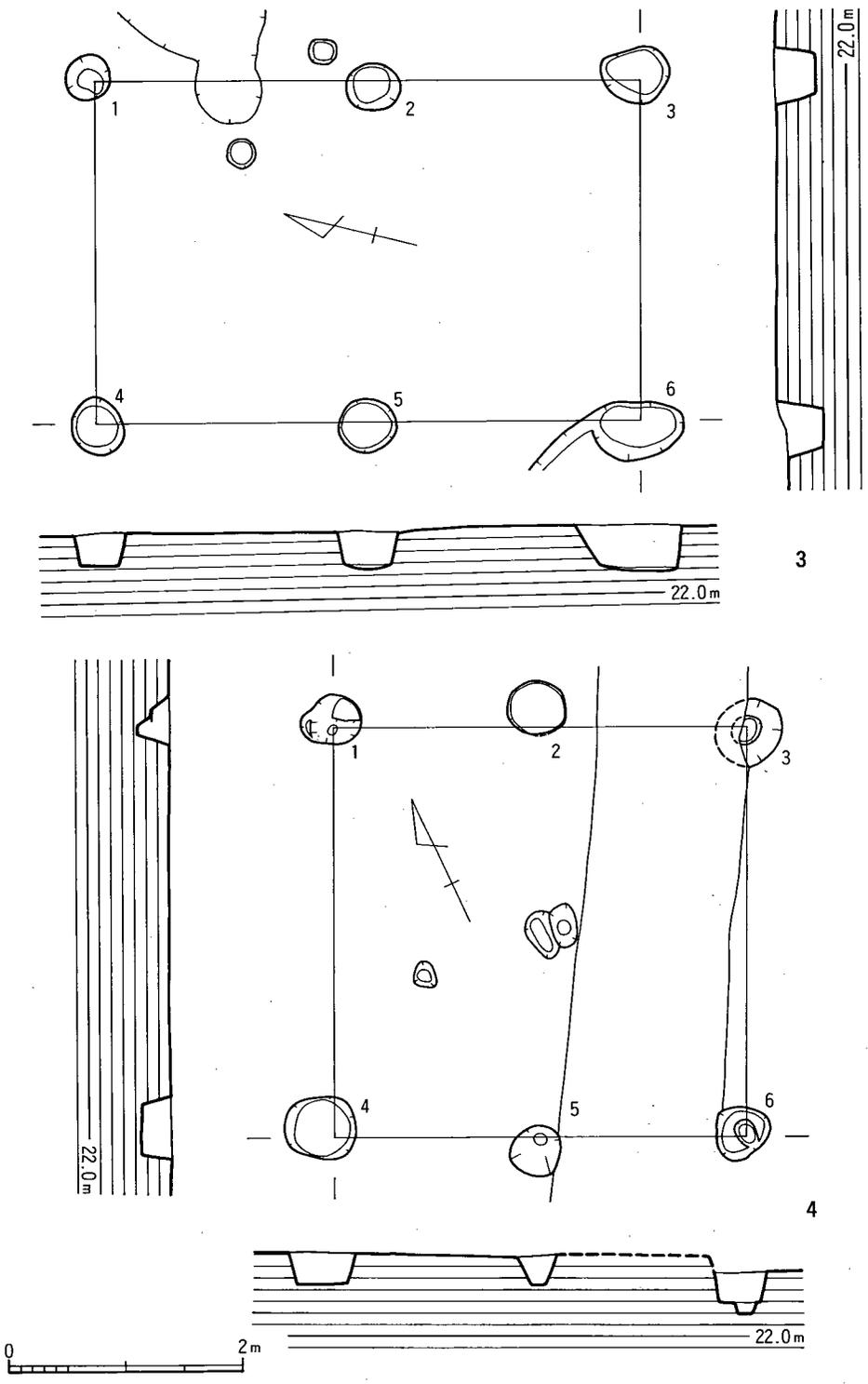
調査区中央部で発見した建物で3号掘立柱建物跡と隣接するが方向は異なる。主軸をN35°Eに向ける1×2間の建物で、梁間3.35m、桁行3.77mの規模である。柱穴は直径40cm~55cm、深さはP4が30cmと深く、他は10cm~15cmほどの大きさである。柱痕はP1・P4・P5・P6で確認できた。確認面での直径は15cmほどである。柱穴内から遺物は出土しなかった。

3号掘立柱建物跡 (図版5-1、第9図)

調査区の中央部で、1号・2号・3号住居跡と2号掘立柱建物跡に挟まれて位置する。2号住居跡の北東隅で重複するが、住居跡より新しい。主軸N14°Wに向ける1×2間の建物で、梁間2.9m、桁行4.6mの規模である。柱穴はP6が70cm×50cmと大きい、他は40cm~50cmである。深さは30cm~40cmを測る。柱痕は確認することができなかった。遺物はP2・P6から土師器の小破片が出土したが図示できる資料ではない。



第8图 1·2号掘立柱建筑物迹实测图 (1/60)



第9图 3·4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

4号掘立柱建物跡 (図版5-2、第9図)

調査区の南側、現在の畦を跨いで位置する。東側には6号溝状遺構、西側にはピット群が存在する。1号住居跡とは南に約10mはなれる。主軸をN65°Wに向ける1×2間の建物である。梁間3.5m、桁行3.5mで方形のプランに柱を配置している。柱穴は直径40cm~60cm、深さ30cm~50cmの大きさである。柱痕は確認することができなかった。柱穴内からの出土遺物はない。

(3) 溝状遺構

C地区区内で8本の溝状遺構を確認した。この内1~5号溝については幅30cm、深さ10cm前後の小溝で、埋土から見てもごく最近まで水田の側溝として使用されていたものと考えられる。また、4号掘立柱建物跡の東側で南西から北東に掘り込まれた6号溝についても現在の畦の線とほぼ平行で、中ほどから南側は何度も掘削されて複数の小溝となる。埋土も新しく、最近まで使用されていた水田の側溝と考える。これらの小溝からの出土遺物はない。

7号溝 (図版1、第4・10図)

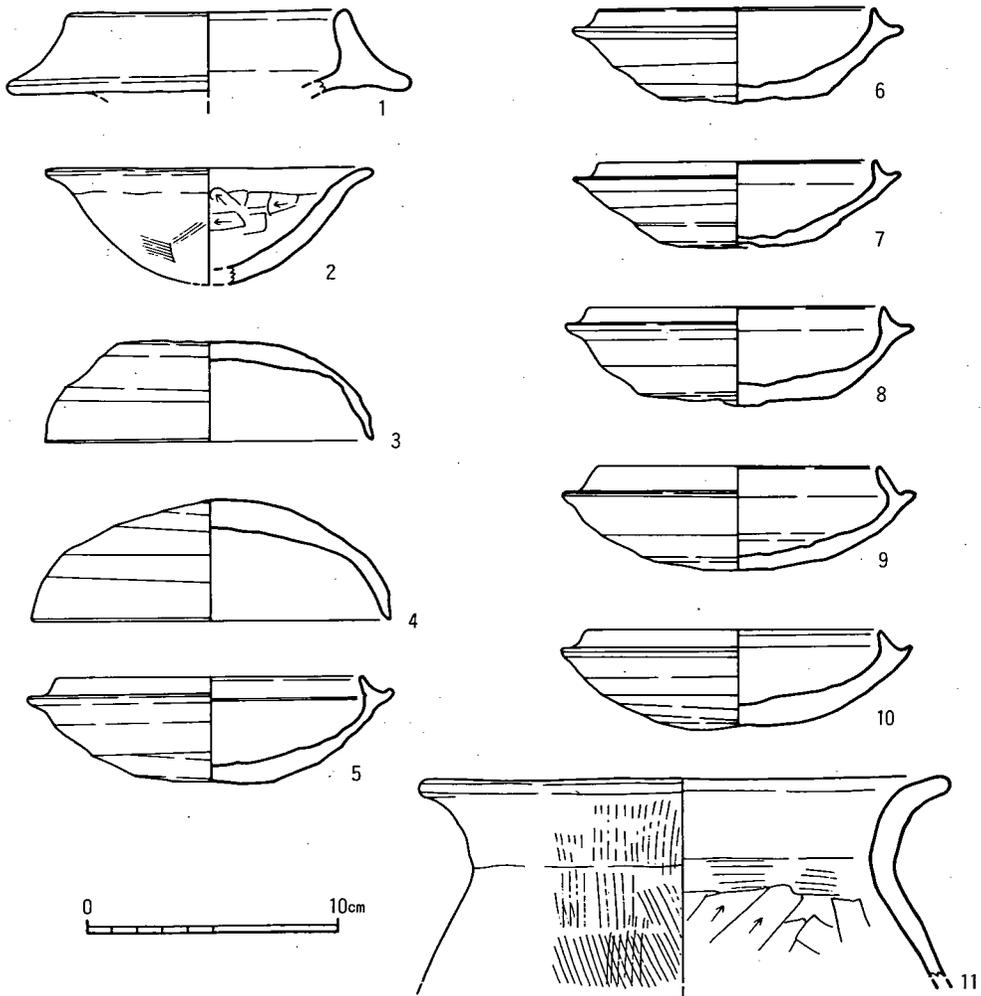
調査区南半部で発見された溝で、南西から北東側に流下して溝8に流れ込む。長さ約20mを確認した。南西側端から4.5mまでは、上縁で幅35cm前後、深さ18cm前後の溝で、この部分から溝8の合流地点までは、上縁で幅1.0m前後、深さも30cm~35cmを測る溝になる。標高は南西側で22.46m、北東側21.93で標高差は約50cm程である。溝の断面形は逆台形を呈する。溝内には黄褐色砂粒が多く含まれた黒色の粘質土が堆積していた。溝内から須恵器・土師器の小破片が出土している。

8号溝 (図版1、第4・10図)

調査区の南半部で発見された溝で、調査区の東寄り南北方向に蛇行する。調査区南端から4m程で小溝と合流し、30m付近で左に曲がってやや北西向きになり、40m付近で溝7と合流し北東に向きをかえ流下する。溝の長さは約60mである。溝底の標高は南端で21.9m、北端で21.6mで30cmの標高差がある。溝幅は上縁で1.2m~1.6m、深さ約50cmで一定しているが、南端部での土層観察では、溝幅を狭めて作り替えられている。勇水の中でポンプを使いながらの



第10図 6~8号溝断面図 (1/60)



第11図 溝出土土器実測図 (1/3)

調査であったため、その規模については明確にすることができなかった。溝内から須恵器・土師器が出土している。

出土土器 (第11図)

壺(1) 屈曲部が飛び出す複合口縁壺の口縁部破片で、復原口径11.4cmを測る。口縁部は短く内傾する。口縁端部と屈曲部端部は丸く仕上げられている。器壁は風化し調整は不明。胎土には細砂粒、角閃石、赤褐粒を含み、白黄褐色に焼成される。

土師器椀(2) 丸底の椀に外反する短い口縁部が付く。復原口径13cm、器高4.7cmを測る。風化が進むが外側はハケ目の後ナデ、内面はヘラ削り調整。胎土には多量の細砂粒、雲母、角閃石を含む。口縁部から体部上位は白黄褐色、他は黒色を呈する。

須恵器杯蓋(3・4) 3は口径13.1cm、器高4.0cmの大きさで、天井部は平坦である。天井部外見はヘラ切り未調整。4は口径14.2cm、器高4.8cmの大きさで、天井部は丸味をもつ。灰白色を呈し、焼成は不良である。

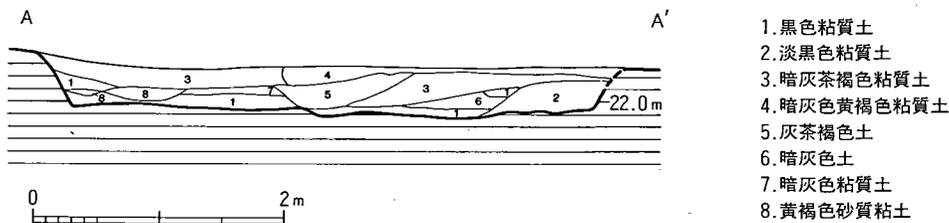
須恵器杯身(5~10) 蓋受けのかえりをもつ杯身である。たちあがりは短く内傾する。底は6・7・8がヘラ切り未調整で平坦である。他は回転ヘラ削り。口径は11cm~12.1cm、器高は3.7cm~4.2cmである。焼成は全体にやや軟質のものが多い。

土師器甕(11) 外反する口縁部破片である。端部は丸くつくられ、器壁は厚い。口縁部から頸部外面は粗い縦ハケ目の後ヨコナデ。頸部内面は横ハケ目の後ナデ、以下はヘラ削りされている。胎土には多量の細砂粒、赤褐色粒を含み、暗黄茶褐色に焼成される。外面に煤が付着する。

(4) 水田区画遺構 (図版6、第4・12図)

調査区北半部の中央西側に発見した区画された落ち込み遺構である。

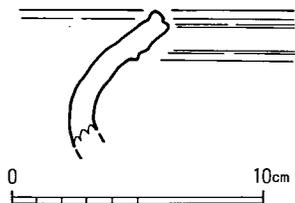
遺構確認時には調査区西側を走る溝として考えていた部分である。この一部を断ち割り、溝の規模と断面観察を行った。この結果、溝としていた黒色土は黄褐色粘質土の下に潜る状態が確認され溝としては不自然であることが判った。西側の水路側から礫を含む黄褐色土で埋め立てを行ったもので東寄りにはこの黄褐色土が及ばなかったことによって溝の様にみえたものと判断された。さらに北側の隅にはほぼ直角なコーナーが認められたため、落ち込みの中にある畦状の突起部を露呈することとした。この結果、落ち込み全体の中に4つの区画をもつことが確認でき、南側から水田区画1~4とした。



第12図 水田区画遺構断面図 (1/60)

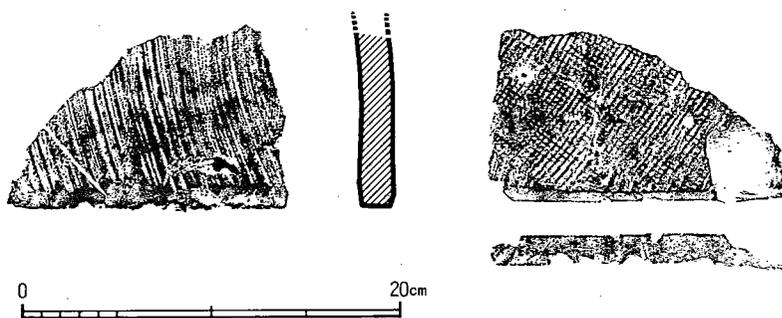
水田区画1は南端で北東隅のコーナーを確認しただけで規模等は不明である。深さは25cm程である。水田区画2とは幅25cm前後の畦で区切られる。

水田区画2は、南北に長い長方形を呈すると考えられるが西側は調査区外で詳細は不明である。東辺は14m、北辺は5.5m、南辺は約3m確認できた。現地表からの深さは25cm前後である。水田区画3とは幅20cmの畦で区切られる。



第13図 水田区画遺構出土土器実測図 (1/3)

水田区画3は東西に長い長方形を呈する。東辺は約2m、南北辺は6mまで確認した。現地表からの深さは25cm程度で、



第14図 水田区画遺構出土瓦実測図 (1/4)

水田区画4とは幅約20cmの畦で区切られる。

水田区画4は、南北に長い長方形を呈し、南西側隅をのぞいて3コーナーを確認することができた。長辺11.2m、短辺5.8mで約65㎡の規模となる。現地表からは28cm前後の深さである。

埋土と地山の境目の直上で、南北方向に軸を向けてなぎ倒された草が認められた。どのような原因によるものか判断できないが、この段階で区画内に草が茂っていたのはまちがいない。

埋土中からこの水田区画の時期を決定する資料は得ることができなかった。遺物としては須恵器甕・平瓦の破片が出土した。

出土遺物 (図版64)

須恵器甕(第13図) 大きく外反する大甕の口縁部破片である。灰色を呈し、焼成は良好である。口縁部に灰かぶりが認められる。

平瓦(第14図) 端面付近を残す破片資料である。厚さ1.8cm。粘土板樋巻き作りによるものか。凸部に一辺4mm前後の方形格子が斜位に叩打され、局部をナデ消す。凹部は布目を板状工具で強くナデ消す。端面近くはヨコナデする。端面は凸面側に面取りを施す。焼成は内部が灰黒色、さらにその外側が橙褐色～灰白色に発色し、須恵器に近い。

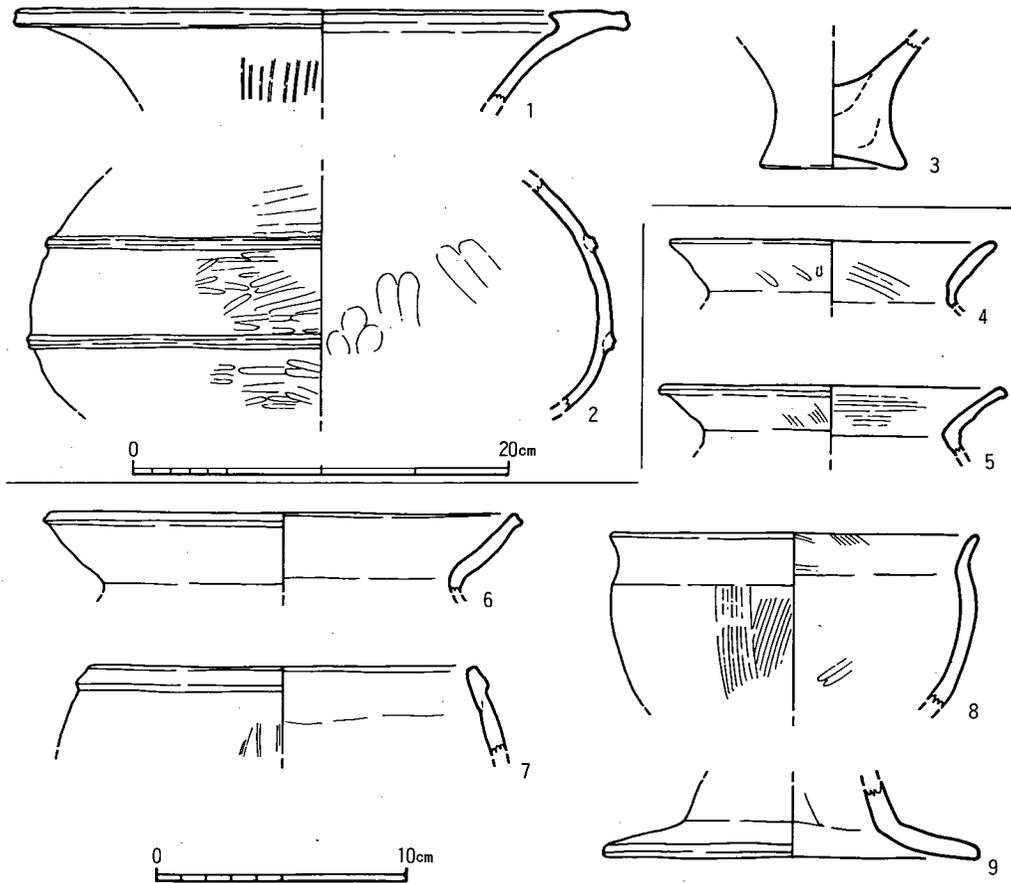
(5) その他の遺構と遺物

表面採集およびピット内出土土器で図示できた資料について説明する。いずれも破片で口径等は復原である。

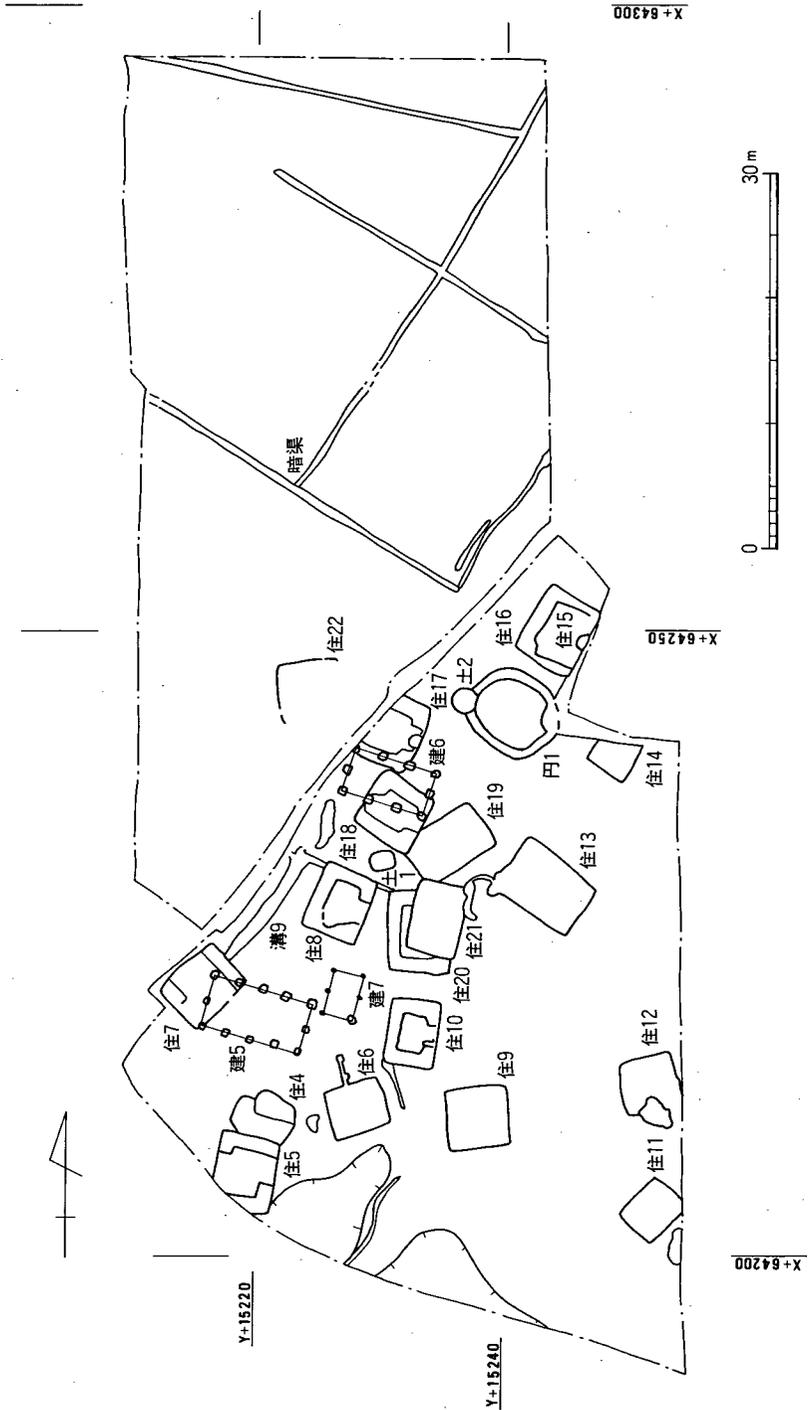
出土土器 (第15図)

1は広口壺で鋤形口縁部の破片である。復原口径24.4cm。口縁部ヨコナデ、他はナデ調整。頸部外面に残るのは粗いハケ目か。2は壺の胴部片で、胴部最大径は30.8cmで、この上下に台形凸部を付ける。外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデ調整され、数ヶ所に指圧痕が見られる。胎土には僅かな砂粒、角閃石、赤褐色粒を含み、焼成は良好である。3は甕の上底の底部破片である。復原底径7.8cm。外面は2次加熱を受け赤変している。1号住居跡横での表採。4

~6は甕の口縁部破片。4は復原口径13.0cm。外反し端部は丸い。5は緩やかに外反する口縁部の破片で端部は僅かに下方へつまむ。復原口径13.4cm。6は中央部やや内彎する。端部は平坦面をもつ。復原口径18.6cm。7は鉢で口縁端部を肥厚させ段をもつ。体部外面はハケ目、他はナデられる。復原口径15.4cm。8は椀で、口縁部は短く外反する。体部外面はハケ目、他は風化が進みはっきりしない。復原口径15cm。9はラッパ形に開く高杯の脚部破片。脚柱部内面は削り、他はナデ調整。復原底径15cm。淡明茶褐色に焼成される。



第15図 表採・ピット出土土器実測図 (1/3・1/4)



第16图 B地区遺構配置図 (1/600)

2. B地区の調査 (図版7・8・9、第16図)

B地区はC地区と農道を挟んで北側に位置する。地形的には小谷を一つ挟むことになる。東側には北東側にある池に続く泥湿地が広がる。調査区の南半部には多くの住居跡が存在するが水路を挟んだ北側は削平を受けて確認した遺構は住居跡一軒だけであった。この北側にはまた泥湿地の黒褐色土が広がっている。ここには暗渠が見られただけで他の遺構は存在しない。この泥湿地のさらに北側にはA地区の集落がある。

池ノ口遺跡の中心であるB地区の集落は西側の黒川が形成した河岸段丘上に展開していくものと考えられる。

B地区で発見された遺構は、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡3棟、土壇2、円形周溝遺構1、ピット等である。

(1) 住居跡

4号住居跡 (図版10-1、第17図)

調査区の南側端の5号住居跡と重複し、5号住居跡より古い。東南と北西の壁が対応するものと考えて住居跡として調査を行った。しかし形態も不整形で、支柱穴も発見できない。住居跡とする要素が少ない。さらに北東側を不整形土壌によって破壊されている。遺物は埋土から若干出土した。

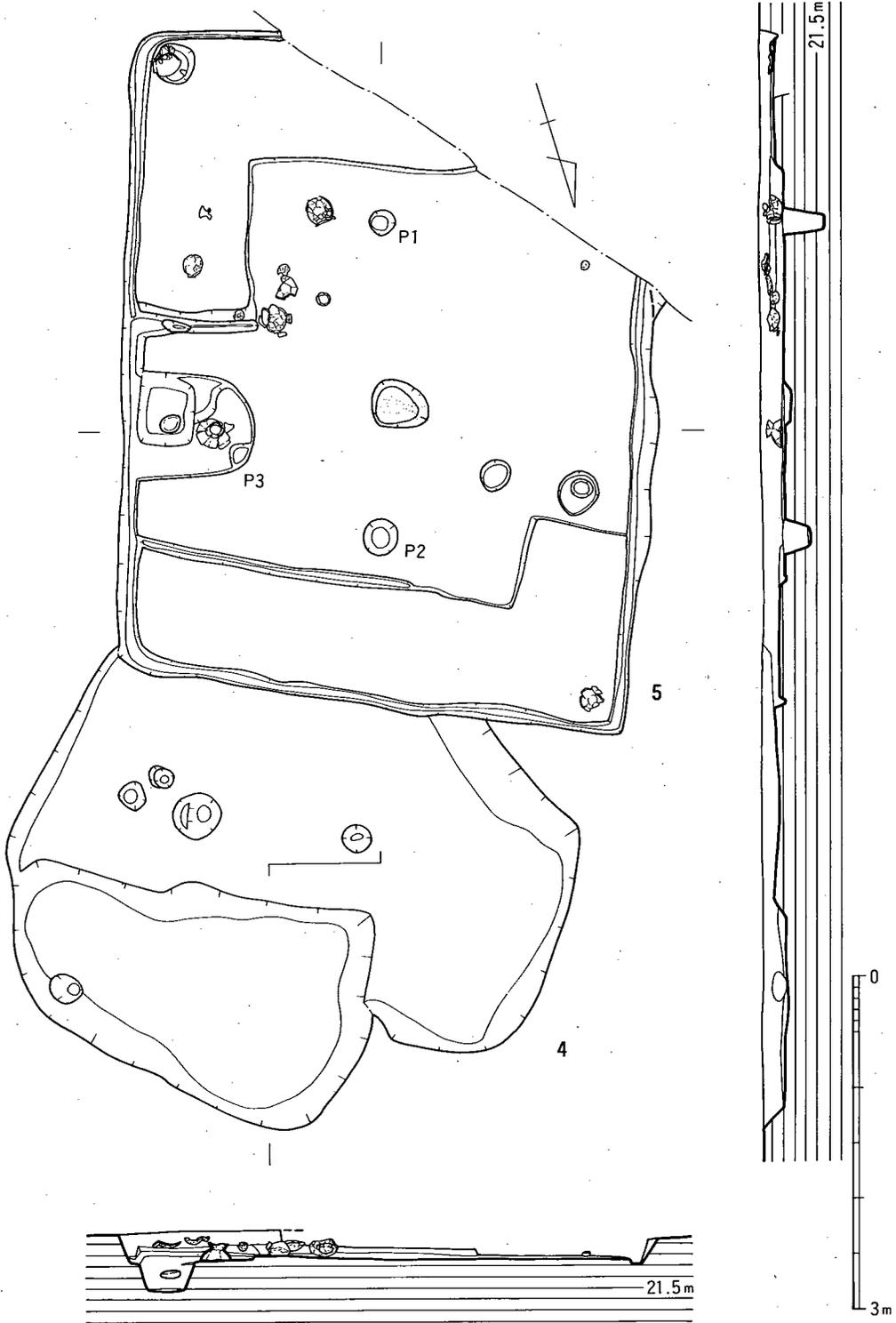
出土遺物 (第18図)

高杯(1~3) 1は杯部破片で復原口径15.0cm。口縁部は外反し、端部は丸くつくられる。底部と体部の境は粘土継目が明瞭である。2は脚柱部の破片で内面は横方向のヘラ削り、裾部の境付近に点状に工具痕が残る。他は風化のため調整は不明である。3は歪みをもつ裾部破片で、復原底径12.0cmである。脚柱裾外面に縦方向のハケ目が残る。

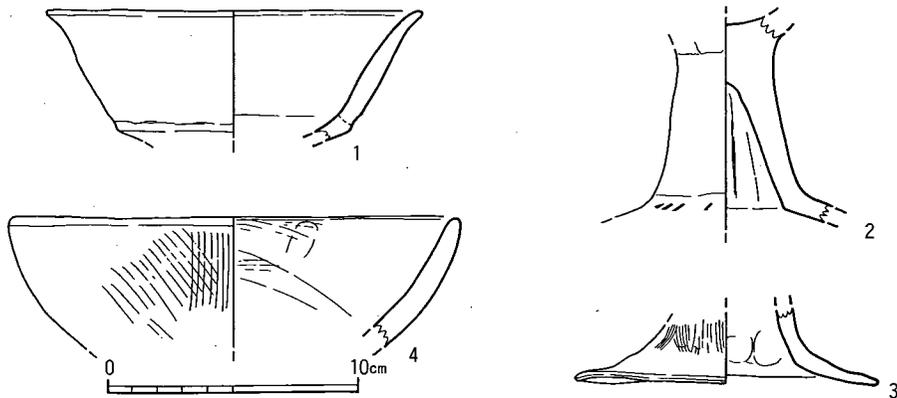
椀(4) 口縁部破片で、復原口径18.0cmである。厚手のつくりで、内外面ともにハケの後ナデられる。胎土には細砂粒を多く含み茶褐色に焼成されている。

5号住居跡 (図版10-1、11-1)

調査区南側端から発見した住居跡で、4号住居跡を切る。南西のコーナー部分は農道にかかるとして調査できなかった。平面形態は、長方形プランを呈し、東西壁が長い。長壁5.7m、短壁4.57m、壁高は約20cmを測る。床面積は23㎡ほどであろう。支柱穴は2本で、P1は直径23cm、深さ35cm、P2は直径34cm、深さ25cmである。柱の距離は2.6mある。P1-P2の中軸方向はN18°Eである。炉跡は柱穴間の中央やや西側に設けられる。45cm×50cmの楕円形を呈し、深さは約7cmである。ベッド状遺構はL字型に2ヶ所設けられる。周溝は壁際を巡るが東壁中央で



第17图 4·5号住居跡実測图 (1/60)



第18図 4号住居跡出土土器実測図 (1/3)

一部切れ、ここに屋内土壌が設けられている。

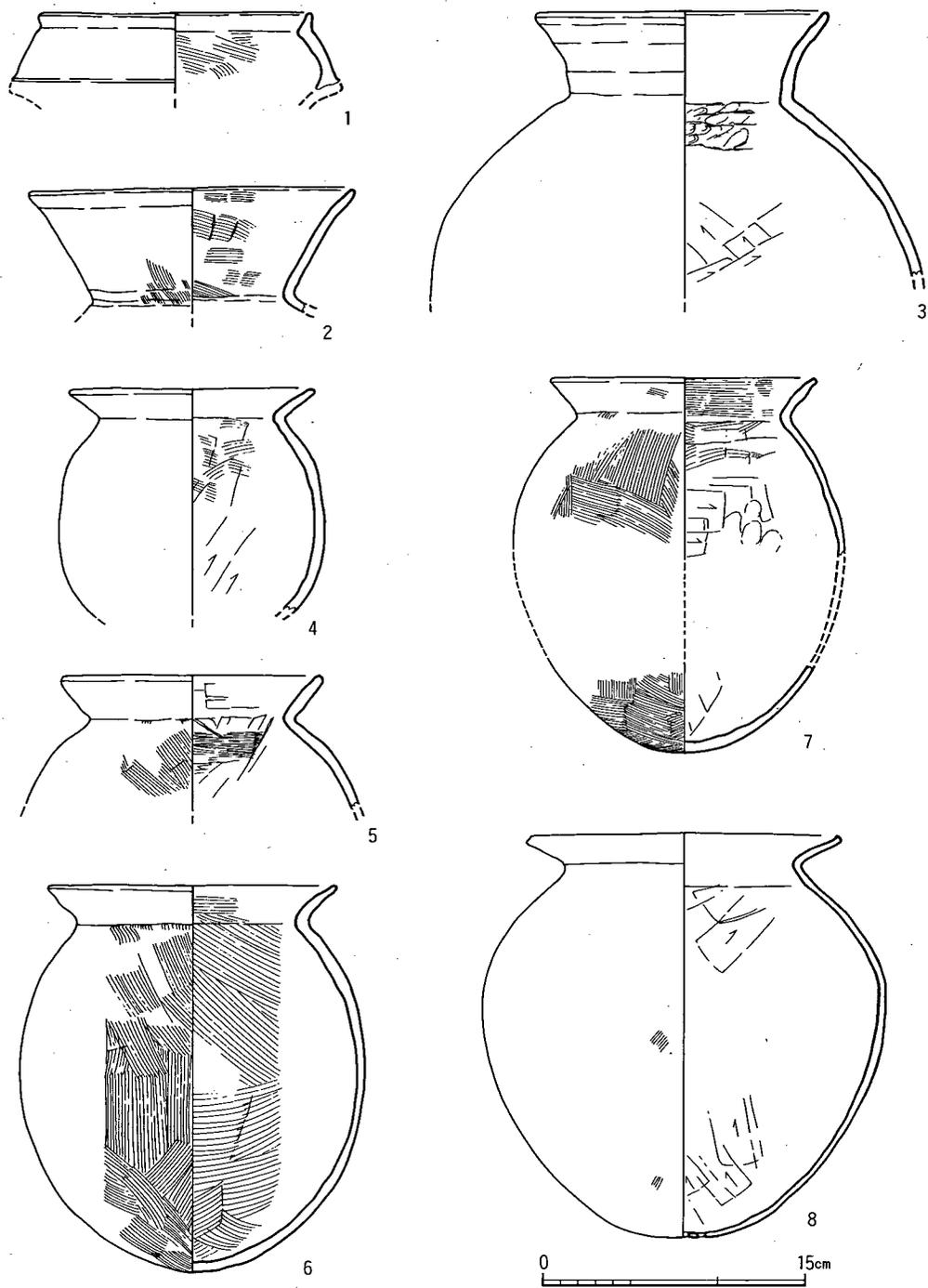
遺物は屋内土壌、P1を東側床面を中心に壺・甕・鉢・高杯・器台等がまとまって出土した。
出土遺物 (図版48、第19図)

複合口縁壺(1) 屈曲部より上部の破片でやや内彎し、端部は短く上方へつまみ出される。全体に風化が進むが、内面にハケ目が残る。角閃石、赤褐色粒、細砂を含み橙褐色に焼成される。床面からの出土。

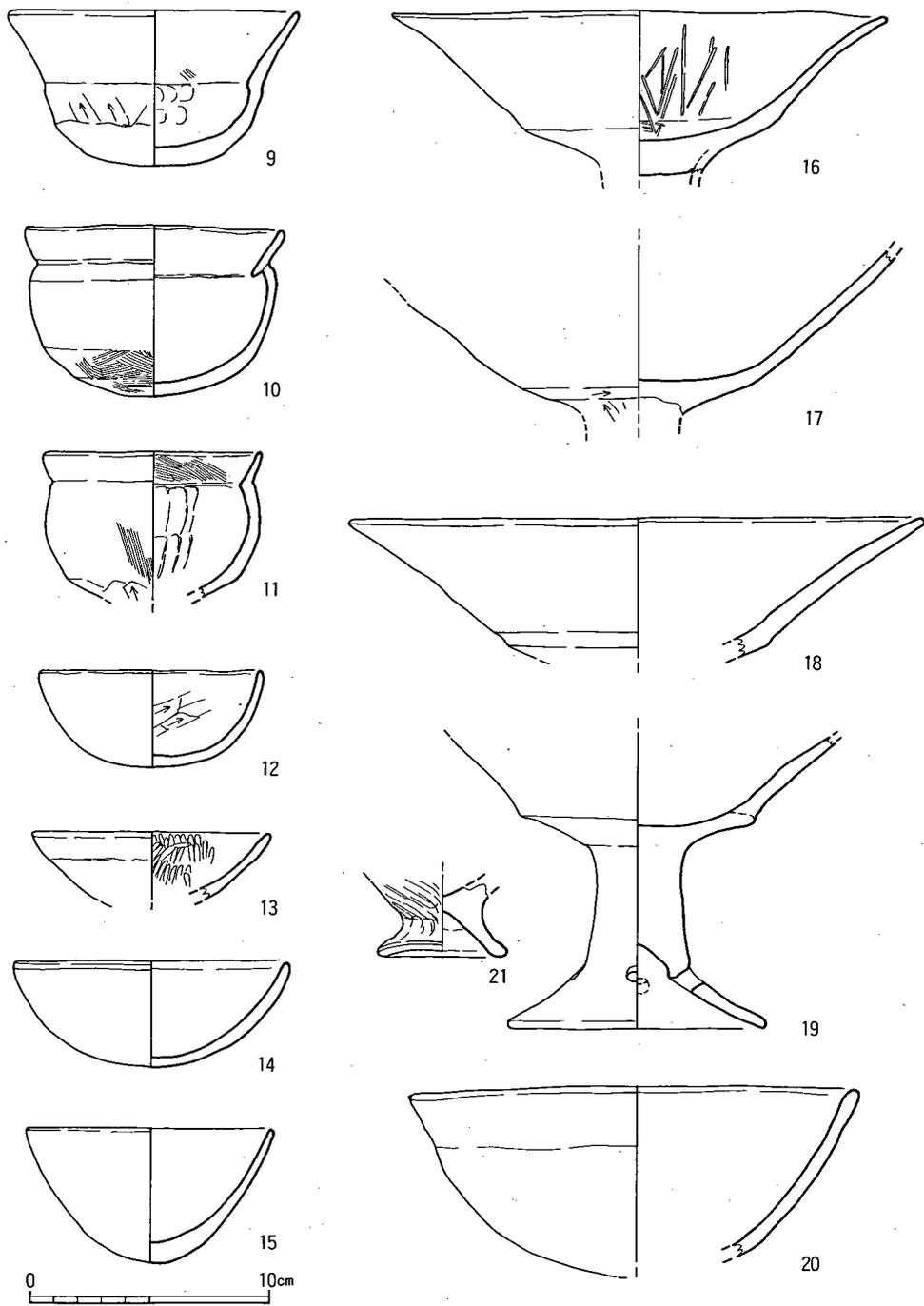
広口壺(2・3) 口縁部が直線的に開く壺である。2は口縁部破片で復原口径18.6cm。器壁は風化が進むが、内外面にハケ目が残る。端部はヨコナデ、頸部はハケ目のあとナデられる。3は胴下半部を欠くもので屋内土壌から出土した。口縁部は緩やかに外反し、端部ではやや内彎気味となる。復原口径16.8cm。口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面は磨滅のため調整不明。内面はヘラ削り、頸部下で粘土の継目が認められる。

甕(4~8) すべて床面からの出土である。4は小型、5~8は中型の甕である。6は口径16.4cm、器高22.2cmの大きさである。胴部は内外面ともにハケ目調整される。胎土には細砂・粘砂を多量、赤褐色粒、角閃石、雲母を含み灰黄褐色を呈する。胴部中位から底部にかけて赤変している。7は口径15cm、器高21.5cmの大きさである。口縁部外面はヨコナデ、一部にハケ目が残る。内面はハケ目。胴部外面はハケ目、底部はヘラ削り、内面頸部下2cmまではハケ目以下はヘラ削りとナデ調整、一部に指圧痕が残る。底部はナデられる。灰黄褐色を呈する。8は、口径17.6cm、器高23.1cm。最大胴部が23.6cmで他に比して丸味が強い。底部に直径5mm前後の穿孔が4個あり甌とし利用されている。器壁は風化が進む。口縁部内外面ナデ、胴部外面に一部ハケ目が残る。内面はヘラ削り。胎土に細砂粒・雲母・角閃石、赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

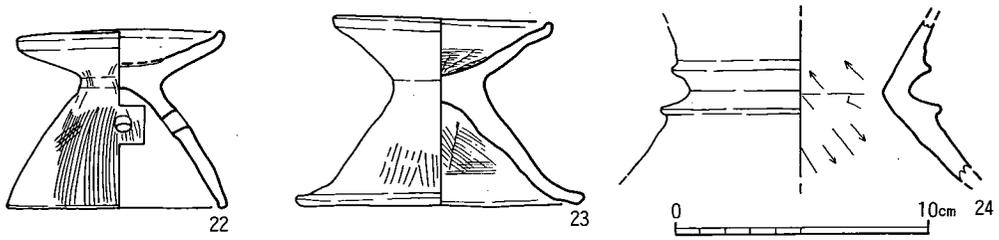
小型丸底壺(9~11) 9の口縁部は直線的に大きく開き、胴部は浅い。復原口径12cm、器高6.4



第19图 5号住居跡出土土器実測図① (1/4)



第20图 5号住居跡出土土器実測図② (1/3)



第21図 5号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

cm. 10の口縁部は短く、端部をやや内側につまむ。頸部は断面でT字型を呈する。胴部下半から底部にかけて削りの後ハケ目調整されている。口径10.9cm、器高7.1cmの大きさで、黄褐色を呈し、焼成は良好である。11の口縁部はやや内彎気味である。口径9.2cm。いずれも床面からの出土。

椀(12~13・20) 12・14は半円形の体部もち、13はやや浅い椀である。15の体部は深く、底部は尖り気味である。いずれも風化が進み調整は不明瞭であるが、12の内面はヘラ削り、13の内面はヘラミガキ、外面はヨコナデされる。粘土継目も認められる。12・13床面からの出土。20は口径18.4cmの大型の椀。内外面に煤が付着している。

高杯(16~19) 16の杯部は、短く内彎する杯底部から、屈曲部は緩やかで、口縁部は外反する。口径20.45cm、杯部高6.0cm。内面はミガキ、外面は杯部ヨコナデ、底部ナデ調整。17の杯底部はヘラ削り、内面はナデ調整。18は口径24cmの大きさである。19の杯部は一旦屈曲して開き、屈曲部に綾を有する。脚部は中実のものである。裾は短く開き、裾部と柱状部の屈曲部に円孔が4ヶ所穿たれる。脚高は7.6cm、裾部径は10.7cmである。調整は風化のため不明。16は床面出土である。

脚台(21) 小型の台付椀の脚であろう。脚は短く開き、端部は丸い。底部外面はタタキ、他はナデ調整される。床面出土。

器台(22~24) 22の脚部は内彎気味に開き、脚裾端部は平坦である。円孔は3ヶ所に穿たれる。受部は浅目である。口径8.2cm、底径8.7cm、器高7.0cmの大きさ。受部外面はヨコナデ、脚部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向ナデ調整。23の脚部は大きく「ハ」の字に開き、端部を横方向につまみ出す。口径8.7cm、底径11.4cm、器高7.4cmの大きさである。受部底内面、脚部内面はハケ目調整。22・23ともに床面出土。24は鼓形器台で、口縁、脚端部を欠く。外面はナデ、内面はヘラ削り調整。角閃石、赤褐色粒、石英と細砂粒を多量に含み白黄橙色に焼成される。北側埋土中から出土。

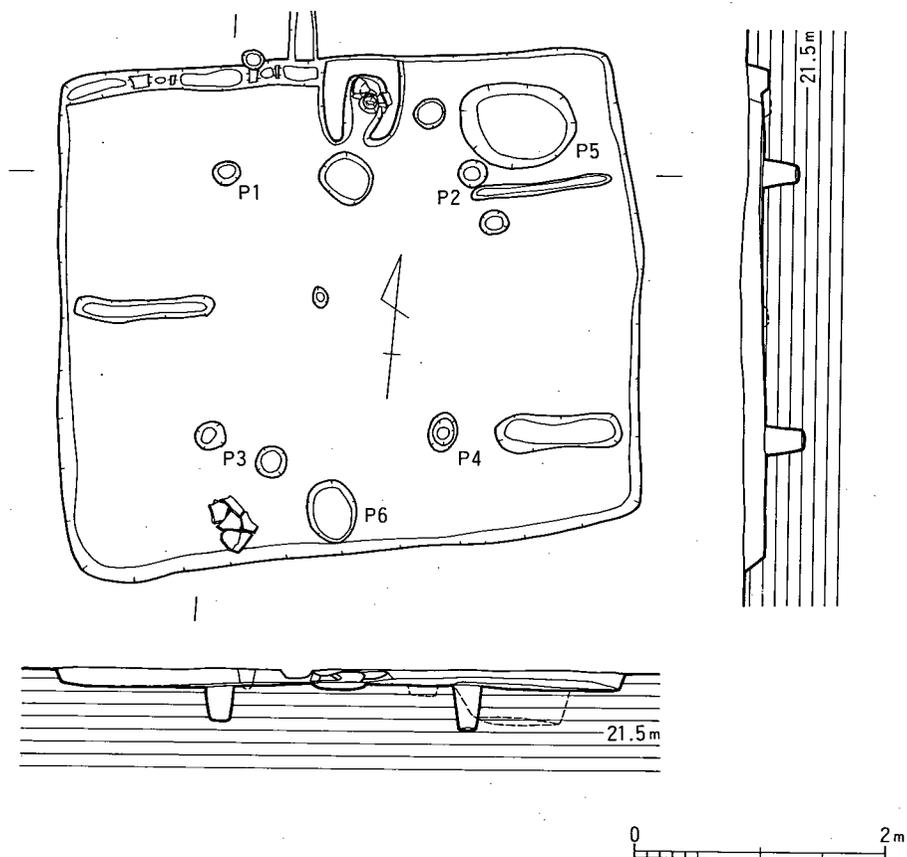
5号住居跡出土の土器は、古墳時代初頭頃に属するものと考えられる。

6号住居跡 (図版10-2・11-2・12、第22図)

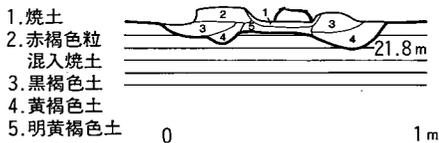
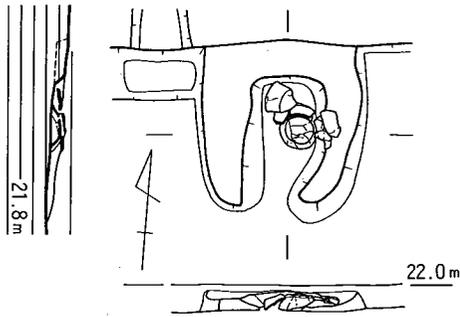
調査区の南側、5号・9号・10号住居跡に挟まれて発見された住居跡である。規模は北壁4.4m、南壁4.55m、西壁4.0m、東壁3.65mで、不整長方形を呈する。壁は12cm前後が残存している。主軸方向はN5°Wである。北壁の中央部にはカマドが設けられている。床面は中央部とカマドの前面がやや堅めである。支柱穴は位置関係や深さからP1～P4の4本柱である。柱穴の大きさは直径20cm～30cm、深さは30cm～37cmである。屋内土壌は北東コーナーにある90cm×65cm、深さ約30cmの楕円形を呈するP5と考える。東壁側に2本、西壁側に1本、壁面に対して直交する長さ1m前後の小溝が設けられるが性格は不明である。壁溝は北壁でカマドの西側にみられる。遺物はP3・P5の付近から出土した。

カマド (第24図)

上部は削平を受け残存状況はよくない。床面を若干掘り下げて基礎をつくる。袖は長さ70cm、



第22図 6号住居跡実測図 (1/60)



第23図 6号住居跡カマド実測図 (1/30)

部をやや外反させる。杯部を杯底部との境は段がつく。口径は4が15cm、5は15.4cmである。

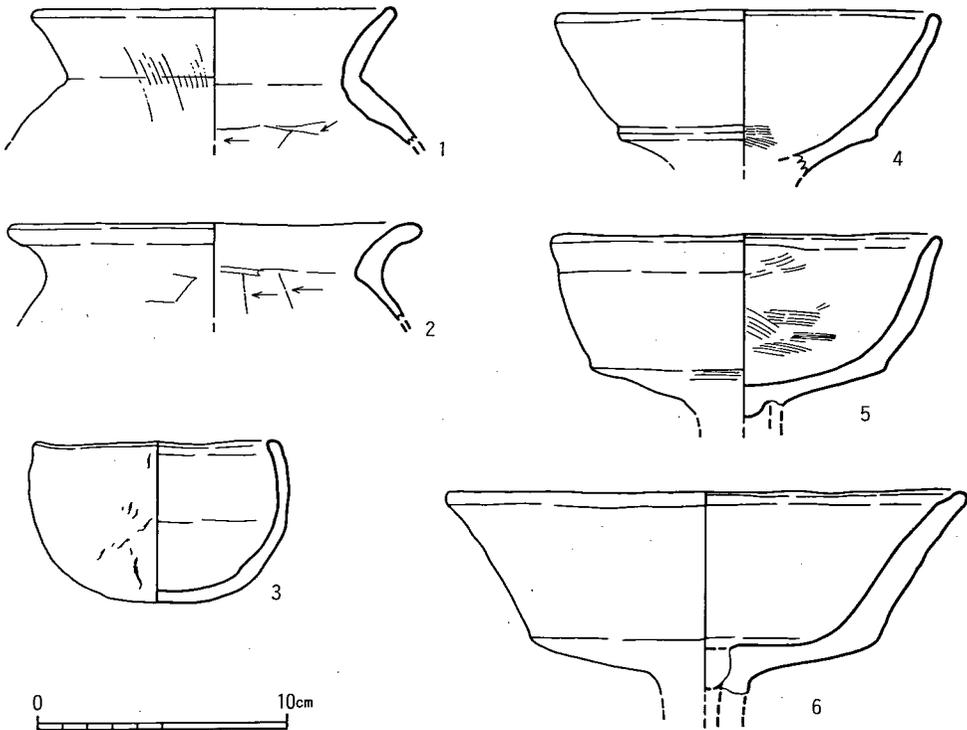
袖幅は20cm前後の規模で、床面とほぼ同じレベルに50cm×20cmの範囲で火床面が広がる。支脚は高杯の杯部(第24図4・6)を転用している。

出土遺物(図版49、第24図)

甕(1・2) 口縁部破片で1は口径14.4cm、2は16.4cmの大きさで、内面はヘラ削り調整される。1は外面にハケ目がみられる。

碗(3) 口縁部が内彎して立ち上がる。端部は平坦面をつくる。口径9.8cm、器高6.4cmの大きさで、ナデ調整される。黄褐色を呈し、焼成は良好で、内面には黒色の付着物がみられる。

高杯(4~6) いずれも脚部を欠く資料で、4・5は杯底部から内彎気味に立ち上がる。5は端部



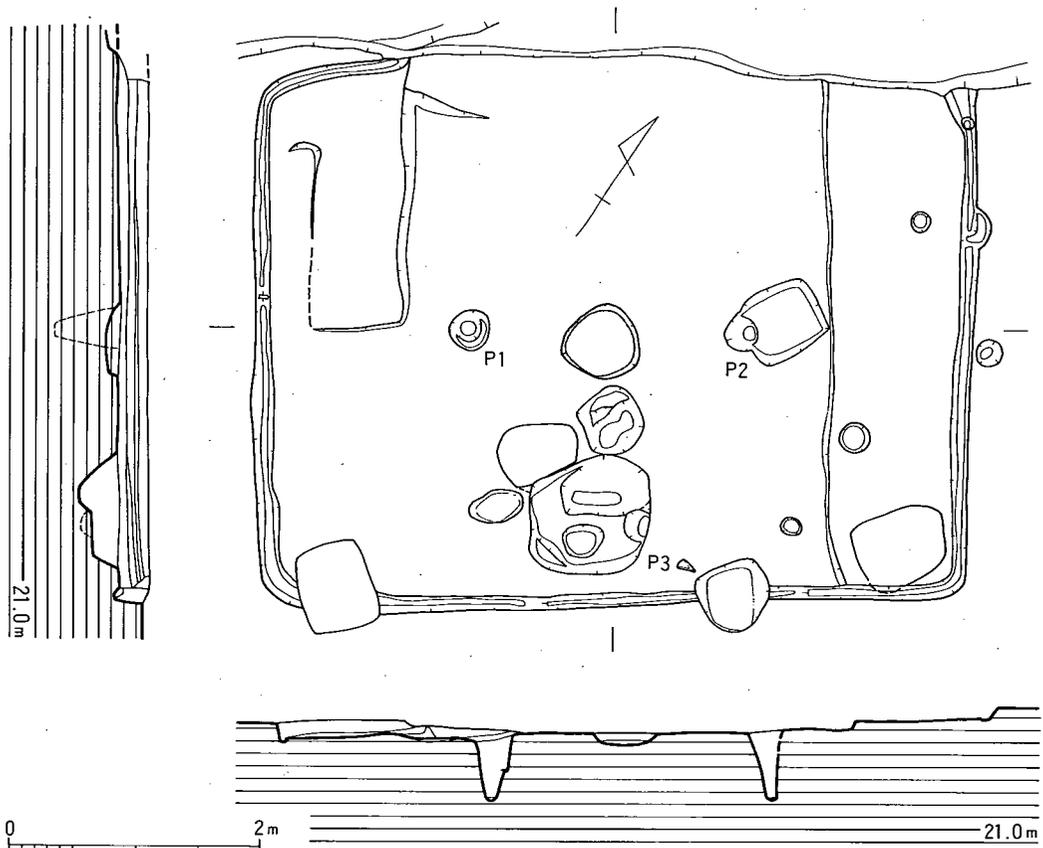
第24図 6号住居跡出土土器実測図 (1/3)

4の杯底部はハケ目調整。外面には煤が付着する。5の内面はハケ目調整。6は口径20.6cmの大形品で、杯部は外反する。風化が著しく調整は不明である。黄褐色を呈し、2次加熱を受ける。

1はカマド東側ピット、3・5は屋内土壌、4・6はカマドからの出土である。またP3の南側床面から出土した須恵器大甕の底部破片は26号住居跡から出土した口縁部破片と接合した。説明は26号住居跡で行う。出土遺物の時期は5世紀前～中葉頃のものとする。

7号住居跡（図版13、第25図）

調査区南西側端にあり、5号掘立柱建物跡の柱穴掘方によって切られる。さらに住居の北側壁を水田の側溝によって破壊されている。平面形態は隅丸長方形プランを呈する。長壁5.56m、短壁4.2m、中軸の長さは5.7mの規模で、壁高は15cm前後を測る。支柱穴は2本で、P1は直径30cm、深さ57cm、P2は5号建物で一部切られているが直径約30cm、深さ52cmを測る。P1-P2の柱間の距離は1.85mで、この中央やや東よりに直径約60cmの炉を設ける。中軸方位はN



第25図 7号住居跡実測図 (1/60)

56° Eである。ベッド状遺構は北東側壁に沿って設けられる。幅約1.0m、床面からの高さは10cm前後である。南西壁側では南西隅から中心まで設けられるが、わずかな段をもつ程度である。屋内土壌と考えられるP3が存在するが不整形である。

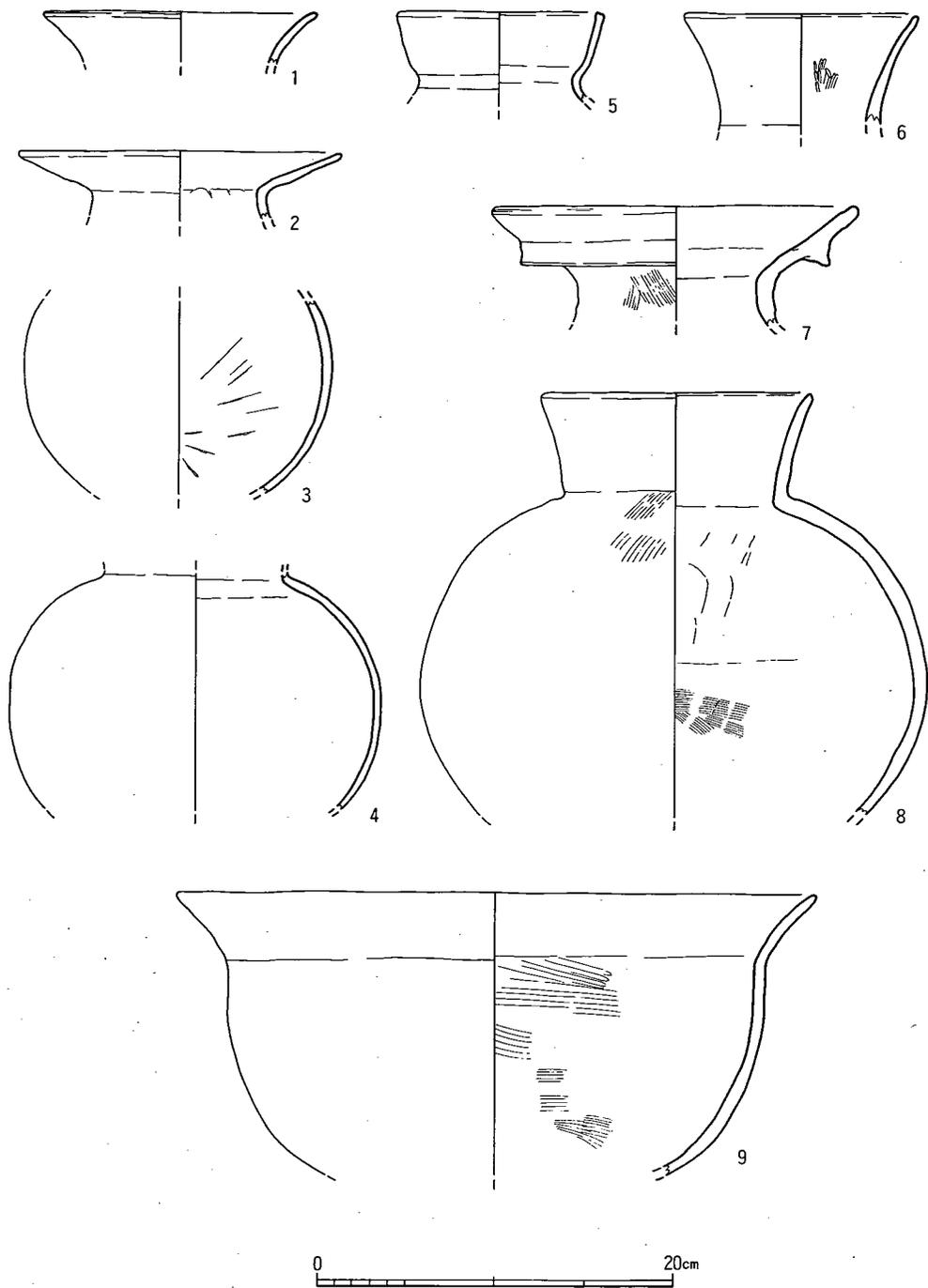
遺物は、床面、埋土から多量の土器と鉄器が2点出土している。鉄器は別項で説明する。

出土遺物（図版49、第26～29図）

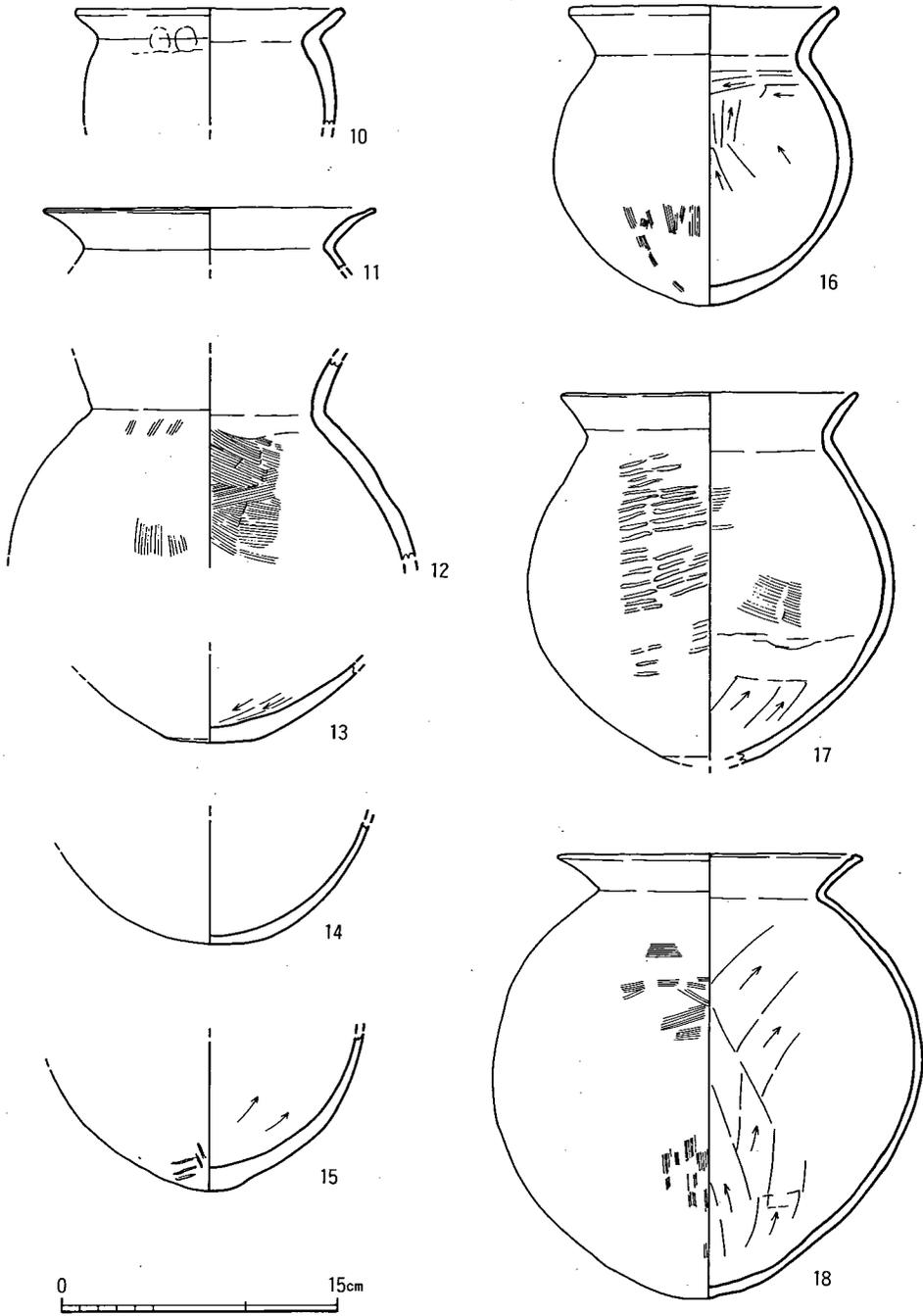
壺(1～8) 2は直線的に開く口縁部破片でやや長目の頸部が付くものであろう。復原口径で18.4cm。調整は不明。3・4は胴部の破片で風化が進み調整不明。3の内面には工具痕が残る。5・6は口縁部破片、5は口径11.7cm、6は13.7cmの大きさで球形の胴部がつくものであろう。5はヨコナデ調整。胎土には砂粒をほとんど含まれない。灰黄色に焼成される。7は複合口縁部の口縁部破片で内外面ともにヨコナデ調整され、頸部外面にはハケ目調整。復原口径20.7cm。8は広口壺で、復原口径15.4cm、最大胴径28.6cmの大きさである。全体に風化が進むが胴部内面上位はヘラ削り、下位にはハケ目がみられる。肩部外面にもハケ目が残る。2と5は埋土から、他は床面から出土した。

甕(10～18) 10は小型の甕で復原口径14.5cm、11は「く」字形口縁部破片で復原口径17.8cm。端部は丸く納められ、内外面ともにナデ調整。12は内外面ともにハケ目調整。13～15は底部破片で13は内面はヘラ削り、15の外表面はタタキの後ナデられる。16は小型の甕で、口径15.2cm、器高16.15cm、胴部最大径17cmの大きさである。胴部内面はヘラ削り、外面は下半部にハケ目がみられる。他は調整不明。胎土に砂粒を多量、角閃石、赤褐色粒を含み白黄褐色に焼成される。17は復原口径16cmの中型の甕で底部が欠く。胴部外面はタタキ。内面底部はヘラ削り、他は調整不明。胴部下半ら底部にかけて2次加熱を受け赤変している。底部には16と同様黒斑が認められ、煤も付着している。18は中型の甕で、口径16.6cm、胴部最大径23.0cm、器高24.2cmの大きさである。全体に薄手造りである。「く」字形口縁を呈し、端部をつまみにげる。胴部内面はヘラ削り、外面は細かいハケ目の後ナデが加わる。胎土には細砂粒、雲母を多め、角閃石を含み、灰黄茶褐色を呈し、焼成は普通である。2次加熱による赤変があり、底辺部には煤が付着している。14～18は床面からの出土。

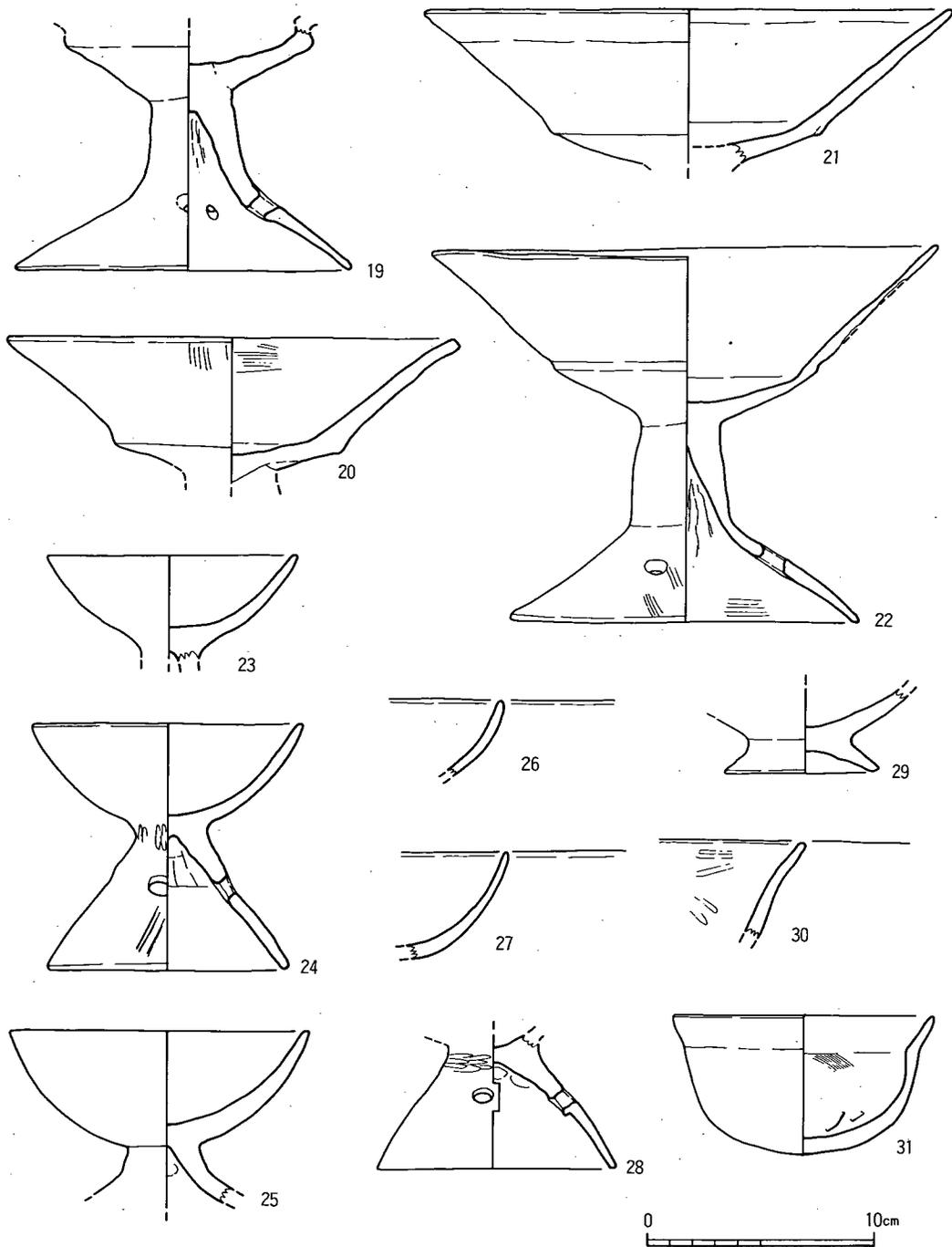
高杯(19～28) 19～22は杯部が大きく開く高杯である。19は脚柱部で中空の柱状部をもち裾部は大きく開く。裾部4ヶ所に円孔が穿孔される。裾部径14.8cm。20の杯部は一旦屈曲して開き、屈曲部に稜を有する。端部は平坦につくられる。復原口径19.35cm。22は復原口径21.9cm、器高16.4cm、裾部径15.0cmの大きさで、杯部の屈曲は緩やかで、直線的に開き端部は丸くつくられる。19と同様に4ヶ所に円孔が穿たれる。細砂粒を多量、角閃石、石英、赤褐色粒を含み橙褐色に焼成される。杯部の一部に黒斑がみられる。23～28は杯部が椀形を呈する。23は口径10.6cm。24は口径11.65cm、器高10.7cm、裾部径10.6cm。脚部は「ハ」の字に開く。脚部外面はミガキ調整であろう。25の口径は13cm。脚部は外反しながら大きく開く。28の脚部はやや



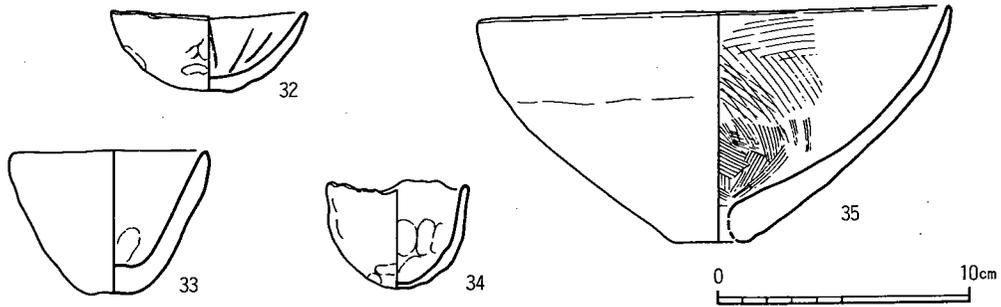
第26图 7号住居跡出土土器实测图① (1/4)



第27图 7号住居跡出土土器実測図② (1/4)



第28图 7号住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第29図 7号住居跡出土土器実測図④ (1/3)

内彎気味に開く。杯部との境はミガキが明瞭である。裾部径10.08cm。細砂粒を多量、赤褐色粒を多量に含み、明褐色に焼成される。19は埋土、他は床面から出土した。

椀(9・30・31) 9は大型の椀で、口縁部はやや外反し、端部は丸くつくられる。全体に風化が進むが、内面にミガキ、ハケ目がみられる。31は短く開く口縁部をもつ、口径15cm、器高6.1cm。内外面に工具痕がみられる。工具によるナデか。いずれも床面出土。

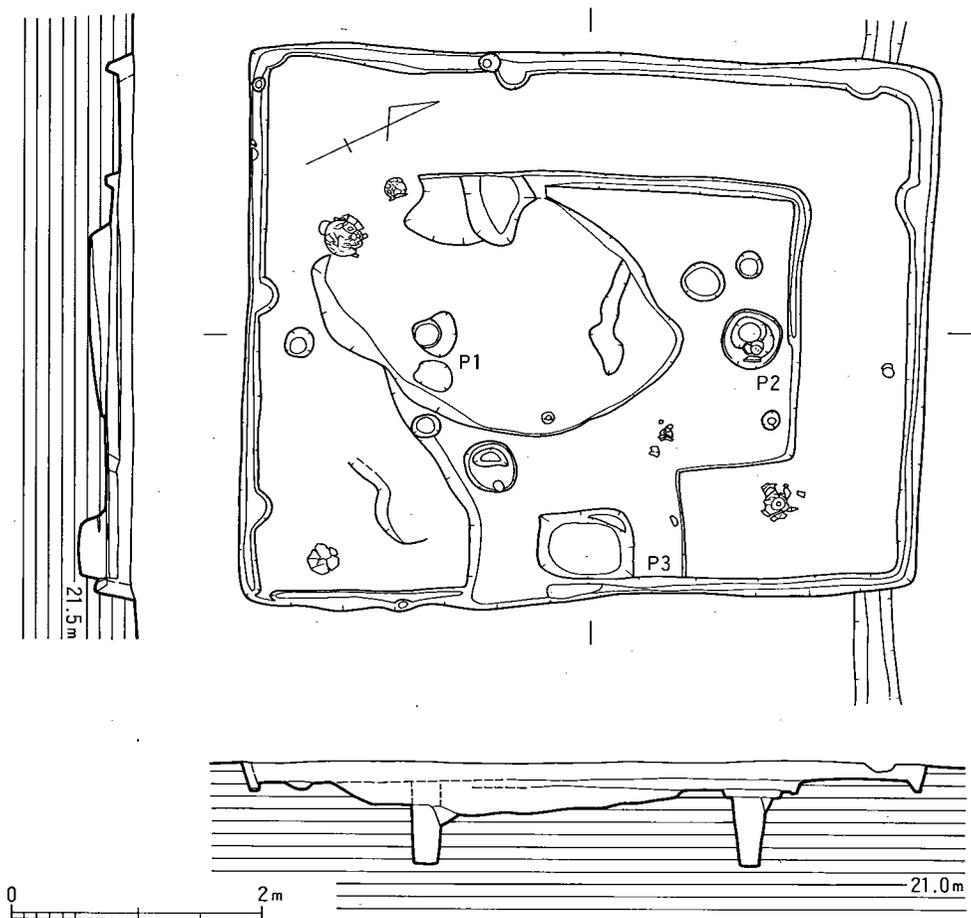
手捏土器(32~34) 32は椀形で口径7.7cm、器高3.12cm。34はやや深めの椀形で、口径5.0~5.4cm、器高4.3cmで、内外面に指圧痕が残る。33は鉢形で、口径7.6cm、器高5.65cm、内面に指圧痕が残る。外面には黒班が認められる。32・34は床面。33は屋内土壌出土。

鉢形甑(35) 床面から出土した。口径18.6cm、器高9cmの大きさである。内面はハケ目、外面はヨコナデ調整され、底部に1.0cm強の円孔が穿孔される。細砂粒、赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成される。外面に黒班、内面に炭化物の付着がみられる。

これらの土器は古墳時代初頭に属するものであろう。

8号住居跡 (図版14-1・第30図)

調査区南半部の中央西側で発見した住居跡で、東側には20号・21号住居跡、南側には5号・7号建物、北側には1号土壌が隣接する。8号住居跡には重複はないが、住居内南側で遺構とは考えられない不整土壌まで掘り下げて、南側の一部を破壊した。平面形態は南北に長い長方形プランを呈する。西壁5.48m、東壁5.4m、北壁4.1m、南壁4.45mでやや歪である。壁高は東側で約20cm残存する。支柱穴は2本である。P1は掘り過ぎてしまったが、直径20cm、深さは約65cm、P2は二段掘りで内側の直径は25cm、深さは62cmである。柱間の距離は2.32mである。炉跡は掘り過ぎて不明。ベッド状遺構は屋内土壌の存在する東壁中央部をのぞいて同壁に沿って付設される。幅は90cmで一定しており床面からは約10cm前後高い。屋内土壌P3は長辺75cm、短辺50cmの長方形を呈し、深さ20cmである。周溝はベッド状遺構と同様に付設される。中軸方向はN26°Eである。

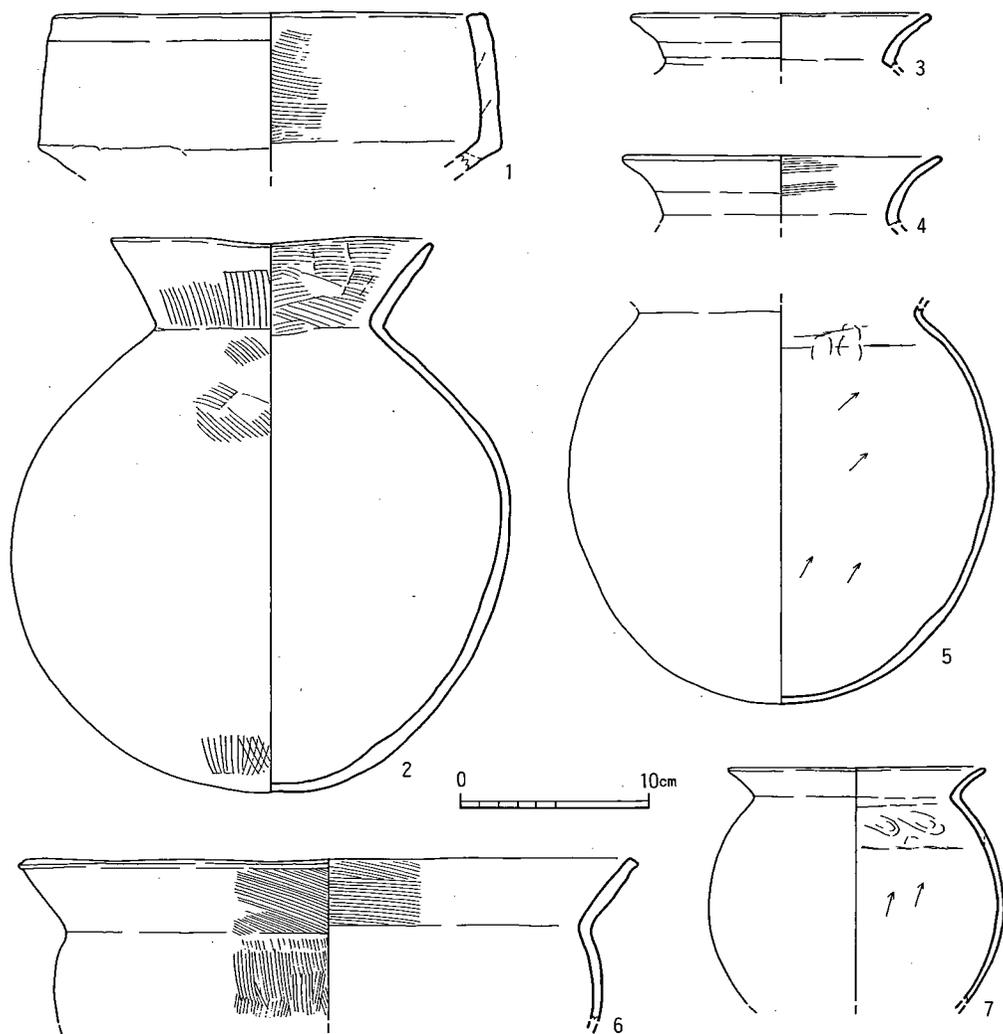


第30図 8号住居跡実測図 (1/60)

遺物はP1南西側、P2とP3の間付近に集中して出土している。

出土遺物 (図版50、第31・32図)

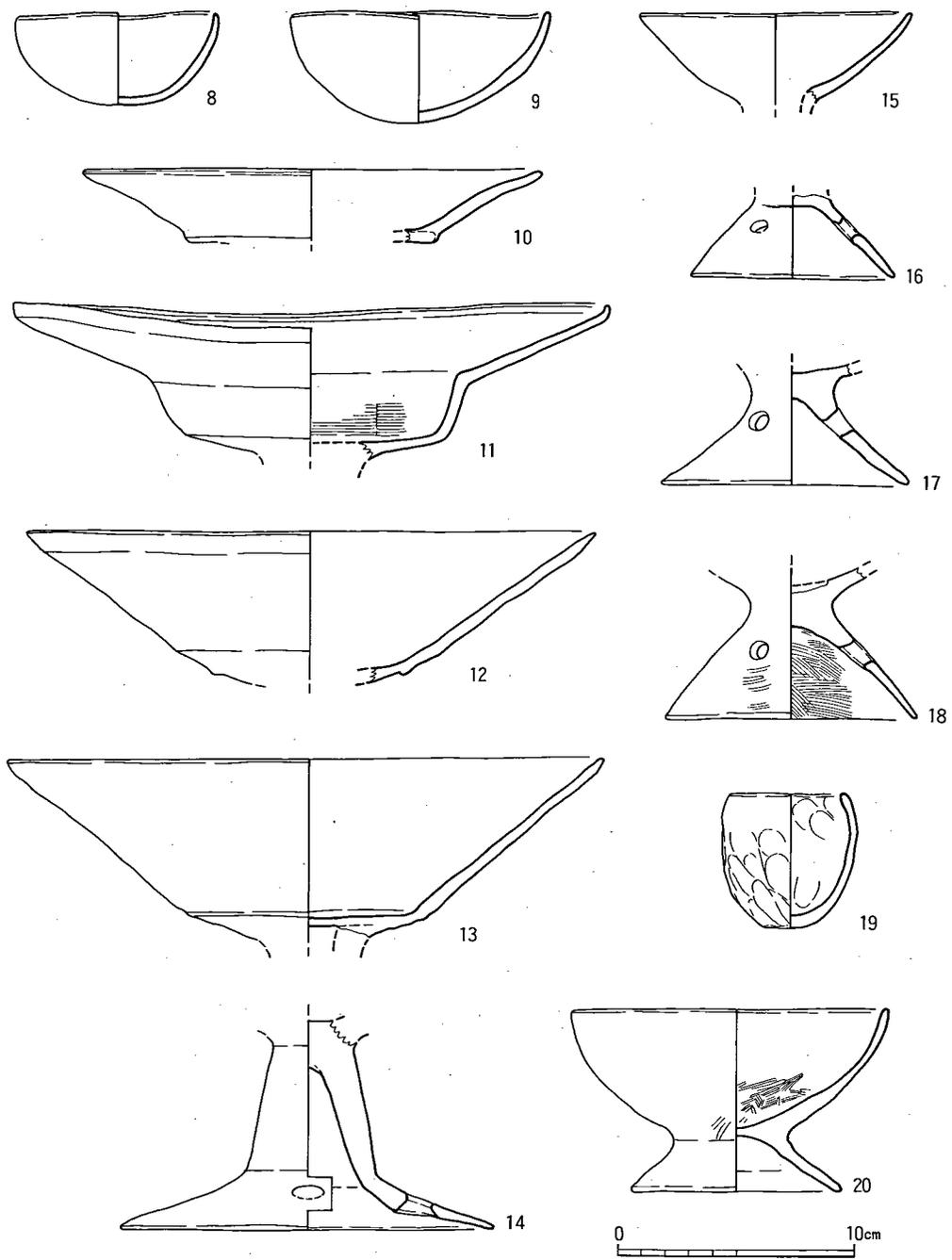
壺(1・2) 1は複合口縁壺の口縁部破片で、外反する口縁端に円筒を重ねた複合口縁である。やや内傾して直立し、口縁端部は平坦面をもつ。口径は23.1cmである。2次加熱を受け風化が進むが内面はハケ目が残る。黄橙褐色に焼成される。埋土からの出土。2は広口壺で口縁部が歪む。口径17.1cm、胴部最大径26.2cm、器高29.7cmの大きさである。口縁部内面は横方向のハケ目、外面は縦方向のハケ目調整。胴部内面はナデ、外面にはハケ目が残る。胴部下位から底部内面はヘラ削りされる。胎土には細砂粒の多量、角閃石、赤褐色粒を含み、灰黄褐色に焼成される。胴部の一部と底部に煤が、内面には炭化物が付着する。南西側ベッド状遺構上からの出土。



第31図 8号住居跡出土土器実測図① (1/4)

甕(3~5・7) 3・4は外反する口縁部破片。3は口径15.8cm、4は16.6cmである。3は内外面ヨコナデ調整。外面に煤が付着する。4の内面はハケ目調整。ともに埋土からの出土。5は胴部最大径22.5cm。内面頸部には粘土継目と指圧痕が明瞭である。内面はヘラ削り調整。外面底部はナデ。他は風化のため不明。底部の内外面に煤が付着している。南東隅ベッド状遺構上から出土。7は「く」字形の口縁部を呈する。復原口径13.6cm。内面頸部下に粘土継目、指圧痕が明瞭である。他は風化が進み調整不明。埋土から出土。

椀(6・8・9) 6は口径33cmの大型椀。直線的に開く口縁部をもち、端部は平坦である。口縁部外面はハケ目の後ヨコナデ、内面はハケ目の後ナデ。胴部外面は縦方向のハケ目、内面はナ



第32图 8号住居跡出土土器実測図② (1/3)

デ調整される。8は口径9.3cm、器高3.85cm。9は口径11.0cm、器高4.6cmで、底部外面に工具痕が残る。ともに2次加熱を受け赤変している。8は屋内土壌北側床面出土。6・9は埋土から出土。

高杯(10~18) 10は杯底部は平坦で杯部は屈曲部から外反し大きく開く。11は復原口径25.1cmの大きさの杯部で、柱上部以下を欠く。杯底部から口縁部への屈曲に深さをもち、直線的に開いた口縁部は端部を上方へつまみ上げる。屈曲部内面に横方向のハケ目が部分的に残る。他は磨滅のため調整不明。胎土に細砂粒、石英、角閃石、赤褐色粒を含み、白黄橙色に焼成される。北側ベッド状遺構上から出土。12・13は長く直線的にのびる杯部破片で端部は丸い。口径は12が24.0cm、13が25.2cmである。磨滅のため調整法不明。14は脚柱部で復原底径15.8cmで、円孔は4ヶ所。15~18は半球形の椀形の杯部をもつ高杯で、15は杯部破片で復原口径11.4cm、16~18は脚部破片で、「ハ」字形に大きく開く。17は杯部の境はヨコナデ、他はナデ調整。18は内面ハケ目、外面はミガキ。円孔はいずれも3ヶ所。

脚台付椀(20) 半球形の椀に短く「ハ」字に開く脚台が付く。底部内面はミガキ、体部はミガキの後ナデ。脚台内面上部は削り。復原口径13.4cm、底形8.8cm、器高7.7cmの大きさで、細砂粒、赤褐色粒、石英、雲母を含み、黄茶褐色に焼成される。一部に黒斑がみられる。

手捏土器(19) 椀形のミニチュアで、体部から口縁部にかけて内彎する。内外面に指圧痕が残る。口径5.0cm、器高5.6cm。全体に煤が付着している。

これらの土器は古墳時代初頭に属すると考える。

9号住居跡(図版15-2、第33図)

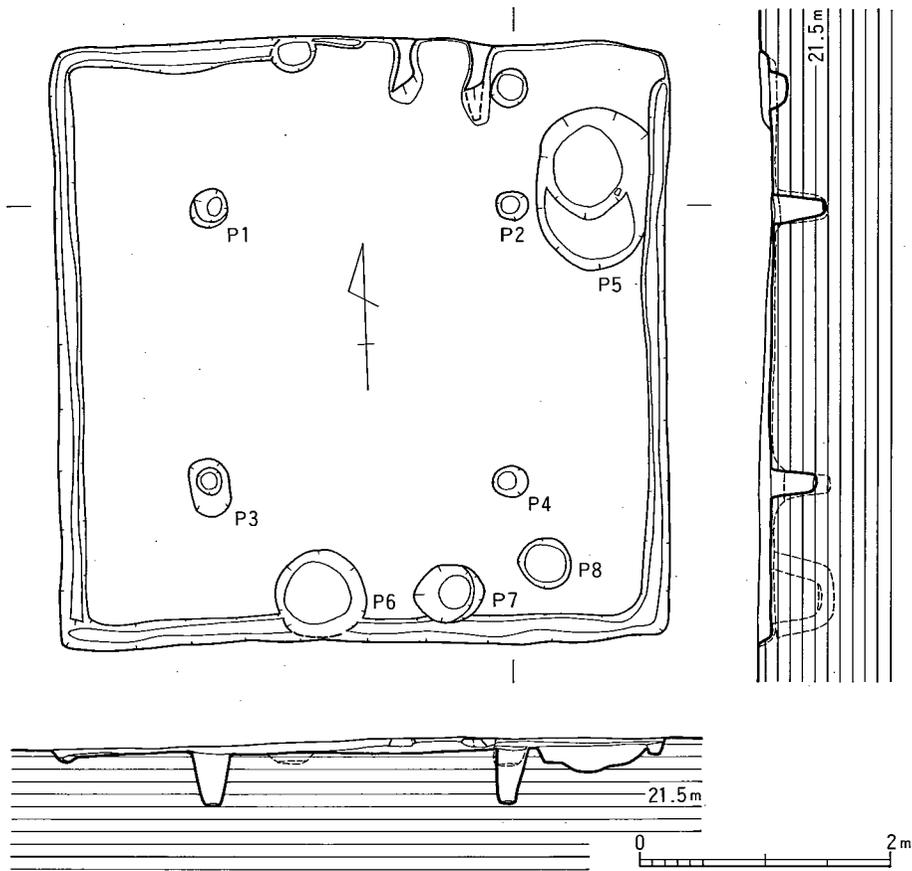
調査南側中央部、ほぼ同時期の6号住居跡東側から発見した住居である。平面形態は方形プランを呈する。壁長は、北壁4.9m、南壁4.85m、東壁4.65m、西壁4.8mを測る。上部は削平され壁高は10cm前後が残存する。主軸方向はN2°Wにとる。北壁の中央よりやや東寄りにカマドが設けられている。支柱穴は4本で、柱穴の規模はP1が直径30cm、深さ42cm、P2が直径23cm、深さ40cm、P3が直径20cm、深さ51cm、P4が直径25cm、深さ21cmである、屋内土壌としては明確なものはなく、南壁にP6・P7・P8、東壁にP5の円形を呈するピットがある。遺物はカマド周辺から出土している。

カマド

上部の削平のため残存状況は悪い。両袖は長さ55cm~65cm、幅15cm前後で、床面からの高さは5~10cmである。燃烧室は長さ55cm、幅40cmほどの広さで、床面には炭・焼土がつまっていた。支脚や煙道は確認できない。

出土遺物(第34図1~7)

甕(1・2) 1は外面に指圧痕が残る。2は外反する口縁部破片で、端部は平坦、内外面とも



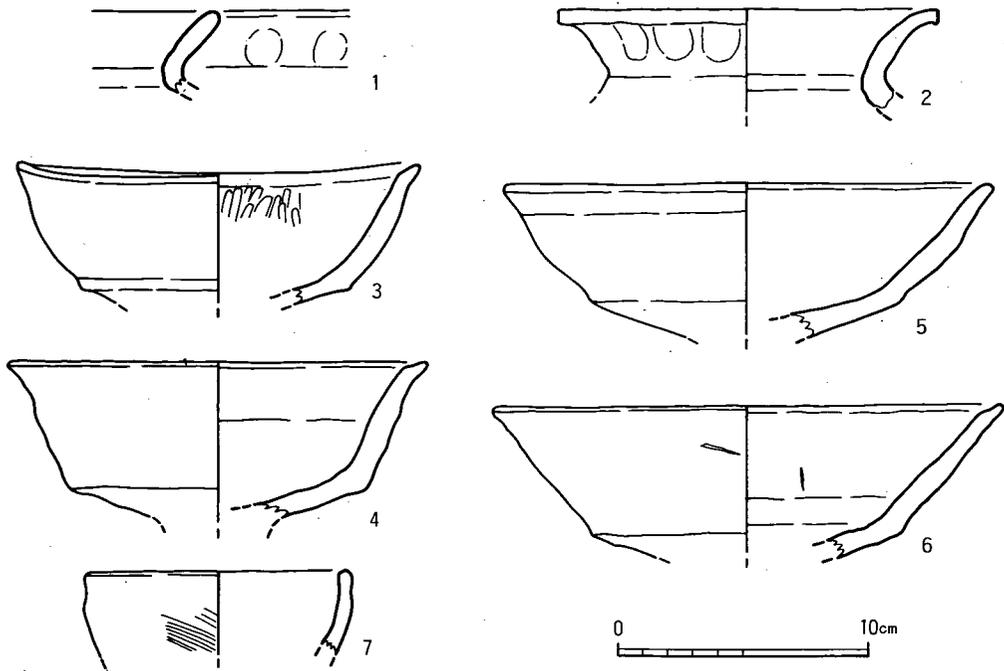
第33図 9号住居跡実測図 (1/60)

にナデ調整され、外面の口縁下に指圧痕が残る。復原口径15cm。

高杯(3~6) いずれも杯部片で、屈曲部の稜は甘い。口縁端部は外反させる。3は内面の一部にミガキが残る。外面に煤が付着している。復原口径16.0cm。4は杯底内外面はナデ、他はヨコナデ調整。復原口径16.7cm。5は磨滅のため調整法不明。復原口径19.4cm。6は口縁部屈曲部の内外面はヨコナデ、他はナデ調整される。内外面の一部に工具痕がみられる。復原口径20.2cm。高杯はいずれもカマド周辺からの出土。

椀(7) 復原口径10.6cm、外面中位はハケ目他はナデ調整。暗黄茶褐色に焼成される。

B地区で6号住居跡とともにカマドを設ける住居跡で、年代もほぼ同時期で5世紀前~中葉ごろと考える。



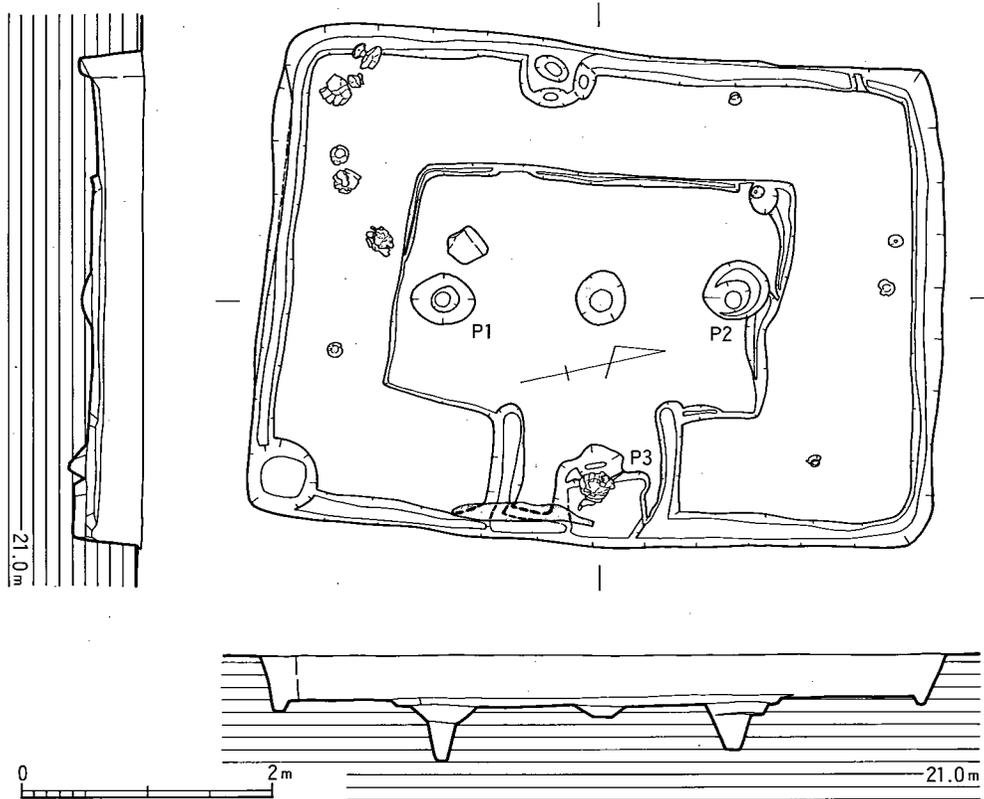
第34図 9号住居跡出土土器実測図 (1/3)

10号住居跡 (図版16・17、第35図)

南側の6号・9号住居跡と北側の20号・21号住居跡に挟まれて発見された住居跡で重複関係はない。平面形態は南北方向が長い長方形プランを呈する。規模は北壁3.8m、南壁3.9m、西壁5.15m、東壁5.35mで、壁高は40cm弱残存する。支柱穴は2本である。柱穴の掘方は二段掘で、P1は50cm×40cmの中に直径23cm、深さ30cm、P2は50cm×45cmの中に直径25cm、深さ30cmの穴を掘り込んでいた。柱間の距離は2.17mである。炉跡はP1・P2の中間に位置し直径約40cmの円形を呈する。中軸方位はN12°Eを示す。ベッド状遺構は東側の中央部を除き、75cmから1m前後の幅で設けられている。周溝はベッド状遺構に沿って、外側と内側に掘り込まれていた。屋内土壌は東側壁の中央に設けられるがプランは不整形である。西壁中央部壁下に周溝が「コ」字形に掘られる。出入口の施設かもしれない遺物の出土状態はよく(図版17)特に南西隅のベッド状遺構上からはまとまって出土した。

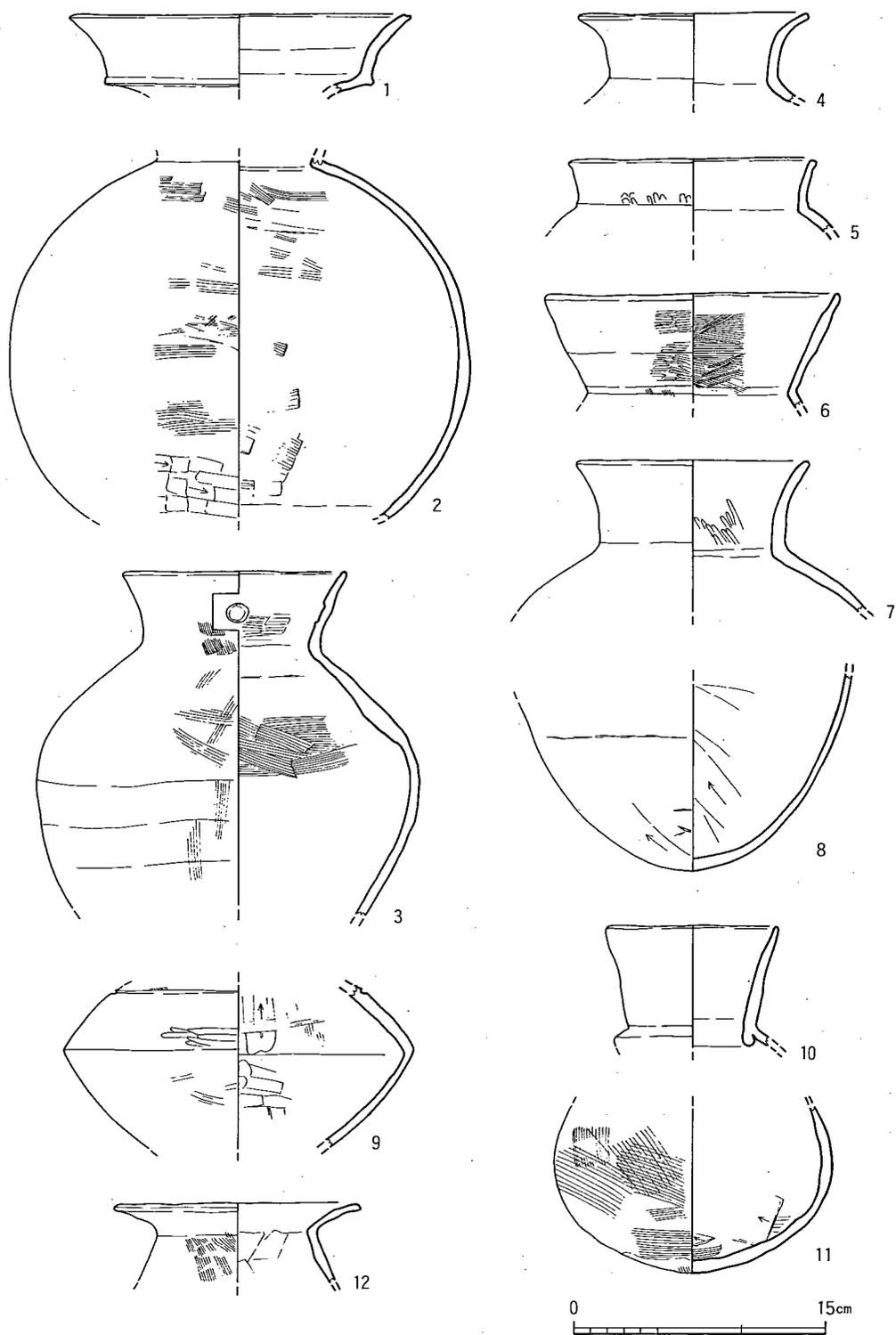
出土遺物 (図版52、第36~40図)

壺(1~12) 1は複合口縁壺の屈曲部から上部の外反する口縁部破片でヨコナデ調整される。復原口径20.4cm。2は胴部破片。最大径は27.45cmである。内外面ともハケ目、外面の胴部下位はヘラ削りの後ナデが加わる。3は中型の広口壺で復原口径13.3cm、胴部最大径22.9cmでやや

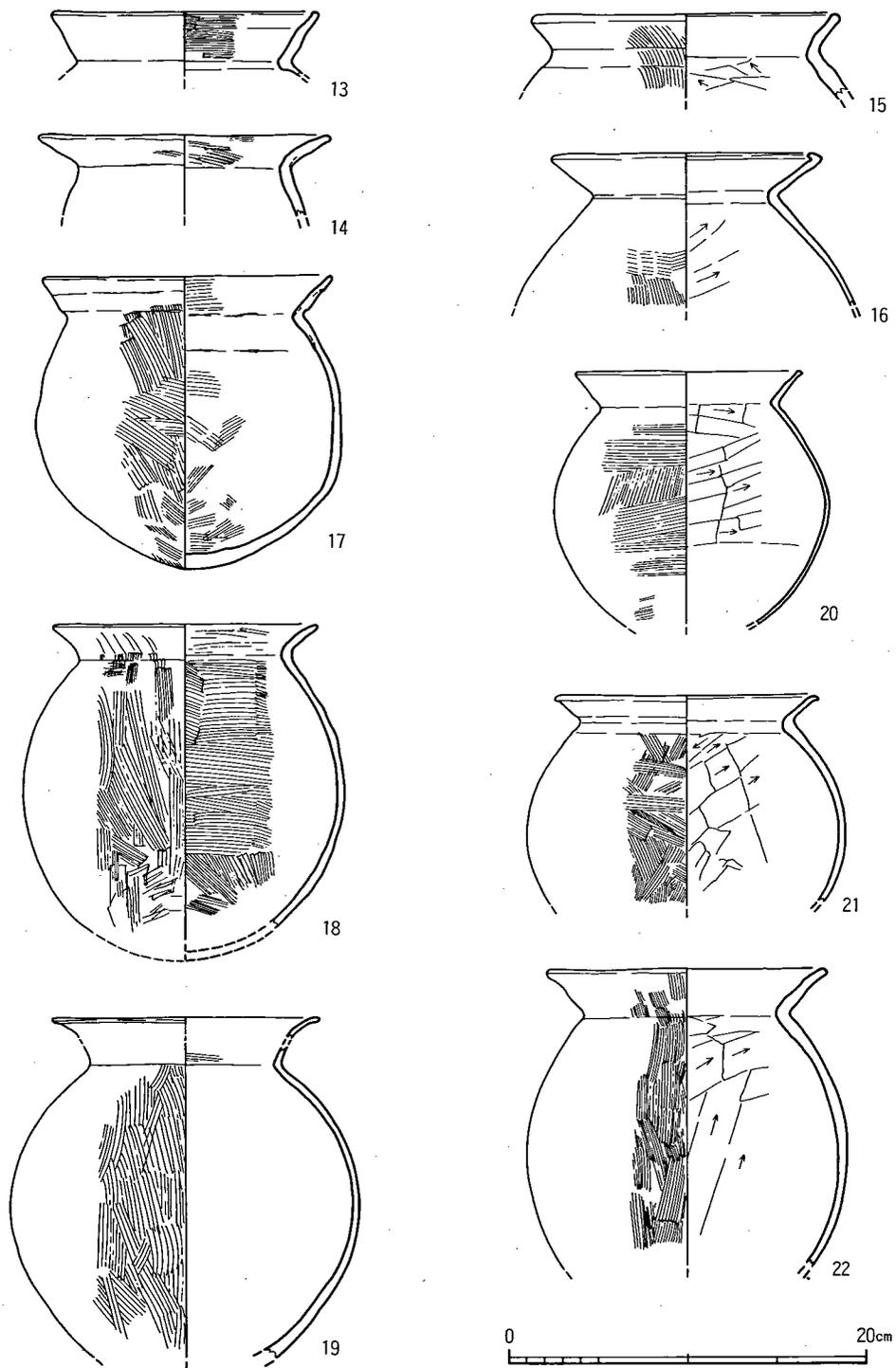


第35図 10号住居跡実測図 (1/60)

歪である。口縁内面に竹管文1個を施す。口縁部内面はハケ目の後ナデ、外面はヨコナデ。胴部内面中位まではハケ目のあと部分的にナデを加える。下位は工具によるナデ。外面頸部はハケ目。中位まではハケ目の後ナデ、下位はハケ目の後横方向のナデ、器壁に凹凸がある。胴部内外面に黒班がみられる。5の頸部に刺突文風の工具痕?がみられる。6は復原口径17.4cmの広口壺の口縁部破片である。内面は細いハケ目の後部分的にミガキ。外面はミガキにナデが加わる。7は復原口径14cm、外面はヨコナデ内面はミガキ、他は磨滅のため調整法不明。内外面ともに黒色炭化物が付着する。8は底部破片。粘土継目より下位の外面は削り、内面も削り、風化が進み明瞭ではない。9は胴部中央で屈曲し稜をもつ長頸壺の破片。外面は磨滅のため明瞭ではないがハケ目の後ミガキか、内面はへら削り、屈曲から下位は指圧痕もみられる。最大胴径は20.9cm。胎土には赤褐色粒、角閃石、細砂粒を含み、淡黄褐色に焼成される。内面に黒班がある。10は小型丸底壺の口縁部破片。復原口径10.2cm、11は胴部破片、内面はナデ、底部はハケ目のあと部分的に削り、外面はハケ目にナデが加わる。12は「く」字状の口縁を呈する



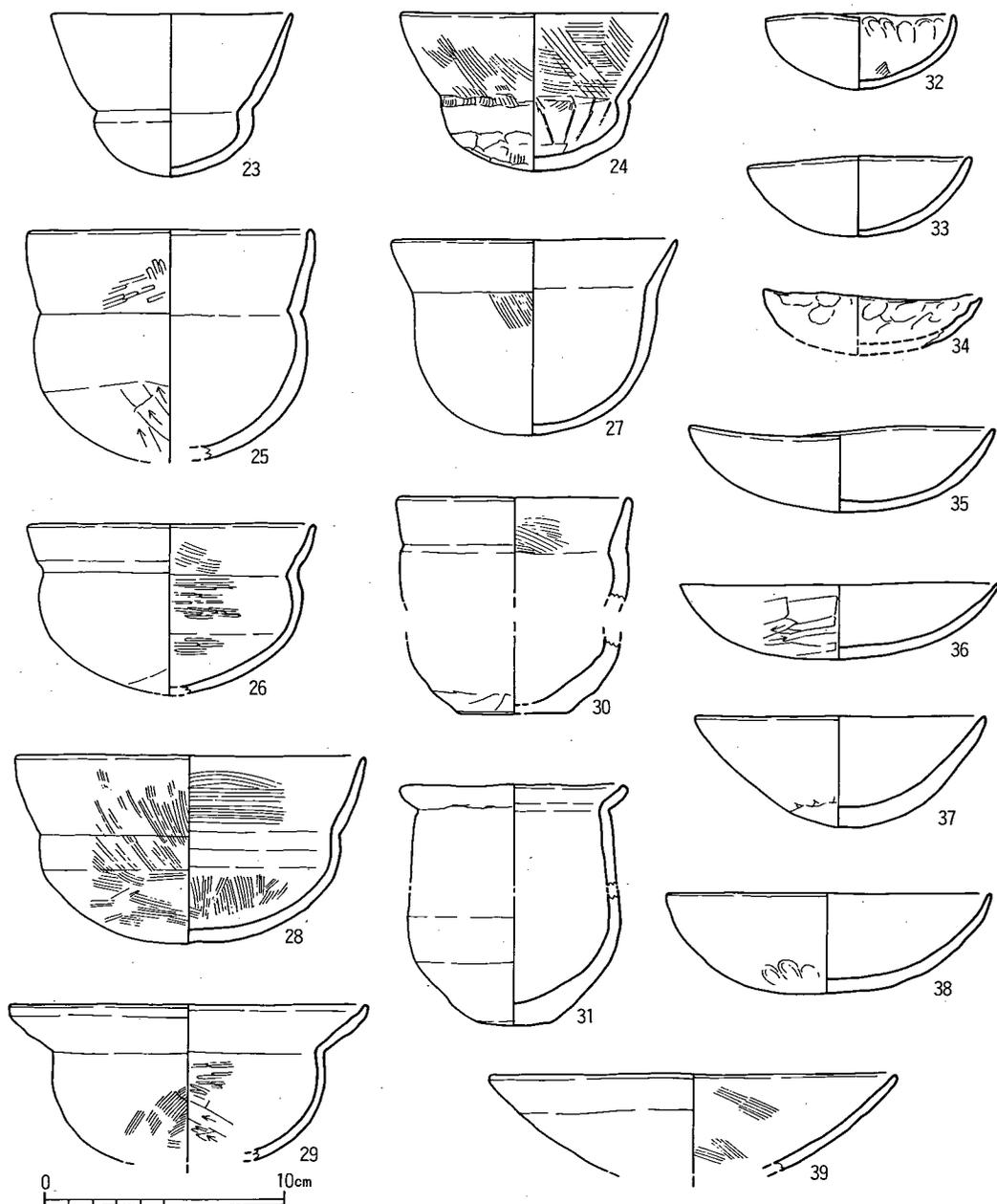
第36图 10号住居跡出土土器実測图① (1/4)



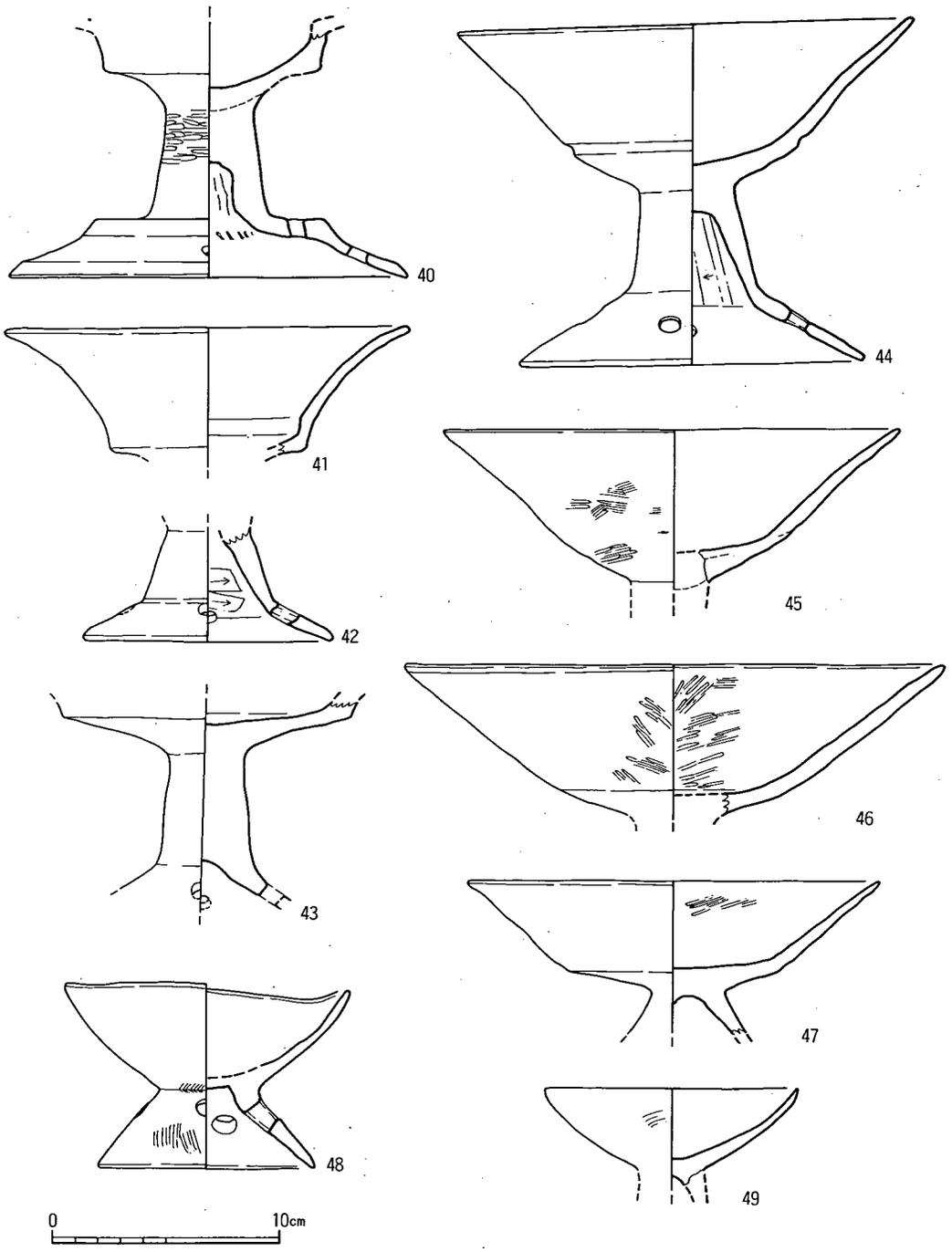
第37图 10号住居跡出土土器実測図② (1/4)

が胴部の形は不明。口縁部ヨコナデ、頸部下は内面が削り、外面はハケ目調整。口径14.8cm。

甕(13~22) 13は復原口径15cmを測る口縁部片。外面はヨコナデ。内面はハケ目調整。14は、



第38図 10号住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第39图 10号住居跡出土土器実測図④ (1/3)

復原口径16.4cm。調整は13と同様。15は復原口径17.0cm。口縁部は内面と端がヨコナデ、頸部以下の内面は削り、外面はハケ目調整。胎土に細砂粒、赤褐色粒、角閃石を含み、黄茶褐色に焼成される。内面に炭化物が付着する。16は「く」字状を呈し、口縁端部を内側につまみ出す。復原口径15.2cm、口縁部ヨコナデ、頸部内外面はナデ、以下は内面が削り、外面ハケ目調整。外面に黒班がみられる。17は小型甕で、口径16.2cm、器高16.5cm。口縁部は直線的に短く開く。胴部はやや歪である。内外面ともにハケ目の後部分的にナデ調整。底部内外面に黒班が認められる。18は底部を欠く資料である。口径14.5cm、器高は19cm弱になろう。口縁部内面は横ハケ目の後ナデ、外面は縦ハケ目の後ナデられる。胴部は内外面ともにハケ目調整。胎土には砂粒を多く含み、淡黄褐色に焼成される。内外面に黒班が見られる。19の外面はハケ目調整。内面は磨滅のため不明瞭だがナデ調整であろう。20は胴部は底部を欠く。口径12.55cmで、口縁部はナデ。胴部外面は縦・横のハケ目を使い分ける。内面は削り、下位は削りの後ナデか、部分的に指圧痕が見られる。暗黄茶褐色を呈し、焼成は良好である。21は胴部下位を欠く。復原口径14.8cmで、口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目調整。内面は削り、中位以下に部分的にナデが見られ、指圧痕が残る。全体に粗雑なつくり。外面に煤が付着。22も底部を欠く。復原口径15.8cm。口縁部外面はハケ目の後部分的にナデ。胴部外面はハケ目調整。内面はヘラ削り。

小型丸底壺(23~27) 23は口径9.95cm、器高6.7cmの大きさで、扁球形の胴部に内彎しながら開く口縁部がつく。口縁部はナデ、胴部内面はヨコナデ調整。24も23と同形で、口径10.1cm、器高6.5cmを測る。口縁部は内外面ともにハケ目調整。胴部外面上位はナデ、底部に削りの後ナデ。一部にハケ目が残る。内面は工具によるナデの後ナデ調整される。内面に黒班あり。25は内彎する短い口縁部がつく。復原口径12.0cm。口縁部外面はミガキ、内面はヨコナデ。底部外面はヘラ削り。26は内傾する短い口縁部がつく。復原口径12.0cm。薄手造りである。胴部内面はミガキ。27の口縁部は短く直に開く。復原口径11.8cm、器高8.1cm。磨滅のため調整法は明瞭ではない。内外面に黒班がある。

鉢(28・29) 28は扁球形の胴部をもつもので内彎する口縁部をもつ。復原口径14.35cm、器高7.75cm。内外面ともにハケ目調整。内面の頸部直下、底部外面はナデ調整。29の口縁部は頸部で屈曲させ大きく開き、端部上方へつまむ。口縁部ヨコナデ、胴部内面にミガキが見られる。

小型甕(30・31) 31は短く内彎する口縁部をもち底部は平底である。復原口径9.4cm、底径3.2cm。内外面ともにナデ調整される。30の口縁は直線的である。復原口径9.8cm、口縁部内面にハケ目が残る。

椀(32~39) 32~34は小型の椀である。32は口径7.8cm、器高3.1cm、外面はナデ、内面に指圧痕が残る。33は復原口径9.2cm、器高3.3cm。内外面ともにナデ調整。34はやや歪な手捏土器で内外面に指圧痕がみられる。35は口径11.6cm~12.6cmで歪む。36は口径13.1cm、器高3.2cm。外面は不定方向のヘラ削り。37は体部がやや深い。口径12cm、器高4.6cm。内面ナデ、外面は削

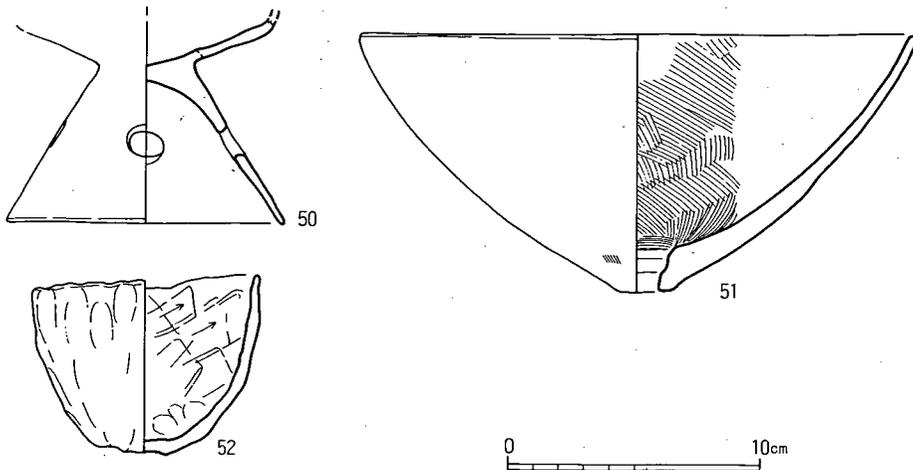
りの後ナデ、底部はヘラ削り調整。38は歪む。口径12.4cm～13.3cm、器高4.1cmである。内外面ともにナデ調整。39は口径17cm。内面にハケ目が残る。

高杯(40～49) 40は鼓形に似た器形の高杯で杯部を欠くが、同形の杯部をもつものである。南側ベッド状遺構直上の出土。柱状部は半ば中実で裾部は段をもって開き、4ヶ所上下2段に円孔をもつ。全体に磨滅するが、柱状部外面はミガキ、裾部はナデられる。裾部径17.4cm。胎土には細砂粒を多量に含む。赤褐色に焼成される。41は平坦な杯底部から大きく外反して開く杯部で、43も同形と考える。44は口径19.5cm、器高15.15cm、裾部径15cmの大きさ。平らな杯底部から、長い杯部がわずかに外反気味に開く。柱状部は中空で、裾部は大きく開く。裾部の4ヶ所に円孔が穿たれる。柱状部内面はヘラ削り、他はナデ調整される。胎土には赤褐色粒、角閃石、細砂粒を多量に含む。淡褐色に焼成される。杯部内外面に煤が付着する。45は口径19.8cm、器壁は磨滅する。内外面ともミガキと思われる。46は復原口径23.4cm。45同様内外面にミガキの痕跡が見られる。47は復原口径17.9cm。杯内面にミガキ痕が残る。48・49は碗形の杯部をもつ高杯である。48の杯部はやや歪である。口径12.1cm～13.2cm、器高8cm、裾部径9.3cmの大きさで、裾部に4ヶ所の円孔がある。外面は磨滅のため調整法不明。杯部、裾部の内面はナデ調整。角閃石、赤褐色粒を含み、灰黄色に焼成される。49は復原口径13cm。

器台(50) 受け部を欠く。裾部は円錐形をなす、裾部径は10cm～11cmとやや歪む。

鉢形甑(51) 復原口径21.8cm、器高10.3cm。鉢形を呈し、体部は内彎気味で大きく開く。底部に直径1.6cmの円孔が外側から穿たれている。外面はナデ、内面はハケ目調整。口縁部から底部にかけて黒斑がみられる。灰黄褐色に焼成される。

手捏土器(52) 口径8.9cm、器高7.9cmの大きさと内面体部は工具によるナデ。底部はナデ、指圧痕が残りの器壁は凹凸が著しい。



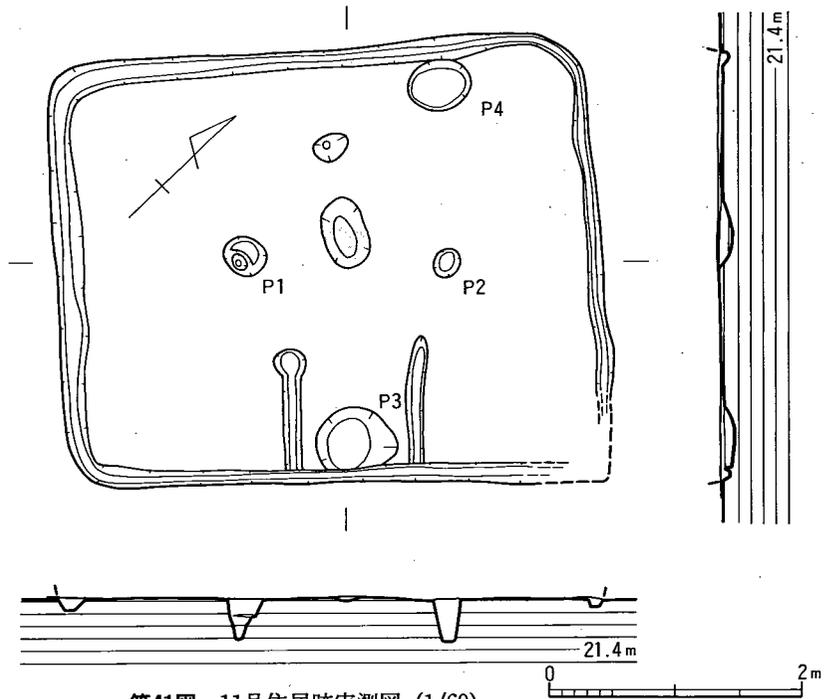
第40図 10号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

10号住居跡は、B地区の中で最も多くの土器が出土した。これ等の土器は器種も多く、セット関係を知る上で重要な資料である。時期としては5号・7号・8号・17号につぐもので、古墳時代初頭頃のものであろう。

11号住居跡 (図版18-1、第41図)

調査区南半部の南東側端から発見した住居跡で、北側の12号住居跡とは約5m離れている。

北東側の隅は路線外のため調査できなかった。上部の削平が著しく、プランは周溝で確認することができた。平面形態は南北に長い隅丸長方形のプランを呈する。長壁は4.25m、短壁は3.45mの規模である。支柱穴は2本で、P1は直径30cm、深さ25cm、P2は直

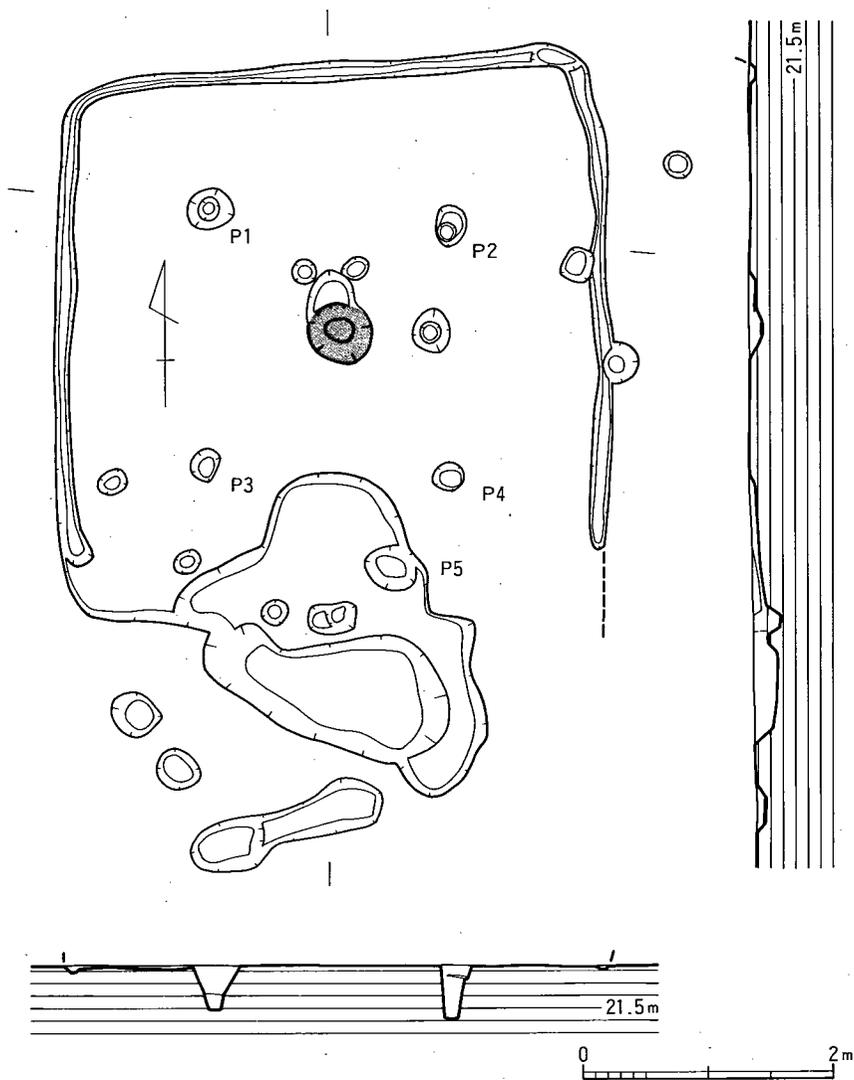


第41図 11号住居跡実測図 (1/60)

径24cm、深さ33cmである。中軸方位は $N44^{\circ}E$ を示す。P1-P2の柱間距離は1.45mである。この中央やや西側に $60\text{cm} \times 35\text{cm}$ の規模の炉跡がある。埋土には炭化物と焼土がつまる。東壁中央に $65\text{cm} \times 50\text{cm}$ で深さ7cmほどの屋内土壌を設ける。この南北両側に、長さ1m、幅15cm~20cmの溝があり他と区画している。同溝はとぎれることなく巡る。出土遺物は土師器の小破片があるが図示できる資料ではない。したがって住居の時期等は確定できない。

12号住居跡 (図版18-2、第42図)

調査区の東側端で発見した住居跡で、11号住居跡の5mの北側に位置する。11号同様上部は削平され、壁は残存しない。周溝と柱穴の位置で住居跡として確認することができた。ただ南壁側については不整土壌で攪乱されており明確にできなかった。平面形態は隅丸方形を呈し、

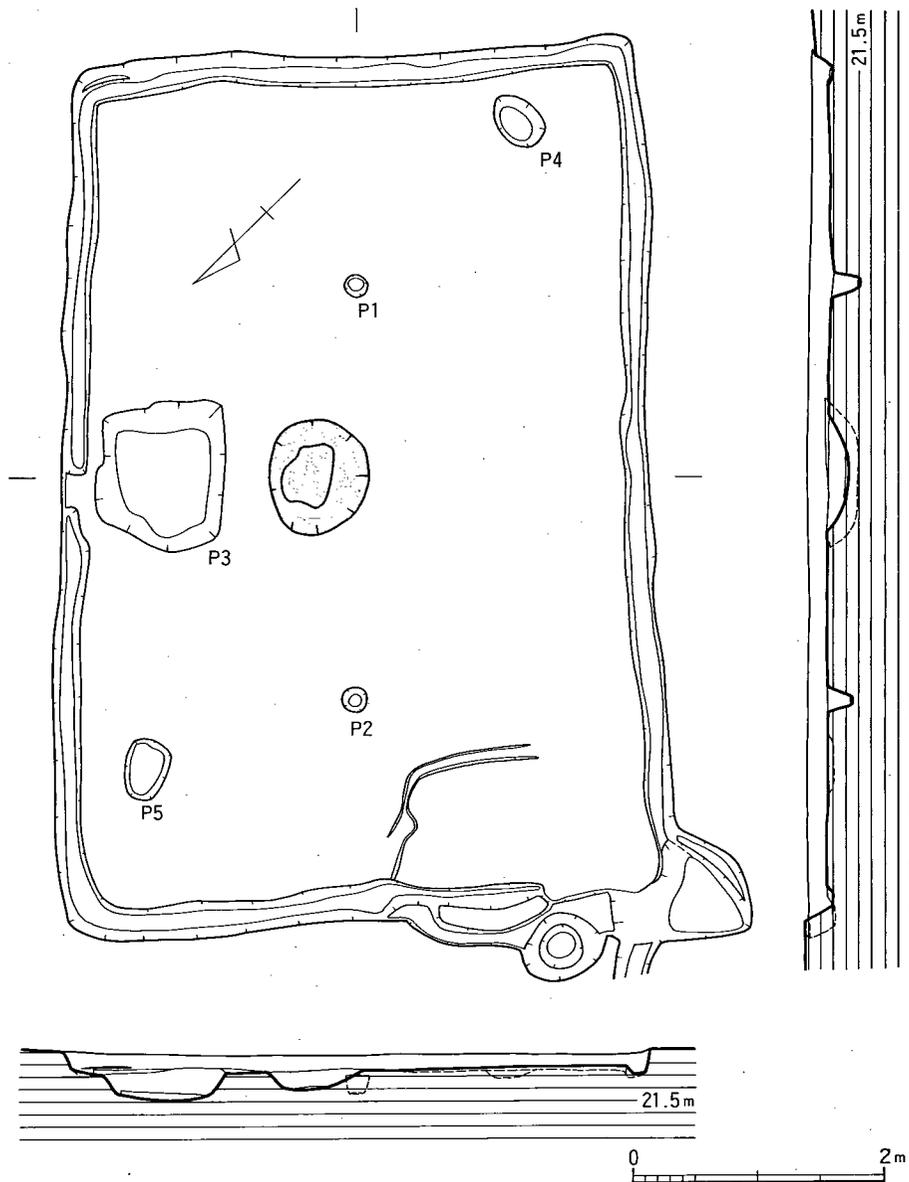


第42図 12号住居跡実測図 (1/60)

一辺の長さは4.2m前後である。主柱穴はP1～P4の4本である。P1は直径35cm、深さ35cm、P2は径25cm～30cm、深さ42cm、P3は直径25cm、深さ21cm、P4は直径25cm、深さ38cmである。主軸方位はほぼ南北を示す。炉跡は主柱穴の中心にある直径50cmの大きさの浅いピットである。屋内土壌については不明。周溝は西・北・東では確認できたが南側には掘られてないようだ。遺物は小破片が出土したが、図示できない。

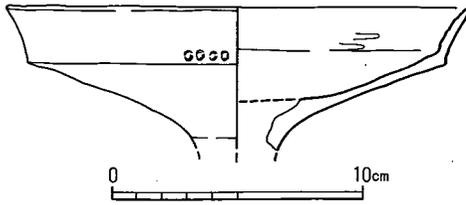
13号住居跡 (図版19-1、第43図)

調査区南半部のほぼ中央、19号住居跡のすぐ東側に位置する。北西隅を後世の不明遺構で破



第43図 13号住居跡実測図 (1/60)

壊されている。住居跡との切り合関係はない。平面形態は南北に長い長方形プランを呈する。長壁は7.0m、短壁は南側が4.45m、北側は若干長く5.0mほどであろう。主柱穴は2本で、P1は直径18cm、深さ20cm、P2は直径20cm、深さ20cmである。P1-P2の中軸方位はN44°Wである。柱間の距離は3.13m。この中央やや東側に90cm×80cmの規模の炉跡がある。屋内土壌



第44図 13号住居跡出土土器実測図 (1/3)

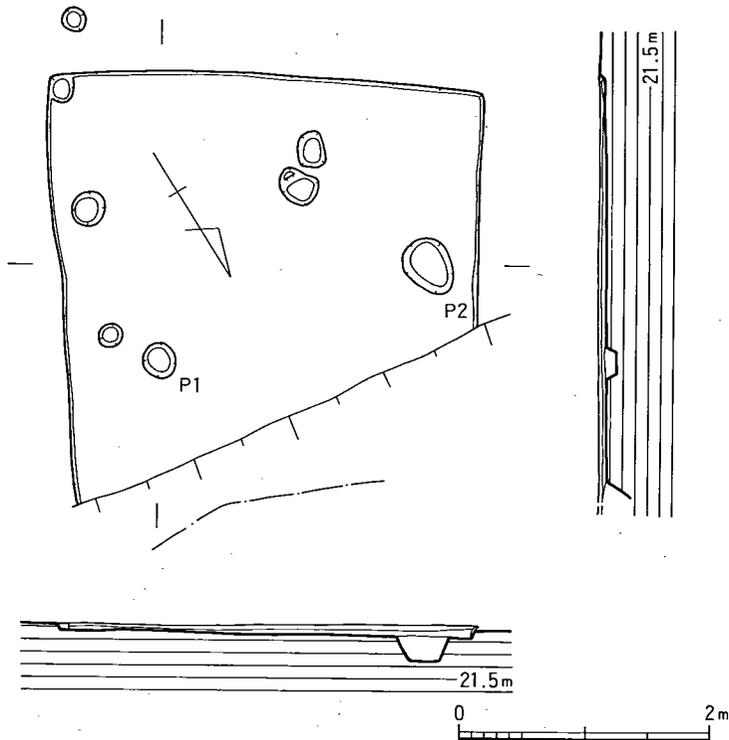
は東壁の中央部に設けられている。長方形に近い不整形で長辺約1.2m、短辺1.0mの規模である。周溝はこの屋内土壌で25cmほどとぎれるだけである。ベッド状遺構等はない。

出土土器 (第44図)

高杯 復原口径18.4cm、残存高5.7cmの大きさで、直線的に広がる口縁に、外反する口縁をつける破片である。口縁の屈曲部に竹管文が4個単位2ヶ所確認できた。器壁は磨滅しており調整不明。口縁内面にミガキ痕がわずかに観察できる。胎土には、白色細砂、赤褐色粒を含む。内面茶褐色、外面赤茶褐色を呈し、焼成は良好である。

14号住居跡 (第45図)

調査区南半部北側から発見した住居跡であるが、上部削平と北側が完掘できなかったため詳

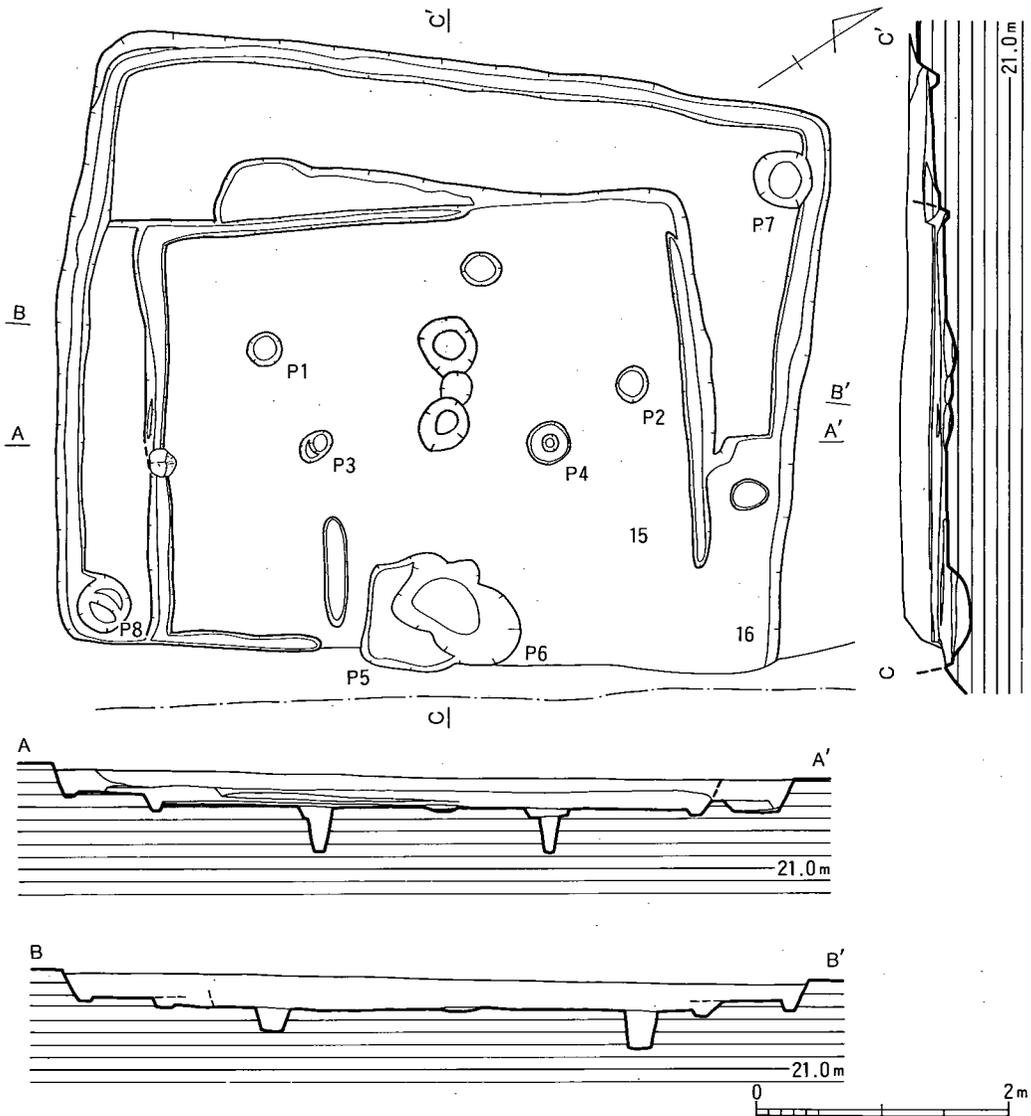


第45図 14号住居跡実測図 (1/60)

細については不明である。南壁は約3.5mを測る。床面に柱穴は7個確認できたが、主柱穴はわからない。その他の付属施設もなく、出土遺物もない。

15号・16号住居跡 (図版19-2・20-2、第46図)

調査区南半部北端から発見した住居跡で、東側は池の堤の側溝によって削平されている。南側に円形周溝が隣接する。15号住居跡が16号住居跡に切り込むが当初15号住居跡のプランを確



第46図 15・16号住居跡実測図 (1/60)

認することができず、16号住居跡の床面まで掘り下げてしまう結果となった。

15号住居跡は、平面形態は16号住居跡と同様で南北に長い長方形のプランを呈する。東側が定かではないが、長壁4.4m、短壁3.4m程の規模となる。支柱穴はP3とP4の2本でともに二段掘である。P3は直径27cm、深さ35cm、P4は直径14cm、深さ35cmの規模である。P3—P4の中軸方位はN32°Eである。柱間の距離は1.7m。この中央やや西側に直径約40cmの大きさの炉跡がある。埋土には炭化物、焼土がつまる。15号住居跡の屋内土壌はP6と考える。周溝は北東・北西のコーナー部分が掘り込まれていない。

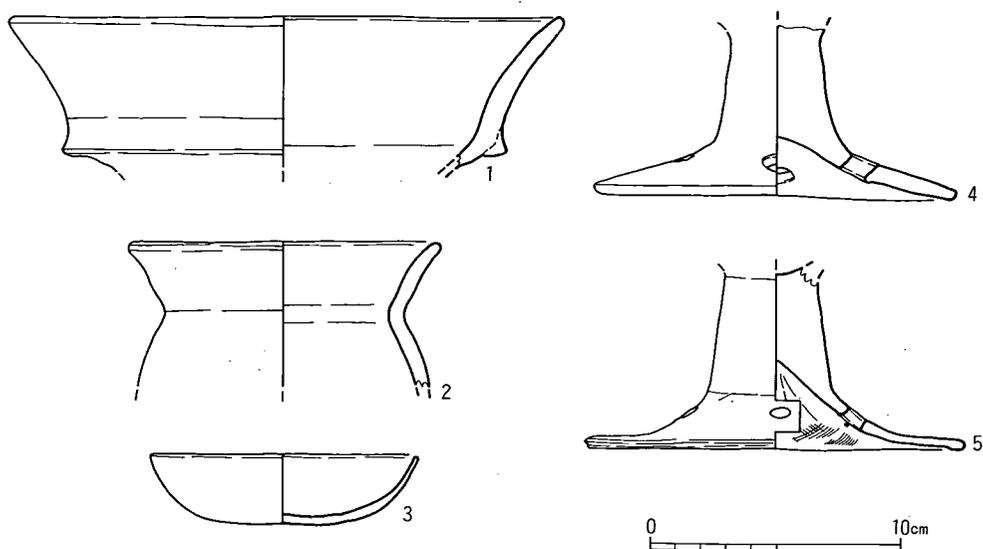
16号住居跡も南北に長い長方形のプランを呈する。東側は削平されており北東のコーナーは確認できない。長壁は西側で5.9m、短壁は南側で4.35mの規模である。支柱穴はP1とP2の2本で、P1は直径27cm、深さ18cm、P2は直径25cm、深さ30cmの大きさである。P1—P2の中軸方位はN40°Eを示す。柱間距離は2.7m。この中央やや西側に直径50cm程の炉跡がある。焼土には炭化物と焼土がつまる。ベッド状遺構は15号住居跡に切られて東側は不明であるが、他の3辺には設けられている。16号住居跡の屋内土壌はP5である。周溝は壁下を巡るが、東側については不明である。

出土遺物 (第47図)

5は15号住居跡の南側床面から、他は埋土から出土した。

複合口縁壺(1) 外反する口縁部で、屈曲部は凸帯状に飛び出す。外面はヨコナデ、内面はナデ調整。胎土には赤褐色粒、角閃石、細砂粒を含み黄褐色に焼成される。復原口径22.0cm。

壺(2) 復原口径12.4cmの口頸部破片である。口縁部はやや外反させ、端部は丸く収める。胴



第47図 15・16号住居跡出土土器実測図 (1/3)

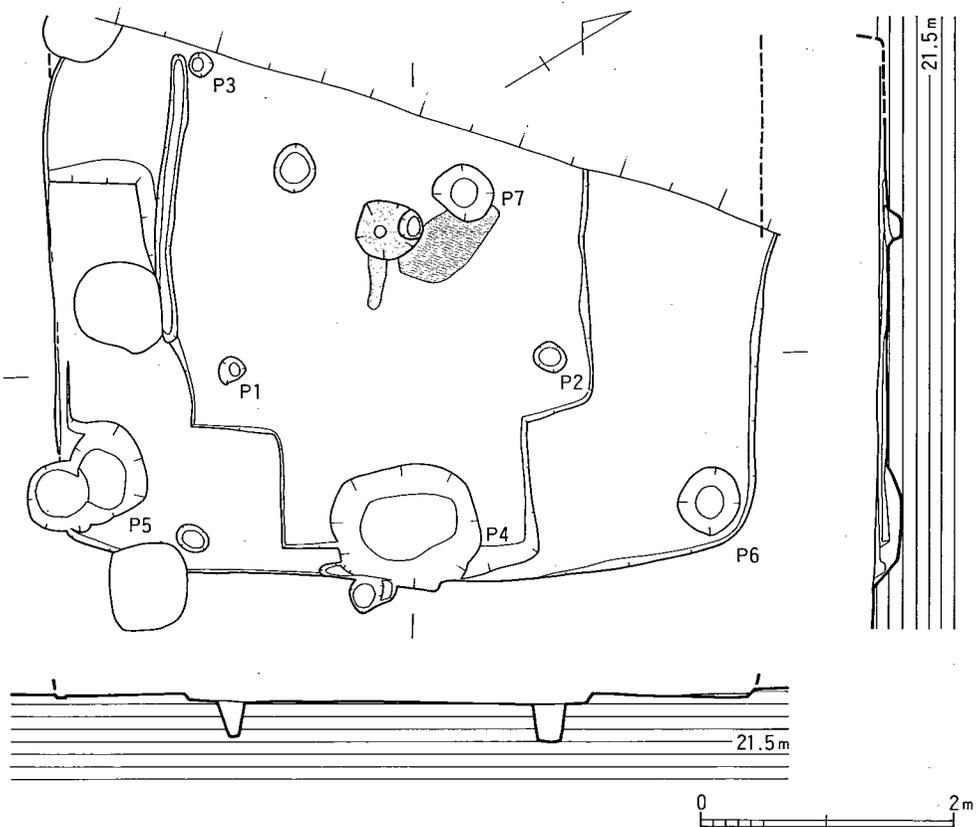
部外面、頸部内面はナデ。他はヨコナデされる。2次加熱を受け橙茶褐色を呈する。

椀(3) 口径10.7cm、器高2.75cmの大きさで、内外面ともに風化が進み調整法は不明である。底部の一部に煤が付着する。

高杯(4・5) ともに杯部を欠く。柱状部は中実で、裾部は大きく開く。裾部に4ヶ所の穿孔がある。ともに磨滅が進む。外面はナデ調整であろう。5の裾部内面にハケ目が残る。裾部径は4が14.4cm、5が15.2cmである。

17号住居跡 (図版21、第48図)

調査区南半部北西端から発見した住居である。すぐ南側に隣接して18号住居跡、東側に円形周溝、畦を挟んで西側に22号住居跡がある。また南側の側壁やベッド状遺構を6号掘立柱建物跡の柱穴が切り込み、さらに北西側は畦道と水路によって破壊されているため、住居跡全体の平面形態は不明であるが残存状況から一辺5.5mほどの隅丸方形プランを呈するものとする。



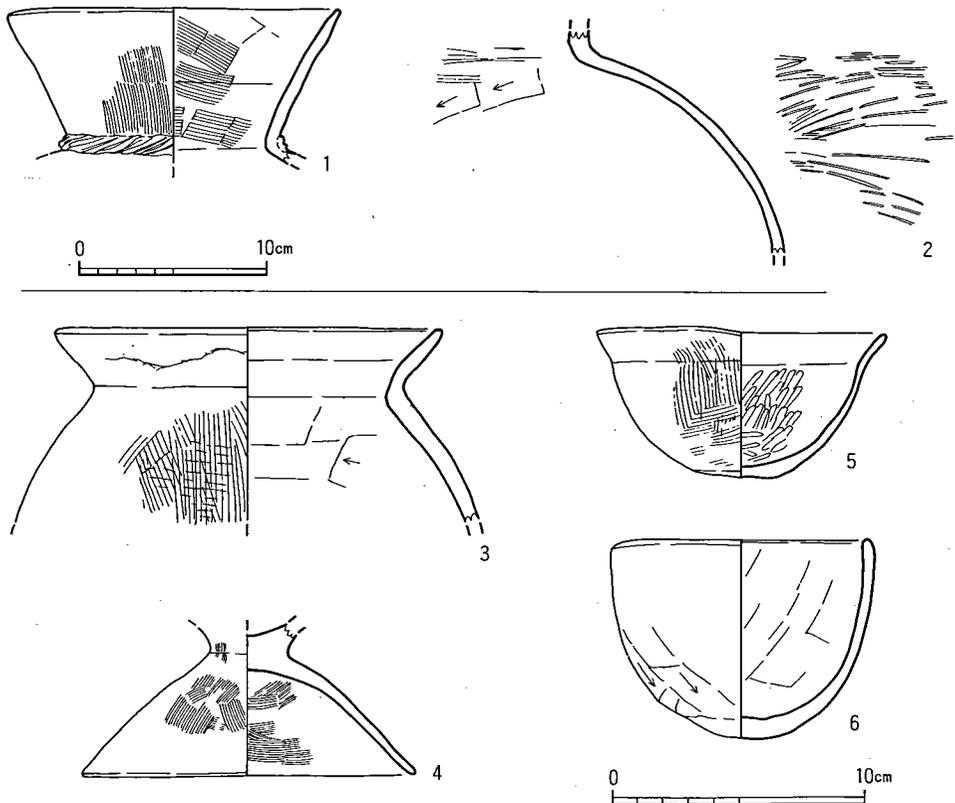
第48図 17号住居跡実測図 (1/60)

主柱穴はP 1・P 2の位置から4本柱と考えるが、P 3を採用すると若干歪むことになり他の2本は破壊された部分に存在したと考える。P 1は直径約20cm、深さ30cm。P 2は直径25cm前後で深さ30cmである。P 1-P 2の方位はN31° Eである。床面中央に55cm×45cmの炉跡があり、周辺部に焼土、炭化物が認められた。屋内土壌は東壁中央に設けられている。1.2m×1.0mの隅丸長方形を呈し、深さは約10cm。ベッド状遺構は、屋内土壌付近と南西側コーナーには設置されていない。周溝は壁際にはない。

出土遺物 (図版53・第49図)

1がP 2西側床面、2・4がP 4の屋内土壌から、5はP 6から、6はP 5から、3は埋土からの出土。

壺(1・2) 1は広口壺の口縁頸部片で口径17.7cm。頸部に刻み目凸帯を貼り付ける。外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目調整。端部はヨコナデされる。2は胴部破片で、外面はミガキ、内面はナデ調整。一部にヘラ削りとハケ目がみられる。内面には黒色の付着物、外面には煤が付着している。

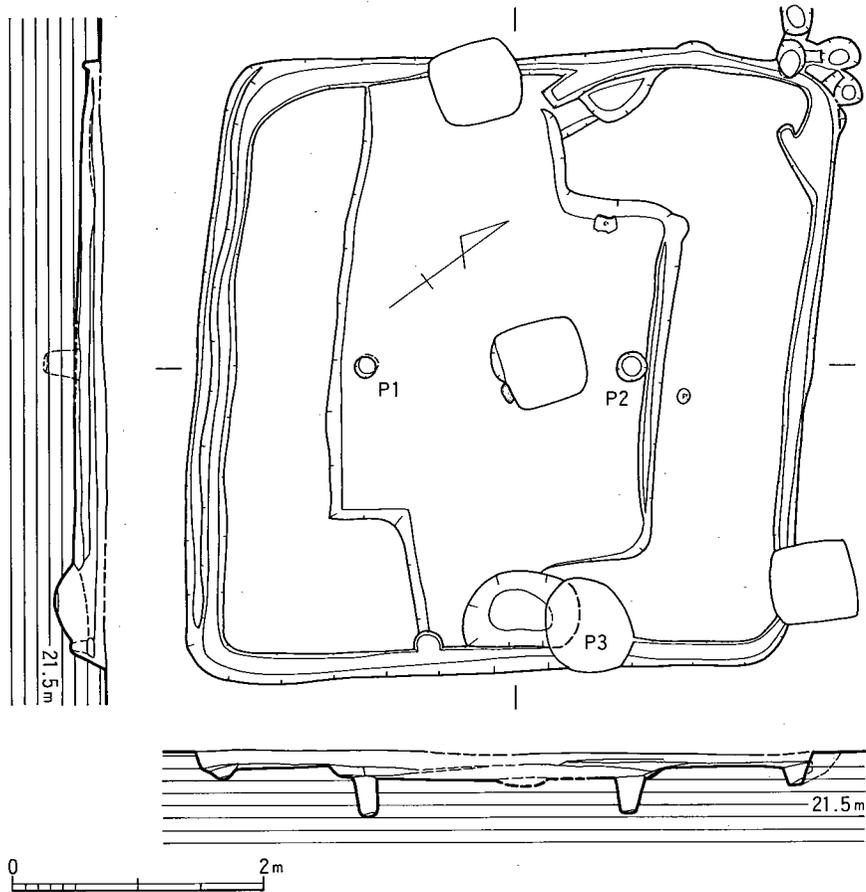


第49図 17号住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)

壺(3) 復原口径15.4cm、口縁部はヨコナデ、外面に粘土の継目が認められる。胴部内面はヘラ削りの後ナデ、外面は縦方向のハケ目、一部に叩き痕がみられる。内外面共に黒色の付着物がある。灰黄褐色に焼成される。

高杯(4) 椀形の杯部をもつ高杯の脚部破片で内彎気味に開く。復原底径13.3cm、外面は縦方向の細かいハケ目、内面は細かい横方向のハケ目調整。胎土に角閃石、石英、細砂粒を多く含み、橙褐色に焼成される。内面に一部炭化物が付着している。

碗(5・6) 5は口径11.6cm、器高6.95cmの大きさで、短く外反する口縁部がつくもので、底部は平底である。内面はミガキ、外面はハケ目調整。底部はナデられる。灰茶褐色に焼成される。外面の一部に炭化物が付着している。6は口径10.5cm、器高7.9cmの大きさで口縁部は体部から直に立ち上がる。口縁部はヨコナデ、外面は上位がナデ、下位がヘラ削り、内面は工具使用のナデ、底部はナデ。胴部から底部にかけて径8cmほどの黒斑がみられる。胎土には角閃石、



第50図 18号住居跡実測図 (1/60)

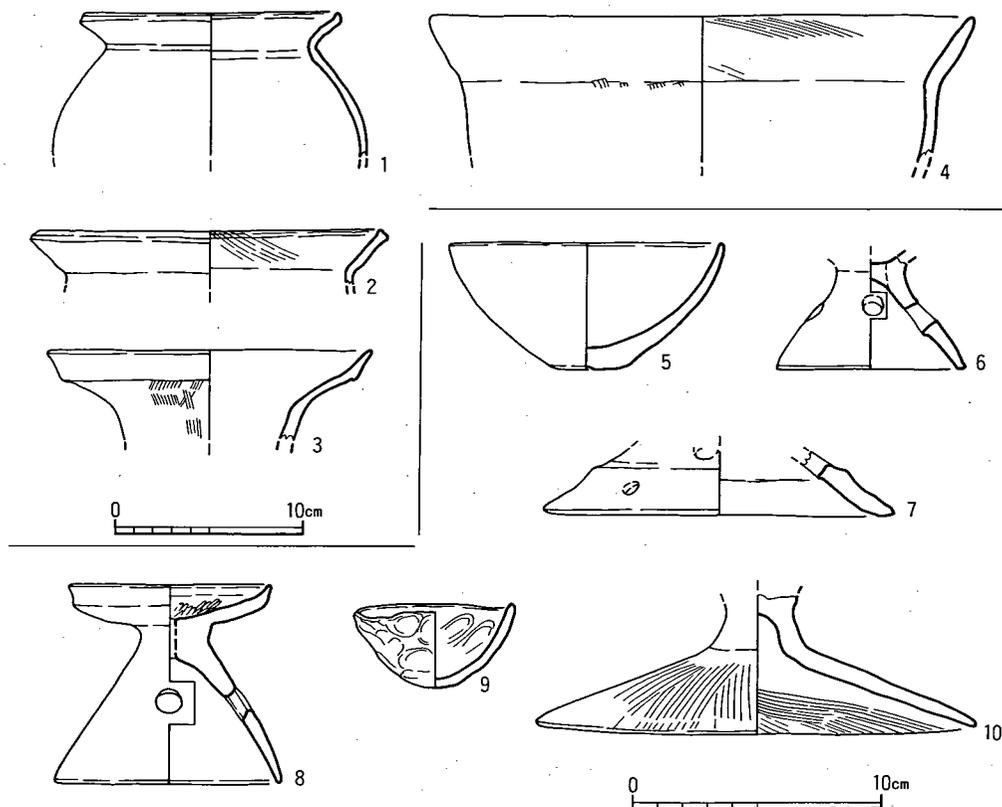
石英、細砂粒を多く含み、黄茶褐色に焼成される。

17号住居跡出土の土器は弥生時代後期末に属するものであろう。

18号住居跡 (図版21-1・23-1、第50図)

調査区南半部、17号住居跡の東南側に隣接する。6号掘立柱建物跡と19号住居跡と重複するが、19号住居跡より新しく、6号建物より古い。平面形態はやや歪む隅丸方形のプランを呈する。壁長は一辺4.85~4.9mである。支柱穴は2本で、P1は直径20cm、深さ30cm、P2は直径25cmで、深さ30cmである。柱間の距離は1.9mを測る。P1-P2の方向はN33°Eである。P1・P2の中心に6号建物の柱穴が掘り込まれており、炉跡は確認することはできなかったが、柱穴の南側端にわずかではあるが焼土の塊がありこの地点を炉跡としてよかろう。屋内土壌は南東壁中央に設けられるが、これも6号建物の柱穴によって半壊している。ベッド状遺構は北西側の一部と屋内土壌の部分には設置していない。周溝は壁下を一周する。

出土土器 (第51図)



第51図 18号住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)

壺(1・2) 1は復原口径14.0cm。「く」字形口縁を呈し、口縁端部は上方につまみ上げられる。口縁部内外面はヨコナデ調整。他は磨滅のため調整法不明。胎土には角閃石、雲母を含む。黄橙褐色を呈する。2は復原口径19.0cmで1と同様に端部をつまみ上げる。内面は粗い斜めのハケ目。外面はヨコナデ調整される。

壺(3) 3は復原口径17.2cmで、複合口縁壺の口頸部破片である。口縁部は、わずかに外反し端部やや尖り気味。屈曲部の上位はヨコナデ、下位はハケ目、内面はナデられる。胎土には赤褐色粒、角閃石、細砂粒、粗砂粒を多く含み橙褐色に焼成される。

鉢(4・5) 5は口径28.6cmに復原できる大型の鉢で、口縁部は斜め上方にのびる。口縁内面にハケ目が残る。他は磨滅のため調整不明。口縁部外面は2次加燃を受け赤変する。5は口径10.8cm、器高5.0cmの大きさで、平底の底部から内彎して立ち上がる。口縁端部は丸い。内外面ともに磨滅が著しく調整不明。北東側ベッド状遺構床面からの出土。

高杯(6・7・10) 高杯脚部破片で、6は杯部が椀形を呈するものであろう。「ハ」字に開く脚部はヨコナデされる。7は杯部が屈曲するタイプのもので、脚部も二段に開き、上下に穿孔する。復原裾径13.8cm。10は椀形の杯部をもつタイプであらう。裾部径は17.4cmと大きく開く。脚部は短い。内外面にハケ目がみられる。床面から出土。

器台(8) 浅い皿状の受部をもつ。受部口径8.0cm、器高7.8cm、裾部径9.0cmの大きさ。脚裾部は内彎気味に開き、端部は丸い。受部底と脚裾部の間に穿孔がある。受部内面はナデ、外面はヨコナデ、他はナデ調整。胎土に角閃石、石英、赤褐色粒を含み、黄橙褐色に焼成される。

手捏土器(9) 口径11.45cm、器高3.3cm。内外面に指圧痕が残る。全面ナデ調整。

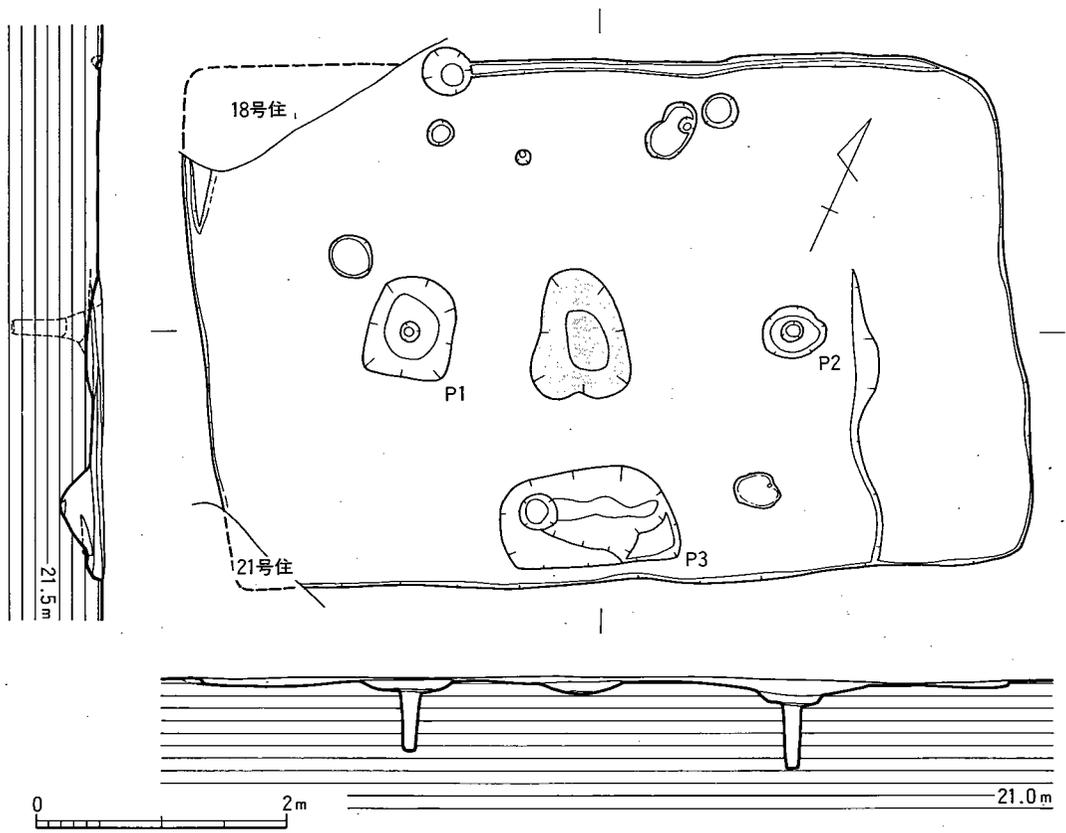
18号住居跡の土器は古墳時代初頭頃に属するものであろう。

19号住居跡 (図版21-1・23-1、第52図)

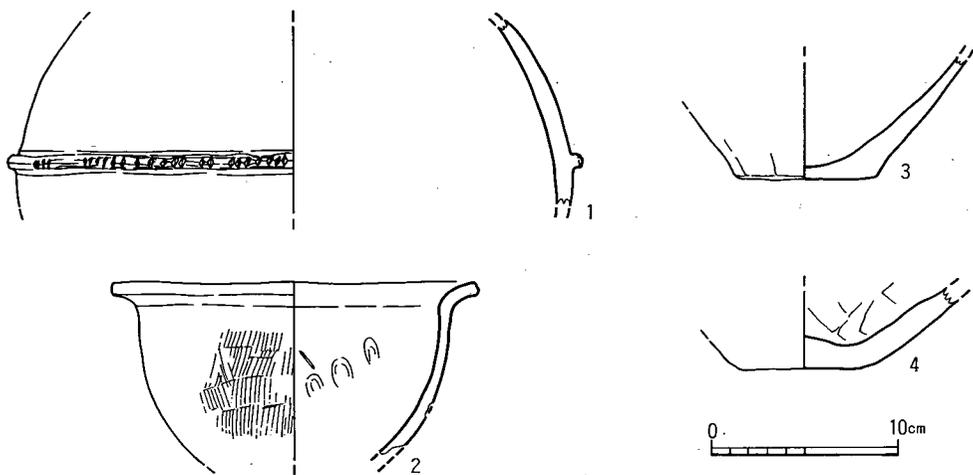
調査区南半部、13号住居跡の西側から検出した住居跡で、北西隅を18号住居跡に、南西隅を21号住居跡に切られる。平面形態は東西に長い長方形を呈する。長壁6.5m、短壁4.2mで壁高は数cmしか残存しない。支柱穴はP1・P2の2本で、ともに二段掘である。P1は80cm×65cmの隅丸長方形の中に直径15cm、深さ48cm、P2は50cm×40cmの楕円形の中に直径約20cm、深さ50cmの柱穴を掘り込む。柱間の距離は2.85cmである。炉跡は柱間の中央よりP1側に1.0m×0.65mの不整形を呈する。深さは8cm前後である。P1-P2の中軸方位はN65°Eを示す。北東側壁に沿って若干の高まりがあるが、中軸に向かって傾斜して中軸線付近で段が消える。通常のベッド状遺構とはちがう。南東側壁中央に、1.4m×0.8mの規模でP3がある。屋内土壌で深さは25cm前後ある。床面上に数個のピットが存在する本住居跡とは関連がない。

出土遺物 (第53図)

壺(1) 壺の胴部破片で、胴部に刻目を施した凸帯を貼付する。磨滅のため調整法不明。内外



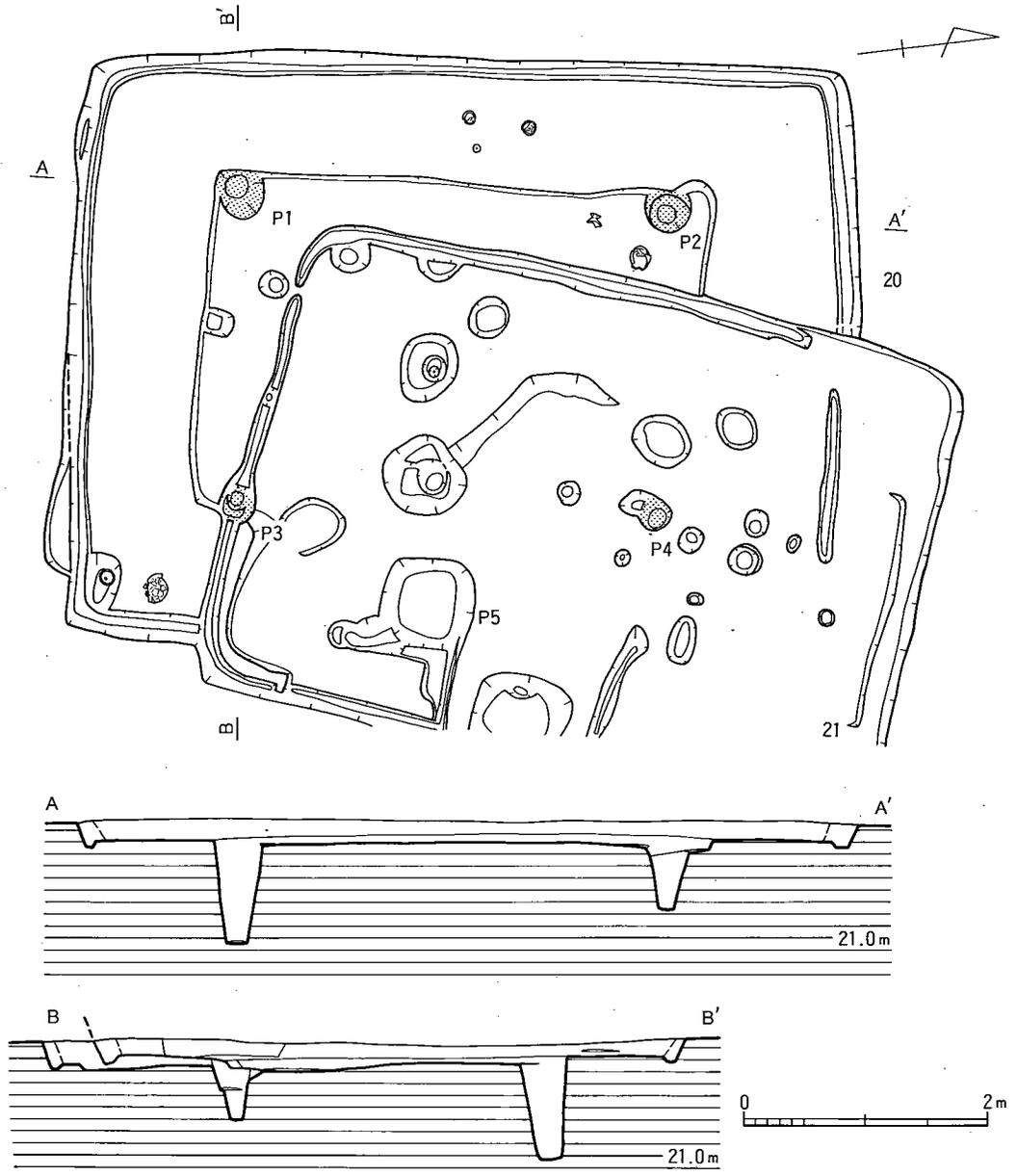
第52图 19号住居跡実測図 (1/60)



第53图 19号住居跡出土土器実測図 (1/4)

面ともに黒色の炭化物付着。最大胴径28.4cmに復原できる。床面から出土。

鉢(2) 短く外反する口縁部をもつ鉢で、復原口径19.5cm。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面はナデ、部分的に指圧痕や工具痕がみられる。外面は縦方向のハケ目調整。P3の屋内土壌から出土。



第54図 20号住居跡実測図 (1/60)

底部(3・4) 3は底径7.6cm、底部は削りの後ナデ、他はナデ調整。4の底部内面は板ナデ、他は磨滅のため調整不明。底部外面に煤が付着している。

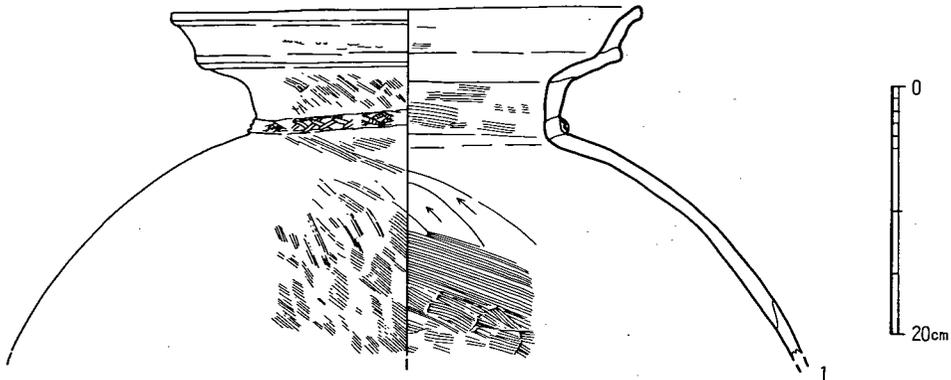
20号住居跡 (図版22、第54図)

調査区南半部の中央部で発見した住居で、21号住居跡と重複し、東側の約半分を破壊される。平面形態は南北に長い長方形プランを呈する。壁長は西壁で6.25m、南壁で4.75mの規模で、壁高は18cm前後残存する。支柱穴は、周溝に沿って設けられた、幅約90cmのベッド状遺構の内側四隅にあるP1・P2・P3・P4の4本柱である。P1は直径40cm、深さ78cm。P2は直径40cm弱、深さ50cm。P3は直径約30cm、深さ40cm。P4は21号住居で10cm程上部を削られるが現状で、直径28cm、深さ48cmで、どの柱穴も深く掘り込まれている。P1-P2の間の距離は3.22m、P1-P3間は2.4mである。中央部は削平され炉跡は不明である。屋内土壌は、東壁中央部に設けられ、一辺が約75cmの方形を呈するP5である。現状での深さは20cm程である。周溝は東側が不明であるが東南隅でとぎれておらず、周壁を巡っていたと考えられる。P1-P2の方位はN3°Eを示す。

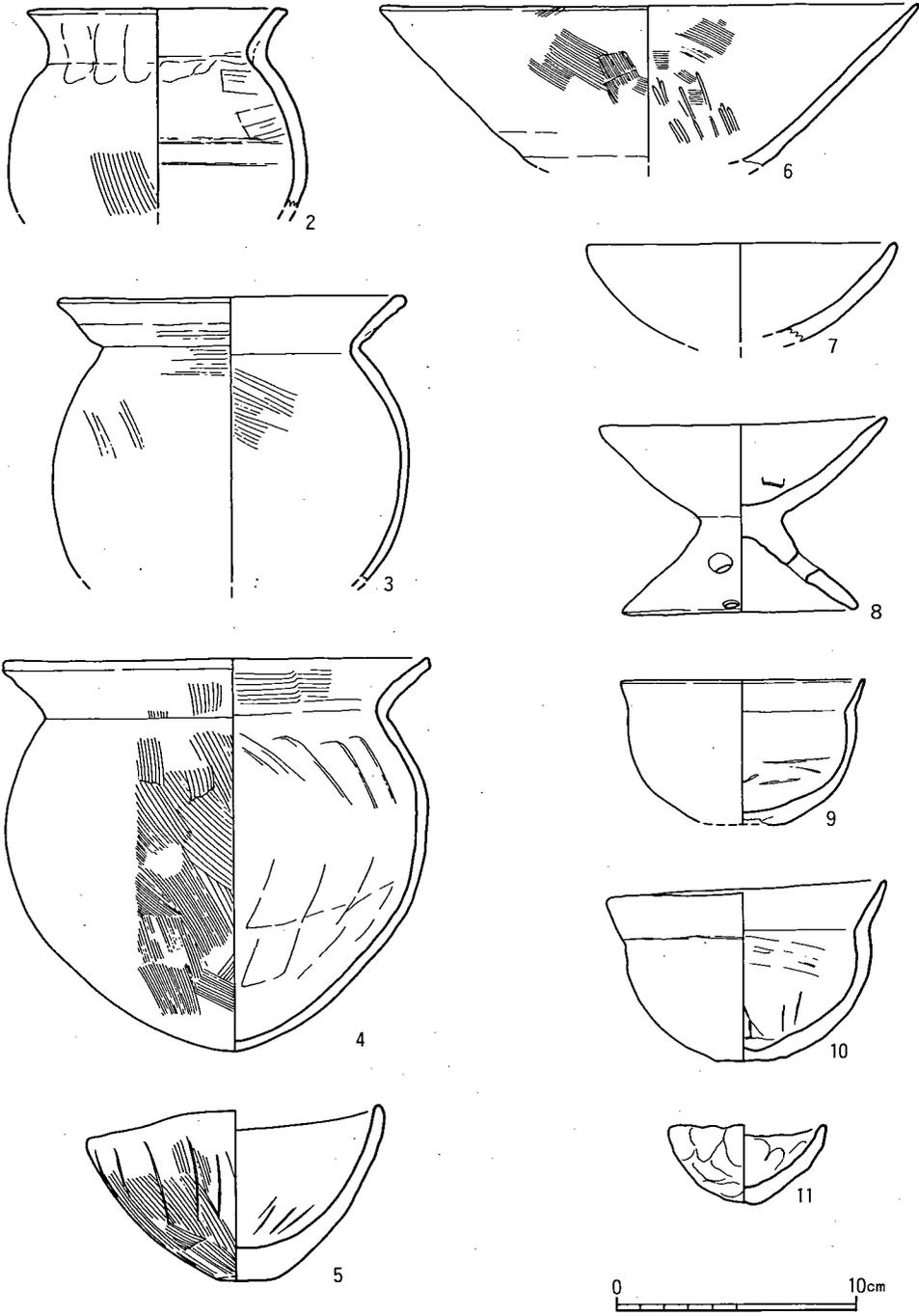
遺物は多量の土器のほか、西側ベッド状遺構床面から鉄鉈が出土した。鉄器については別項で説明する。

出土遺物 (図版53・54、第55～58図)

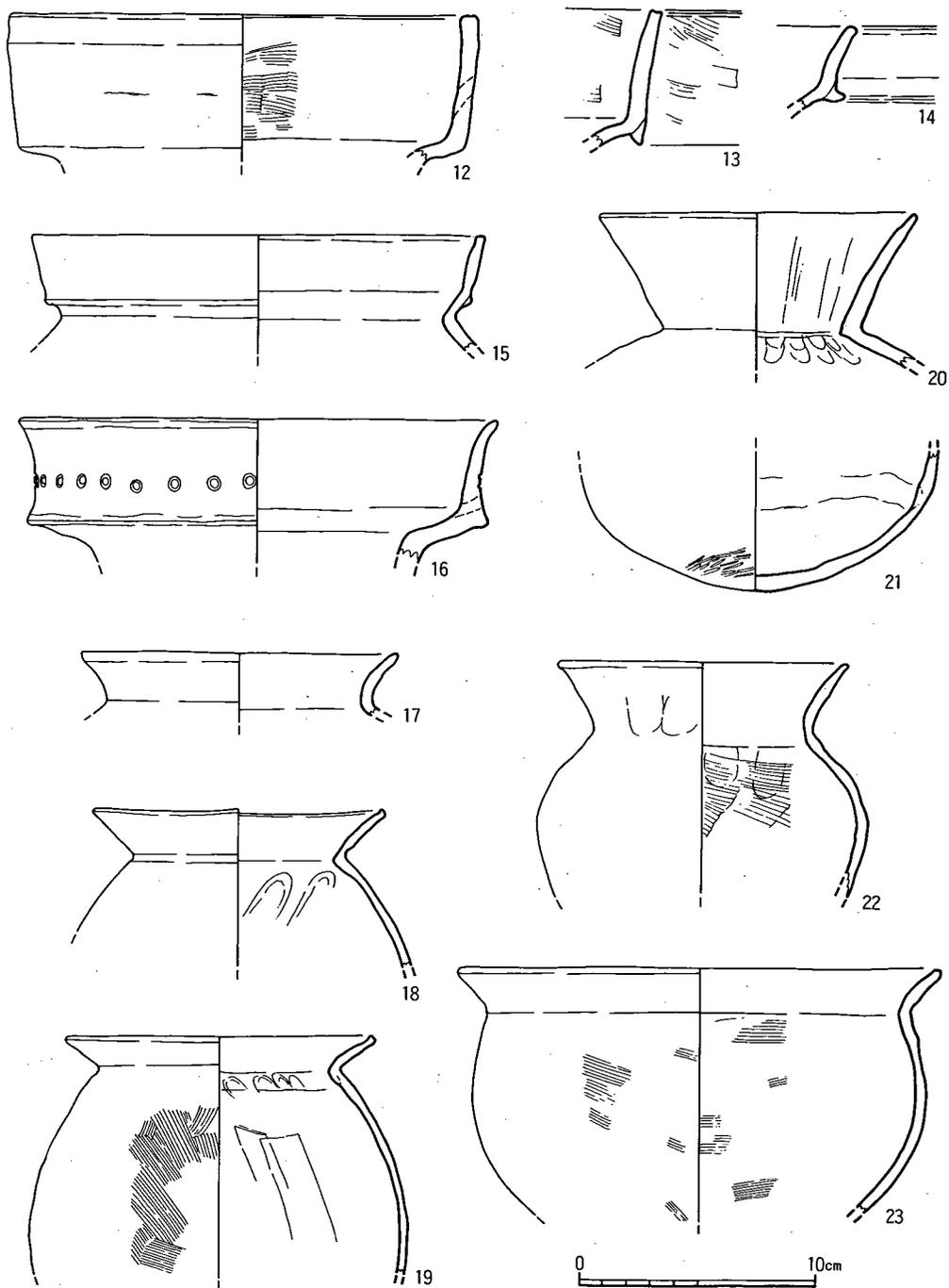
複合口縁壺(1) 口縁部はほぼ直に立つ頸部から開いて、上り気味に突出しながら屈曲し外反しながら上がる。頸部には凸帯を貼付する。肩部はなで肩で丸味をもつ。復原口径は37.2cm。上部口縁内外面はハケ目の後ヨコナデ、下部口縁は内面ナデ、頸部内面はハケ目。肩部以下の外面はハケ目調整、肩部内面は縦方向のナデと一部ヘラ削り、以下はハケ目調整される。胎土に角閃石、赤褐色粒、細砂粒を含み茶褐色に焼成される。頸部以下の広範囲に黒斑が見られる。南側ベッド状遺構床面から出土。



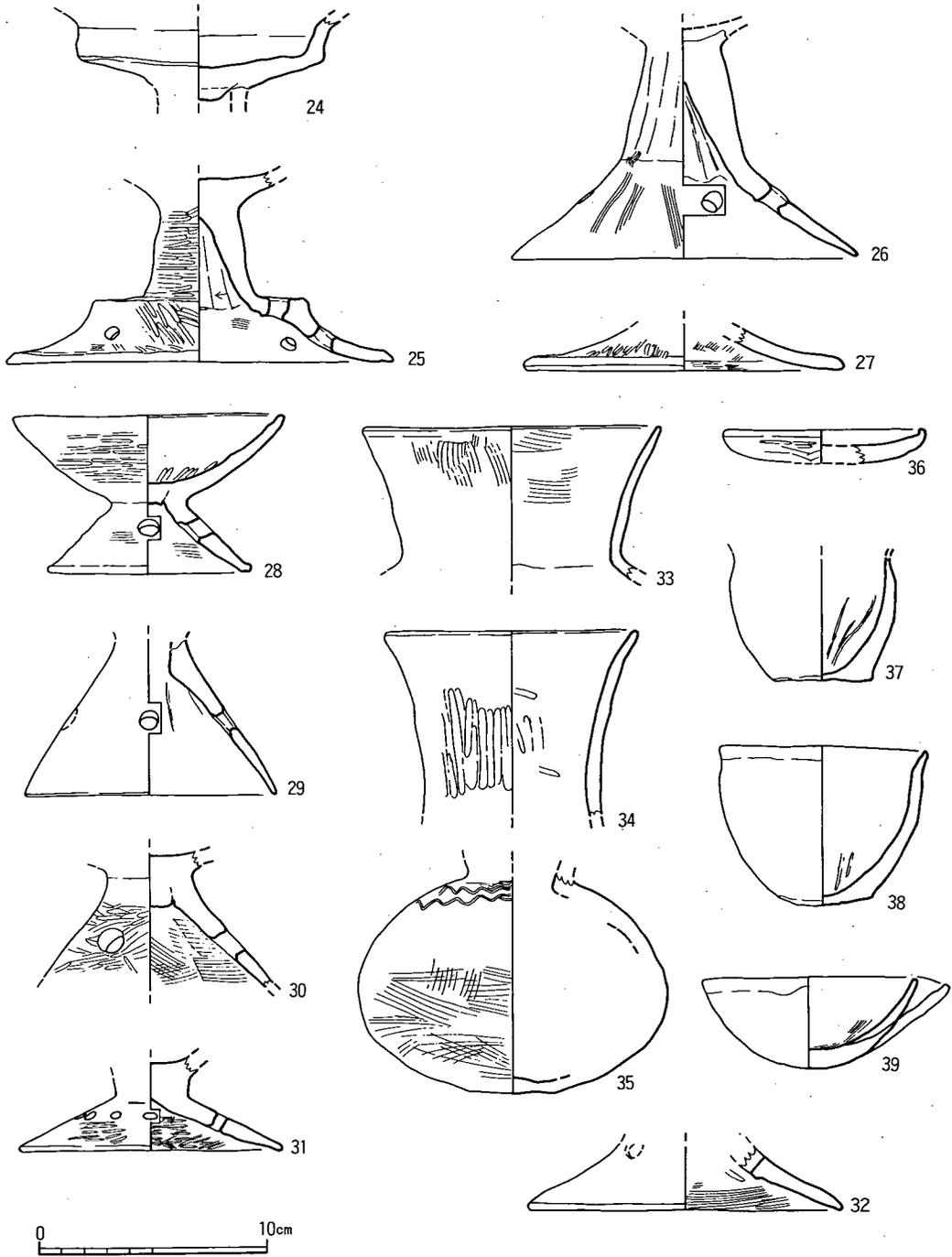
第55図 20号住居跡出土土器実測図① (1/6)



第56图 20号住居跡出土土器実測図② (1/3)



第57图 20号住居跡出土土器実測图③ (1/3)



第58图 20号住居跡出土土器実測図④ (1/3)

甕(2~4) 2は復原口径10.6cm。口縁部は緩やかに外反する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面はヘラ削りの後、部分的にナデられる。工具痕が残る。外面はハケ目の後ナデ調整。頸部に指圧痕がみられる。P1東側の小ピットからの出土。3は口径14.4cm。「く」字状口縁を呈し、端部は丸くつくられる。口縁部内外面はヨコナデ。外面に粘土の継目がみられる。外面はハケ目の後ナデ、内面はハケ目調整。P2の東側から出土。4は口径18.9cm、器高16.1cm、胴部最大径17.3cmの大きさ。口縁部内面は横方向のハケ目、外面は縦ハケ目の後ナデ、胴部内面はヘラ削り、外面はハケ目調整。南側ベッド状遺構床面から出土。

鉢(5) 口縁部は歪む。口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ目、内面はナデ調整。工具痕が残る。南側ベッド状遺構床面から出土。

高杯(6~8) 6は杯部破片。復原口径22cm。内面ハケ目の後ナデ、一部ミガキがみられる。外面はハケ目調整。7・8は碗形の杯部をもつ高杯で、脚は大きく開く。8は口径11.7cm、脚裾部径9.8cm。3ヶ所に穿孔される。調整は工具によるナデ。7は南側ベッド上、8はP2の南側床面出土。

椀(9・10) 口縁部が小さく内彎気味に立ち上がる。9は口径9.8cm、器高6cm、内面に工具痕がみられる。西側ベッド中央部床面から出土。10は口径11.4cm、器高7.1cm、底部は平底気味。内面は工具使用によるナデ調整。外面頸部に工具痕が一巡する。

手握土器(11) 口径6.5cm、器高3.3cm、全面ナデ調整。9・10と同位置から出土。

以上が床面出土の土器。以下は埋土からの出土。

複合口縁壺(12・13・14・16) 12は直立する口縁部で、復原口径26.5cm。内面横方向のハケ目。13・14は屈曲部を凸帯状に突出させる。16は屈曲部に稜をもち、口縁部は外反させる。復原口径27cm、外面に直径8cmの竹管文を一周巡らせる。胎土に白色砂粒、細小砂粒、赤褐色粒を多量に、角閃石も含み、黄橙色に焼成される。

複合口縁甕(15) 復原口径25.1cm。直線的にやや外傾して立ち上がる。屈曲部は、凸帯状に突出させる。内外面ともにヨコナデ調整。

甕(17~19) 17は外反する口縁部破片で復原口径17.8cm。18・19は「く」字形口縁を呈し端部をつまみ上げる。18は復原口縁16.7cm、磨滅のため調整法不明。19は復原口径17.6cm。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ目調整。

直口壺(20・22) 20は復原口径18.0cm、直線的に外傾して開く。口縁部内面は工具によるナデ。頸部下に指圧痕が残る。

広口壺(22) わずかに外反する口縁部で復原口径16.5cm。胴部内面はハケ目調整。

底部(21) 丸底の底部で外底部にミガキ痕が残る。

椀(23) 口縁部が外反する。復原口径26.6cm。口縁部内外面はヨコナデ。胴部は磨滅のため調整法は明瞭ではない。内外面にハケ目が残る。

高杯 (24~32) 24は屈曲部に段を有する杯部破片である。25は脚部で、鼓形に近い器形の高杯である。柱状部は中空で内面はヘラ削り、外面はミガキ。裾部外面はハケ目の後ミガキ、内面はナデ。円形の穿孔は上下二段に4ヶ所ずつ行う。胎土には赤褐色粒、角閃石、雲母、細砂粒を含み、黄褐色に焼成される。裾部径16.8cm。26はラッパ状に開く脚部で裾部径15.5cm、柱状部内面はしぼり痕、外面は工具によるナデ、裾部外面はハケ目、内面はナデ調整される。4ヶ所円孔をもつ。27は裾部破片。径13.6cm。外面は不定方向のミガキ。28は椀形の杯部をもつ高杯で、杯部径11.7cm、器高6.9cm、裾部径8.8cm。杯部内外面、裾部外面はミガキ。穿孔は4ヶ所。29~32は脚裾部破片で、30・31の外面はミガキ。32は工具による削りのあと丁寧なミガキ。31の内面はミガキ。30・32はハケ目調整。

壺 (33~35) 33は広口壺の口縁部破片で口径13cm。内外面ともにハケ目の後ナデ。34は長頸壺の口縁部破片。外面ミガキ、内面はナデ、部分的にミガキ。復原口径10.25cm。35は直立壺の胴部破片。肩部に波状文を施す。最大径までの内面はナデ。外面はハケ目の後ヨコナデ。以下の内面は不明。外面は横方向のハケ目調整。胎土には白色砂粒、細砂粒を多め、角閃石を含み黄橙色に焼成される。胴部径13.4cm。

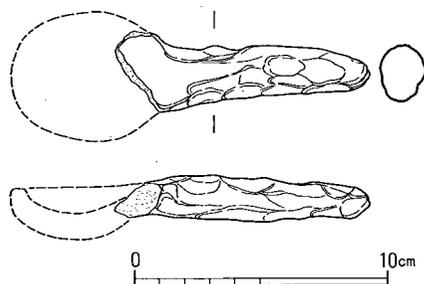
器台 (36) 器台受部の破片。復原口径は8.44cm。外面はミガキ。淡橙褐色を呈する。

小型甕 (37・38) ほぼ同形である。38は口径8.9cm、器高6.9cm。ともに内面に工具痕が認められる。

鉢 (39) 口縁部は変形するが歪なのか片口なのか判断できない。復原口径は9.2~10.6cm。内面底部に工具痕がみられる。

土製品 (第59図)

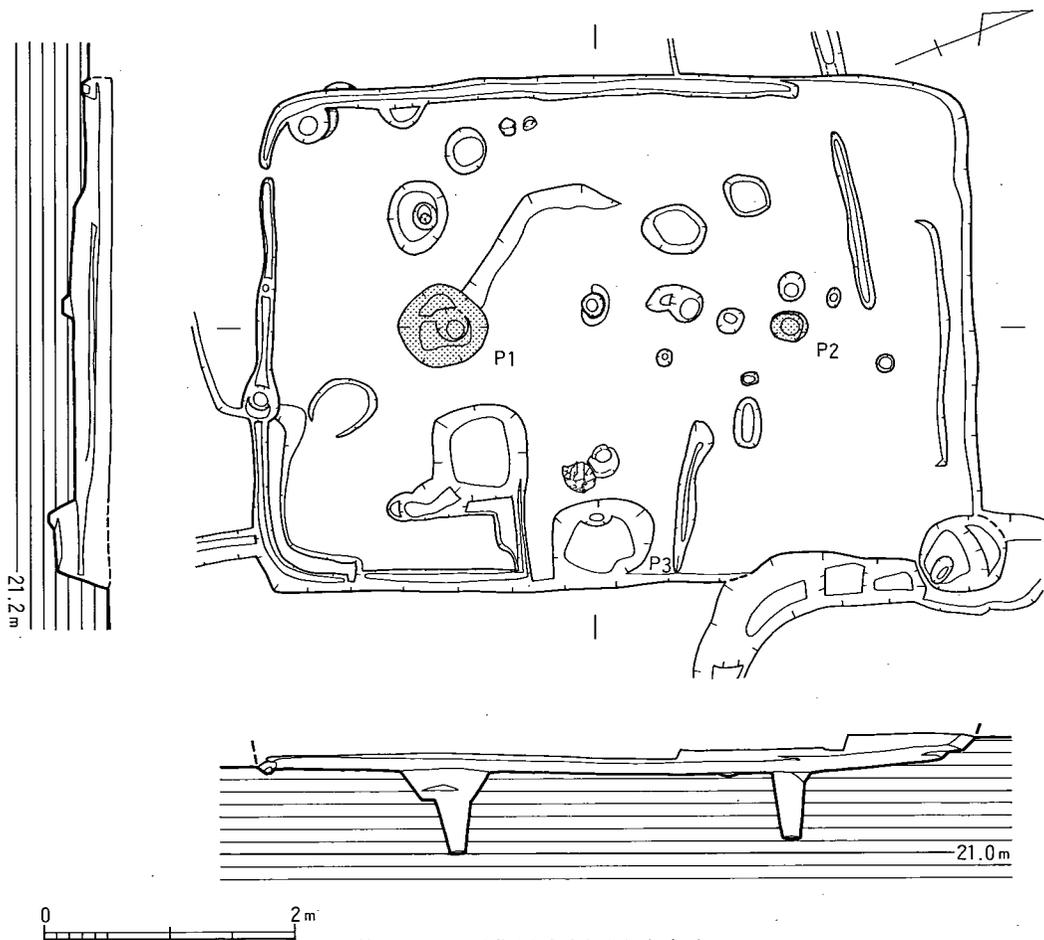
埋土から出土した杓子の土製品である。椀部を欠損するもので、全長は不明である。残存長10.1cm、柄部長8.0cm。柄の断面は2.2cm×1.9cmの不整楕円形を呈する。椀部の付け根部分はナデ、他は指オサエで整形している。胎土には砂粒を含む。焼成は堅くひきしまり良好である。色調は、柄の先端部側が白黄茶色、椀側が暗褐色を呈す。



第59図 土製品実測図 (1/3)

21号住居跡 (図版22、第60図)

調査区南半部中央で発見した住居跡で、20号住居跡、18号住居跡と重複し、20号・18号より新しい。北西隅は不明遺構に攪乱を受ける。平形形態は南北に長い長方形プランを呈する。主柱穴はP1・P2の2本である。P1は二段掘で一辺65cmの方形の中に直径25cm、深さ40cmの柱穴を掘り込む。P2は直径30cm、深さ50cmの規模である。P1—P2の柱間距離は2.4mであ



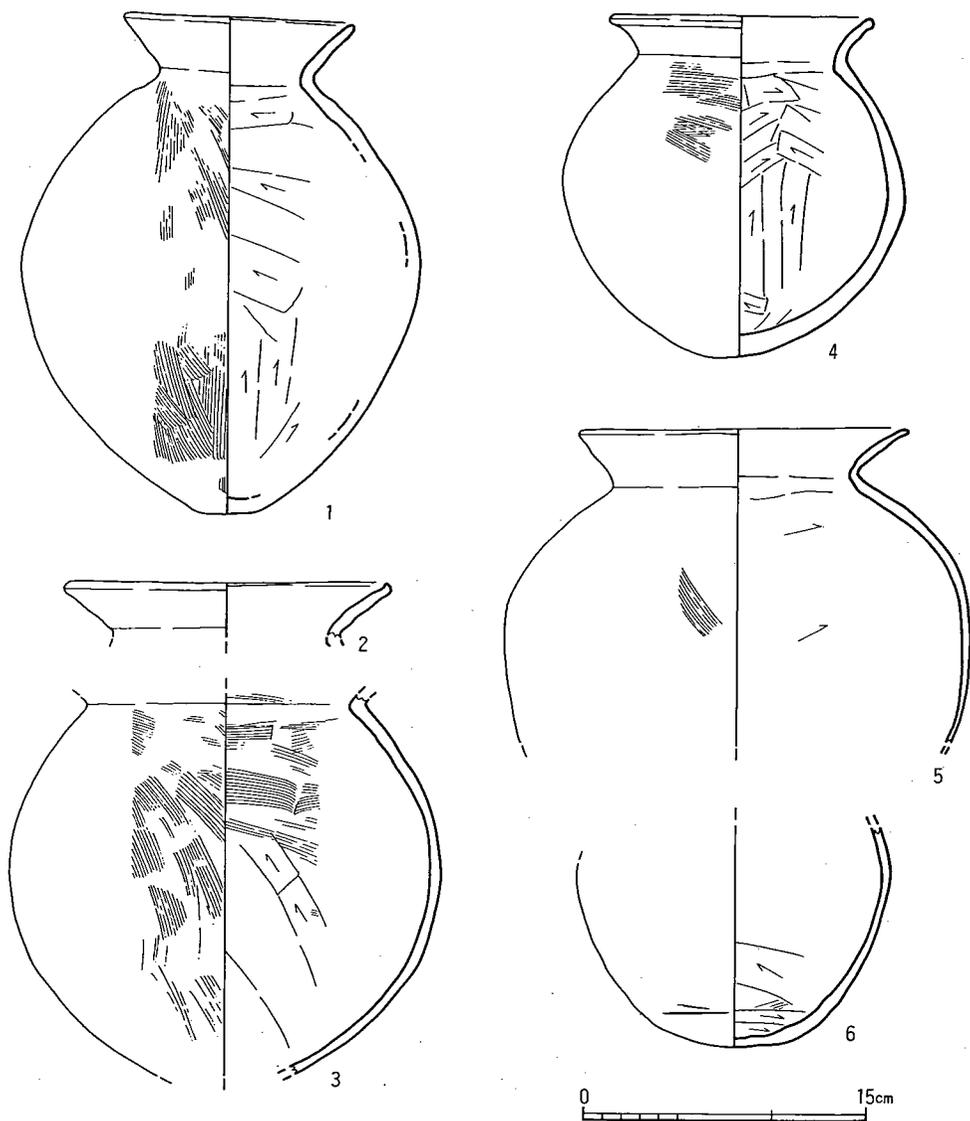
第60図 21号住居跡実測図 (1/60)

る。この中央東側に焼土塊がみられ炉跡と考えられる。屋内土壌は東壁の中央部にあるP3で、80cm×60cmの隅丸長方形を呈し、深さは15cmほどである。この両側に長さ1.2m、幅15cmほど溝を設けて他と区画されている。屋内土壌の西側に甕が2個体置されていた。ベッド状遺構はない。周溝は北壁側をのぞく周壁に掘り込まれる。P1・P2を通る中軸線の方位は、N23°Eを示す。

出土土器 (図版55、第61・62図)

壺(1) 長胴の広口壺で、復原口径11cm、器高26.5cm、胴部最大径21.0cm、底径3.1cmの大きさである。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ目で調整される。胎土に角閃石、赤褐色粒、細砂粒を含み、灰黄褐色に焼成される。内面に黒色炭化物、外面の広範囲に煤が付着。底部に黒斑がみられる。

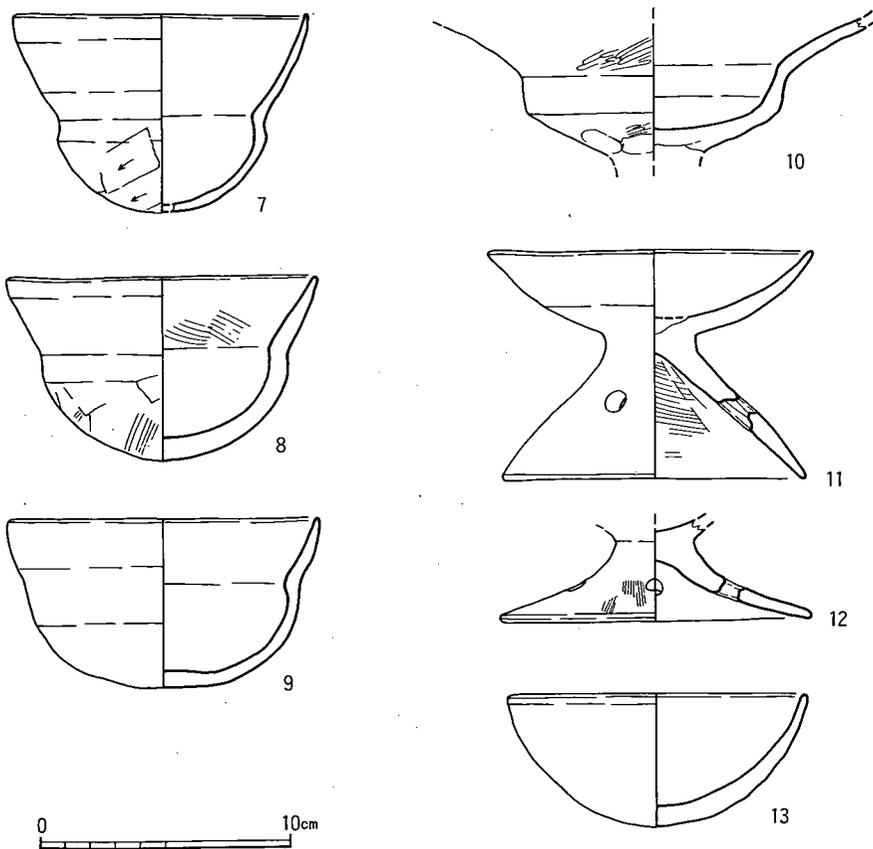
甕(2~6) 2は口縁部破片で端部はつまみ上げる。復原口径16.8cm。3は胴部破片で、最大



第61図 21号住居跡出土土器実測図① (1/4)

径22.8cm。外面はハケ目、内面は上位ハケ目、下位はヘラ削り調整。4は口径14cm、器高18.1cm、外反する口縁部はヨコナデ、胴部内面はヘラ削り、外面はハケ目調整。胴下半外面に煤が付着している。内面には黑色炭化物が付着する。5は復原口径17.4cm。外面は磨滅のため調整不明。内面は丁寧な削り。6は胴部破片で、内外面ともに削りの後ナデられる。

小型丸底壺(7~9) 半球形の胴部に、やや内彎して大きく開く口縁部がつき、口径が胴部最大径を上回る。7と8の胴部外面はヘラ削り、内面はナデ調整。口径は順に10.4cm、12.4cm、



第62図 21号住居跡出土土器実測図② (1/3)

器高は8.6cm、7.3cmである。9の胴部は7・8に比して扁平である。口径12.4cm、器高6.7cm。

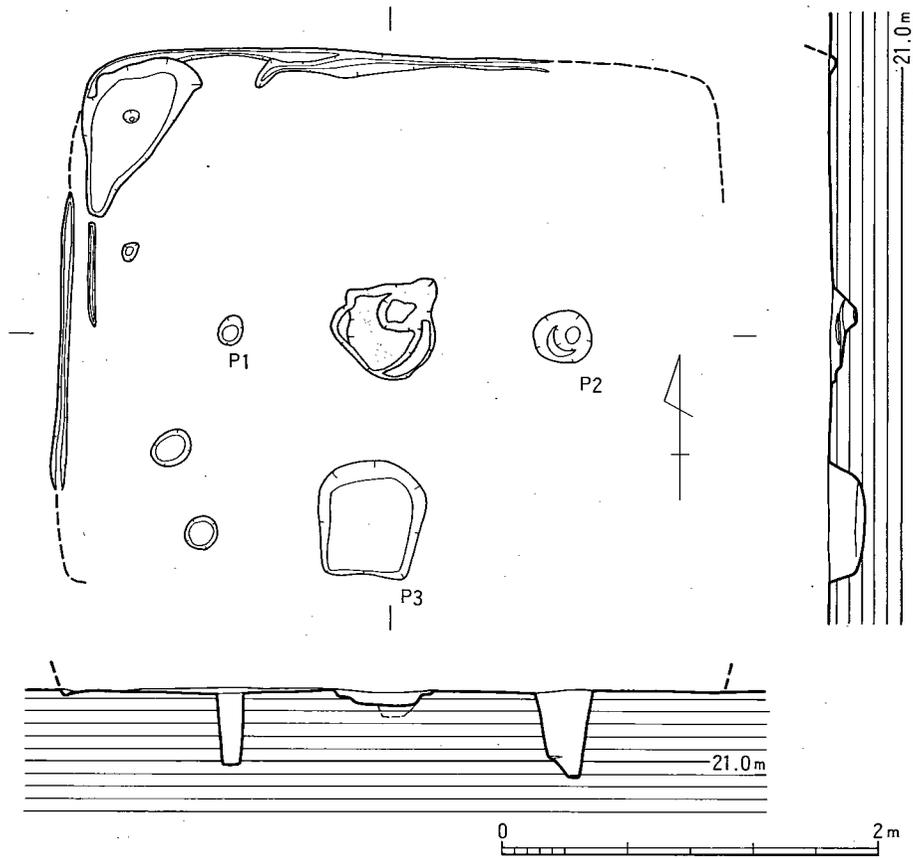
高杯(10~12) 高杯の杯部破片で、屈曲部に段を有する。磨滅が著しいが外面にミガキが観察できる。11・12は椀形の杯部をもつ高杯で、11は、口径12.7cm、器高9.1cm、裾部径は11.95cmの大きさである。裾部の穿孔は3ヶ所である。脚部内面はハケ目調整。12は11より大きく開く脚部で低い。穿孔は4ヶ所である。裾部径12.4cm。外面は円孔までがナデ、以下はハケ目。内面はナデ調整される。

椀(13) 口径11.8cm、器高5.3cm、底部外面は削り、内面は、工具によるナデ。外面に黒斑がある。淡黄茶褐色を呈し、焼成は良好である。

21号住居跡の出土土器は古墳時代初頭頃に属するものであろう。

22号住居跡 (図版23-2、第63図)

調査区北半部から発見した住居跡で、この周囲には他に住居跡等の遺構は存在しない。住居

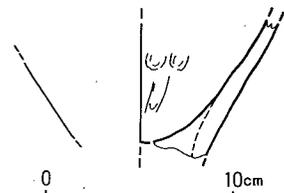


第63図 22号住居跡実測図 (1/60)

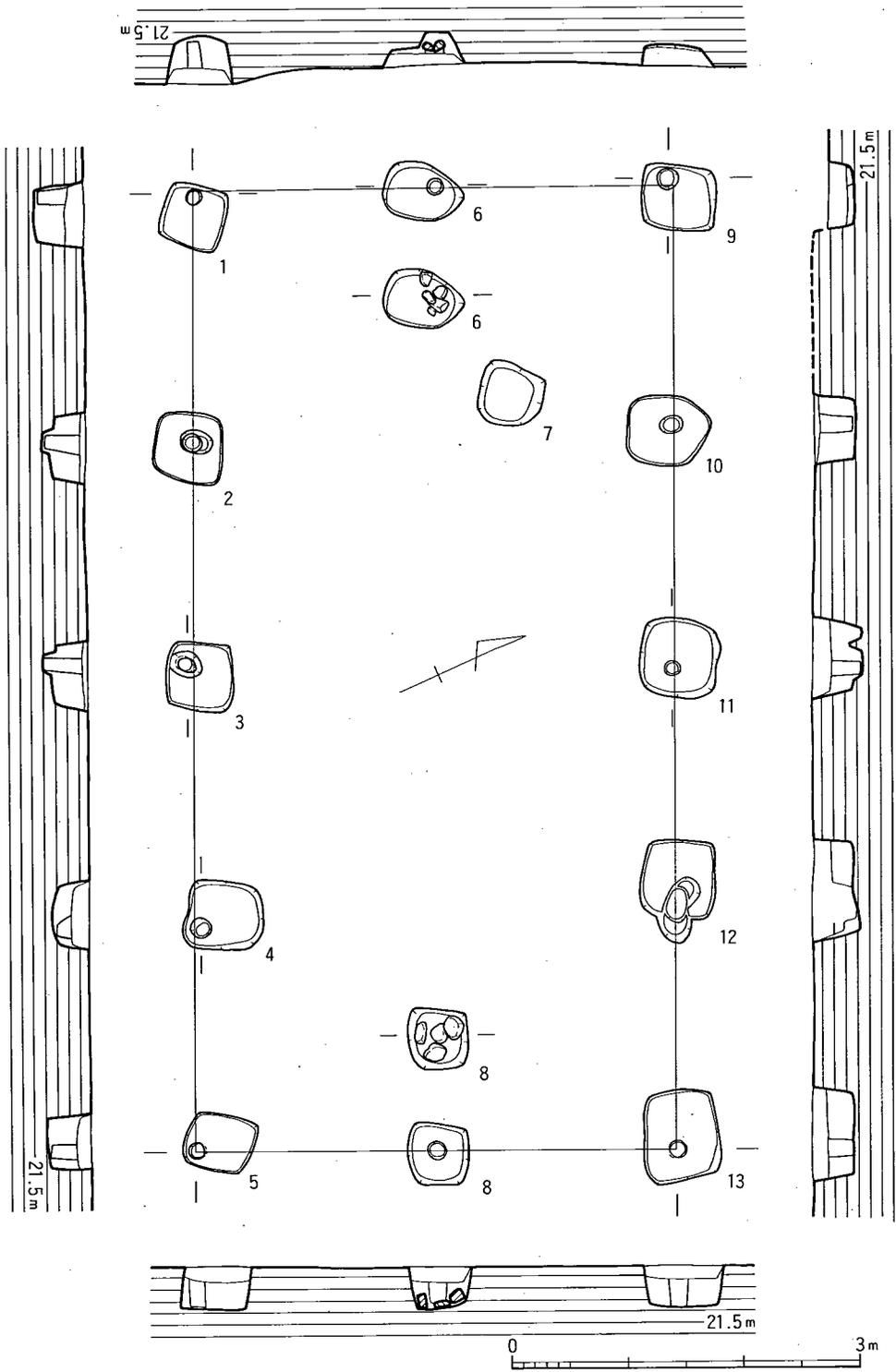
跡を多数発見した南半部のレベルから約20cm強低く削平されていることもあるが、すぐ北側が泥湿地でもあり、15・16号住居跡とともにこの集落単位の北限であろう。7号住居跡が位置するあたりから南西方向の黒川の形成する河岸段丘に遺跡地は広がると考えられる。

北西側で周溝の痕跡を確認したため周辺を調査した所、P1・P2の柱穴と屋内土壇P3を発見することができた。平面プランは、同溝や柱穴の位置から復原すると長軸5.2m前後、短軸4.2mほどの東西に長い長方形を呈するものと考えられる。

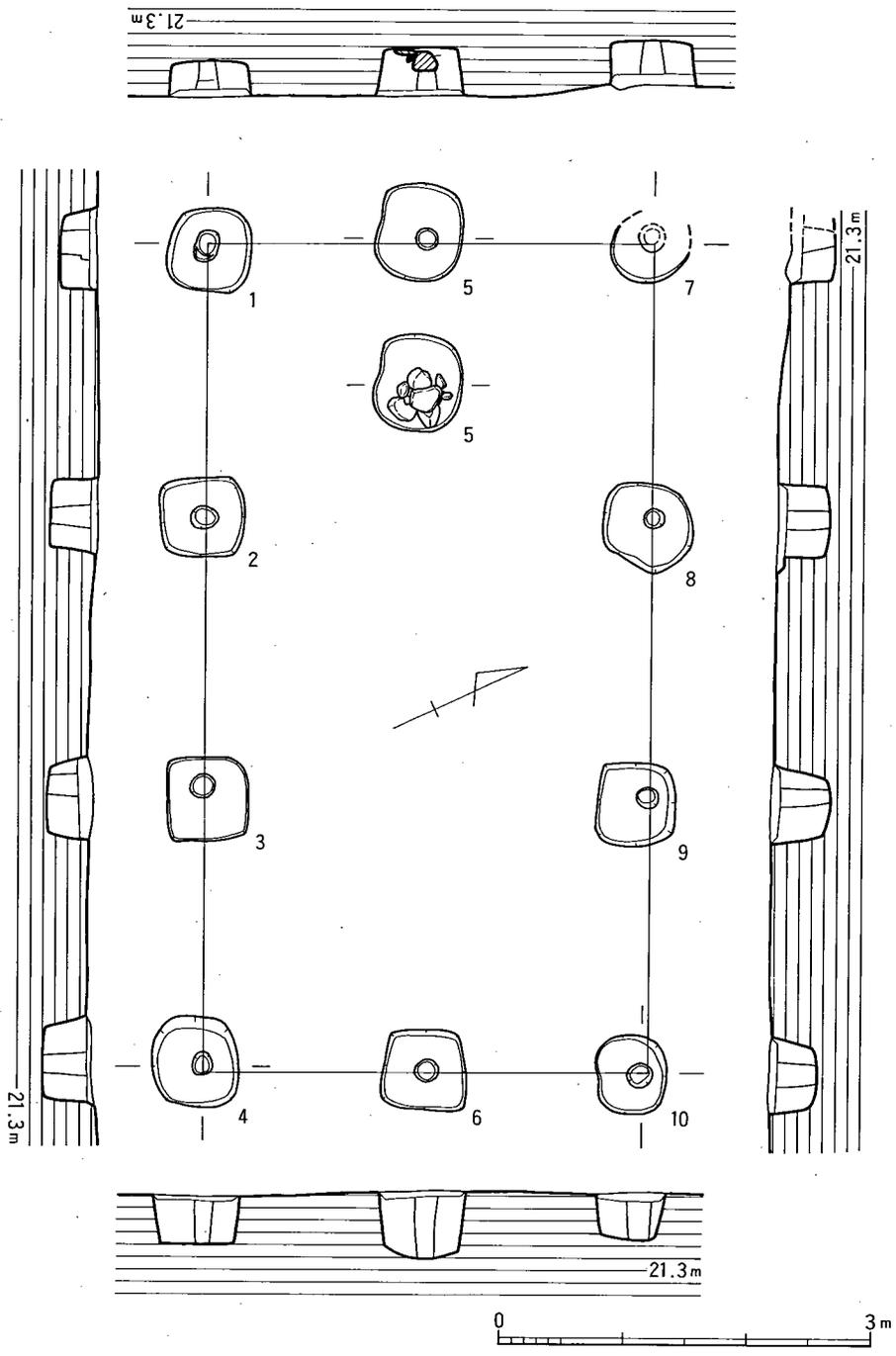
P1は直径22cm、深さ57cm、P2は直径40cm、深さ65cmである。P1-P2間の距離は2.3mで、この中央に不整形の炉跡がある。P1-P2の中軸方位はほぼ東西方向である。屋内土壇は、南壁側の中央に設けられており、90cm×70cmの隅丸長方形を呈し、深さは25cm前後である。



第64図 22号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第65图 5号掘立柱建物跡実測图 (1/60)



第66图 6号掘立柱建物跡実測图 (1/60)

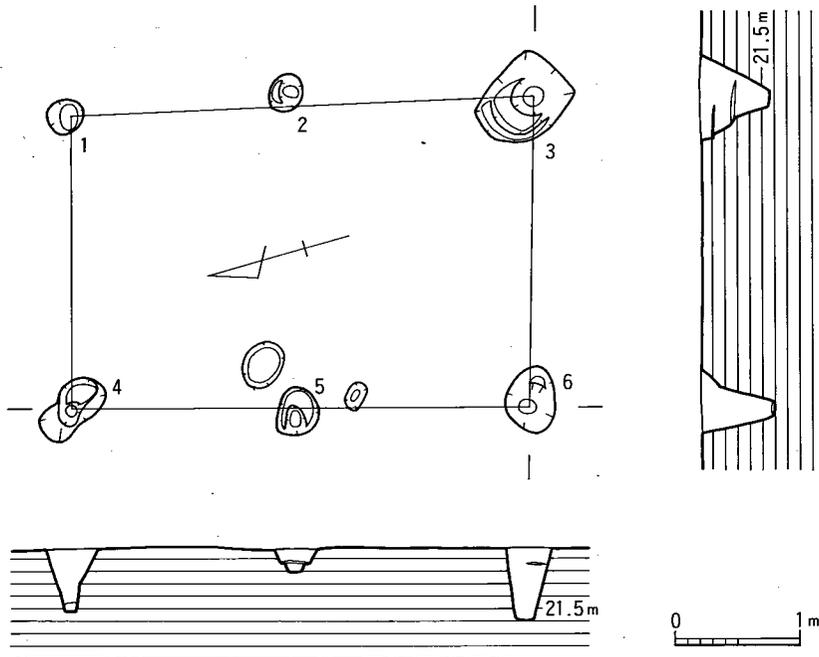
出土土器（第64図）

住居跡南側の屋内土壌から出土した甕底部片である。内外面ともにナデ調整。内面に指圧痕が残る。

(2) 掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡（図版24・25・26-1、第65図）

調査区南半部南西側で発見した掘立柱建物跡で7号住居跡と重複し、住居跡より新しい。5号・6号建物は他の建物とはちがひ、隅丸方形掘方が規則的に配されたもので、2棟の主軸方向も同一であることが判明した。この2棟間の距離は17mである。5号建物は、主軸をN66°Wに向ける。2×4間の建物である。梁間2間はP1—P9が4.1m、P5—P13は4.15m、桁行4間はP1—P5が8.3m、P9—P13が8.4mで、梁間の柱間平均は2.06m、桁行の柱間平均は2.09mである。柱穴の掘方は隅丸方形を呈し、一辺50cm～60cmで、柱根は15cm～20cmである。深さは35cm前後である。柱穴の内、梁間の中心であるP6とP8は河原石を用いて礎盤に使用している。当建物に直接伴う遺物は出土していない。



第67図 7号掘立柱建物跡実測図（1/60）

6号掘立柱建物跡

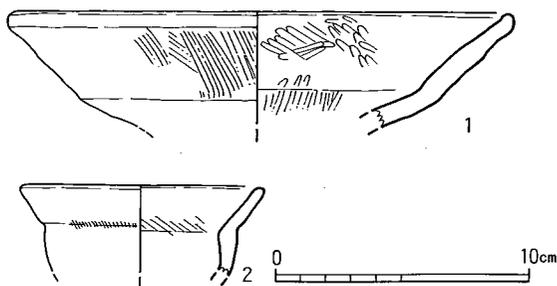
(図版27-1、第66図)

調査区南半部やや北側で発見した掘立柱建物で、17号住居跡、18号住居跡と重複関係にあり両住居より新しい。

主軸をN64.5°Wに向ける2×3間の建物である。梁間2間はP1—P7が3.

59m、P4—P10が3.55m、桁行3間

はP1—P4が6.62m、P7—P10が6.75mで、梁間の柱間平均は1.79m、桁行の柱間平均は2.23mである。掘方は隅丸方形を呈し、一辺65cm～75cmで、柱根は直径18cm～20cmである。深さは平均35cmほどである。P5は河原石を用いて礎盤とし周囲を他の石でかためている。当建物に直接伴う遺物の出土はない。重複する住居跡は古墳時代初頭のものである。



第68図 掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)

7号掘立柱建物跡 (図版27-2、第67図)

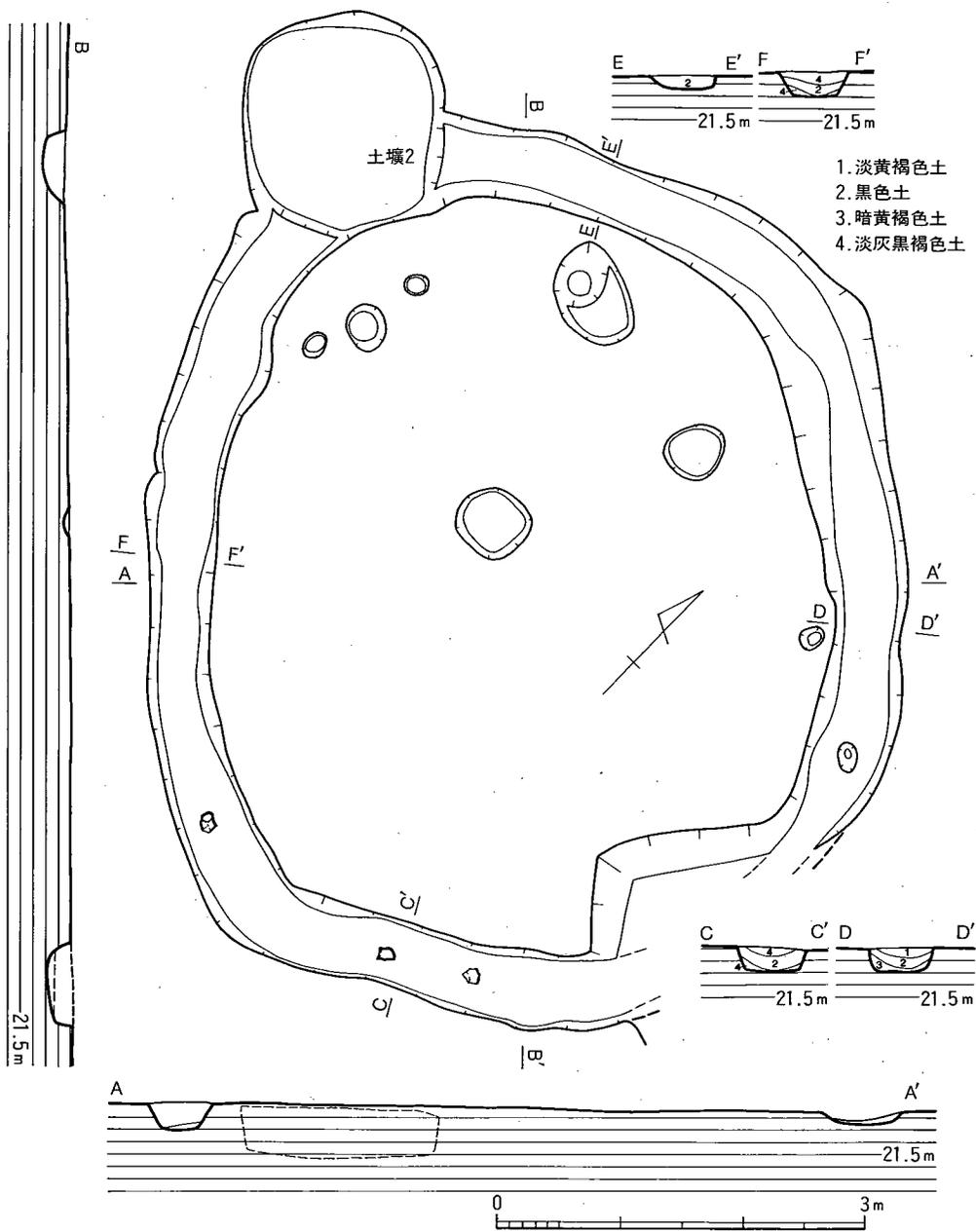
調査区南半部のやや南よりから発見した建物で、5号建物の東側に位置する。重複関係はない。主軸N16°Eに向ける1×2間の建物で、梁間2.50m、桁行5.60mの規模である。柱穴はP3が70cm×60cmと大きい、他は30cm～40cmである。深さは50cm～60cmを測るが、P2は20cm、P5は16cmと浅い。柱痕は確認することができなかった。遺物は出土していない。

出土土器 (第68図)

1は5号掘立柱建物跡のP9から出土した土師器高杯杯部破片である。浅い杯部で復原口径20.0cmである。内面はミガキ、外面は縦方向のハケ目の後ナデ調整。2は小型丸底壺で、復原口径9.8cm、頸部内外面にハケ目が残る。内面はナデ調整。外面は磨滅のため調整法不明。黄灰褐色に焼成される。

(3) 1号円形周溝 (図版28-1、第69図)

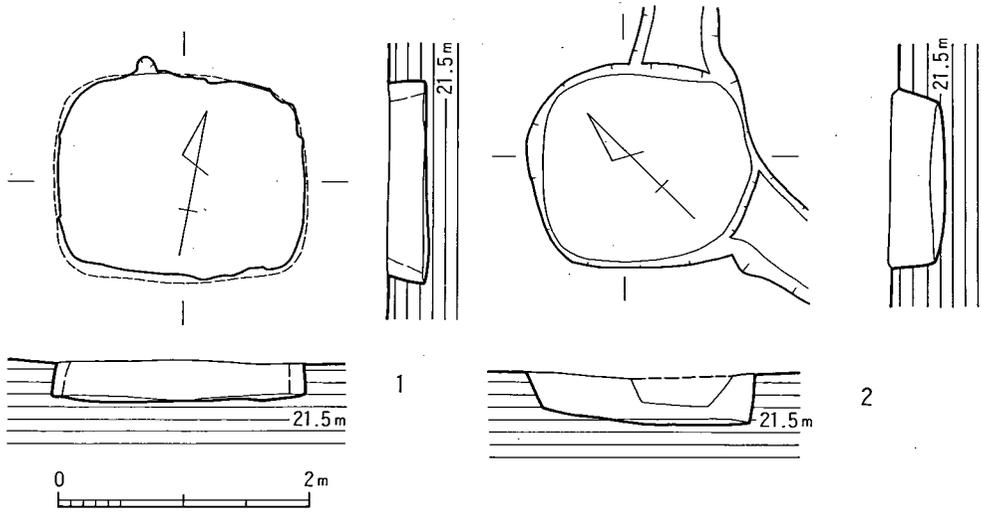
調査区南半部の北端から発見した。北側には15・16号住居跡、東側には14号住居跡、西側には17号住居跡があるが、住居跡の切り合いはない。同形周溝のプランは図面でみると正円に近いというより、東西方向が長い隅丸長方形に近い楕円形ということになる。円形周溝の規模は溝の内側で長軸6.12m、短軸5.0mである。この内面平坦部には、ピットが大小7個存在するが建物等の配置を示すものはない。また、溝がU字形に掘られており、古墳の可能性も考えたが、溝に落ち込んだ石材もなく、平坦面においても石室の掘方に類する施設等は発見することができなかった。溝はとぎれた場所もなく、出入口に相当する場所も確認できなかった。溝の幅は60cm～85cm程で、深さは20cm前後でほぼ一定している。埋土は、黒色土や暗黄褐色土等で



第69图 1号円形周溝実測図 (1/60)

埋っている。溝内からは、土師器の小破片がわずかに出土したが図示できる資料がなく、時期についても確定できない。

(4) 土 壙



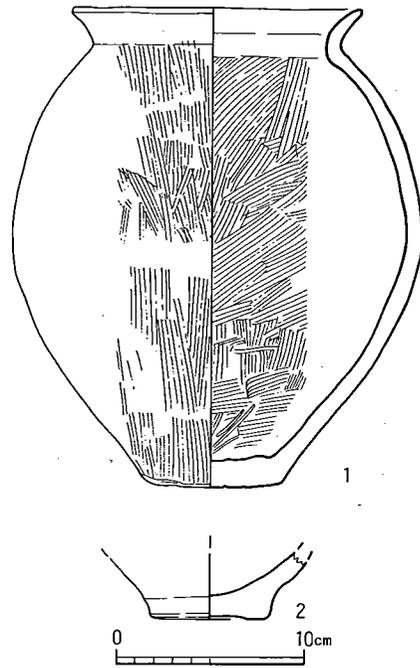
第70図 1・2号土壙実測図 (1/60)

1号土壙 (図版28-2、第70図-1)

調査区南半部のほぼ中央で、8号住居跡と18号住居跡に挟まれた位置にある。底面は2.03m×1.65mの隅丸長方形を呈する。壁は内傾して掘り込まれている。深さは約30cmである。埋土からの出土遺物はない。重複関係もなく時期については不明である。

2号土壙 (第70図-2)

調査区南半部の北東側から発見された土壙で、円形周溝と切り合い、東側の上部を破壊されている。底面は1.55m×1.5mの隅丸方形を呈し壁は斜めに掘り込まれている。深さは約35cm程あり、床面は水平ではなく、中央がやや高い。埋土から弥生時代後期の甕形土



第71図 2号土壙出土土器実測図 (1/4)

器が出土しているが、性格等については不明である。

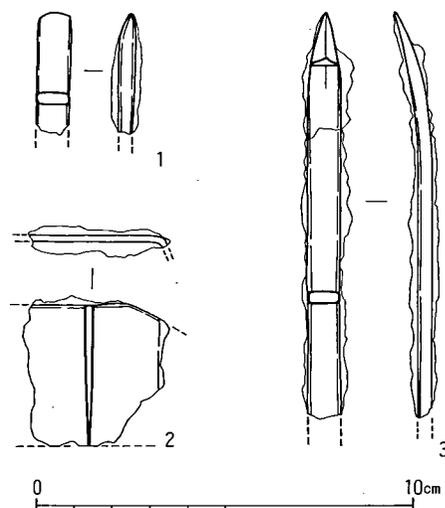
出土土器 (図版55、第71図)

1は口縁部が短く外反する甕形土器である。復原口径15.2cm。器高25.55cm、胴部最大径21.6cm、底径7.5cm。口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部内外面はハケ目調整である。底部はナデの後ハケ目調整されている。胎土に赤褐色粒、角閃石、砂粒を含み、黄橙色に焼成される。体部外面に黒斑がある。2は底部破片で底径6cmを測る。わずかに上底となる。外面はナデ調整。内面は工具使用のナデ。

(5) その他の遺物

B地区出土鉄器

1・2は7号住居跡埋土から出土したノミ状の鉄器。残存長3.2cm、刃部長1.0cm、厚さ0.3cm、刃部の明瞭なもので、体部は断面長方形を呈する鍛造品である。2は不明鉄片。幅4cmほどで右端が曲がっている。下に刃がつく。厚さは2mmほどある。鉄鎌の可能性はあるが不明である。3は20号住居跡西側ベッド状遺構床面出土。鉄鉈で、柄尻を欠失する。現存長10.8cm、幅0.9cm。刃は先端から1.8cmまでついており、刃部中央には弱い鑿が通る。断面は刃部がV字形、柄は長方形を呈し、厚さは2.5mmほどである。



第72図 B地区出土鉄器実測図 (1/2)

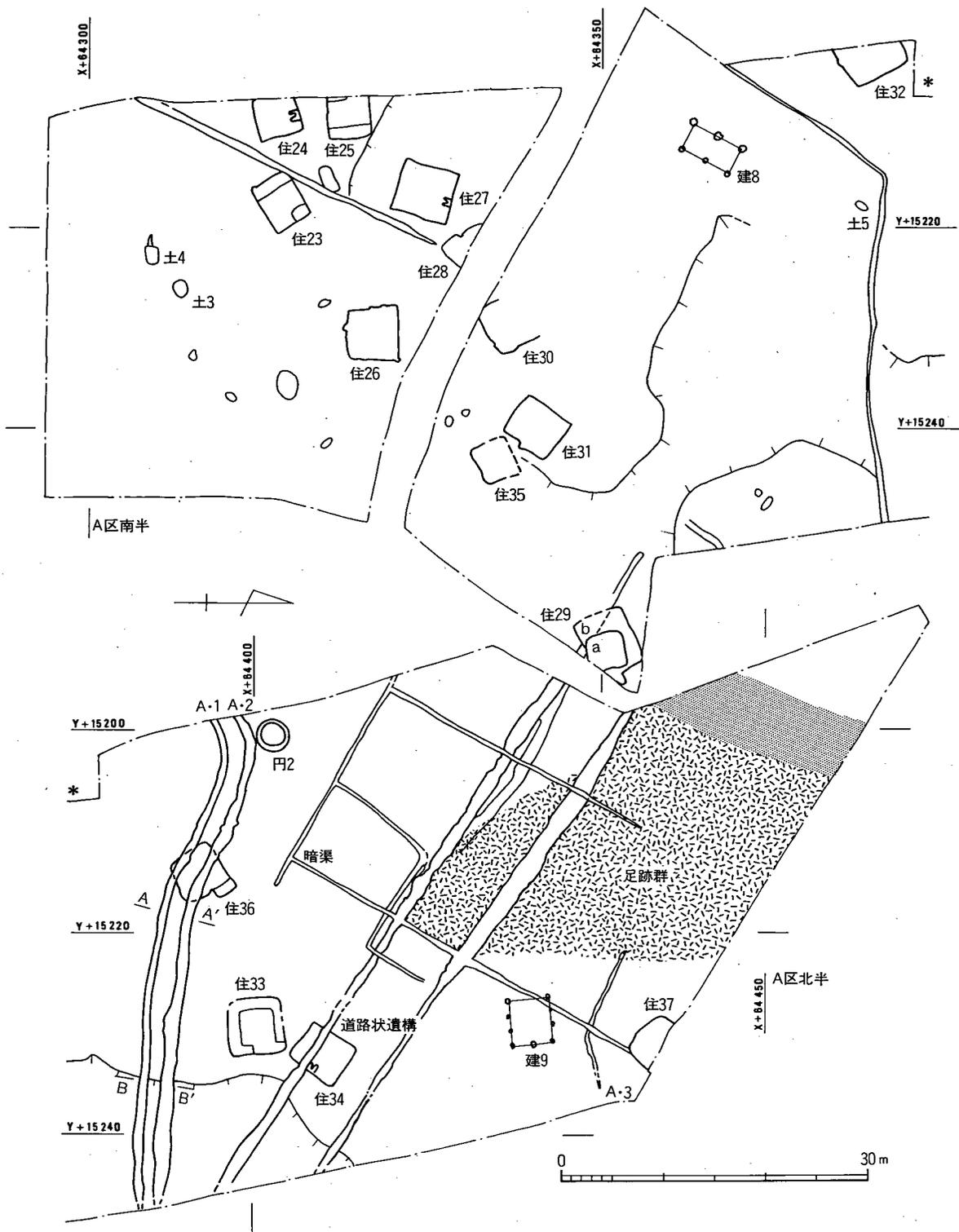
B地区出土石器 (図版65-1、第72図)

砥石 (1~6) 1は3号住居跡より出土。砥面は5面ある。重さ50gで珪質層灰岩製。2は19号住居跡より出土、砥面は3面ある。重さ30gを測る。花崗岩質砂岩。3は13号住居跡より出土。砥面は4面あり、1面は線状痕が残る。重さは60g、砂岩製。4は8号住居跡より出土。砥面は2面、重さ320g、砂岩製。5はB地区P-29より出土した。図の正面の一部は火を受けている。砥面は3面で重さ970g、硬質凝灰岩製。6は7号住居跡床面より出土した。砥面は4面あり、線状痕が深く刻まれており硬質の物を砥いたのであろう。重さ573g、珪質層灰岩製。

石 錘 (7) 7は10号住居跡より出土。それぞれの面はローリングを受けている。両側縁に挟りが入る。重さ1.12kgで花崗岩製。



第73图 B地区出土石器实测图 (1/3)



第74图 A地区遺構配置图 (1/600)

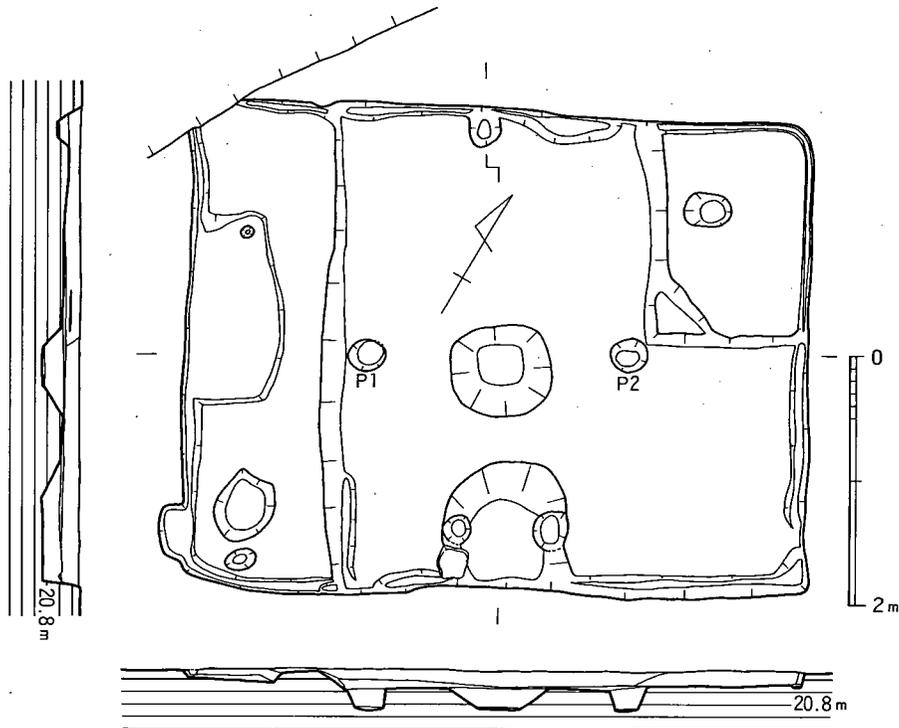
3. A地区の調査

A地区で検出された主な遺構は、竪穴住居跡16軒、土壇3基、掘立柱建物跡2棟、官道（道路状遺構）等である。調査区南から北へ、住居跡より説明を行っていく。

(1) 住居跡

23号住居跡（図版29-1、第75図）

A地区南端で検出された。切り合い関係は無く、東西方向に長い4.96m×3.9mの長方形の平面プランを呈している。壁高の残存状況は残りの良い所で床面から検出面まで16cmを測るが、南は大きく削られベッド状遺構と検出面の高さは同じである。床面は地山を削り出して整形している。主柱穴は長軸方向に炉を挟んで2本ある。南壁には屋内土壇が設けられており、長径が94cm、深さ16cmを測り左右に小ピットがある。この土壇の西側床面には、作業台石が置かれている。ベッド状遺構は、長軸の両壁に設置されるが南側が一直線なのに対し、北側は一角のみである。南側のベッド状遺構にはかなりの範囲に焼土が確認された。遺物の出土状況は北壁中央あたりで床面上より土器が出土しており、炉跡や屋内土壇の埋土からも土器が出土している。

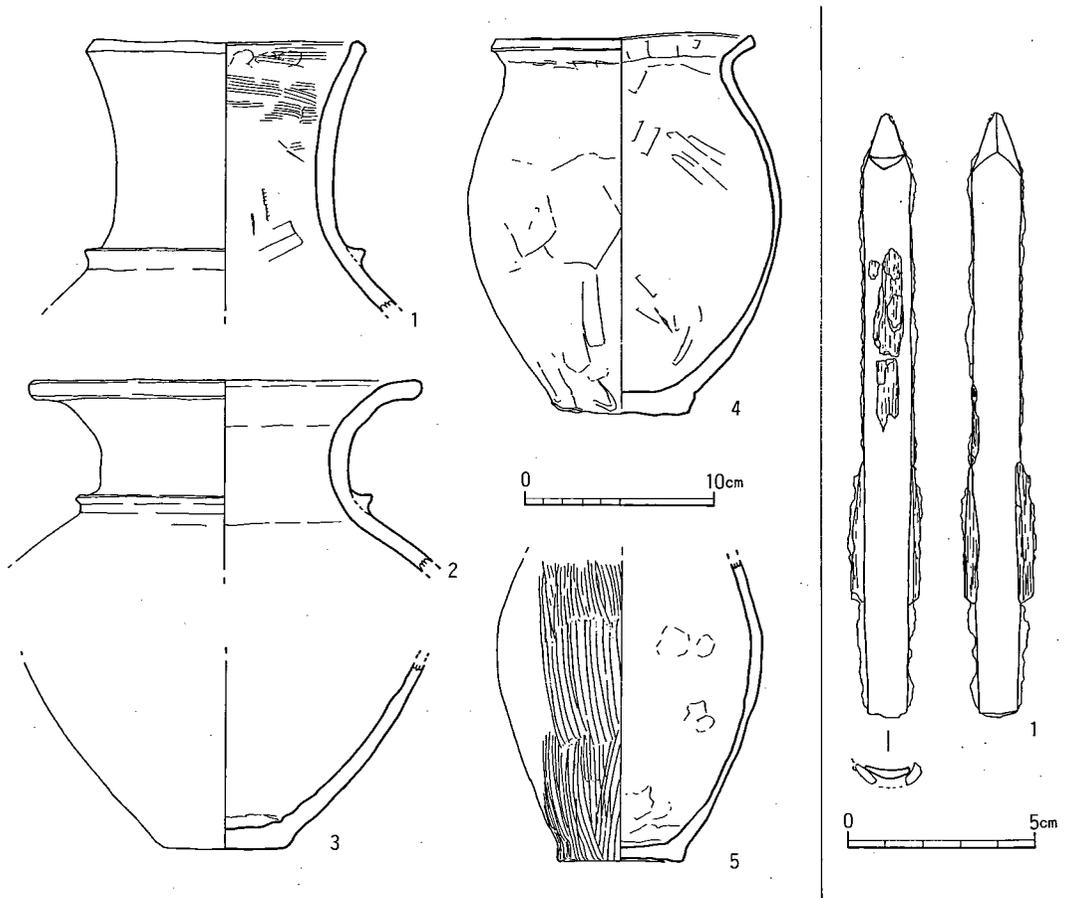


第75図 23号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版56、第76図)

壺(1~3) 1は、頸部が細く立ち上がりながら口縁でやや外反する細頸壺で1/2が欠損。頸部下に三角凸帯を貼り巡らしている。外面は磨滅が激しい。内面については、横方向のハケ調整の後ナデられている。頸部付近には工具痕らしき痕もある。復原口径14.2cm。2は頸部より口縁部が大きく外反する。頸部下には三角凸帯が貼り巡らされている。頸部から口縁部にかけてはナデ調整されている。復原口径は21.0cmで褐色を呈す。3は外面の磨滅が激しいが、一部黒斑が認められる。内面についてはナデ調整が行われている。色調は外面白黄褐色で内面は黒色で底径7.2cmを測る。炉跡より出土。

甕(4・5) 4は小型の甕で、北壁中央あたりの床面上より出土した。外面調整は工具による粗いナデ調整が行われ、器面に痕を残している。内面も工具によるナデ調整が行われ、頸部において横位となり端部のみ丁寧である。底部は削り。口径13.5cm、器高20.4cmである。5は、



第76図 23号住居跡出土土器・鉄製品実測図 (1/4・1/2)

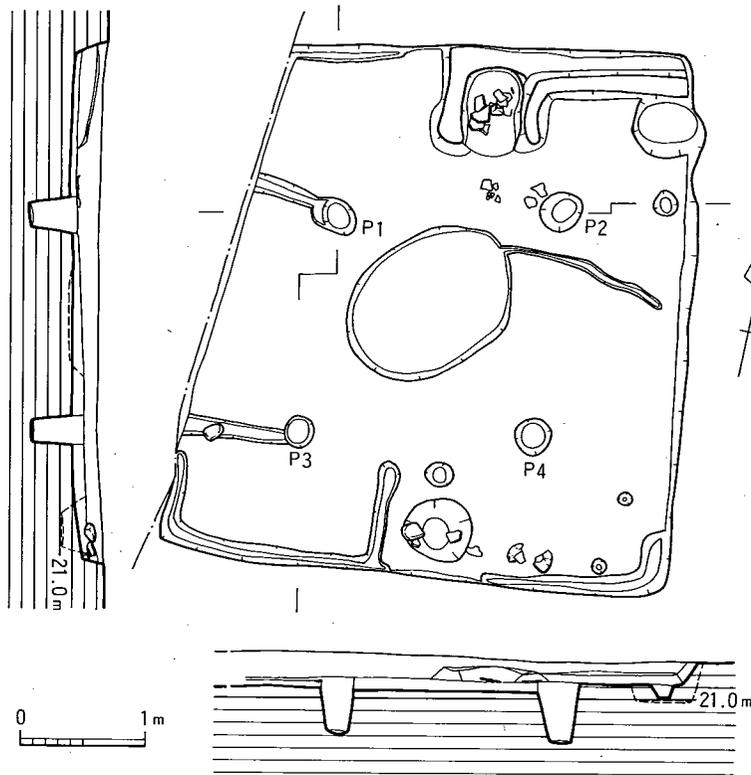
頸部付近から口縁を大きく欠損する。底径6.8cm、屋内土壌より出土。

鉄製品 (図版65-4、第76図)

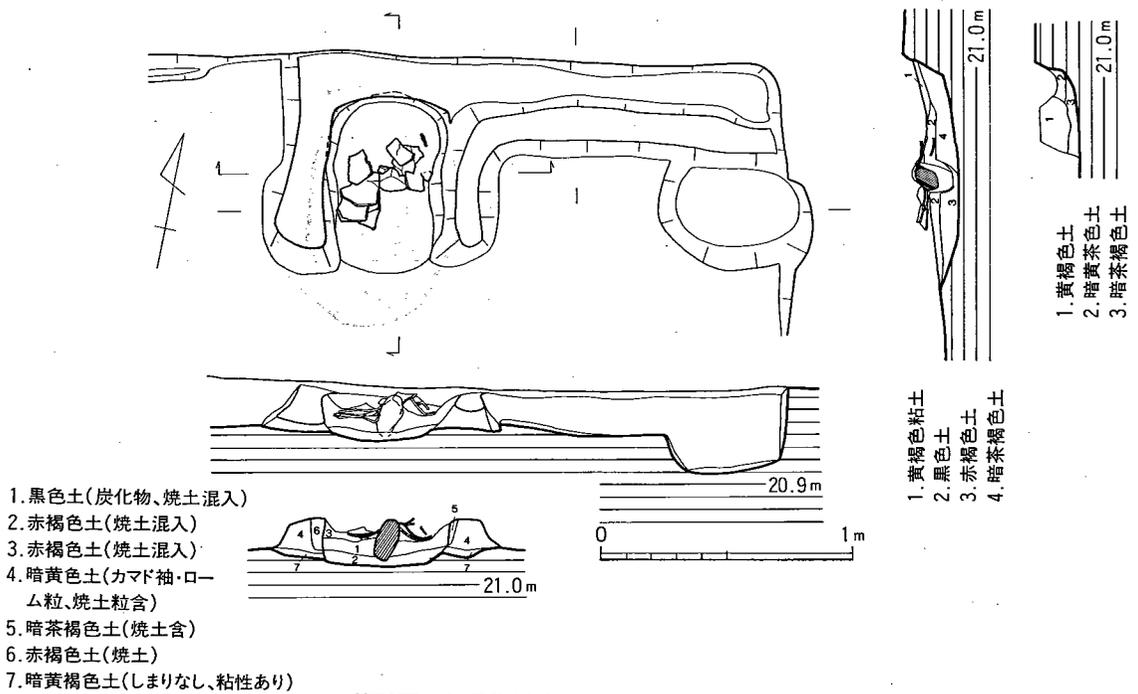
1は、鉄鉈で長さ16.2cmを測る。木質が12cm以上残る。刃先は外反する。屋内土壌より出土。遺構の時期は弥生後期前葉～中葉位であろう。

24号住居跡 (図版29-2、第77図)

調査区西南端で検出された。西端は調査区から外れる。ほぼ南北に軸をとり、4.2m×4.1mのほぼ正方形に近い平面プランを呈しており、カマドを持つ。住居床面から検出面までの壁高は、約20cm前後である。支柱穴は4本柱で一番深いP4で床面での直径が32cmで深さ50cmを測る。床面は貼床で堅く締まっている。周溝は南・北壁にはみられるが、東・西の壁では確認できない。また、中央の貼床の下には、レンズ状に掘り込まれた土壌がある。もう一つは、住居跡北側に直径40cm、深さ22cmを測るものがある。出土土器は、カマド前の床面付近と反対の南壁近くの床面上で確認された。また、カマド前の床面からは、須恵器の大甕片や玉類が出土し



第77図 24号住居跡実測図 (1/60)



ている。

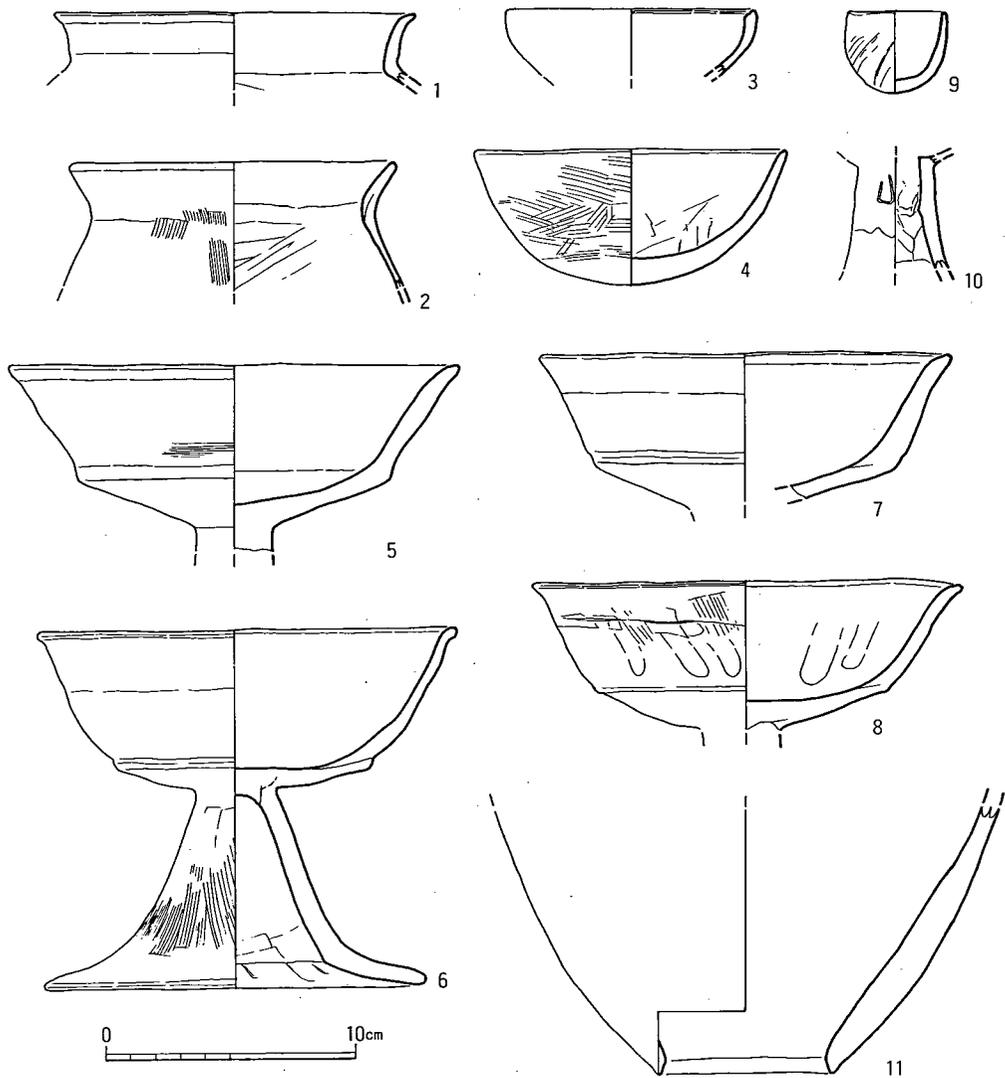
カマド (図版29-3、第78図)

火床面は、住居床面とほぼ同じ高さである。両軸は壁から直線的に伸びている。左軸の残存長78cm、基底部幅30cm前後、残存高は先端部で5cm、右軸の残存長は72cm、基底部幅は20cm前後で残高6cmを測る。燃焼室は40cm×70cmの広さで、支脚と杯片が混在し、焼土が広く覆っていた。煙道部は粘土で被覆し、そのまま住居右壁まで伸びている。立ち割って土層を観察したが高熱を受けた状況などは確認できなかった。

出土遺物 (第79図)

甕(1・2) 1は復原口径14.4cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、先端部で少し外へ開く。横ナデ調整。内面は頸部以下に削り。2は復原口径13.0cmを測る。口縁は窪んだ頸部より外へ直線的に開く。外面頸部までハケ目、内面は頸部まで削り。口縁内外面は横ナデ調整される。

椀(3・4) 3は復原口径10.0cmを測る。外底部については欠損するが、残存部と同じく工具によるナデ調整であろう。口縁部と内面はナデ。胎土に雲母、角閃石等を含み淡こげ茶色に焼成されている。4は住居跡西南付近の床面より出土した。外面はハケ目調整、内面には工具痕が残るが調整は不明。口縁部と外底部についても磨滅著しく調整不明。胎土には、雲母赤褐色粒を含み、黄橙色に焼成されている。



第79図 24号住居跡出土土器実測図 (1/3)

高 杯(5~8・10) 5は復原口径18.0cmを測る。杯底部は中心に向かうにつれ深い。内外面共に口縁部との接続部はつまみ上げたようにくびれる。口縁部は直線的に立ち上がり、中程で肥厚し端部で少し外反する。一部のハケ目以外、内外面ナデ調整。6は杯部が住居跡南壁付近より、脚部がカマド前面付近より出土し接合した。杯部の内底部は平坦で口縁部は緩やかに立ち上がり、端部は「く」の字につまみ出されている。内外面ナデ調整。柱状部は縦方向のハケ目のちナデ。内面は縦方向のナデと裾部の近くで横位削り。裾部は大きくひらき、内面は工具

によるナデ。復原口径16.7cm、器高15.0cmを測る。7は、復原口径16.4cmで底部と口縁との接続部に沈線の段を有する。口縁は厚く端部付近で少し外反する。8は住居跡南壁付近の床面より出土。復原口径17.0cm。口縁の厚さは均一で直線的に立ち上がり、端部で急に外反する。口縁と柱部の接続部は底面側に貼り出した稜をもつ。内外面に指圧痕あり、外面にハケ目調整あり。10は杯の脚部に記号があり、“ム”の字を反対にしたもの。

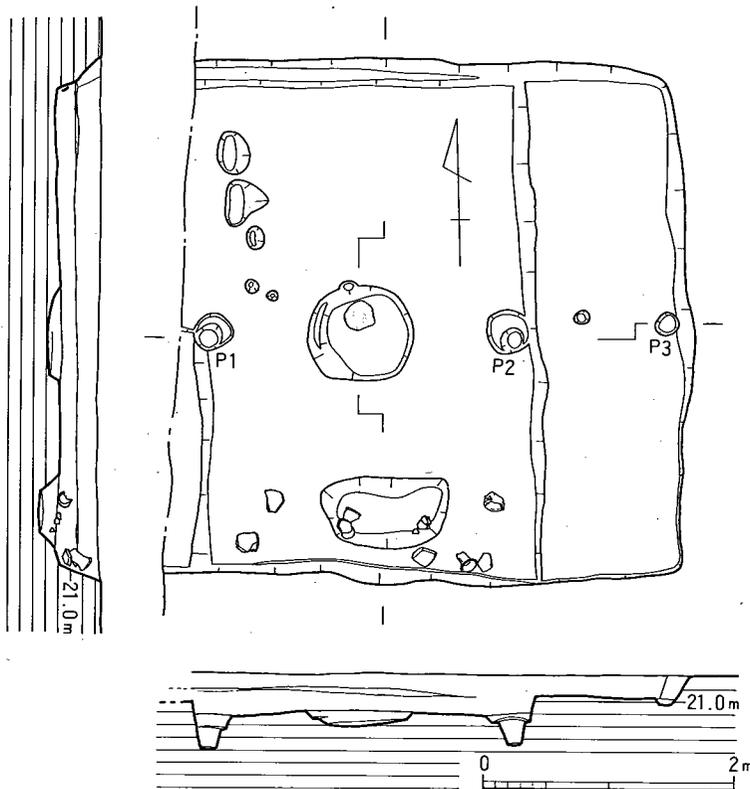
手捏土器(9) カマド前面で床面上より出土した。口径2.0cm。器高3.25cmを測る。胎土に細砂細粒。石英等を含み、暗茶色に焼成されている。

甗(11) 復原底径約7.0cmを測る。おそらく単孔式でよいだろう。胎土には雲母、赤褐色粒、角閃石、細砂粒を多量に含み、色調は白黄褐色、灰黄褐色で一部黒斑あり。

これ等の土器の他に玉類が多数出土しているが、あとで他住居跡出土のものといっしょに説明する。

これ等の出土遺物から遺構の時期は、5世紀前～中葉と考えられよう。

25号住居跡 (図版30-1、第80図)



第80図 25号住居跡実測図 (1/60)

調査区南側で検出されたが、西1/4は区外となる。中軸で東西(4.1)m×南北4.2mを測り、区外の長さを加えれば東西に長い長方形の平面プランとなろう。壁高は最も残りの良い所で、25cmである。床面は地山を削り出して整形している。支柱穴は東西に炉を挟み込む形であり、これらの支柱穴の軸にあうP3が東壁付近にある。支柱穴の深さはP1で床面での直径が25cm、深さ30cmを測り、P2で直径34cm、深さ26cmを測る。屋内土壌は南側にあり、壁に密着せずに設けられており、東西の長軸で88cm、床面より14cmの深さである。土壌の東側には作業台石が置かれている。ベッド状遺構は、長軸となる東西の東側壁に接し、一直線に設けられている。中央の炉跡には一部焼土がある。屋内土壌周辺で床面より、遺物がまとまって出土している。

出土土器(図版56、第81・82図)

壺(1~3) 1の復原口径は16.0cmを測る。内外面共に磨滅が著しい。胎土は、赤褐色粒、角閃石等を含む。色調は、橙褐色、淡褐色である。2は、住居跡西壁の埋土中より出土した無頸壺である。復原口径9.2cm、胴部の最大径は直径20.5cmを測る。そこから口縁部までは少し内彎しながら至る。外面は胴部上半がハケ目のちナデ。下半部には擦過痕あり。内面はハケ目調整であるが、爪痕と工具痕?が無数に残る。口縁下には粘土紐の痕あり。茶褐色に焼成されている。3も同じく無頸壺で復原口径8.6cmを測る。胴部から口縁部へはやや外反する。胎土に雲母角閃石を含む。こげ茶色に焼成されている。

甕(4~10) 4は屋内土壌東側の床面より出土した。復原口径11.8cm、器高13.9cmを測る。口縁部より胴部が広い球形。胎土には、金雲母、角閃石等を含み、色調は、暗黄茶褐色、灰黄褐色である。5は復原口径16.4cm。外面縦位のハケ目、内面はナデ調整。6は復原口径19.0cm。内面口縁付近にハケ目を施している。胎土に細砂、角閃石雲母等を含む。色調は白黄褐色、淡橙褐色。7は復原口径22.0cmで胴部に張りを持ち、口縁は「く」字に立ち上がる。内面頸部以下に削りあり。8は復原口径24.0cmを測る。口縁は「く」字状を呈し長胴で内外面にハケ目調整あり。9は壺の底部の可能あり底径5.0cm。10は甕の脚台部で底径9.2cm、底部外面はハケ状の工具による横位ナデ。屋内土壌より出土。

鉢(11) 11は住居南壁床面より出土。胴部~頸部付近に張りを持ち、頸部で少し内彎して口縁は「く」字状に開く。口径24.0cm、器高13.5cmを測る。

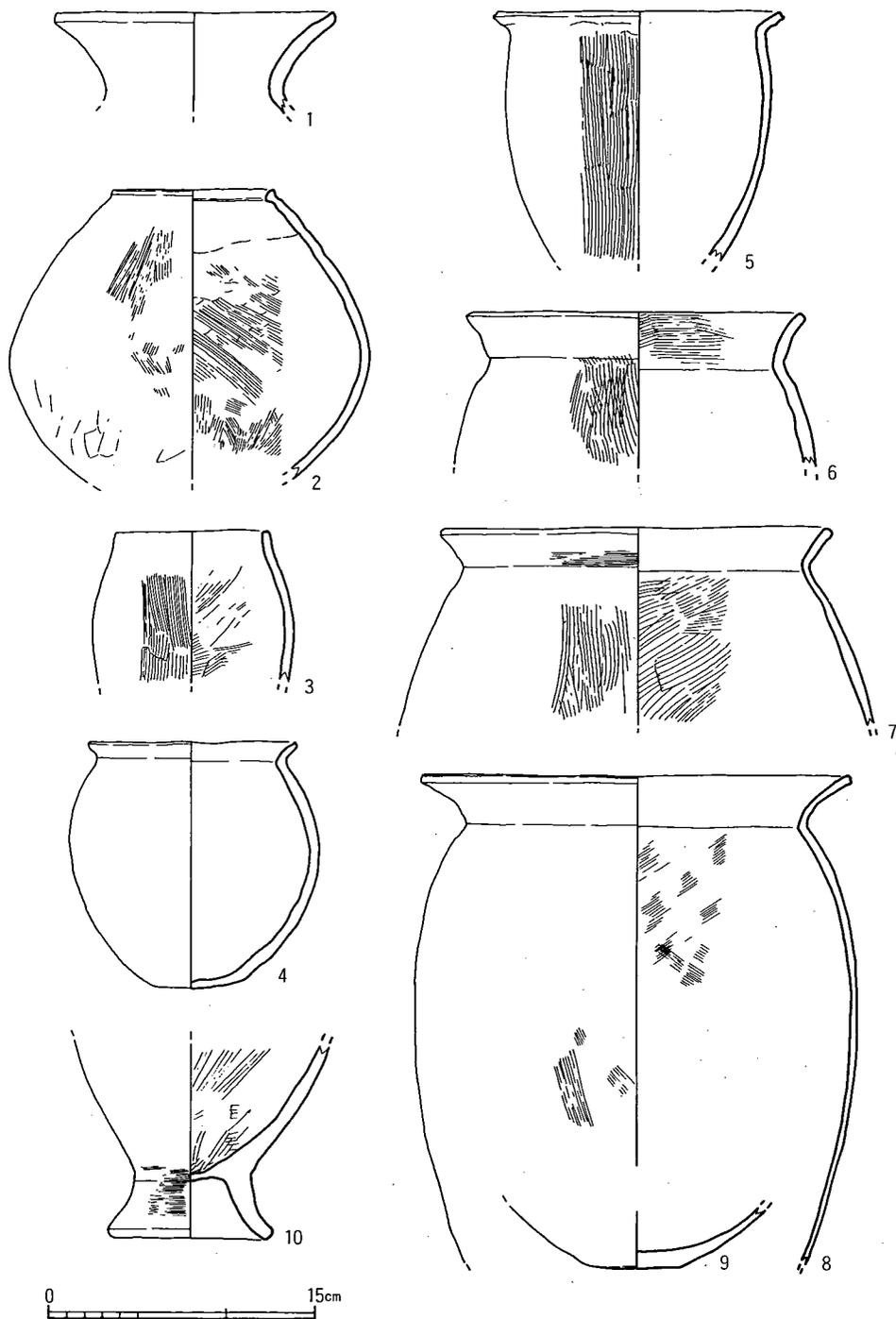
椀(12) 手捏ねで、住居跡北壁より出土。復原口径7.4cm、器高3.0cmを測る。各所にナデ痕を残す。

高杯(13) 脚部を欠損する。口縁は袋状に内彎する。口径33.1cmで西壁埋土中より出土。

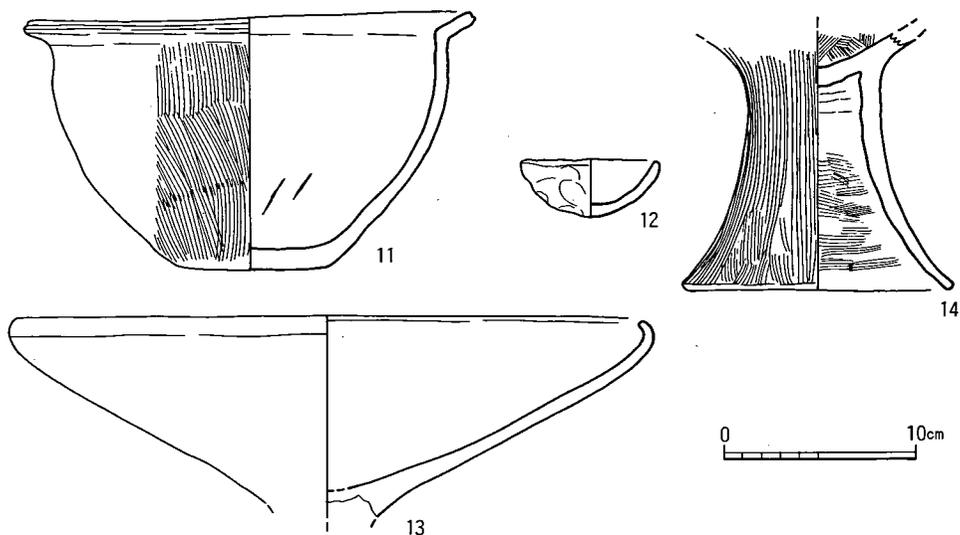
器台(14) 南壁床面より出土、外面には縦位のハケ目、脚部内面は横位のハケ目。底径は14.2cm。

他にガラス玉が一点出土している。

これ等の出土遺物から、弥生時代後期中葉~後葉の時期が与えられよう。



第81图 25号住居跡出土土器実測図① (1/4)



第82図 25号住居跡出土土器実測図② (1/4)

26号住居跡 (図版30-2、第83図)

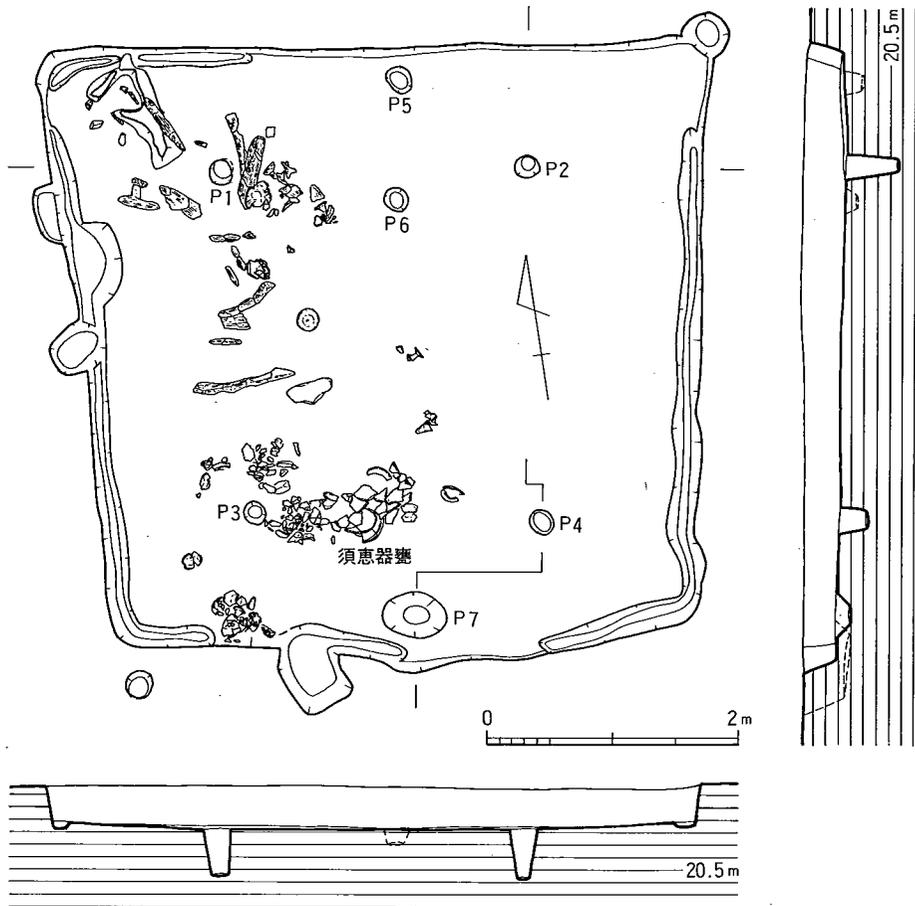
調査区南部の27号住居跡の東側で検出された。住居跡の東辺と南辺では、それぞれ4.84m × 4.75mであるが北辺が5.4mと長く、平面プランは逆台形でカマドを持つ。検出面から床面までの壁高は30cmと残りは良い。床面の状況は、住居東側においては、礫混じりとなっている。主柱穴は四本柱で、柱穴の直径は、床面上で20cm前後であり、深さはP 2で40cmを測る。住居跡の南北軸に対応しそうな柱穴はP 5、P 6とP 7である。周溝は、東西の住居壁沿いには平行するようにあるが、南北については途切れている。遺物は、床面上にばらまかれたような状態で北・中央・南に集中箇所を持って出土しており、炭化材が何本か散乱していた。また、カマド以外の場所からも焼土が確認された。

カマド

カマドは、住居跡北西角に確認できたが、残存状況は悪く、左袖は破壊されてなかった。右袖は残存し、炭化材が倒れかかっている。

出土土器 (図版56~58 第82~90図)

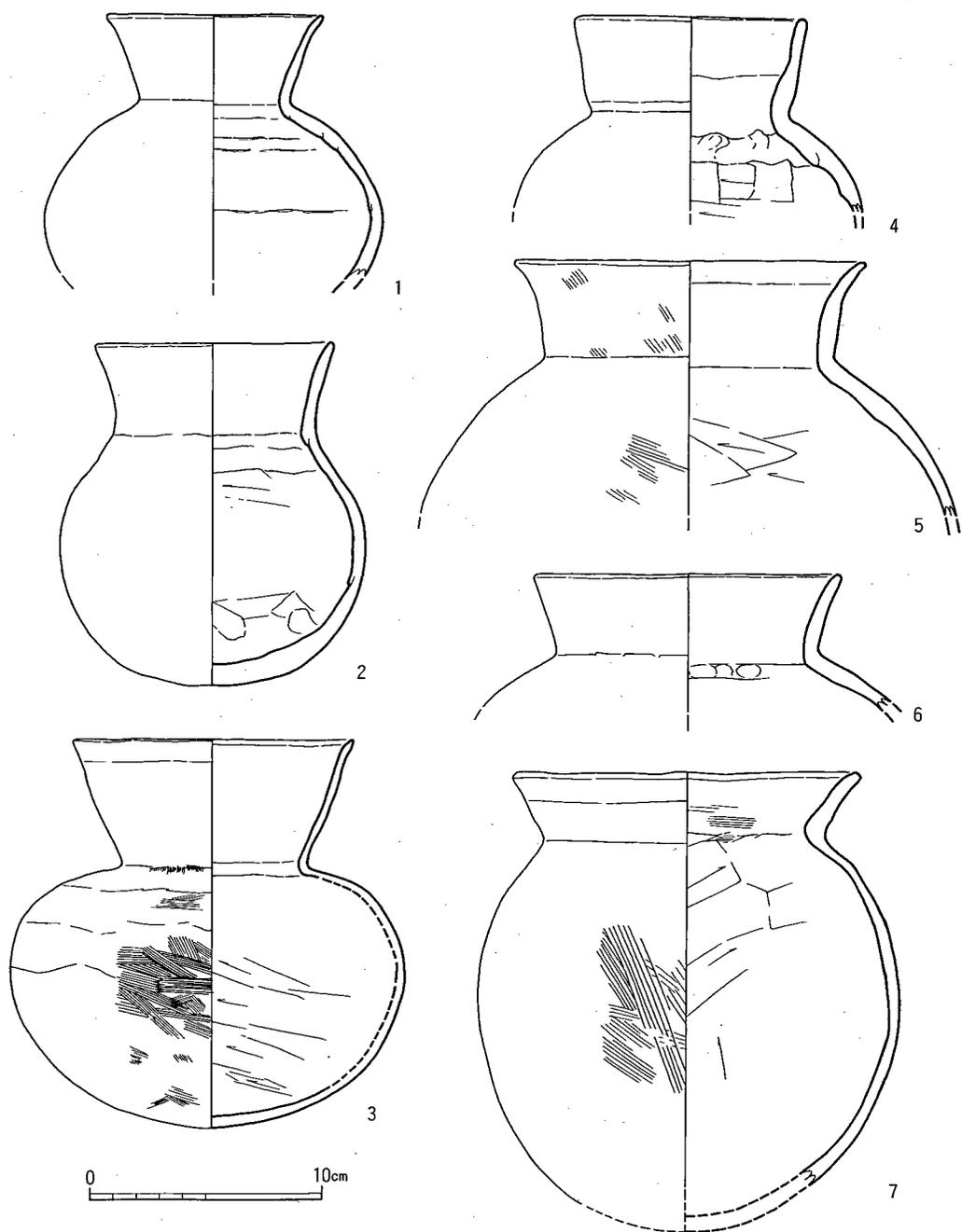
壺(1~6) 1は復原口径9.2cmを測る小形の壺で、頸部から口縁へは直線的に開き端部でさらに外反する。内外面共に橙褐色。2は南の集中箇所より出土し、復原口径10.2cm、器高14.6cmで僅かに平底を呈す。内面底部は削りのちナデ調整。内外面共に橙褐色に焼成されている。3は2と同じ集中箇所より出土。復原口径12.0cm、器高16.6cmを測る。胴部の最大径は頸部に近



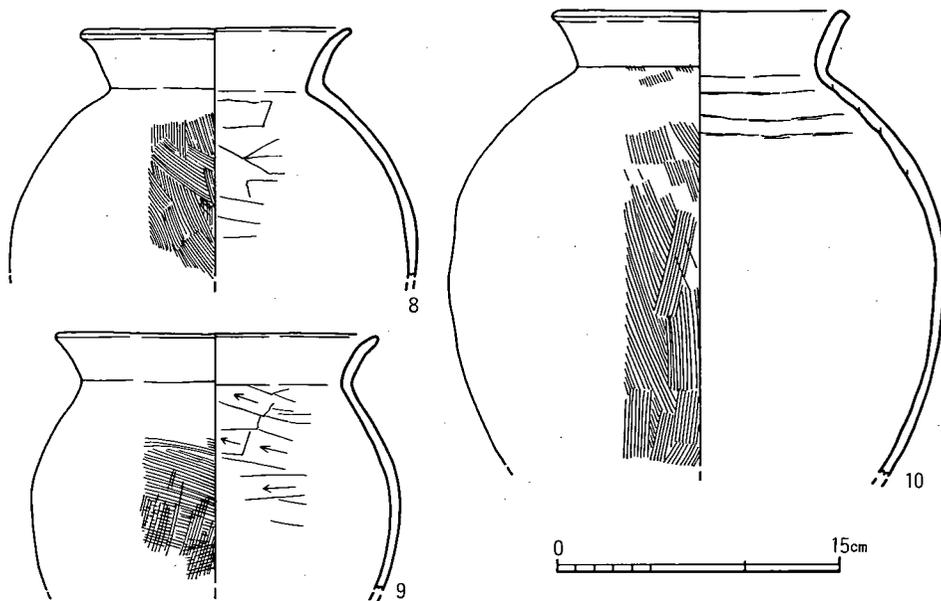
第83図 26号住居跡実測図 (1/60)

く、底部は丸底に近い。内面の下方は削り。橙褐色、黄褐色。4は復原口径9.8cmで頸部に沈線が入るかのようにくびれ、口縁が垂直に立つ。内面頸部下には指圧痕があり、胴部は削りで茶褐色に焼成。5は復原口径14.9cmで口縁は垂直気味に立ち上がり端部近くで外反する。内面胴部は削り、頸部下は削りのちナデ調整。黄茶褐色から茶褐色に焼成。6は復原口径12.8cmで口縁は直線的に開く。内面頸部に指圧痕あり、それ以下は削り。白黄褐色に焼成されている。

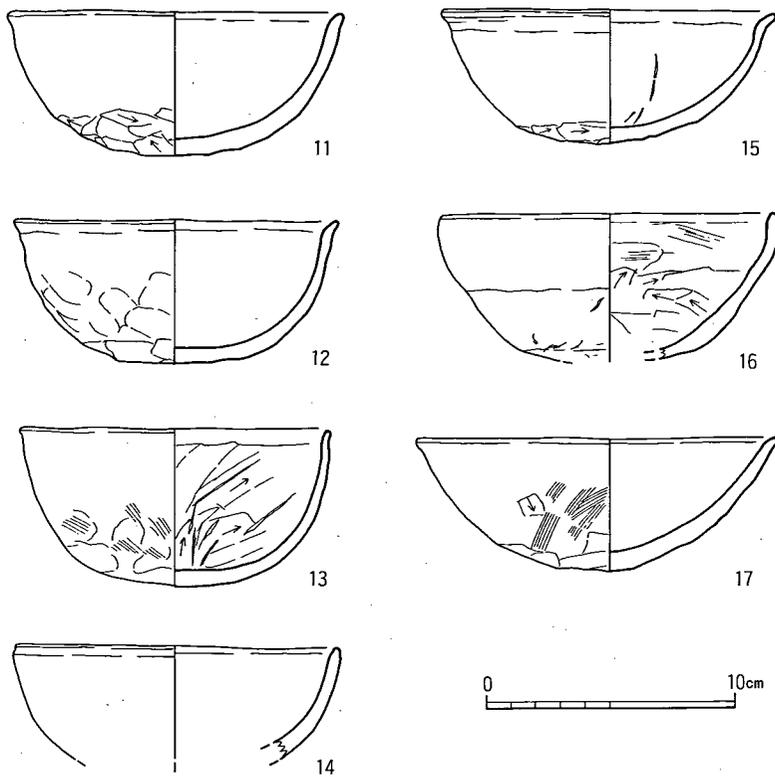
壺(7~10) 7は中央の集中箇所より出土。口径14.8cmで、頸部から厚く口縁端部で外反する。胴部は球形に近く内面に削りを残す。橙褐色で胴部に黒斑あり。8は北の集中箇所より出土。口径14.4cmで頸部は「く」字に折れ、口縁端部で外反する。9は復原口径17.2cmで胴部の最大幅は口径より広く口縁端部は丸味を持つ。10は住居跡中央集中箇所より出土。口径15.8cmで口縁は厚く端部は角を持つ。白黄褐色、白黄茶色に焼成されている。



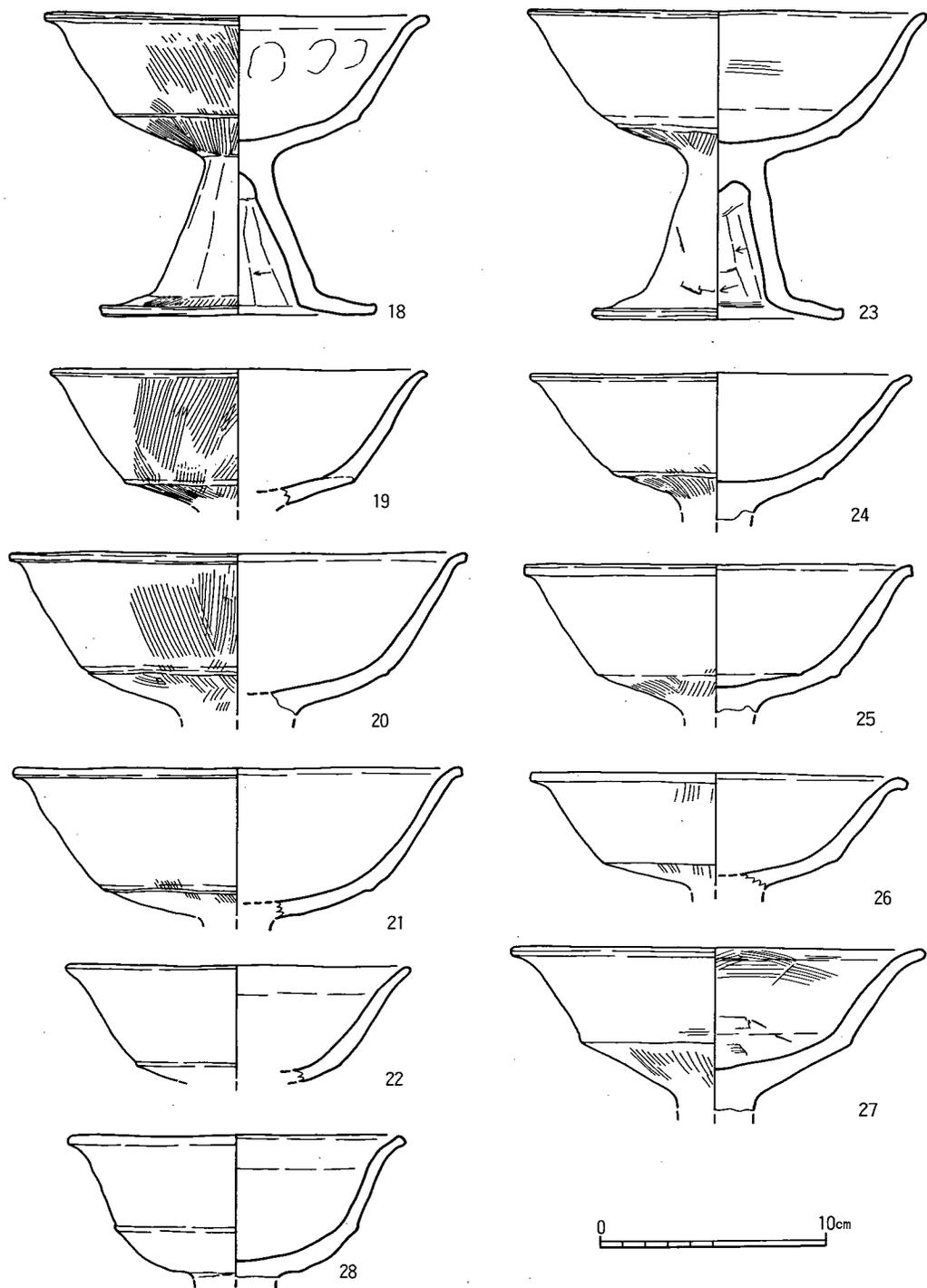
第84图 26号住居跡出土土器実測図① (1/3)



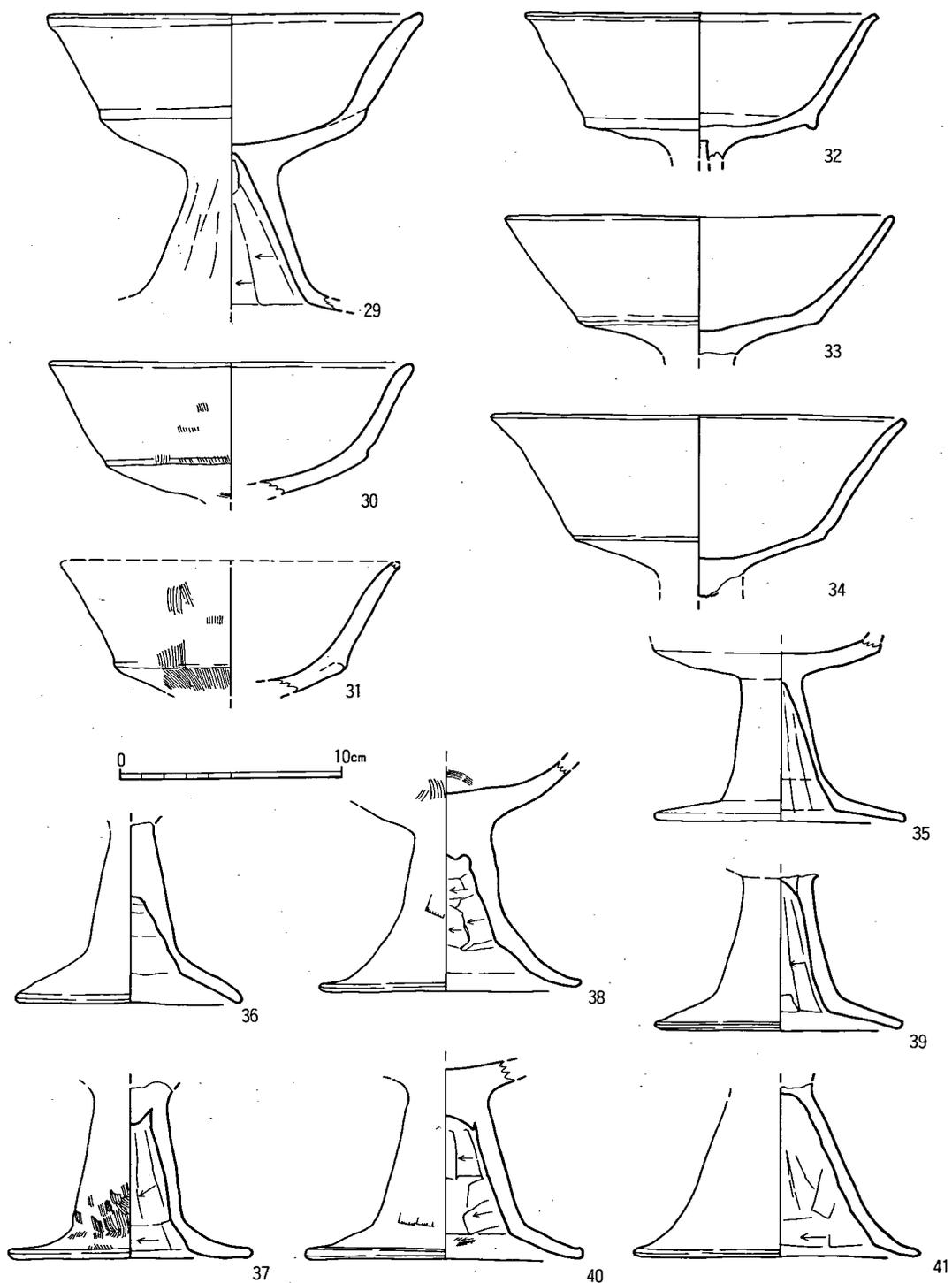
第85图 26号住居跡出土土器実測図② (1/4)



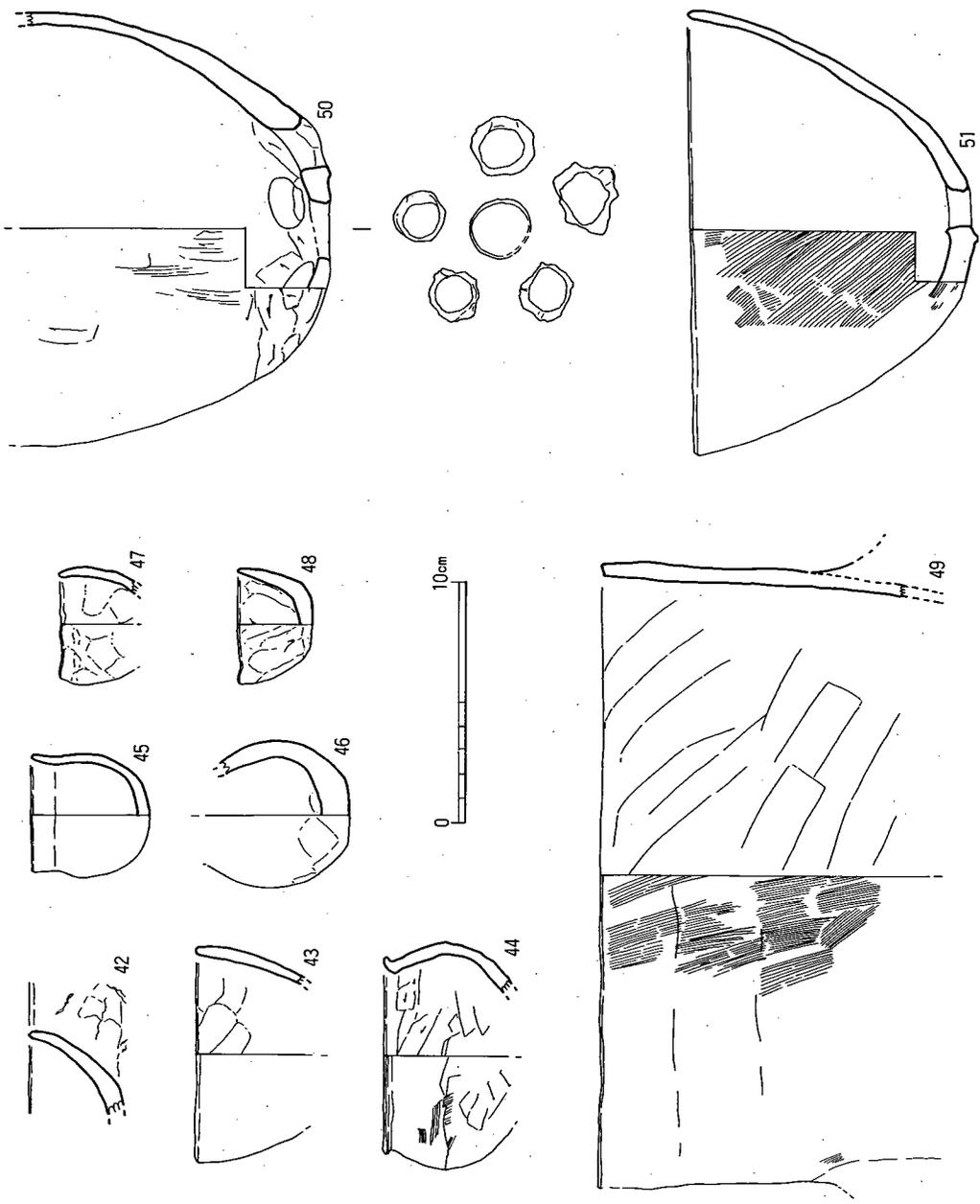
第86图 26号住居跡出土土器実測図③ (1/3)



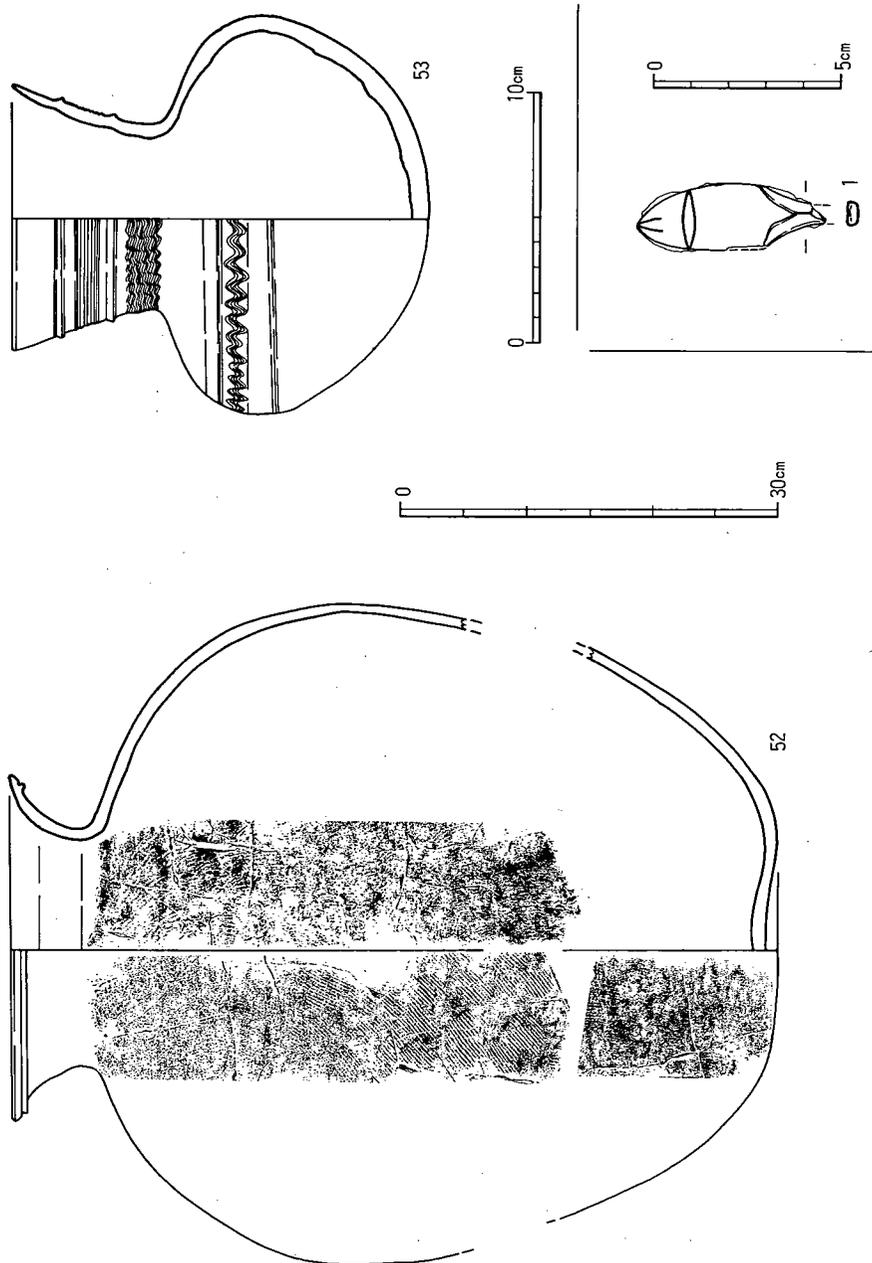
第87图 26号住居跡出土土器実測図④ (1/3)



第88图 26号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)



第89图 26号住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)



第90图 26号住居跡出土土器・銚製品実測図① (1/6・1/3・1/2)

椀(11~17) 11は復原口径13.4cm、器高5.70cmで外底面へラ削り、赤褐色に焼成。12は南の集中箇所より出土、復原口径12.9cm、器高5.7cmで外面削りのちナデ調整、暗茶褐色に焼成され口縁部に煤付着。13は南の集中箇所より出土、口径12.3cm、器高6.3cmの半球形で口縁端部は外反する。内面は削り上げ、赤褐色に焼成されている。14は内外面ナデ調整。15は口径13.3cm、器高5.3cm。端部は細く外反し、外底面削り、内面に工具痕あり。16は復原口径13.6cmで端部は内彎し、内面は底面削り、口縁付近は工具によるナデのち指ナデ調整。17は口縁端部が僅かに外反する。

高杯(18~41) 18は南の集中箇所近くの床面上出土。口径16.8cm、底形12.0cm、器高13.2cmを測る。杯部器厚は薄く、口縁端部は僅かに外反する。口縁と杯外底部の接する屈曲部は僅かに底部側に凸状に出る。脚部は柱状部から裾部へはL字に近く屈曲し、裾端部は少し上に反る。器面調整は杯部外面ハケ目、柱状部内面は削りで、白黄褐色に焼成。19~24も18と同型式であろう。19の復原口径は16.4cm。20の復原口径は20.0cm。21の復原口径は18.6cm。22の復原口径は15.0cmで器面は磨滅。23は北の集中箇所より出土。復原口径17.6cm、底径11.0cm、器高13.5cm。口縁端部の反りは18に比べ弱い。外面ハケ目調整は杯底部のみで杯内面にハケ目調整あり、柱状部は工具痕がある。24の復原口径は16.5cm、25は中央集中箇所より出土で復原口径16.9cm。26は中央付近の床面より出土。口縁端部の外反が強い。27の復原口径は18.0cmで口縁端部の外反は大きく、屈曲部も鋭い。28の杯内底部は椀状で深く、口縁端部に丸味を持つ。29は中央集中箇所より出土、復原口径16.9cmで口縁厚く端部に丸味をもつ。30、31は29と同式と考えられる。30の復原口径は16.2cm。32の復原口径は15.8cmを測る。口縁は直線的に開き端部は鋭く外反する。口縁と外底部がなす屈曲も鋭く、底部側に凸状に貼り出す。杯内底面は平坦。33は中央集中箇所より出土、復原口径17.0cmで口縁は直線的に開き器厚は薄い。34は中央北壁よりで出土した。口径18.35cmで口縁は直線的に開く。35は中央集中箇所より出土、底径11.2cm、柱状部内面は削り。36の復原底径9.6cm。37は中央集中箇所より出土。外面ハケ目のちナデ調整、内面は削り。38の内面は削り。端部はやや反る。39の裾端は僅かに内彎する。40は裾部が僅かに上へ反る。18と同型式であろう。41は中央集中箇所より出土。柱状部は鐘状に広がる。内面は削り。

手捏土器(42~48) 42は外底部に指圧痕を残す。43は復原口径9.0cmを測る。45の口縁は少し外反する。外底面、内面は削り。45は器面をナデによって仕上げている。46の外底面に削り。47の内面には指圧痕。48は口径4.6cm、器高3.0cmを測る。

甌(49~51) 49は復原口径26.0cmを測る。口縁は垂直に立ち上がり、端部は角を持つ。把手は欠損。外面ハケ目のちナデ、内面削り。50は多窓式で五つ円窓を配置している。底部は球形をなす。外面胴部は工具使用によるナデ、外底面は削り。内面底部は削りを残す。51は南の集中箇所より出土した。口径18.4cm、器高11.7cmを測る。外面ハケ目、孔部はナデ調整、内面は

工具によるナデ調整。

須恵器壺(52) 住居跡の中央集中箇所でおよそ保ちながら出土した。その他6・9・24号住居跡から胴・底部片がそれぞれ出土し接合した。口径は27.8cm、頸部径は19.2cmを測る。器高はおよそ60cm位になろう。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部の直下にはシャープに削り出された凸帯が一状付く。肩部はゆるやかに胴部へ至る。底部は焼成により歪んでいる。外面の縦位の平行タタキは一部ナデ消されており、内面当て具痕の円弧文も一部ナデ消されている。技術的にみると5世紀前半の年代が与えられる初期須恵器である。

須恵器壺(53) 中央集中箇所より出土した。口径10.5cm、器高16.6cmを測る。口縁は頸部より直線的に立ち上がる。口縁には削り出し凸帯が2状、9本の沈線を挟んである。頸部の波状文は、小さきみに施文されている。胴にも波状文あり。平行タタキ文はナデ消されており、内面はナデによる調整。この壺の時期も52の甕と同時期に見て良いのだろう。

鉄製品 (図版65-4、第90図)

1は鉄鏃で残存長5.05cm、幅1.80cmを測る。

その他の出土遺物にはガラス玉等がある。遺構の時期は5世紀中葉位であろう。

27号住居跡 (図版31-1、第91図)

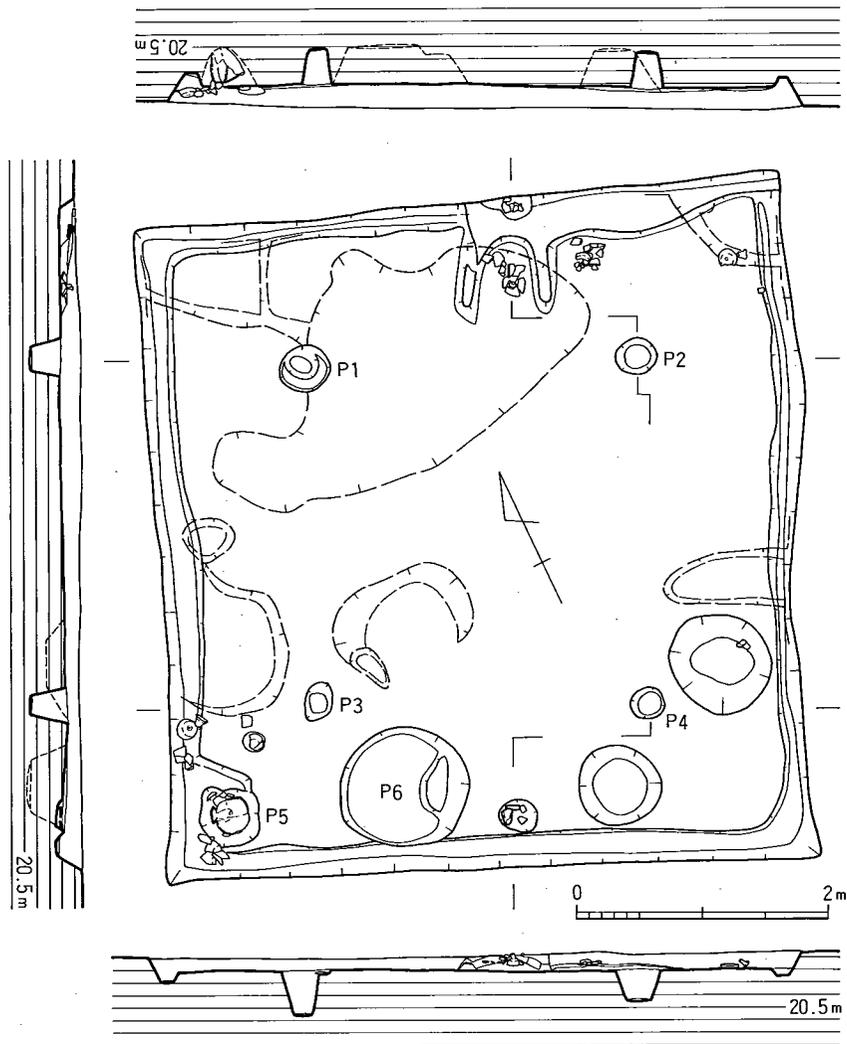
調査区の南部、28号住居跡の南側で検出された。切り合い関係は無い。一辺の長さは、北辺と西辺で4.2m×4.2mとほぼ正方形を呈している。検出面から床面までの壁高は、残りの良い所でおよそ20cmを測る。床面は貼床であるが、極端に深い住居跡の掘方ではない。主柱穴は4本柱で最も残りの良いP1の床面での直径は36cm、深さ38.8cmを測る。主柱穴以外のピットは住居跡南側で4つある。そのうちの最も大きいもので直径47cm、深さ30.3cmを測る。周溝はほぼ全周する。出土遺物は、カマド周辺と住居跡南壁付近に集中しており、杯が多い。

カマド (図版32-1・2、第92図)

カマドは、住居跡北壁に付設され、煙道は粘土で被覆されたまま東壁まで伸びている。火床面は住居跡と同じレベルにあり、両袖についてはどちらも直線的に伸びる。左袖残存長50cm(但し一段落ちて1mまで残)、基底部幅15cm~20cm、残高11cm(低い先端で5cm)。右袖の残存長91cm、基底部幅10cm~25cm、残高は先端で約5cmを測る。燃烧室は40cm×60cmを測り、中央に高杯が臥せた状態で出土した。焼土は燃烧室中央と右袖~煙道部へひろがっている。煙道は右袖より大きく伸びて、1.9mで東壁に接し、最大幅35cm。煙道の粘土を立ち割ると黒色土を覆う形で検出したが、熱を受けた跡はなかった。また、東壁の煙道部付近の床面のレベルは低くなっている。

出土遺物 (図版58・59、第93~9)

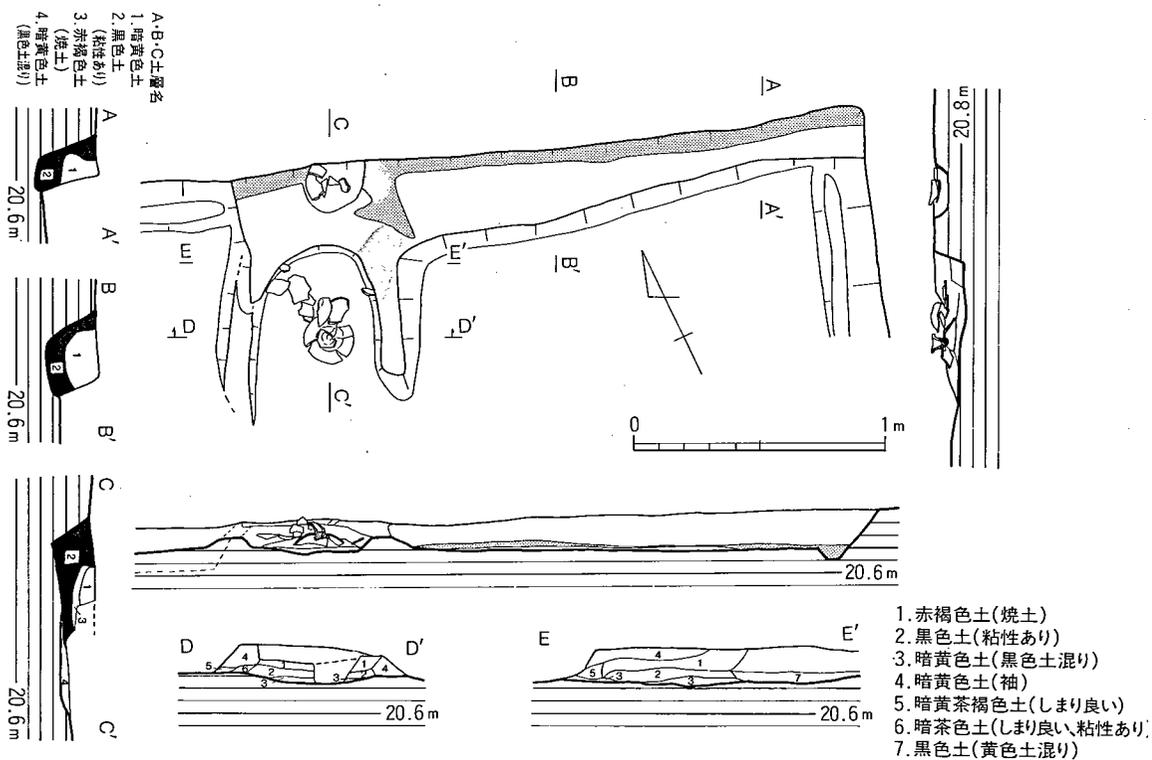
壺(1・2) 1の口径は10.2cmで、胴部最大径は15.0cmを測る。ややくびれる頸部から口縁端



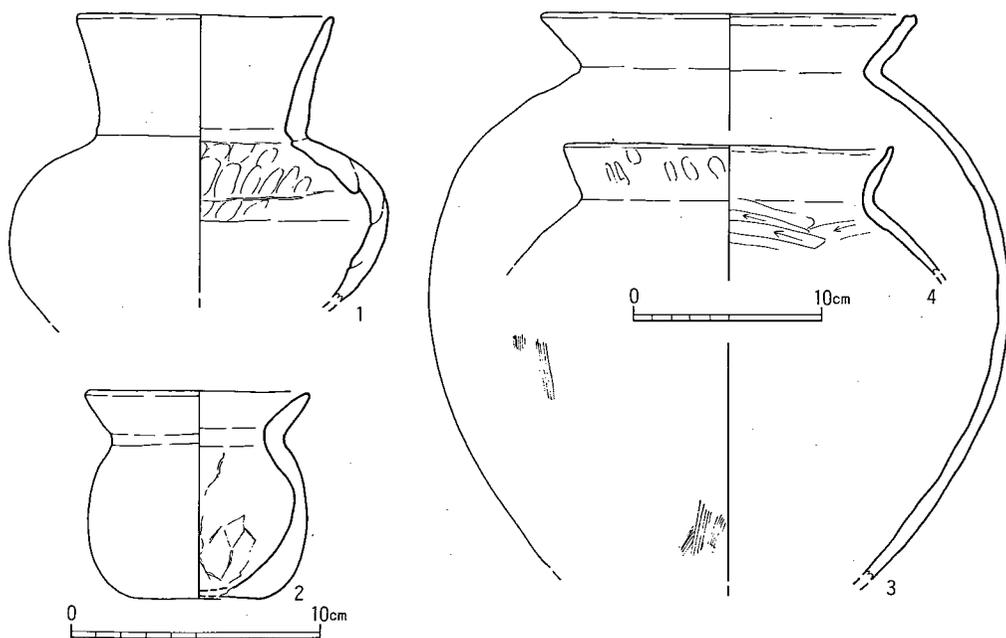
第91図 27号住居跡実測図 (1/60)

部までは直線的に開く。外面は磨滅著しく調整不明、内面胴部は粘土粗の痕とそれを押さえた指圧痕が残る。カマド右袖東側より出土。2の復原口径は9.0cm、器高8.30cmを測る。頸部から口縁端部までは緩やかに開く。胴部は球形に近く、最大径は8.8cm。外面胴部はミガキ調整、内面胴部は下半が工具によるナデ、上半が指ナデ。内外面ともに橙褐色に焼成されている。

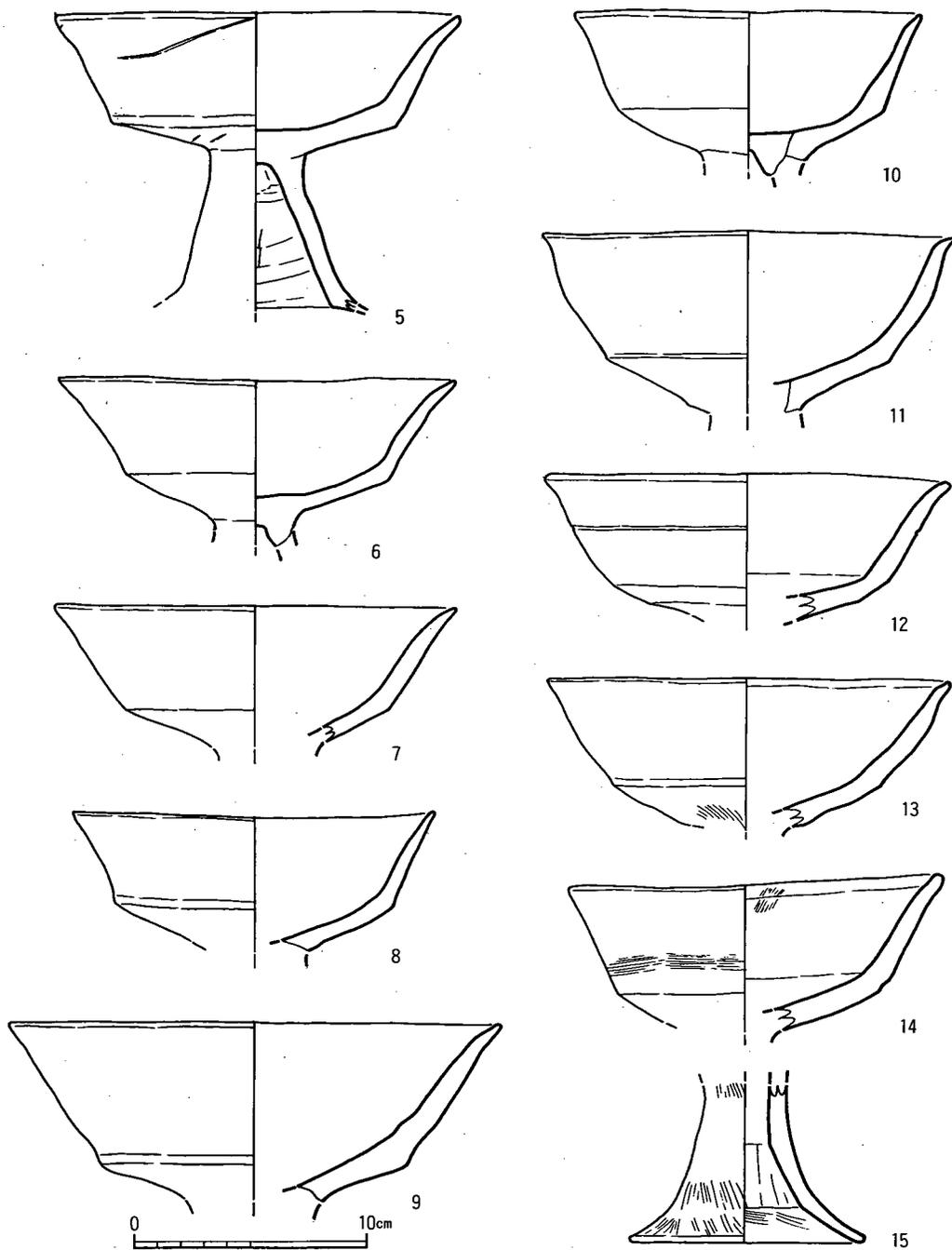
壺(3・4) 3の復原口径は19.8cmを測る。頸部から口縁部へは「く」字状を呈し、端部は厚く内側へ少し折れる。茶褐色に焼成されている。4は復原口径17.5cmを測る。口縁は頸部より緩やかに外反しながら端部で内折れ。口縁の外面には指圧痕あり。内面胴部はヘラ削り。



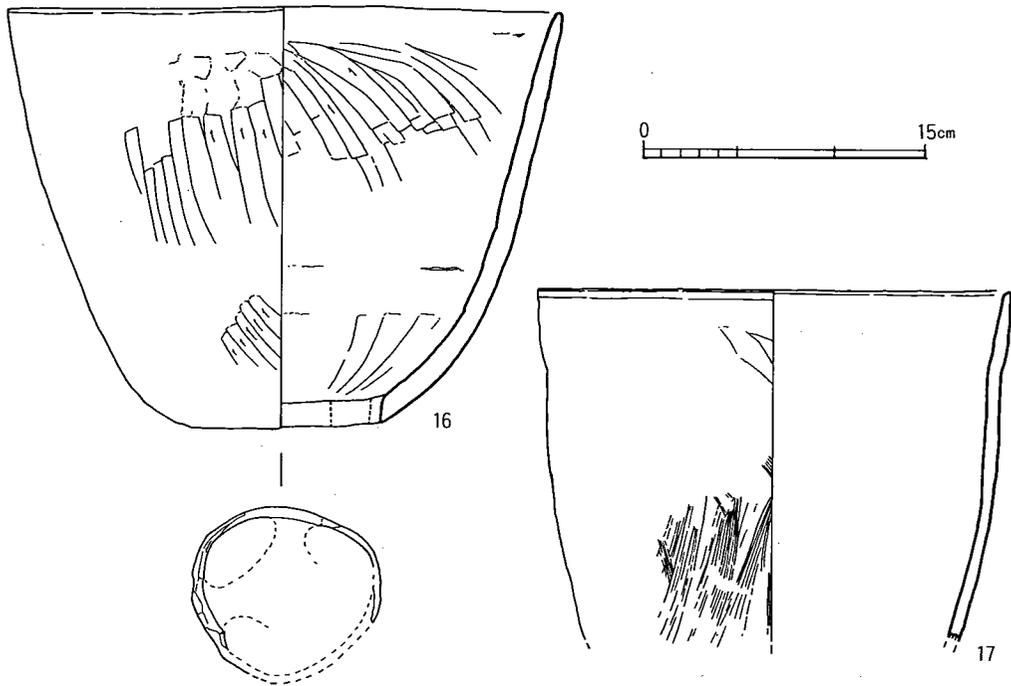
第92図 27号住居跡カマド実測図 (1/30)



第93図 27号住居跡出土土器実測図① (1/3・1/4)



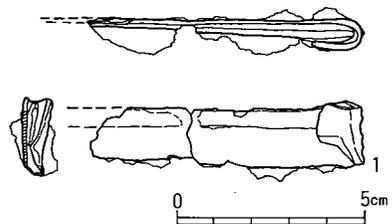
第94图 27号住居跡出土土器実測図② (1/3)



第95図 27号住居跡出土土器実測図③ (1/4)

高 杯(5~15) 5は口径17.2cm、残存器高13.0cmを測る。口縁から端部までは直線的に開くが端部で少し折れる様に外反する。口縁と杯外底部がなす屈曲部は鋭い、柱状部には縦にミガキが入る。内面は削り。橙褐色に焼成されている。住居西南壁より出土。6は口径16.9cmを測る。口縁端部へは少し外反しながら向かい細く抜ける。住居西南付近床面より10の杯を乗せて出土。橙褐色で内面に煤付着。7の口径は17.2cmを測る。端部は僅かに外反する。カマド内にふせた状態で出土した。8は口径17.5cmを測る。器面磨滅著しい。東壁煙道前面より出土。9は復原口径21.0cmを測る。口縁端部は外反。住居跡西南角より出土。10は6の上に垂って出土。11は復原口径17.4cmを測る。口縁端部は著しく外反する。内は椀状に深い。12はカマド煙道部より出土。13はカマド内出土の破片と西南壁で出土した破片が接合した。復原口径17.1cmを測り、口縁端部は内に折れる。15は8と共に東壁煙道前面より出土した。直径10.0cmを測る。

甗(16・17) 16は口径29.2cm、残存器高22.5cmを測る。底面の割れの状況から、多孔式である。胴は直線的で直口縁であるが把手が付かない。外面は削りのち



第96図 27号住居跡出土鉄製品実測図 (1/2)

ナデ、内面も削り、一部ナデ。灰黄色、灰橙色に焼成され、外面には煤付着、P 5より出土。17は復原口径25.0cmを測る。16と同じく胴が直線的な直口縁だが器厚は薄い。把手無し。16横の壁のそばで出土。

鉄製品（図版65-4、第96図）

1はP 7の南壁で出土した鉄製の手鎌である。大きく欠損するが僅かに袋部と柄が残っている。残存長7.0cm、幅1.8cm・厚さ0.9cmを測る。

これ等の他にP 6より玉類が出土している。

以上の観察結果より遺構の時期は5世紀前～中葉に位置づけられよう。

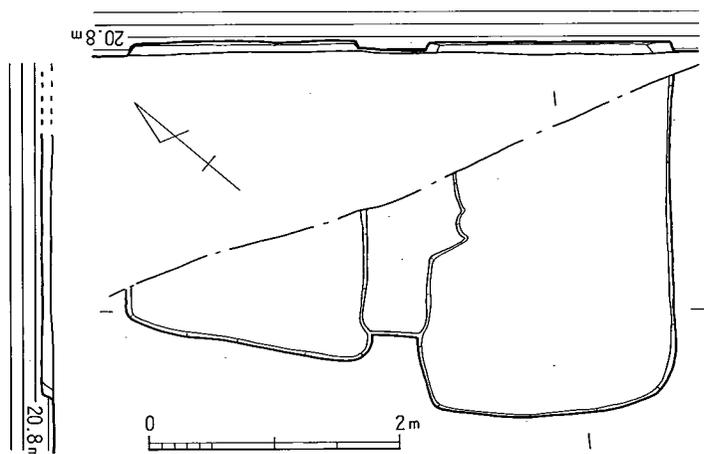
28号住居跡（第97図）

調査区南側の農道沿いで検出された。27号住居跡のすぐ北側である。住居跡の半分以上が農道下となる。プランは不定形で南北辺が4.4m、東西辺が2.5mを測る。柱穴は確認できなかった。南床面上より土器が出土している。

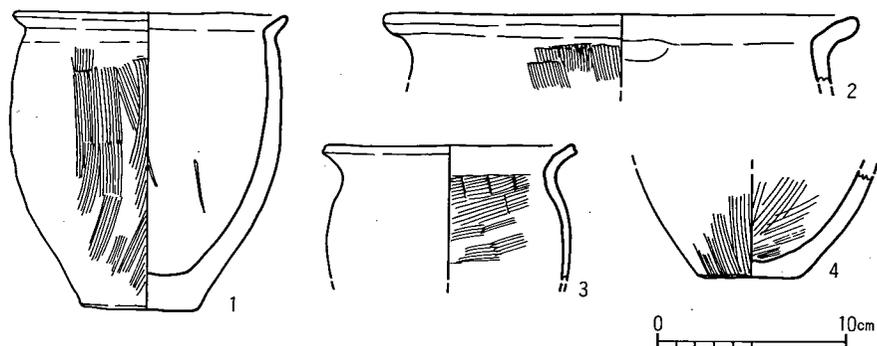
出土遺物（図版59、第98図）

甕(1～4) 1は口径14.7cm、器高16.0cmを測る。口縁は厚く緩やかに立ち上がる。胴部は中程で最も張る。底部は平底で少し凸状である。外面は縦位のハケ目調整、内面下方に工具痕あり。外面は暗茶褐色で内面は黒色である。2は復原口径25.0cmを測る。口縁部は厚く端部は丸い。3は復原口径13.4cmを測る。内面頸部以下をハケ目調整。4の底径は5.5cmを測る。底面はナデ調整。

これ等の出土遺物より遺構の時期は、弥生時代後期初頭と考えられる。



第97図 28号住居跡実測図 (1/60)



第98図 28号住居跡出土土器実測図 (1/4)

29号 a・b 住居跡 (図版33-1、第99図)

29号 a、b 住居跡は、整理の段階で2軒に分離した。内側の住居を a、外側を b とし、それぞれについて説明していく。

29号の a 住居跡は、A 地区内で最も東側に位置する。29号 b 住居跡を切っており、一部は調査区外へ出る。東西辺×南北辺は、3.5m×3.4m で東西方向に少しだけ長い方形プランを呈している。壁高の最も残りの良い所で14cm とかなりの削平を受けている。支柱穴と考えられるのは、P 1、P 2 の2本柱である。P 1 の床面上の直径は20cm で深さ26cm である。炉跡はやや北にずれる。出土遺物はほとんど床面上より出土している。

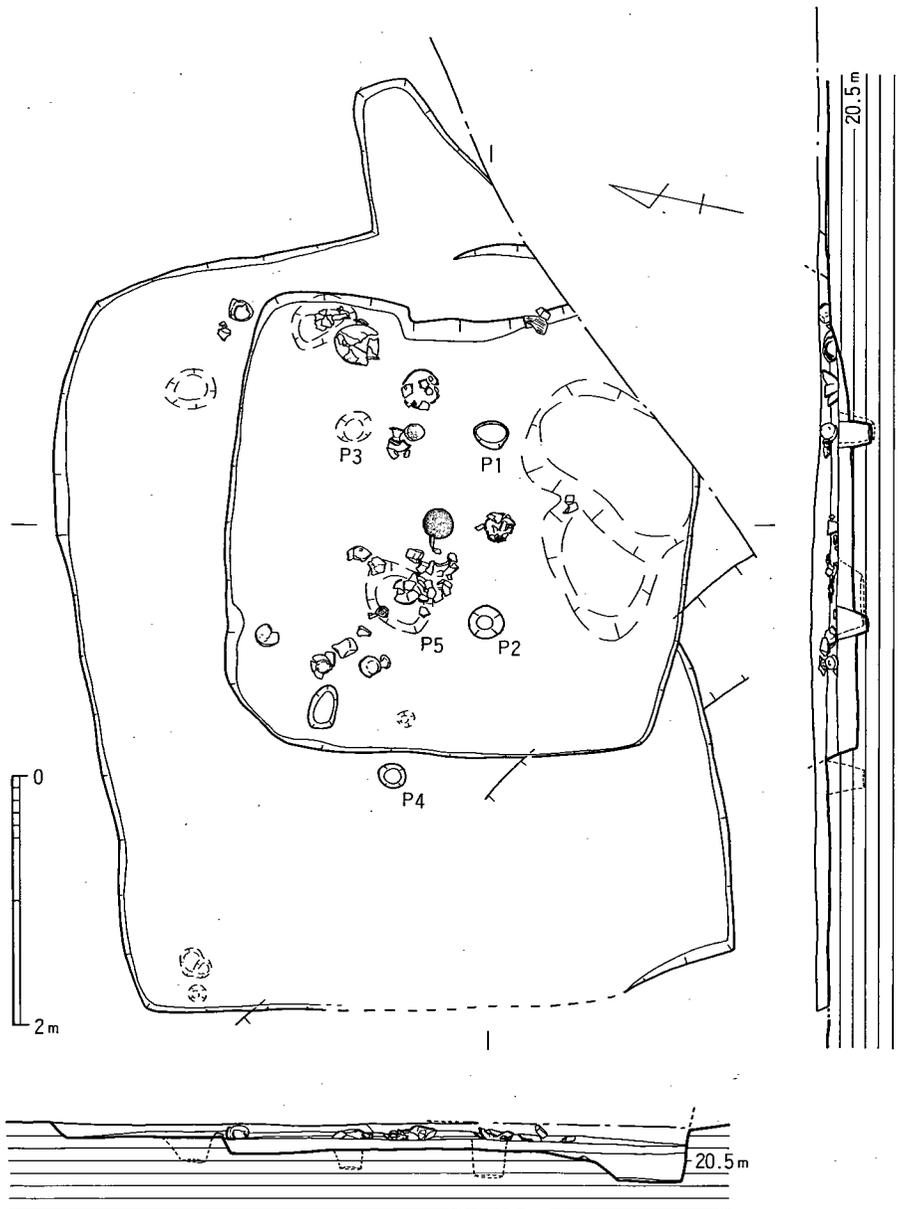
29号 b 住居跡は a 住居跡に大きく切られている。東西辺×南北辺は、5.8m×4.8m で長方形のプランを呈している。壁高の最も残りの良い場所は、10cm でかなり削平されている。支柱穴と考えられるのは、P 3・P 4 で2本柱の大型住居跡であったと考えられる。P 4 の直径は26cm で32cm の深さである。P 3 と P 4 の間の P 5 が29号 b 住居跡の炉跡の可能性がある。また、a 住居跡の東にある落ち込みは、b 住居跡の屋内土壌であった可能性がある。出土遺物は東側で床面上より出土している。

出土遺物 (図版59・60、第100図)

前半は a 住居跡出土遺物の説明を行い、後半に b 住居跡出土遺物の説明をする。

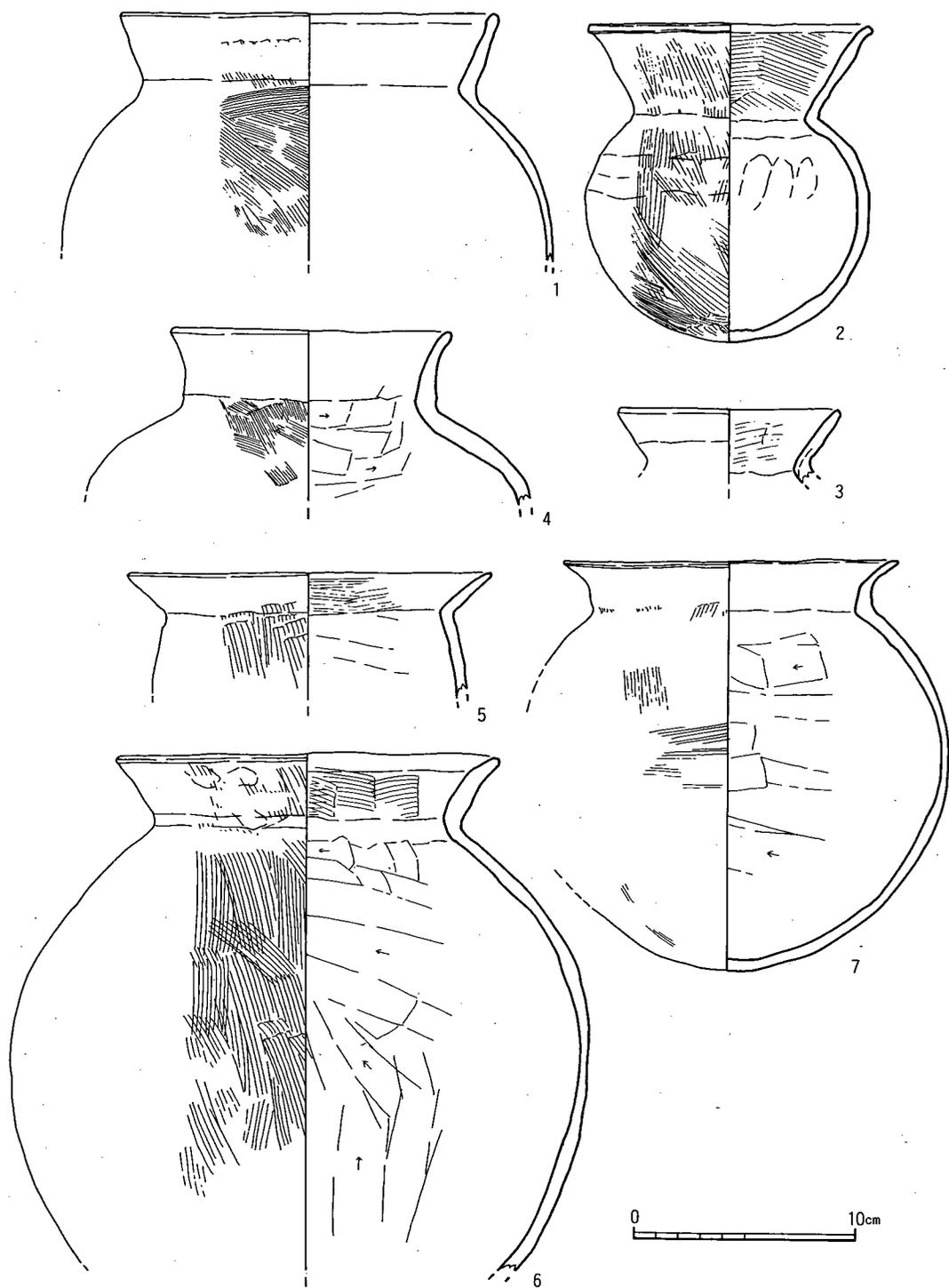
土師器壺(1~3) 1 は復原口径17.0cm を測る。口縁部が直線的に開くことから壺と観た。2 は口縁部が直線的に開き、球形の胴部が付く丸底の壺である。口径12.6cm、器高14.25cm を測る。内面胴部に指圧痕のちナデ調整あり。3 は壺の口縁であろう。復原口径10.0cm。

土師器甕(4~9) 4 は復原口径12.5cm を測る。5 は復原口径16.2cm を測る。口縁は「く」字状に開く。外面に縦位のハケ目、内面の口縁に横位のハケ目調整をそれぞれ行っている。頸部以下は削り。6 は P 2 の西辺りの床面より出土した。口径17.2cm を測る。頸部から口縁部へか

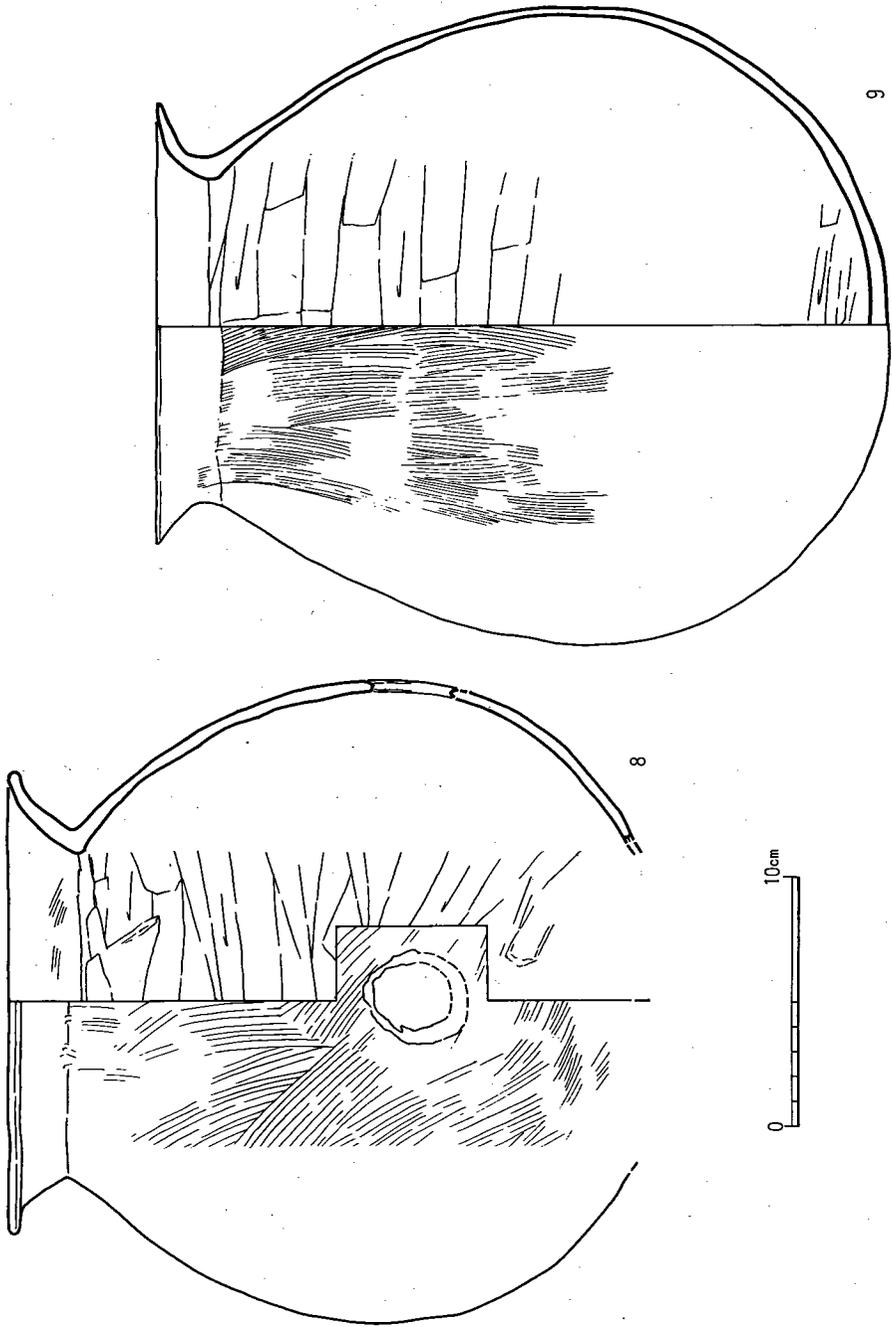


第99図 29号 a・b 住居跡実測図

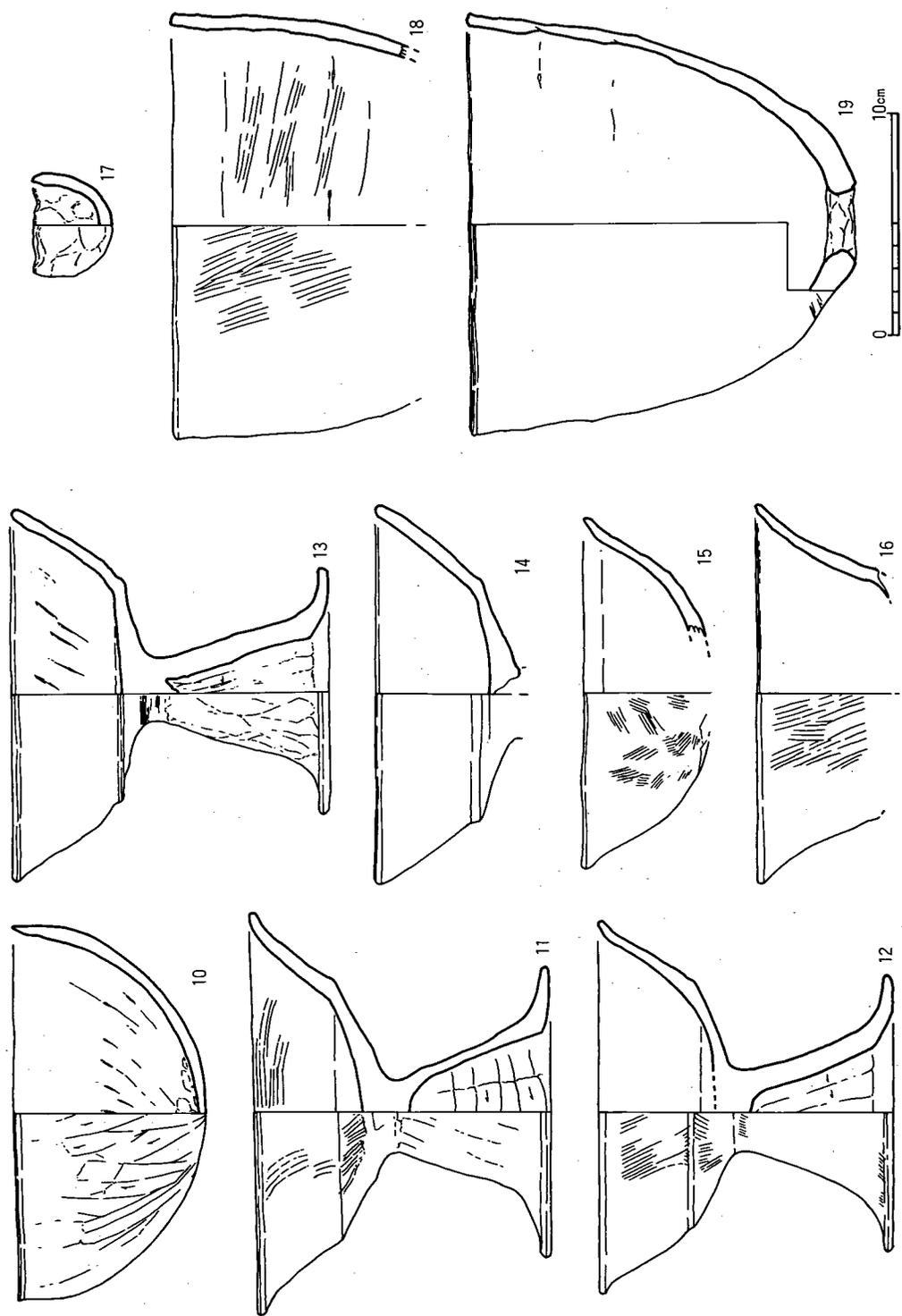
けて肥厚し、そのまま外反する。口縁部外面には指圧痕あり。外面胴部には縦位のハケ目調整、内面口縁部には横位のハケ目、頸部はナデ、胴部には削りの調整が行われる。7はP1とP2の間の床面上より出土した。復原口径14.8cm、器高18.3cmを測る。口縁は頸部より垂直気味に立ち上がり、端部へはさらに外反しながら至る。外面は磨滅気味、内面は口縁端部から胴の先



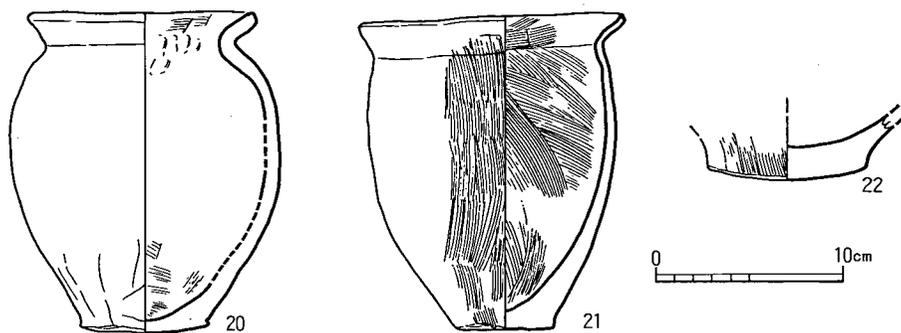
第100图 29号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第101图 29号住居跡出土土器実測图② (1/3)



第102图 29号住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第103図 29号住居跡出土土器実測図④ (1/4)

辺りまでナデ、以下は削りによる調整。8は住居跡東半床面より出土した。口径18.3cm、残存器高24.8cmを測る。口縁は「く」字状に折れ、端部付近ではさらに外反する。胴部最大径は25.6cmを測り、4cm前後大の穿孔あり。外面胴部まではハケ目調整、内面頸部下は削り、底部についてはナデ調整。9は住居北角の床面より出土した。口径17.6cm、器高28.9cmを測る。口縁部は口縁中程から端部へかけて大きく外反する。外面は縦方向のハケ目、内面頸部は削りのちナデ、胴部、底部については削りで、その間はナデ消されている。灰黄褐色で黒斑あり。

土師器碗(10) 10は住居西北端の床面より出土した。口径16.6cm、器高8.5cmを測る。外面は口縁方向へのヘラ削り。口縁部は横ナデ。内面は工具によるナデ、内底面には指圧痕あり。色調は灰黄色で外底面には黒斑がある。

土師器高杯(11~16) 11は住居跡中央部床面上より出土した。口径18.0cm、底径13.0cm、器高13.2cmを測る。口縁と外底部が作る屈曲は鋭く、そのまま立ち上がりながら端部付近で外反する。柱状部から裾部へは緩やかに曲がり至る。内面削りで裾部付近はナデ調整。11はP2北部の床面上より出土。口径16.7cm、器高13.1cmを測る。杯部の器厚は薄く、口縁端部は外反する。柱状部内面は削り、裾部内面は削り。13は住居東壁より出土した。口径17.0cm、器高14.0cm、底径11.0cmを測る。口縁はやや外反しながら直線的に開き端部は丸い。杯の屈曲部がやや凸状に出る。内底面は水平。脚部の外面は削りのちナデで、裾部は少し反る。14は復原口径17.0cmを測り、口縁部は直線的に開く。15は復原口径15.6cmを測る。端部は緩やかに外反する。16の復原口径は17.0cmを測る。

手捏土器(17) 口径4.4cm、器高は3.5cmを測る。外内面ナデ調整で、所々指圧痕を残す。

土師器甑(18・19) 18は復原口径19.0cmを測る、直口縁で器壁は薄い。19は住居跡北よりの床面より出土した。口径18.8cm、器高17.0cmを測る単孔式である。口縁まで直線的に立ち上がるが器厚は厚い。底部は削りを残し、孔部はナデ調整、内面には粘土の積み痕を残す。

甕(20~22) b住居跡に関連ある遺物の説明をする。20は住居跡東北の床面より出土した。

口径12.0cm、器高17.1cmを測る。口縁は頸部前後で肥厚し、そのまま外反する。胴部最大径は14.6cmで口径より広く底部は平底である。底部周辺は削りのちナデ、内面下方にハケ目調整あり。胴部に黒斑あり。21も20と共に同じ場所出土した。口径14.2cm、底部5.0cm、器高16.8cmを測る。口縁の厚さは薄く、穏やかに立ち上がる。胴部はやや長胴で底部は平底である。内外面にハケ目調整あり。22は底径8.4cmを測る甕の底部である。

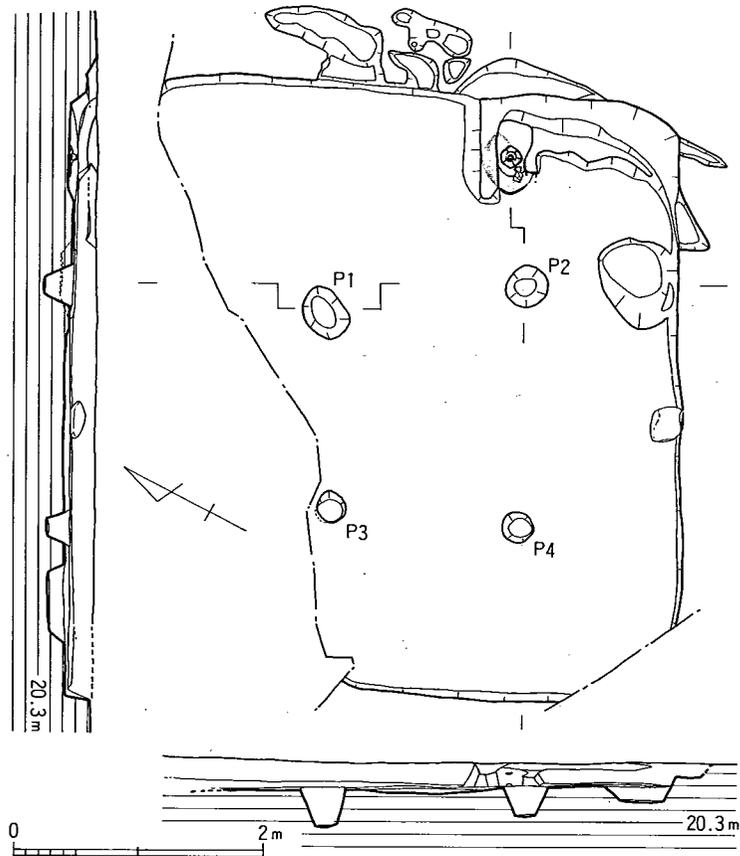
これ等の出土遺物から29号の住居跡については4世紀後半から5世紀初頭くらいであろう。
b 住居跡については弥生時代後期前葉位であろう。

30号住居跡 (図版33-2、第104図)

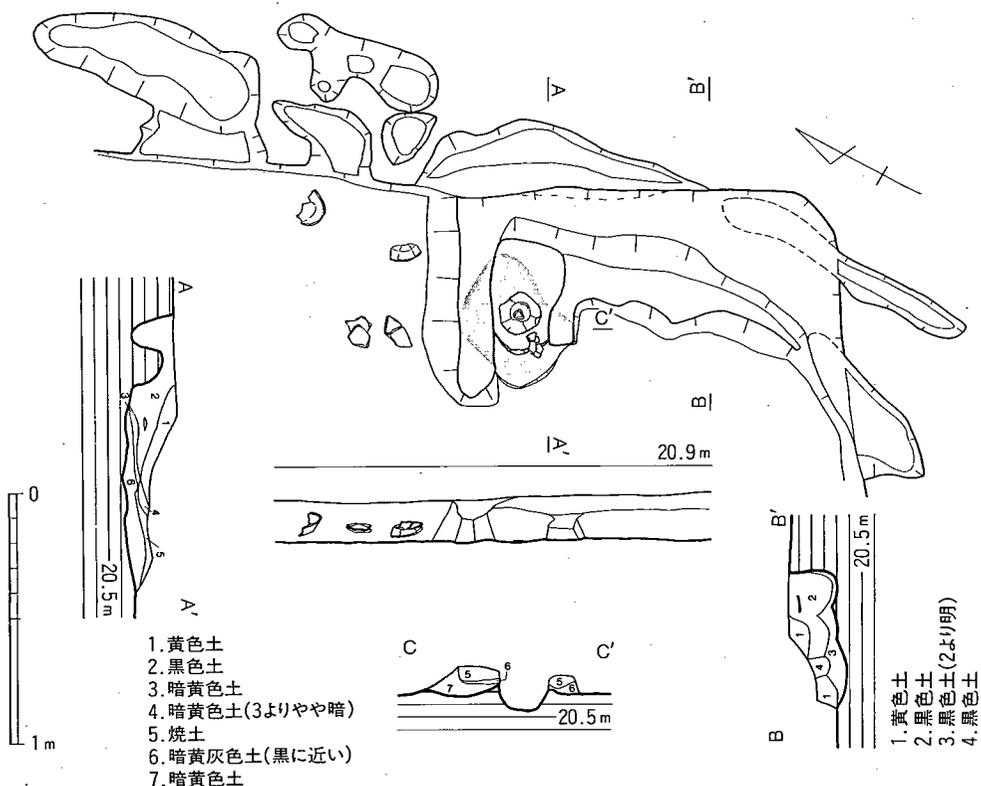
調査区南側、農道北側付近において検出された。住居北側は、河川礫等が多量に流れ込んで破壊している。住居跡は東西方向に長い、一辺4.8cm (中軸) × 4.0cmと長方形プランを呈しており、東隅にカマドを持っている。検出面から床面までの壁高は20cmを測る。床面については貼床である。支柱穴は4本柱で一番深いP1は直径32cmで深さ30cmを測る。出土遺物はカマド周辺とP1周辺に集中する。

カマド (図版34-1・2、第105図)

火床面は、住居床面とほぼ同じ位の高さである。左右の袖は壁から直線的にのびているが、左袖80cm、右袖62cmと左袖がかなり長い。左袖の基底部幅は25cm、残存高10cmを測る。右袖の基底部幅は15cm、残存高7cmを測る。燃



第104図 30号住居跡実測図 (1/60)



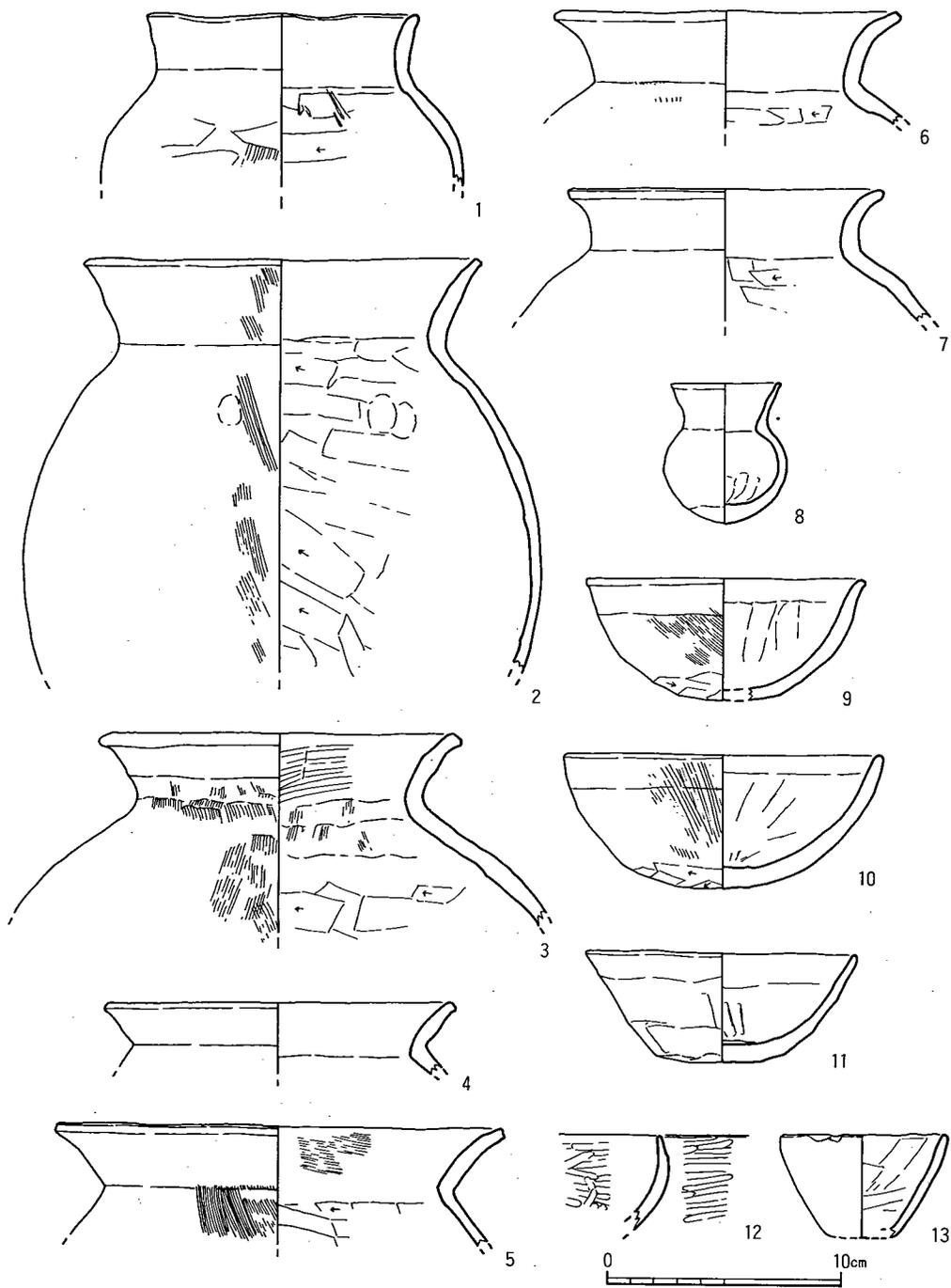
第105図 30号住居跡カマド実測図 (1/30)

焼室は30cm×60cmの広さで、高杯が臥せた状態で出土した。右煙道部は粘土で被覆し、そのまま住居右壁まで伸びている。立ち割って土層を確認したが、熱を受けた状況などは確認できなかった。

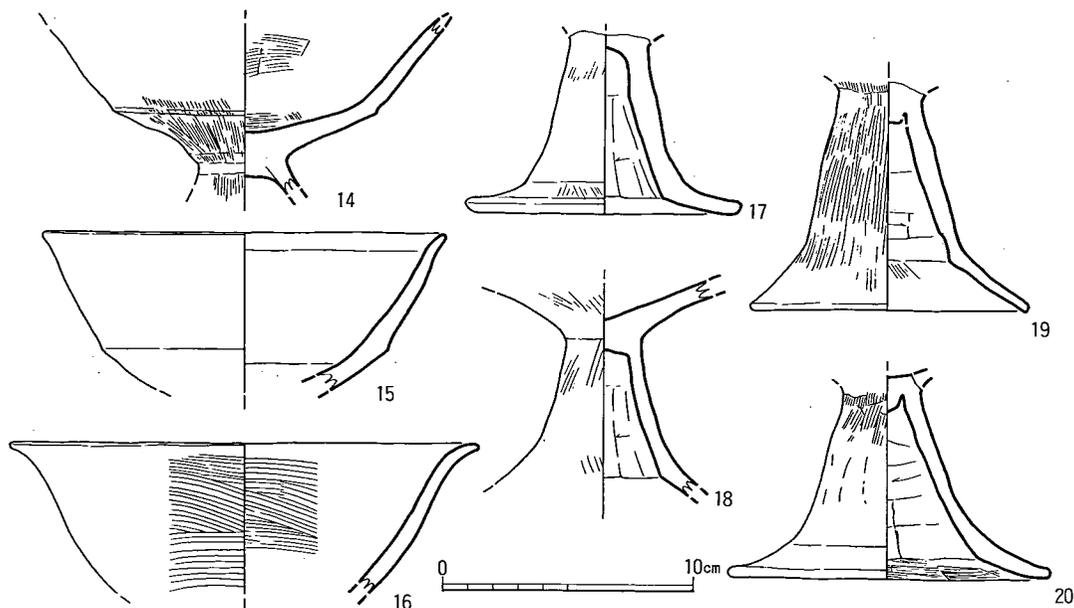
出土土器 (図版60・61、第106・107図)

壺(1) 1は復原口径11.6cmを測る。口縁は肥厚しながら緩やかに外反する。内面は頸部までナデ、以下は削り。

甕(2~7) 2は復原口径17.0cmを測る、口縁は頸部より肥厚し緩やかに立ち上がり外反する。頸部以下の器厚は薄い。胴部内面は削りが施され、一部に指圧痕が残る。胴の外面には黒斑がのこる。3はP3の東側で出土した。復原口径は15.4cmを測る。胴部から口縁部への器厚は一定で、ゆるやかに外反しながら端部は少し肥厚する。内面口縁はハケ目調整、頸部は指圧痕が残るナデ調整。灰黄褐色に焼成され、口縁部に黒斑あり。4は「く」字状に折れる口縁を持つ。復原口径は15.0cmを測る。5も4と同じく「く」字に折れる。ただ頸部以下にヘラ削りを残す。復原口径19.0cmを測る。6はP1上より出土した。復原口径は14.6cmを測る。頸部は鋭く折れ



第106图 30号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第107図 30号住居跡出土土器実測図② (1/3)

口縁部へ至る。口縁はゆっくり開きながら折れるように外反する。橙褐色、暗褐色で焼成される。7も6と同様な口縁を持つが外反は弱い。復原口径は13.4cmを測り、灰黄色、淡黄褐色で焼成されている。

椀(9~11) 9は復原口径12.0cmを測る。カマド左側の壁際より出土した。外底面に削り面を残す。内面は指ナデ調整。10はカマド左袖際より出土した。復原口径は13.5cm、器高5.7cmで外底面に削り面を残す。内面は工具によるナデ。11はP4上より出土。外底面は平底を呈す。胴部から口縁端部へは、直線的に開く。内外面は工具によるナデ調整。口径11.5cm、器高4.70cm、底径5.5cmを測る。

手捏土器(8・12・13) 8は壺形を呈している。口径は4.6cm、器高5.9cmを測る。口縁は直線的に開く。外内面ナデ。12は内外面にミガキがある。杯かもしれない。13は復原口径4.8cmを測る。底部から口縁へは直線的に立ち上がる。外面はナデ、内面には削りあり。

高杯(14~20) 14はカマド内に臥せた状態で出土した。口縁は一定の厚さを持って立ち上がっている。口縁端部については欠損しており不明。外底部にハケ目調整あり。15は復原口径16.0cmを測る。口縁はゆるやかに内彎しながら立ち上がり、端部は外反する。16は復原口径18.6cmを測る。杯部口縁は緩やかに立ち上がりながら端部で少し外反する。内外面はハケ目調整が行われ暗黄茶褐色に焼成されている。17は底径11.0cmをはかる。裾の端部は僅かに外反する。暗黄茶褐色、橙褐色に焼成。18は中央付近で出土。柱状部外面に僅かにハケ目調整を残す。内面

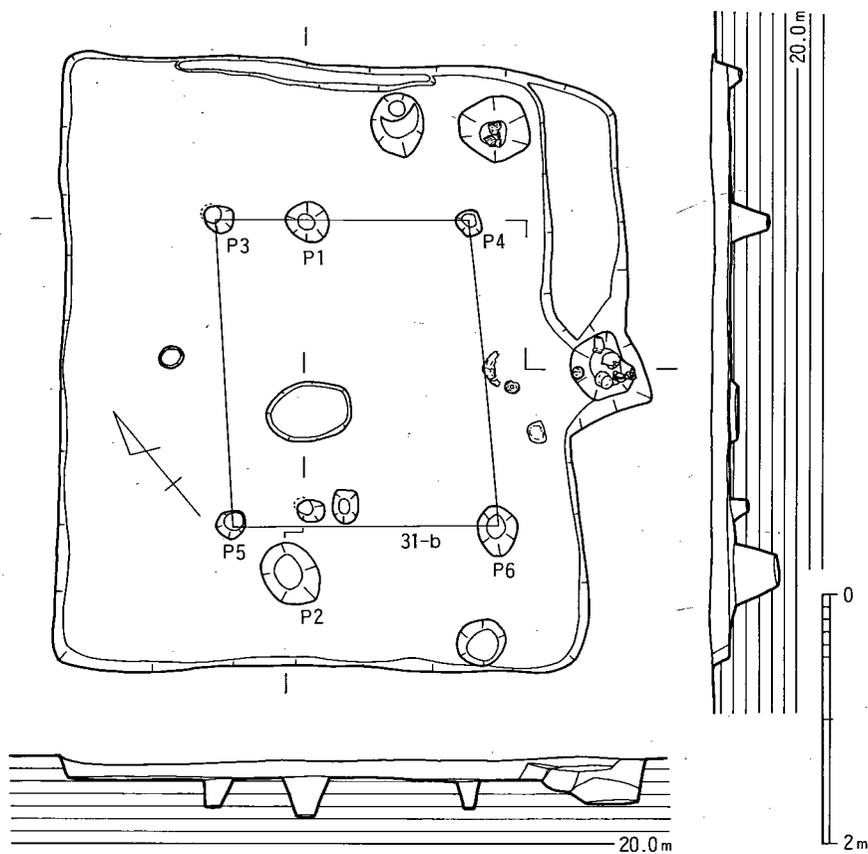
は削り。橙褐色、灰黄色に焼成されている。19は底径11.0cmを測る。柱状部は縦方向のハケ目調整、内面は削り。裾部はハケ目のち横ナデ調整。20はP 2 上より出土。底径12.8cm、残存高8.0cmを測る。柱状部から裾部へはなだらかに移り、端部は僅かに外反する。裾部内面はハケ目調整される。暗赤褐色に焼成されている。

これ等の出土土器より遺構の時期は5世紀前～中葉位であろう。

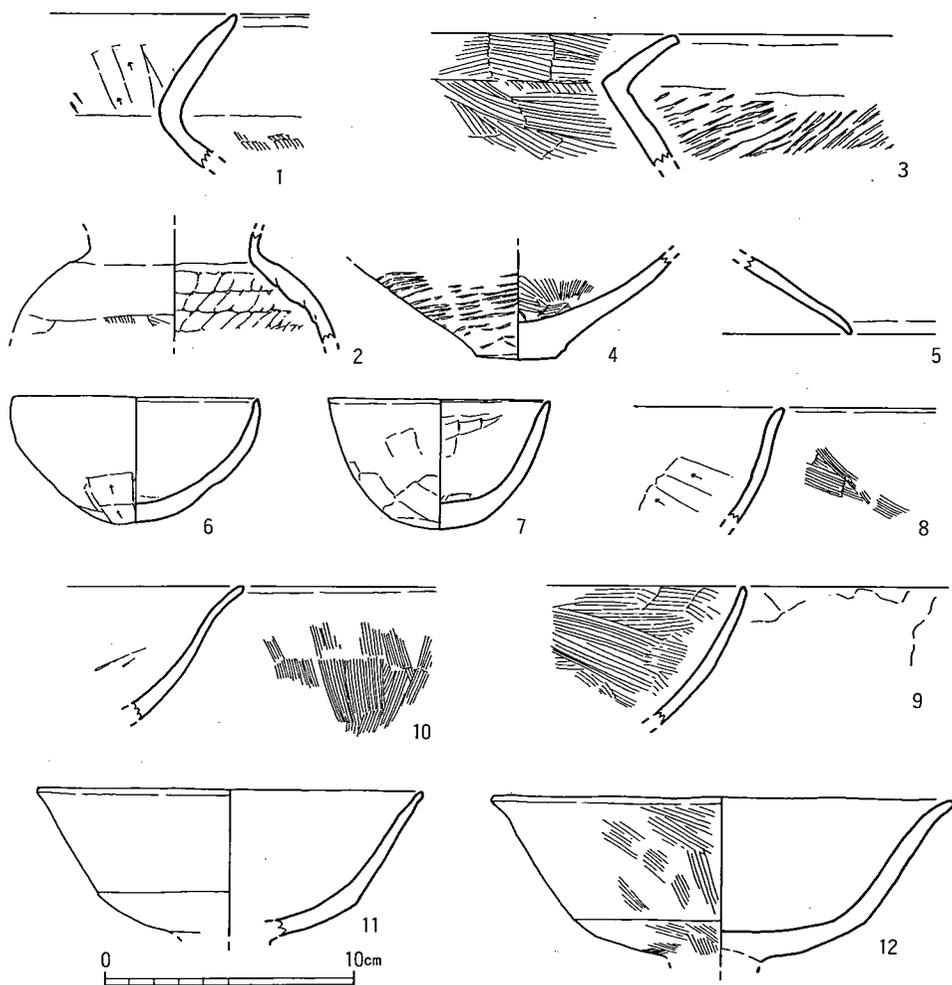
31号 a・b 住居跡 (図版35-1、第108図)

31号住居跡はA地区南側、30号住居跡の東側で35号住居跡に接する状態で検出された。29号住居跡と同様、整理の段階で2軒に分けられた。

31号 a 住居跡は、現在視覚的に認識できる。南北辺×東西辺は、5.0m×4.2mを測る。壁高は残りの良い所で、検出面から床面まで18cmを測る。主柱穴はP 1 と P 2 の2本柱で間に炉を挟む。P 1 の直径は36cm、深さ34cmを測る。屋内土壌としてはP 7 が上げられる。



第108図 31号 a・b 住居跡実測図 (1/60)



第109図 31号住居跡出土土器実測図 (1/3)

31号b住居跡は、調査時に正確なプランは把握できなかった。P3・P4・P5・P6が、主柱穴となるだろう。P4の直径は18cm、深さは24.0cmを測る。貼床については確認できなかった。また、カマドについても確認できなかった。おそらく住居跡は、2本柱の時期と4本柱の時期の2時期となるだろう。

出土遺物 (図版61、第109図)

ここでは器種ごとにまとめて説明する。

壺(1・2) 1の口縁は頸部より直線的に開く、外面はハケ目調整。2は内面頸部下に粘土の積と指圧痕を残す。外面ハケ目で内面頸部は削り。P8の手前より出土した。

甕(3・4) 3の口縁は「く」字状に外反する。外面胴部に叩き目、内面にはハケ目調整。4

は甕の底部で底径3.2cm、外面に叩き目、内面にハケ目調整を残す。P 7より出土。

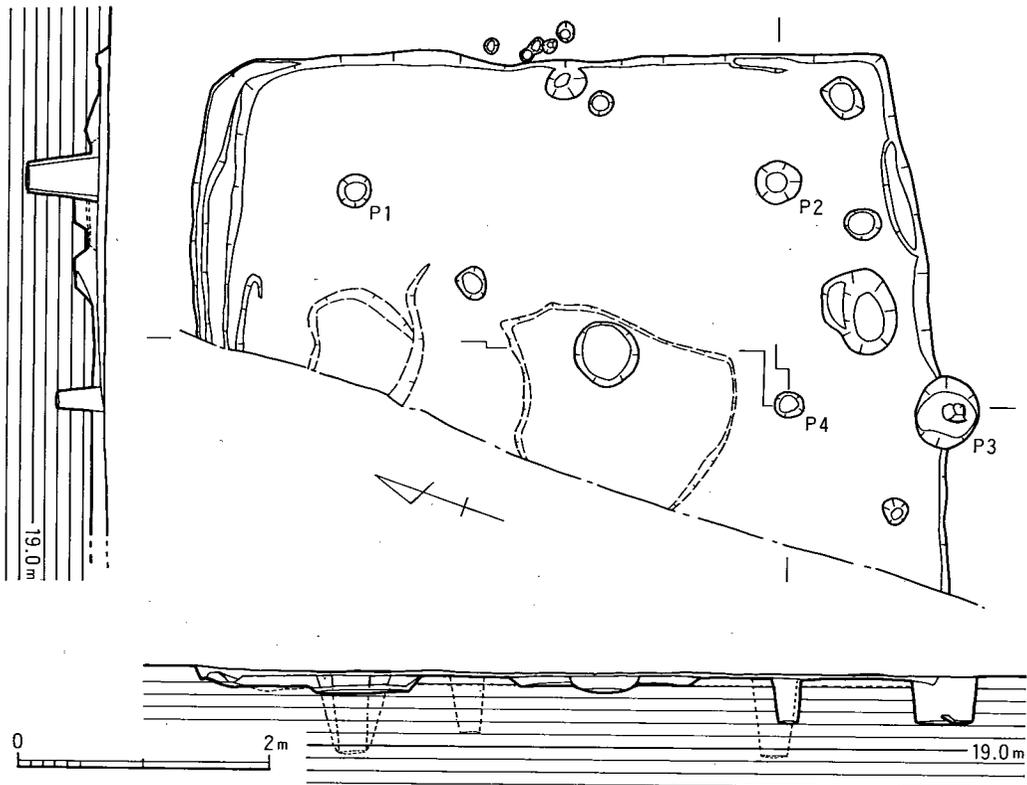
椀(6~9) 6はP 7より出土。口径9.9cm、器高5.1cmを測る。外底面は削り、内面は工具によるナデ。7は口径9.0cm、器高5.2cmを測る。外面削りののちナデ、内面粗いナデ。8は口縁端部がやや外反し、外面はハケ目、内面は削りのちナデ調整。9の口縁はやや内彎する。外面ヨコナデ、内面細いハケ目調整。

高 杯(5・10~12) 5は裾部破片である。10は口縁がやや外反する。外面に縦のハケ目調整。11は復原口径7.60cm。口縁は直線的に開き端部がやや外反する。12はP 8より出土。復原口径は18.2cmを測る。口縁は直線的に開き端部付近で外反する。外面ハケ目調整、内面ナデ調整。

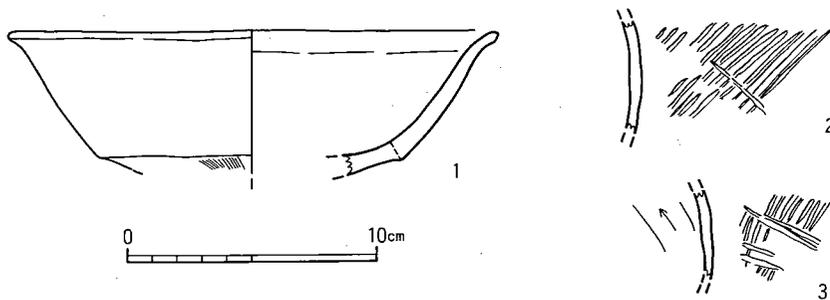
これ等の遺物より、a住居跡は弥生時代の後期後葉に比定できよう。また、b住居跡については4世紀中葉位に考えられよう。

32号住居跡 (図版36-1、第110図)

調査区中央の西側で検出された。住居の1/3は調査区外である。計測できる住居東側の一辺は、5.3mである。主柱穴の全ては確認できないが、P 1・P 2の配置状況から、4本柱であったと



第110図 32号住居跡実測図 (1/60)



第111図 32号住居跡出土土器実測図 (1/3)

考えられる。床面上でのP 2の直径は40cm、深さ58cmである。床面は貼床であった。遺物はほとんど出土しなかった。

出土土器 (図版61、第112図)

高杯(1) P 3より出土した。口径は19.4cmを測る。口縁部と外底部がつくる屈曲部は少し鋭い。口縁は内彎しながら、端部付近で外反する。外面底部にハケ目調整。

2、3は胴部に叩き目を持つ。

これ等の出土土器から遺構の時期は4世紀代に求められよう。

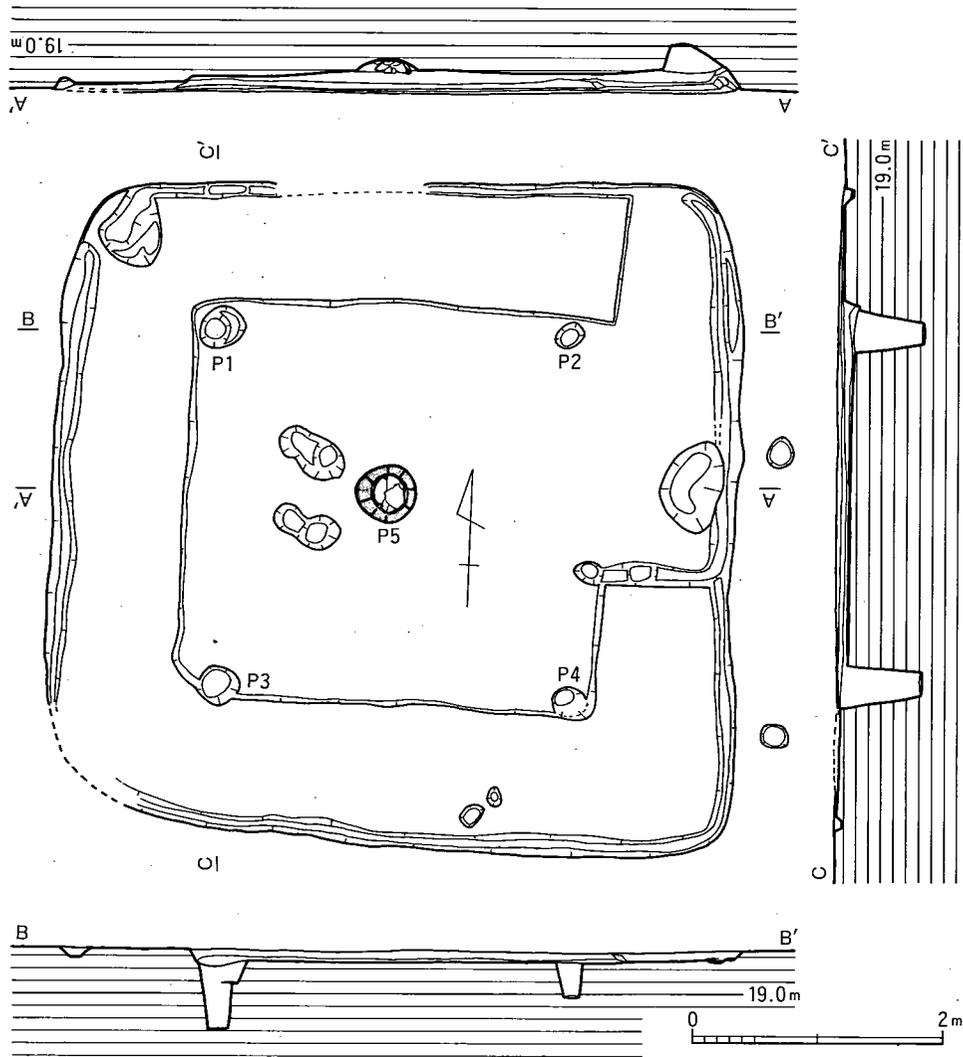
33号住居跡 (図版36-2、第112図)

調査区北側の34号住居跡のそばで検出された。住居跡の東辺×北辺は、5.3m×4.8mのほぼ正方形のプランを呈しており、方位軸に沿っている。床面から検出面までの壁高は、残りの良い所で9.0cmを測る。ベッド状遺構の一部は削平されており、遺構の残りは良いとは言えない。支柱穴は4本で中央に炉を持つ。ベッド状遺構は屋内土壌部分と東北角以外は貼られている。炉には甕の底部が設置されていた。柱穴はどれも残りが良いが、P 3では直径36.0cm、深さ62.0cmを測る。南側には削平を受けた屋内土壌が配置されており、周溝が巡る。

出土土器 (図版61・62、第113図～第115図)

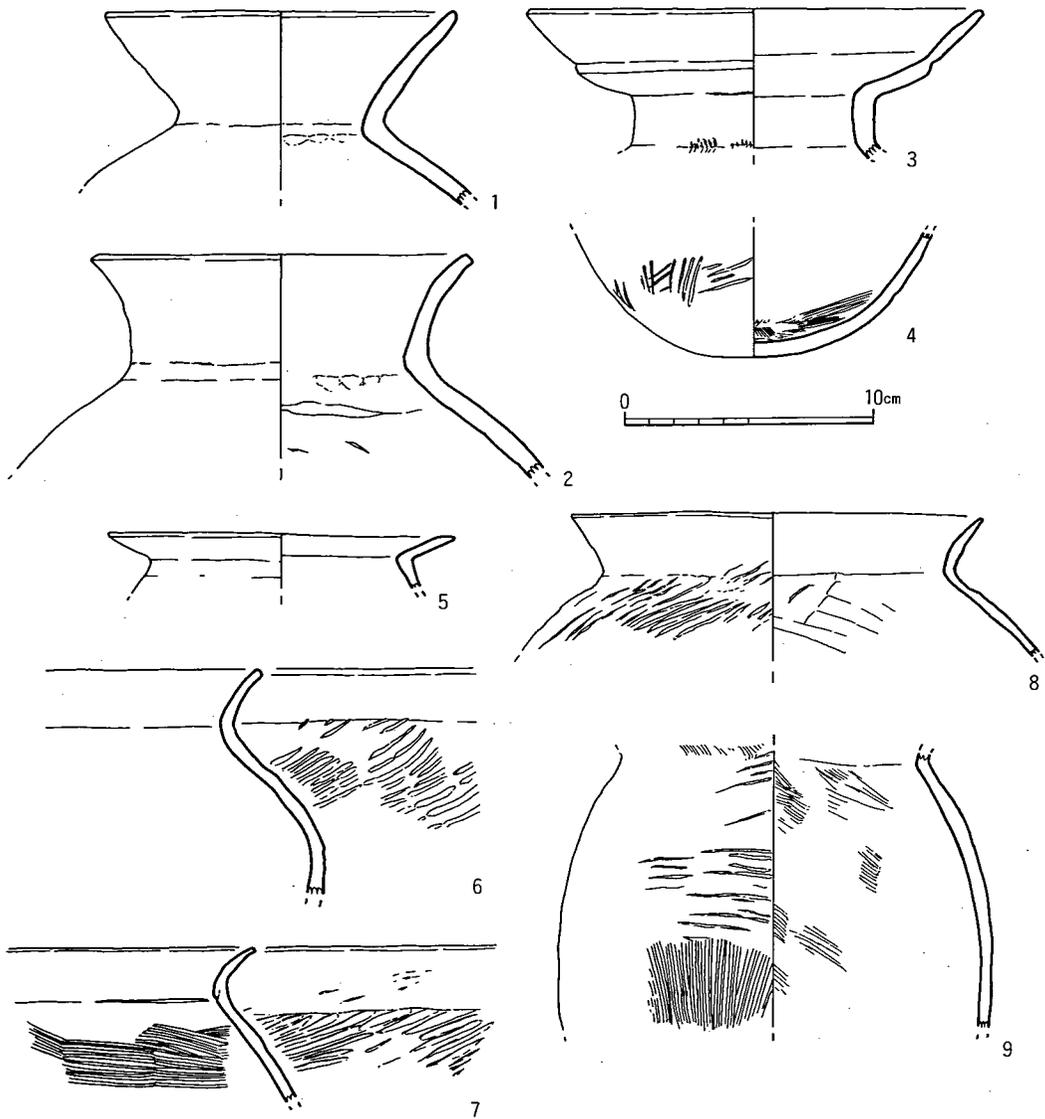
壺(1~4) 1は口径14.0cmを測る。口縁は直線的に開き端部が少し内に折れる。内面頸部には指圧痕がある。灰橙色に焼成される。2は口径15.0cm、内面頸部下には指圧痕があり、粘土の積み痕も残る。灰橙色に焼成されている。3は複合口縁の壺で、口径は18.0cmを測る。口縁はナデ調整。頸部はハケ目調整。胎土は粗く灰黄橙色を呈す。4は壺の底部で丸底に近く、底は少し窪む。外面は叩き目のちナデ調整、内面についてはハケ目調整、指圧痕が残る。灰暗茶色に焼成されている。

甕(5~13) 5は口径13.8cmを測る。口縁は「く」字状に開き、外面ナデ、内面頸部以下削り。灰黄色に焼成されている。6・7は口縁部破片。6の頸部は少し折れながら開く。内面はナデ。



第112図 33号住居跡実測図 (1/60)

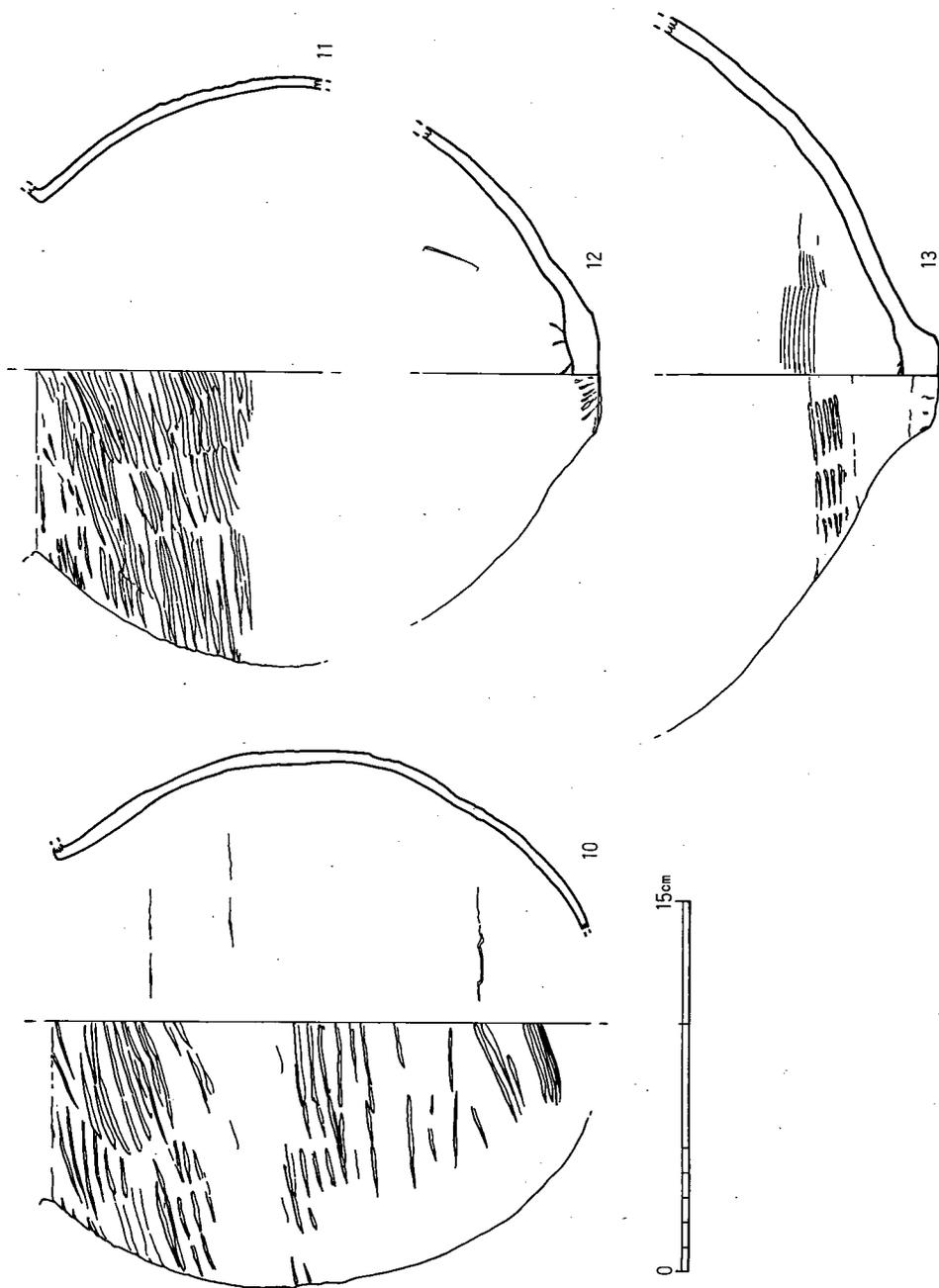
7の頸部は丸く折れて外反する。内面はナデ調整。8の口径は16.1cmを測る。口縁は頸部より立ち上がる様を開き端部へ向かうにつれ細くなって外反する。外面は平行叩き目が頸部にまで達する。9は長胴タイプの甕であろう。外面の胴部下半はハケ目が叩き目を消している。内面はハケ目のちナデ調整。暗茶褐色に焼成されている。10は叩き目をほぼ全面に残す。内面はナデ調整である。胴部最大径は21.8cmを測る。胎土粒子は粗く器面に石英等が浮く。灰橙色に焼成されている。11の叩き目の残りは良い。灰橙色に焼成されている。12の外面の叩き目はほとんどナデ消されている。黒斑あり。内面は工具によるナデ。13は炉に設置されていた。直径4



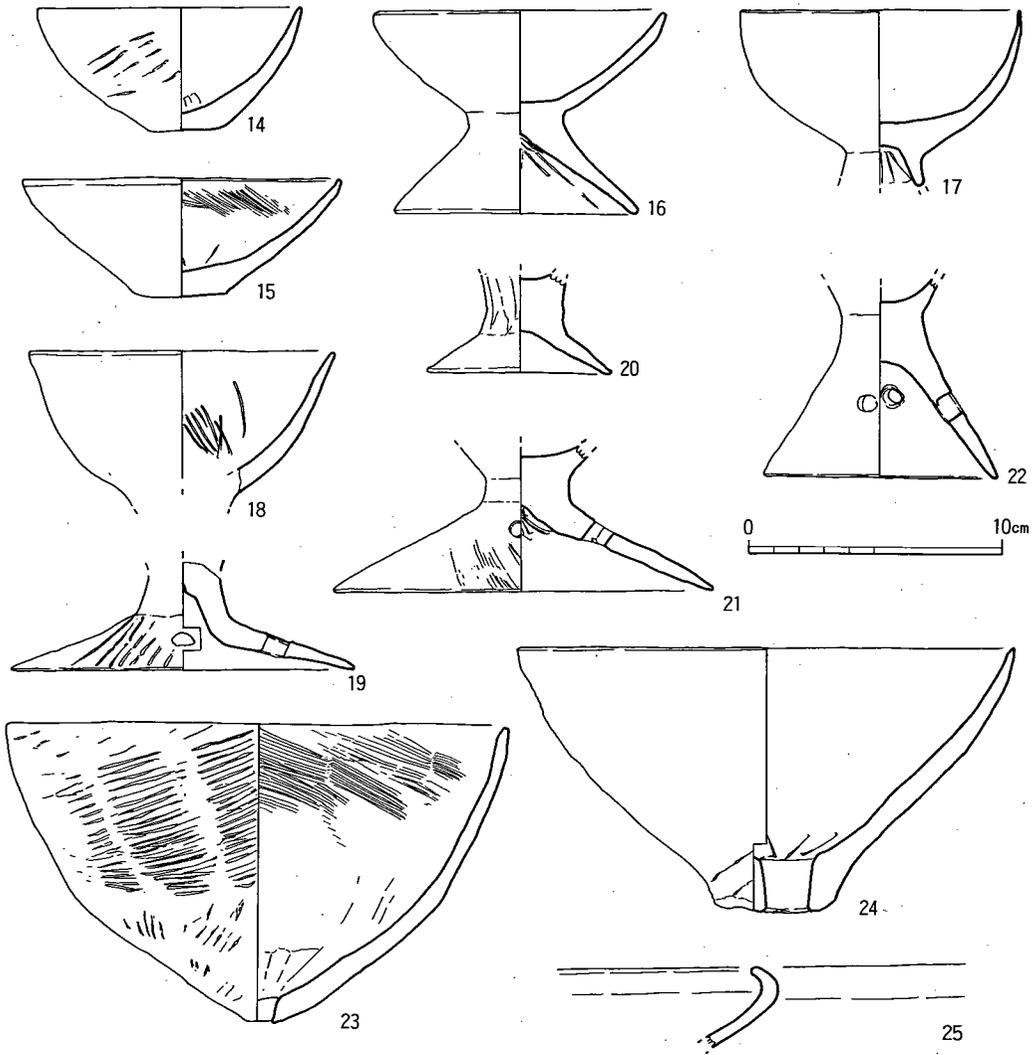
第113図 33号住居跡出土土器実測図① (1/3)

cm程度の底部が残る。外面は灰橙色で、底部のみ黒色。内面は灰色である。

鉢(14・15) 14は口径10.4cm、器高5.0cmを測り、平底である。外面には叩き目が少し残る。内面には底に工具痕あり。15は口径12.8cm、器高4.8cmを測る。口縁はやや内彎する。底部は平底である。外面に黒斑あり。内面は、ハケ目のちナデ調整。煤付着。



第114图 33号住居跡出土土器実測图② (1/3)



第115図 33号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

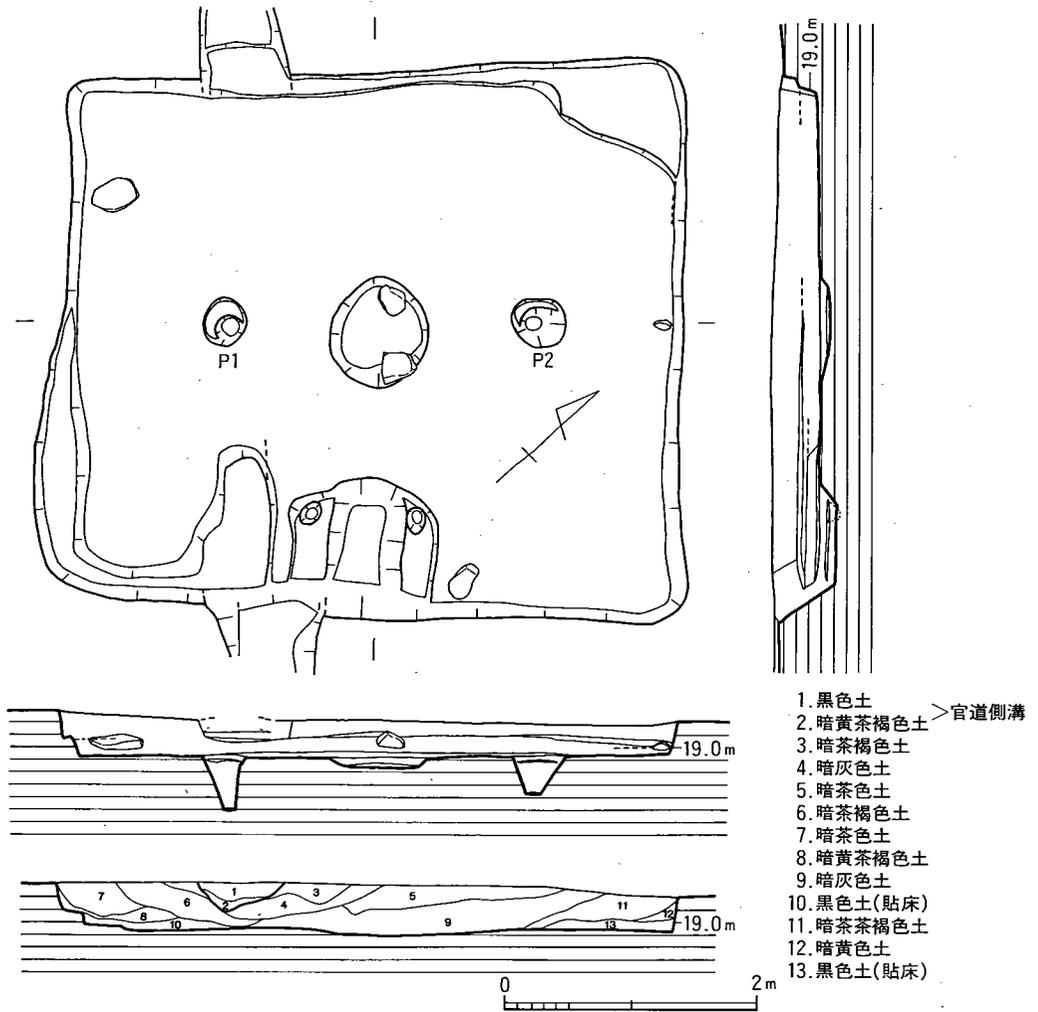
高杯(16~18・25) 16は杯部口径11.6cm、器高8.1cmを測る。脚部内面に工具痕あり。17は口径11.0cmを測る。口縁は急に丸く上がり椀状に近い。色調は外面灰黄色、内面は茶褐色である。18は口径12.1cmを測る。口縁端部はやや外反する。内面にミガキあり。19は底径13.6cmを測る。裾部にはミガキが入り、穿孔は4つである。20は底径7.3cm。裾端部はやや外反する。21は底径21cmを測る。裾部はハケ目のちナデ調整で穿孔は4つである。杯内底面にはミガキあり。22は底径9.2cm、杯内底面までの器高は7.0cmである。裾部の穿孔は4つ。裾部内面には煤付着。25の口縁は大きく内彎する。

鉢形甕(23・24) 23は口径20.0cm、器高12.0cmを測る。外面は叩き目のち孔付近ナデ。内面は口縁から胴部ハケ目調整。孔付近は削りを残す。外面灰黄色、所々に煤附着。内面黒色。24の復原口径は19.6cm、器高11.5cmを測る。外面の孔付近は磨滅気味。内面に工具痕あり。

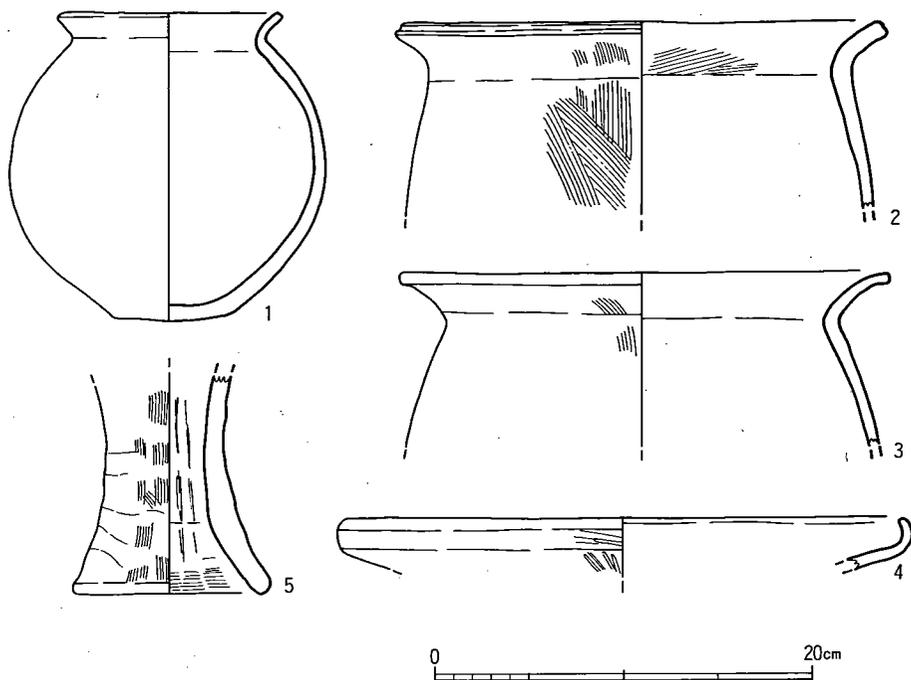
これ等の出土遺物と住居跡の形態から遺構の時期は弥生時代末に位置づけられよう。

34号住居跡 (図版37-1、第116図)

調査区北側、33号住居跡のすぐ北で検出された。住居跡は官道に切られている。西辺×北辺



第116図 34号住居跡実測図 (1/60)



第117図 34号住居跡出土土器実測図 (1/4)

は、4.9m×4.4mである。主柱穴は2本で炉を挟んである。屋内土壌は南壁に配置している。ベッドについては湧水地での調査のため不十分な検出であった。遺物は炉周辺で出土した。

出土土器 (図版62、第117図)

甕 (1~3) 1は復原口径12.0cm、器高16.4cmを測る。口縁は頸部より鋭く外反する。胴部の復原最大径は17.0cmで口縁より広い。器面調整は磨滅し不明。2は復原口径26.0cmを測る。口縁は緩やかに外反する。外面胴部ハケ目、内面口縁部ハケ目調整。3は復原口径26.0cmである。口縁は頸部より大きく「く」字状に外反する。

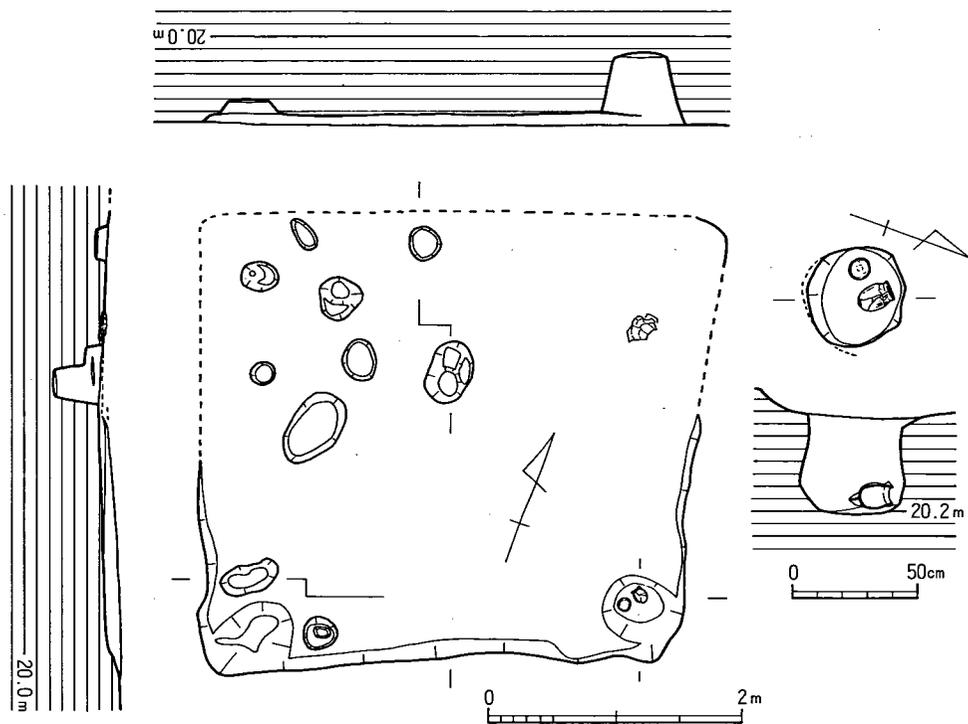
高杯 (4) 4は復原口径29.5cmを測る。外面ヘラミガキ、内面はナデ調整。

器台 (5) 5は底径10.5cmを測る筒状の器台である。外面は丁寧なハケ目調整が行われ、内面は一部ハケ目のちナデ調整。

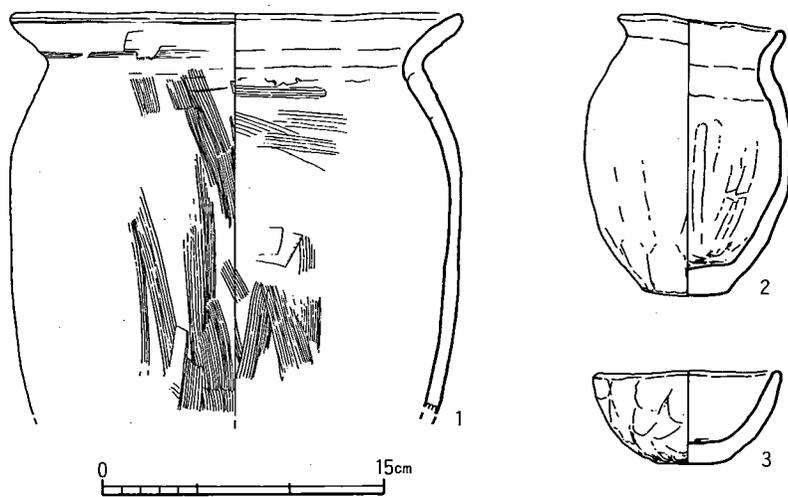
これ等の出土遺物より、弥生時代後期中葉の年代が与えられよう。

35号住居跡 (図版37、第118図)

調査区南部、31号住居跡の南側で検出されされた。かなりの削平を受けており全容を知り得ないが、1ヶ所だけ計測可能な東辺は3.6mを測る。主柱穴は確認できないが、屋内土壌を一基検



第118图 35号住居跡・屋内土壌実測図 (1/60・1/30)



第119图 35号住居跡出土土器実測図 (1/4)

出している。遺物は土器がその土壌と床面より少量出土しただけである。

出土土器（図版63図、第119図）

甕(1・2) 1は復原口径24.0cmを測る。厚い頸部が「く」字に折れそのまま端部へ至る。胴部は直ぐのびる。外面には縦位のハケ目調整。2は口径8.9cm、器高14.1cm、底径4.6cmを測る。口縁は緩やかに立ち上がり端部は少し内彎する。胴部下半は削りのちナデ調整。

椀(3) 3は口径10cm、器高4.9cmを測る。内外面共にナデによる調整。2と共に屋内土壌1より出土した。

これ等の遺物の観察結果から遺構の時期は、弥生時代後期後葉であろう。

36号住居跡（図版38-2、第120図）

A区北部に位置し、A-1号・2号溝に切られている。4.2m×4.0mの隅円方形プランで、床面積は約17.7㎡を測る。北辺に張り出し部を持ち、張り出し部は床面より一段高く、地山削り出しのベット状遺構が設けられている。

床面中央に炉、その南北に2つの支柱穴がある。壁は32cm程残っており、支柱穴の深さは26cm～34cm。東辺中央には屋内土壌がある。周溝は床面と張り出し部に部分的に検出された。

出土遺物（図版63、第121、122図）

壺(1～5) 1・2は長頸壺で赤色顔料が塗られている。3は大型壺の胴部で胴下位に最大径を持つ下膨れの器形で、胴中位の粘土積み上げ部に断面略三角形の突帯を貼り付けている。4・5は壺の底部で、4は小さな平底をもつ外来系のものであり、5は凸レンズ気味である。

甕(6～11) 6・7は小型甕で、7は胴部が膨らみ、器高が低いタイプと思われる。8・9は中型甕で、8は内面にナデが多用されており作りが悪い。9は口唇部が平坦になっており、外面はナデのみ、内面は細かいハケ目が施されている。色調は赤褐色で他のものと異なる。10・11は底部で、10は平底、11は凸レンズ状を呈する。

高杯(12) 12は高杯の口縁部で、瀬戸内系と豊前系の折衷的形態である。

鉢(13～15) 13～15は鉢で、13は単口縁、14は大きく外反する口縁をもつタイプで、15は口縁部が歪んでおり、逆L字状を呈する部分と「く」の字状の部分がある。完形だが上位から出土しており、混入品と思われる。

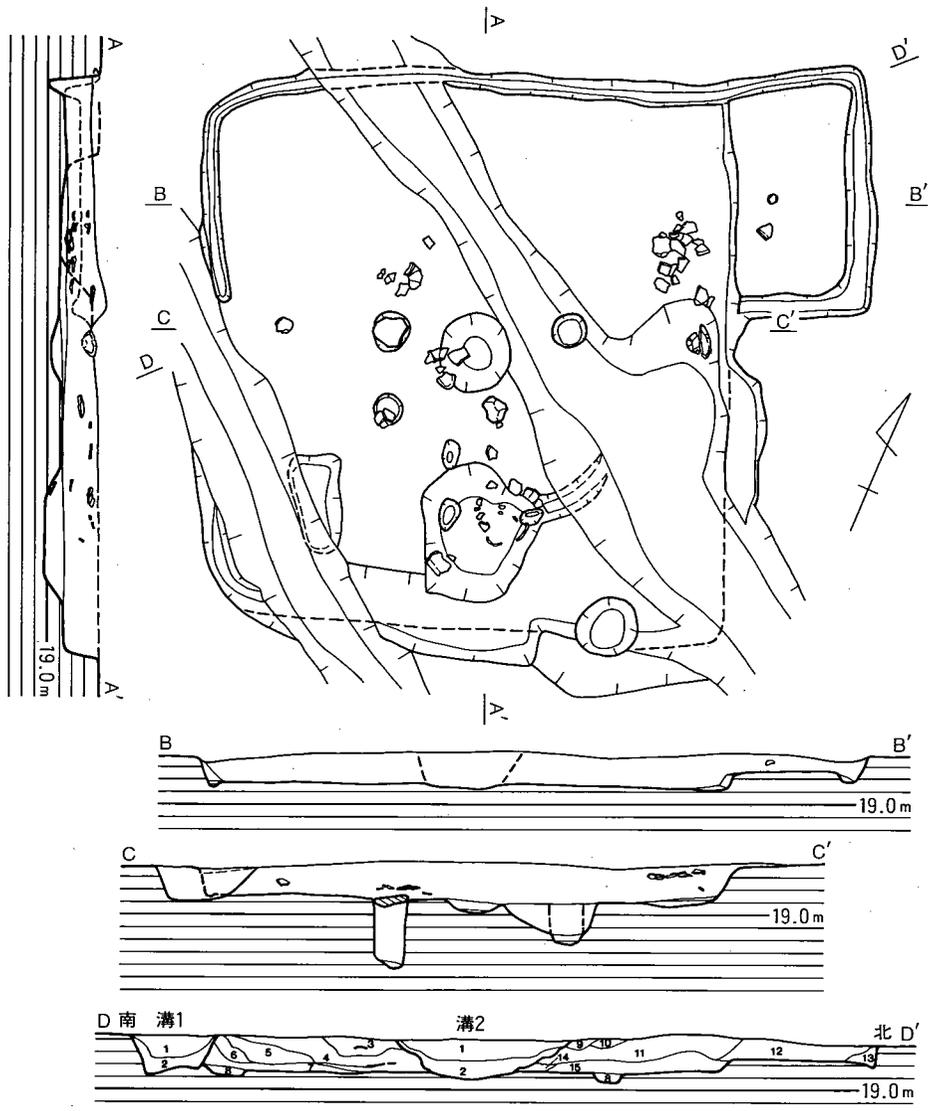
器台(16) 16は鼓形器台の胴部で、胴中位がくびれるタイプである。

手捏土器(17) 17は手捏土器である。

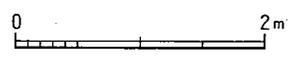
遺構の時期は出土遺物から、弥生後期中葉と考えられる。

37号住居跡（図版39-1、第123図）

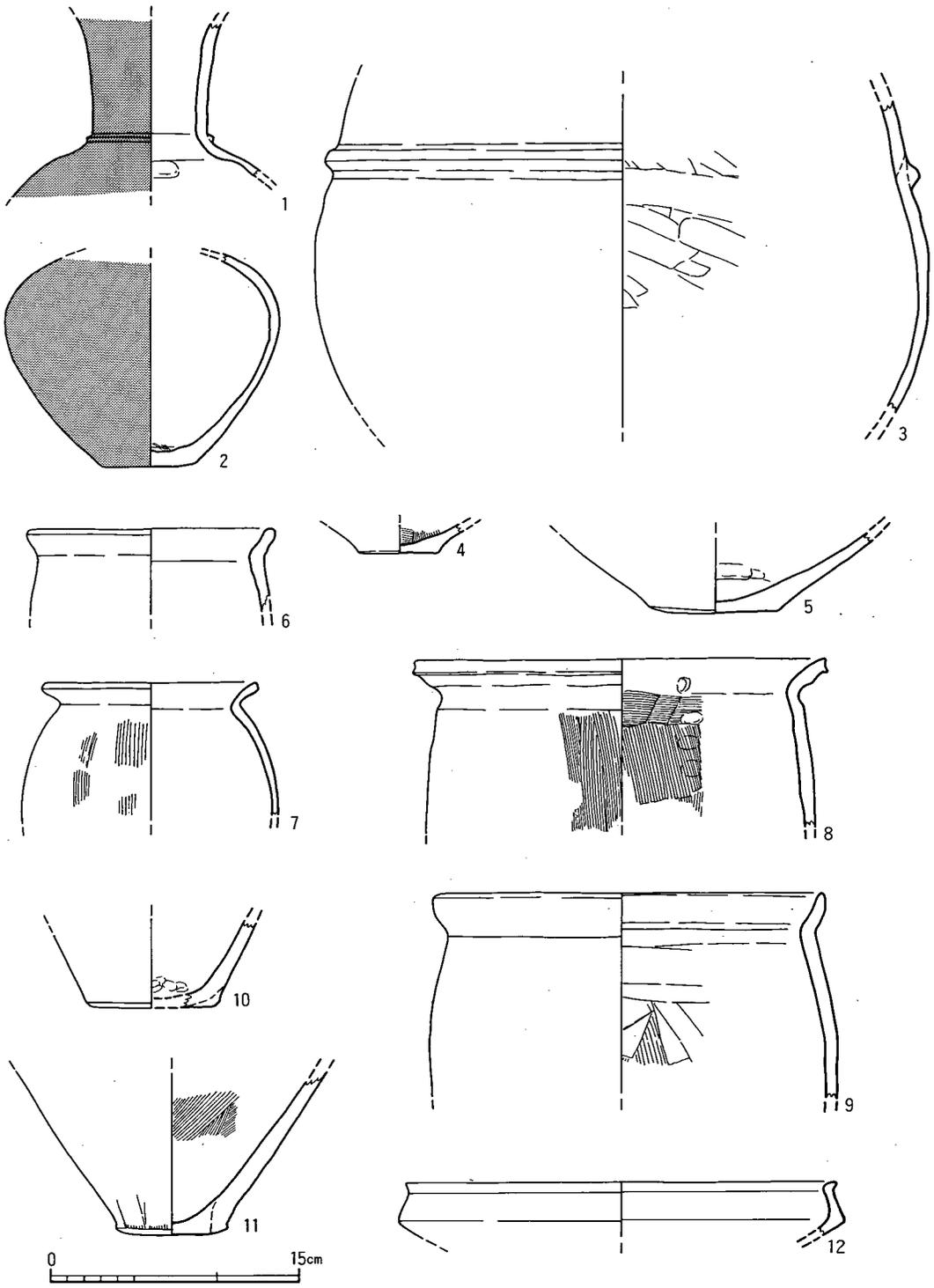
A区北端に位置し、南半分だけ検出された4.62m×2.84m以上の隅円方形住居で、床面積は



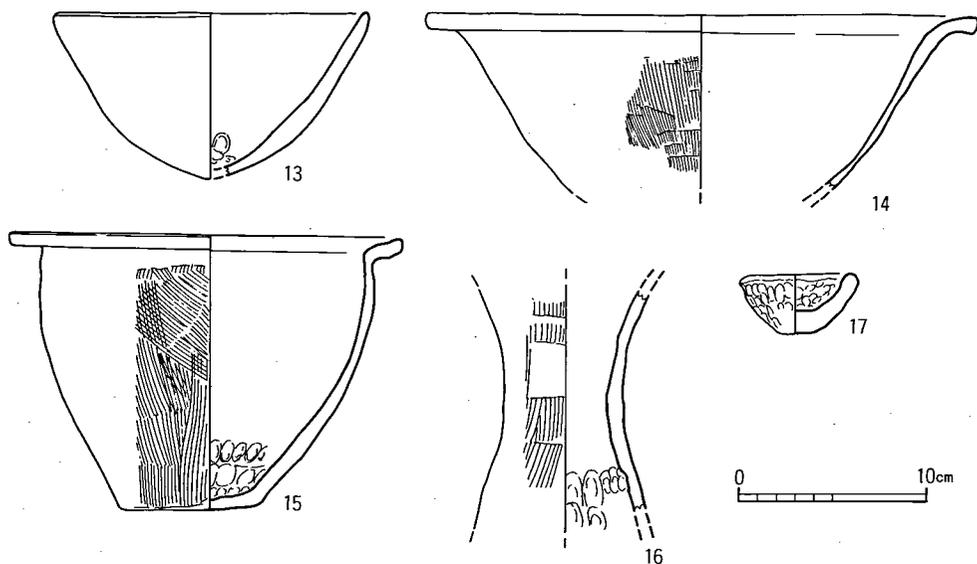
- | | | |
|-----------|------------|---------------------|
| 1. 黒色土 | 6. 暗茶色土 | 11. 暗茶褐色土 |
| 2. 暗黄茶褐色土 | 7. 黒色土 | 12. 暗茶色土 |
| 3. 暗こげ茶色 | 8. 暗茶褐色土 | 13. 暗茶褐色土 |
| 4. 暗茶褐色土 | 9. 暗こげ茶色土 | 14. 暗茶褐色土(4層よりやや暗い) |
| 5. 黒色土 | 10. 暗こげ茶色土 | 15. 暗こげ茶色土 |



第120図 36号住居跡実測図 (1/60)



第121图 36号住居跡出土土器実測图① (1/4)



第122図 36号住居跡出土土器実測図② (1/4)

残存部で約10.9㎡を測る。炉・支柱穴は不明確であった。南壁に接して屋内土壌状のものがある。壁は26cm残っており、貼床は他の住居に比べて厚く、黄色土と黒縁色土が交互に重ねられていた。

貼床の下には、壁に沿って幅45~56cm、床面からの深さ約20cmの溝があったが、これは周溝にしては幅が広く、貼床の下にあることから水抜き施設と考えられる。これらの他の住居跡に無い特徴は、本住居跡が集落の北端の泥湿地帯に近い場所にあることから、防水のためのものと思われる。

出土遺物 (第124図)

壺(1・2) 1は瀬戸内系の単口縁壺の口縁部で、擬凹線が消滅した段階のものとみられる。2は丹塗長頸壺の胴部で断面略三角形の貼付突帯をもつ。

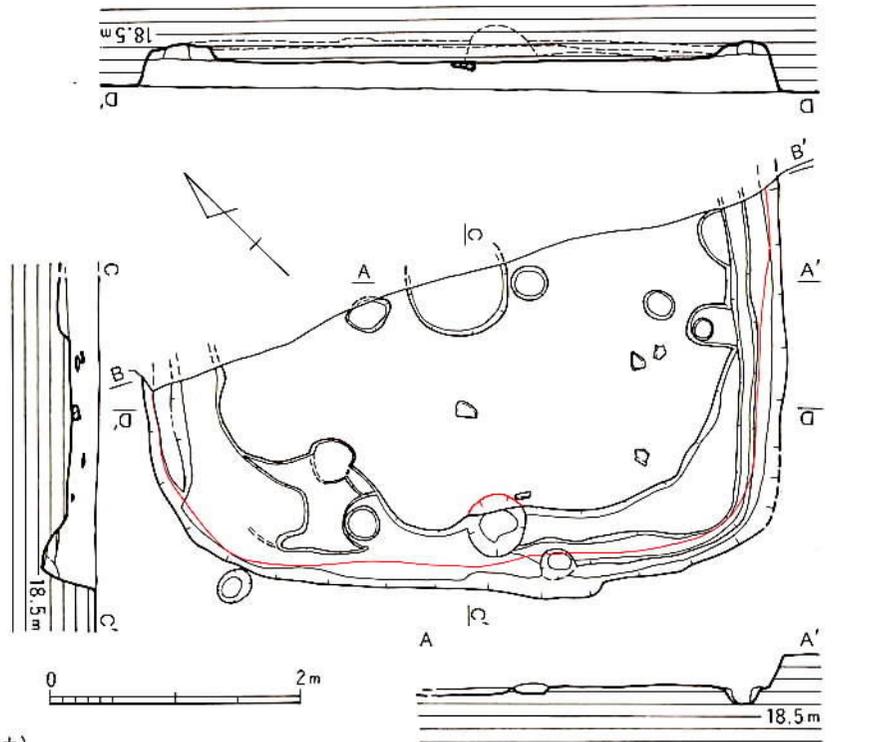
甕(3~5) 3・4は甕の口縁部、5は甕か壺の底部であり、平底を呈す。

鉢(6・7) 6は瀬戸内系の鉢の口縁部で、擬凹線が退化し沈線化している。7は鉢の底部と思われる、平底を呈する。

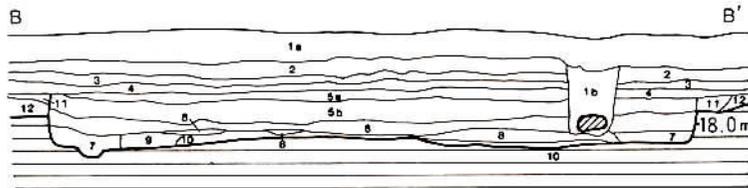
高杯(8) 8は小型の高杯の杯部と思われ、器壁が厚く作りが悪い。

脚付鉢(9) 9は脚付鉢の脚部と思われる。

遺構の時期は出土遺物から、弥生後期中葉~後葉と考えられる。



- 1a. 青灰色砂層(表土)
- 1b. 黒褐色と灰色砂層の混和層(暗渠埋め土)
- 2. 黄灰色砂層
- 3. 明黄灰色砂層
- 4. 暗黄灰色粘土層
- 5a. 黒褐色粘土層
- 5b. 暗黒褐色粘土層
- 6. 暗黒灰色粘土層
- 7. 暗黒褐色粘土層
- 8. 明黄褐色粘土層
- 9. 暗黒灰色粘土層
- 10. 暗黒褐色粘土層
- 11. 暗黒褐色粘土層
- 12. 暗褐色粘土層(地山漸移層)



第123図 37号住居跡実測図 (1/60)

(2) 掘立柱建物

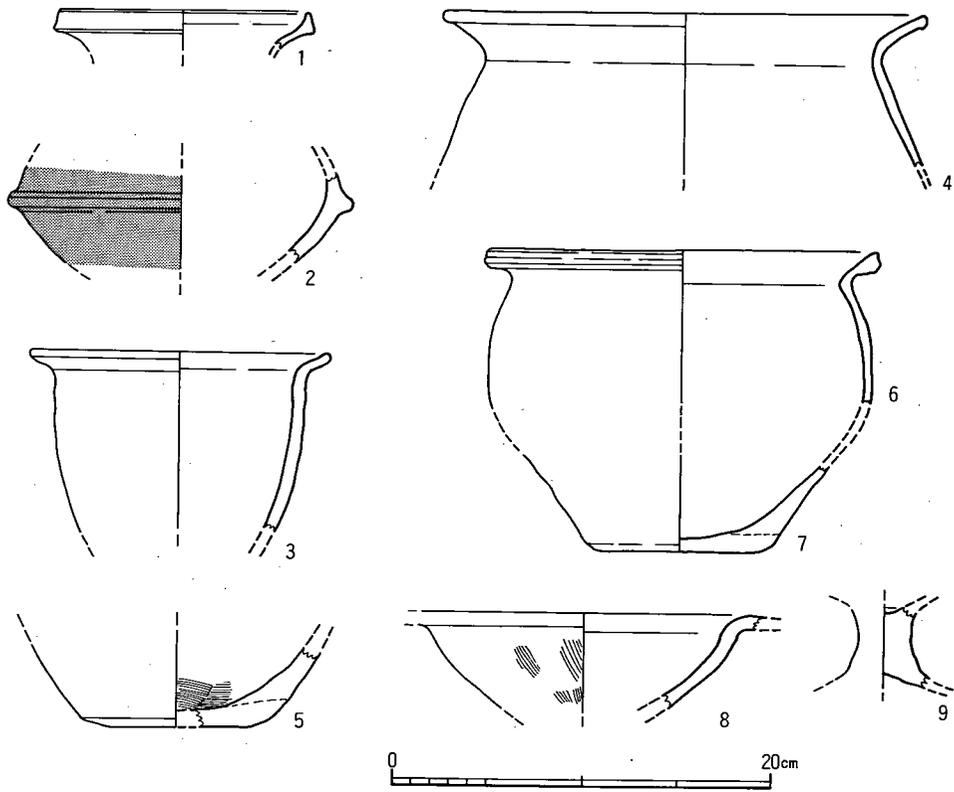
8号掘立柱建物跡 (第125図)

調査区中央西寄りで検出された、1間×2間の建物で、主軸をN28°Eにとる。床面積は約14.8m²を測る。柱穴径は約50cm~70cmに収まる。1より弥生土器が1点出土しているが磨滅しており時期は決定できない。

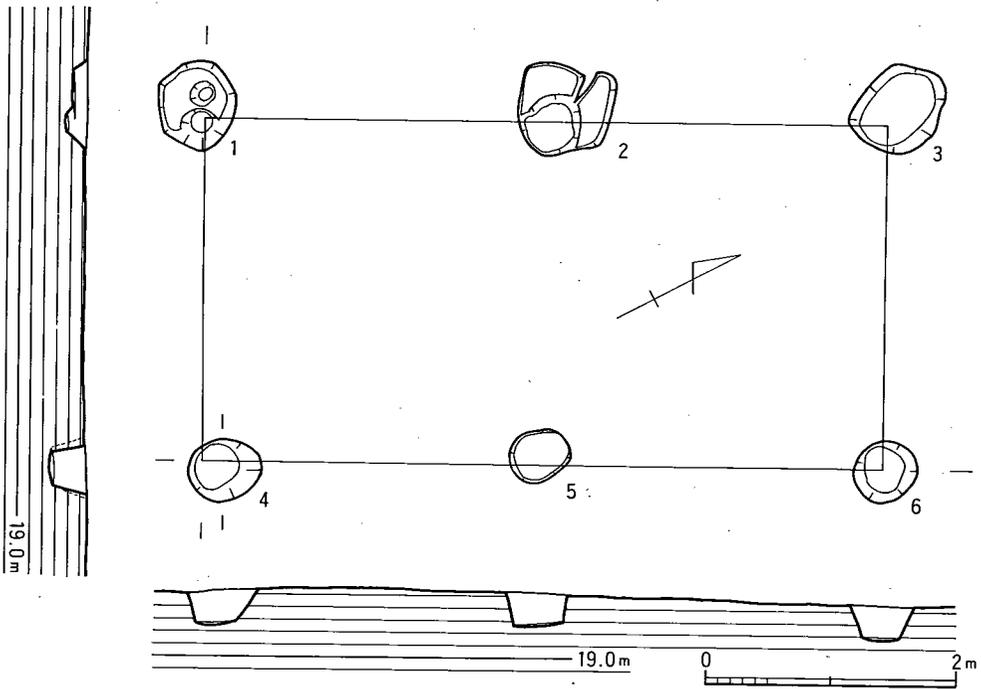
9号掘立柱建物跡 (図版39-2、第126図)

2間×3間の建物で、主軸をN83°Eにとり、梁行2.0m、桁行4.4mで、床面積は約8.8m²を測る。柱間距離は芯々で約1.5mで、柱穴径は約22cm~50cmと小さい。

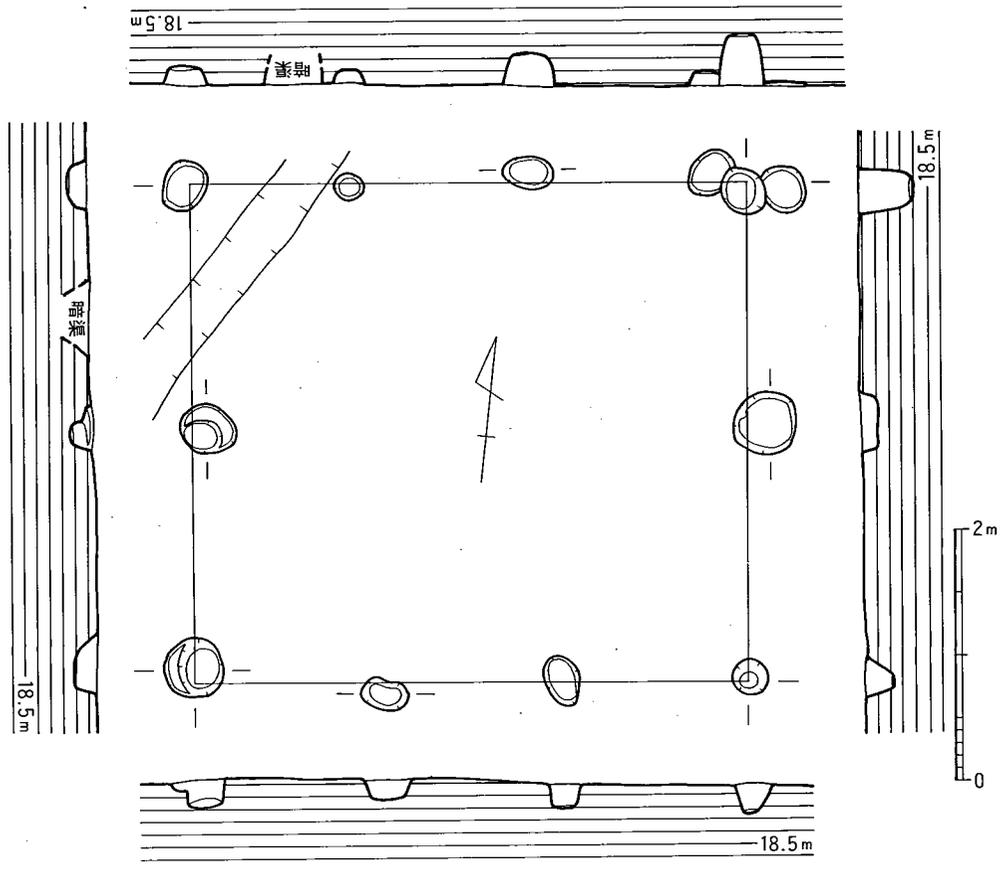
遺物を出土する柱穴が無いので時期を特定できない。



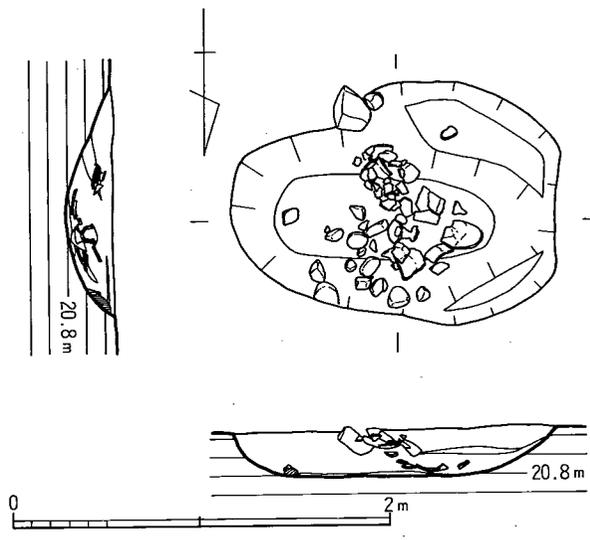
第124图 37号住居跡出土土器実測図 (1/4)



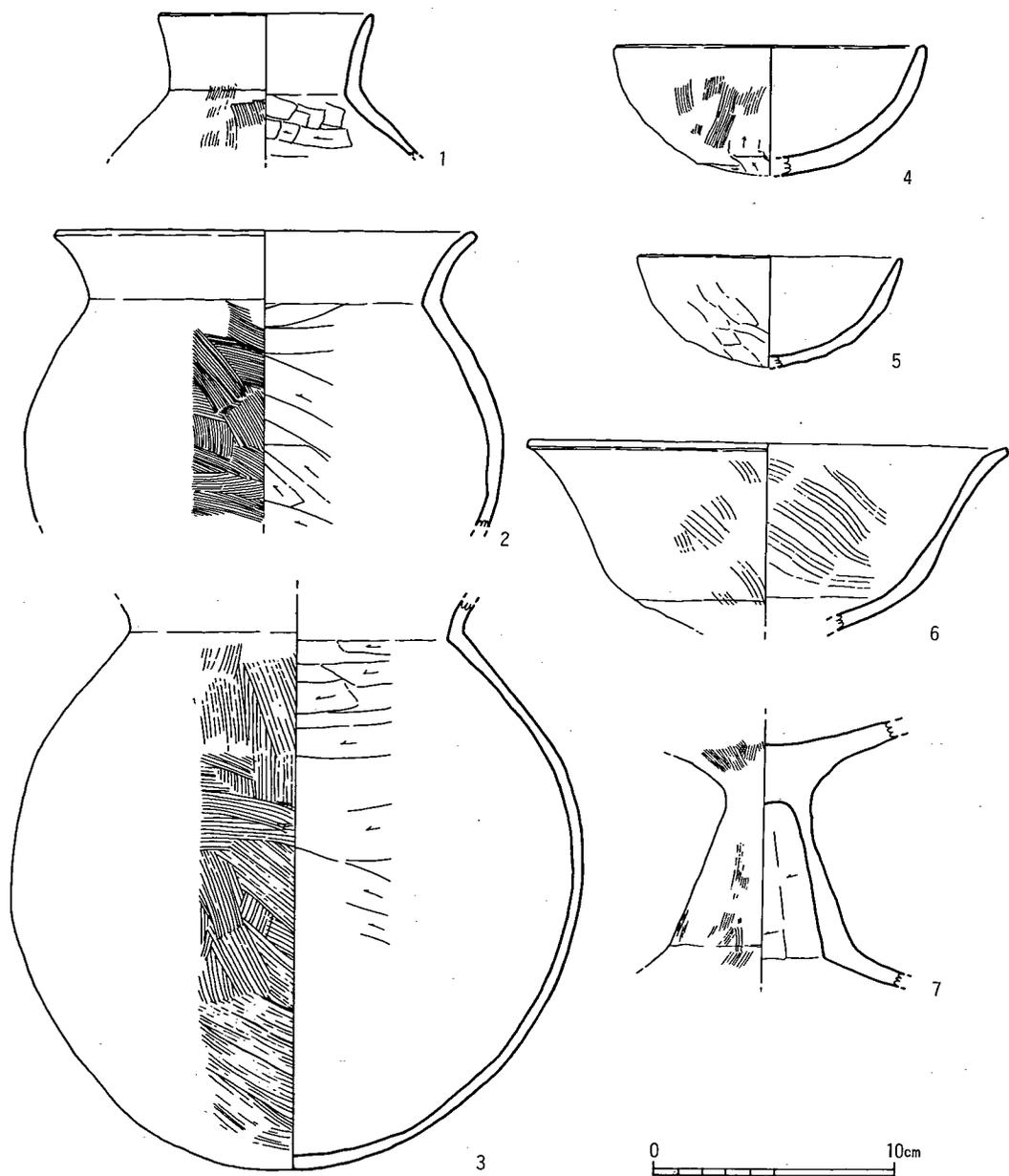
第125图 8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



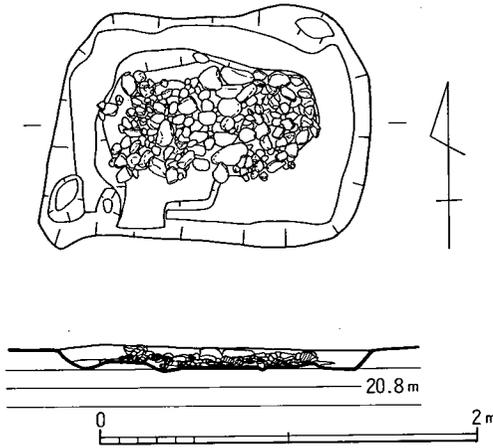
第126图 9号掘立柱建物跡実測图 (1/60)



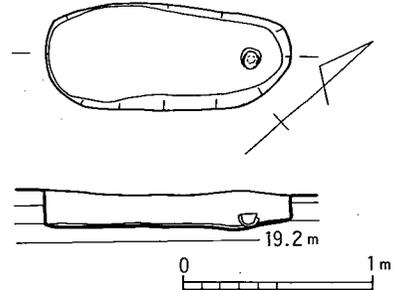
第127图 3号土坑实测图 (1/40)



第128图 3号土坑出土土器实测图 (1/3)



第129図 4号土壌実測図 (1/40)



第130図 5号土壌実測図 (1/40)

(3) 土 壌

3号土壌 (図版40-1、第127図)

調査区南端において検出された。上縁長軸1.72m、端軸1.24mで最深25cmを測る。主軸方位はN88° Eである。埋土中より土師器が出土している。

出土土器 (図版63、第128図)

壺(1) 1は復原口径9.0cmを測る。口縁は頸部より直線的に立ち上がる。内面頸部下削り。

甕(2・3) 2は復原口径17.6cmを測る。口縁部は頸部より「く」字に折れて、そのまま外反しながら端部に至る。暗黄茶褐色、赤褐色に焼成されている。3は口縁端部を欠損する。しかし、頸部が折れ反る状況は確認できる。胴部最大径23.8cmを測る。

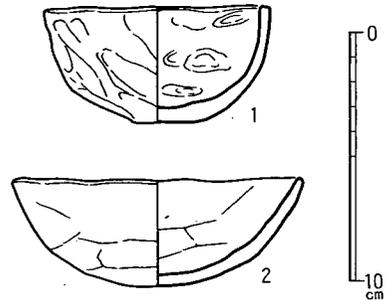
椀(4・5) 4は復原口径13.0cmを測る。口縁は緩やかに内彎する。外面は胴部ナデ、底面削り。淡橙褐色、白黄褐色に焼成されている。5は復原口径11.0cm、器高4.60cmを測る。外面は削りのちナデ調整。黒色～茶色に焼成されている。

高杯(6・7) 6は復原口径20.0cmを測る。口縁は端部に向うにつれ肥厚し外反する。内外面ハケ目のちナデ。7の柱部外面はハケ目のちナデ、内面は削りで裾部からはナデ調整。

これ等の出土遺物より、遺構の時期は5世紀前～中葉位であろう。

4号土壌 (図版40-2、第129図)

調査区南端、3号土壌の西で検出された。土壌内は礫が一定のレベルで敷きつめられており、



第131図 5号土壌出土土器実測図 (1/3)

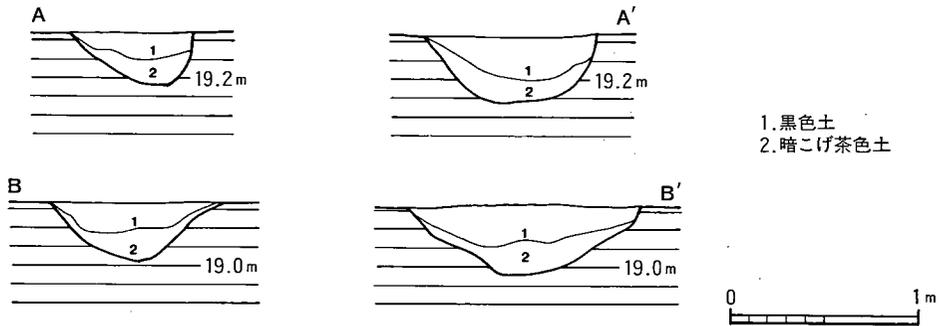
墓の可能性も考えられる。上縁長軸1.72m、短軸1.2m、最深10cmを測る。主軸方位はN88° Eである。3号土壌と同じ方位軸をとっている。遺物は出土しなかった。

5号土壌（図版41-1、第130図）

調査区中央付近で検出された。長方楕円形に近いプランを呈している。北端に土器が重ねられた状態で出土しており墓の可能性もある。上縁長軸1.3m、短軸58cm、最深20cmを測る。主軸方位はN40° Eである。

出土遺物（図版63、第131図）

椀(1・2) 1は口径8.90cm、器高4.60cmを測る。椀状を呈している。内外面共にナデ調整、色調は黒褐色。2は口径11.3cm、器高4.20cmを測る。色調は黄褐色～赤色である。



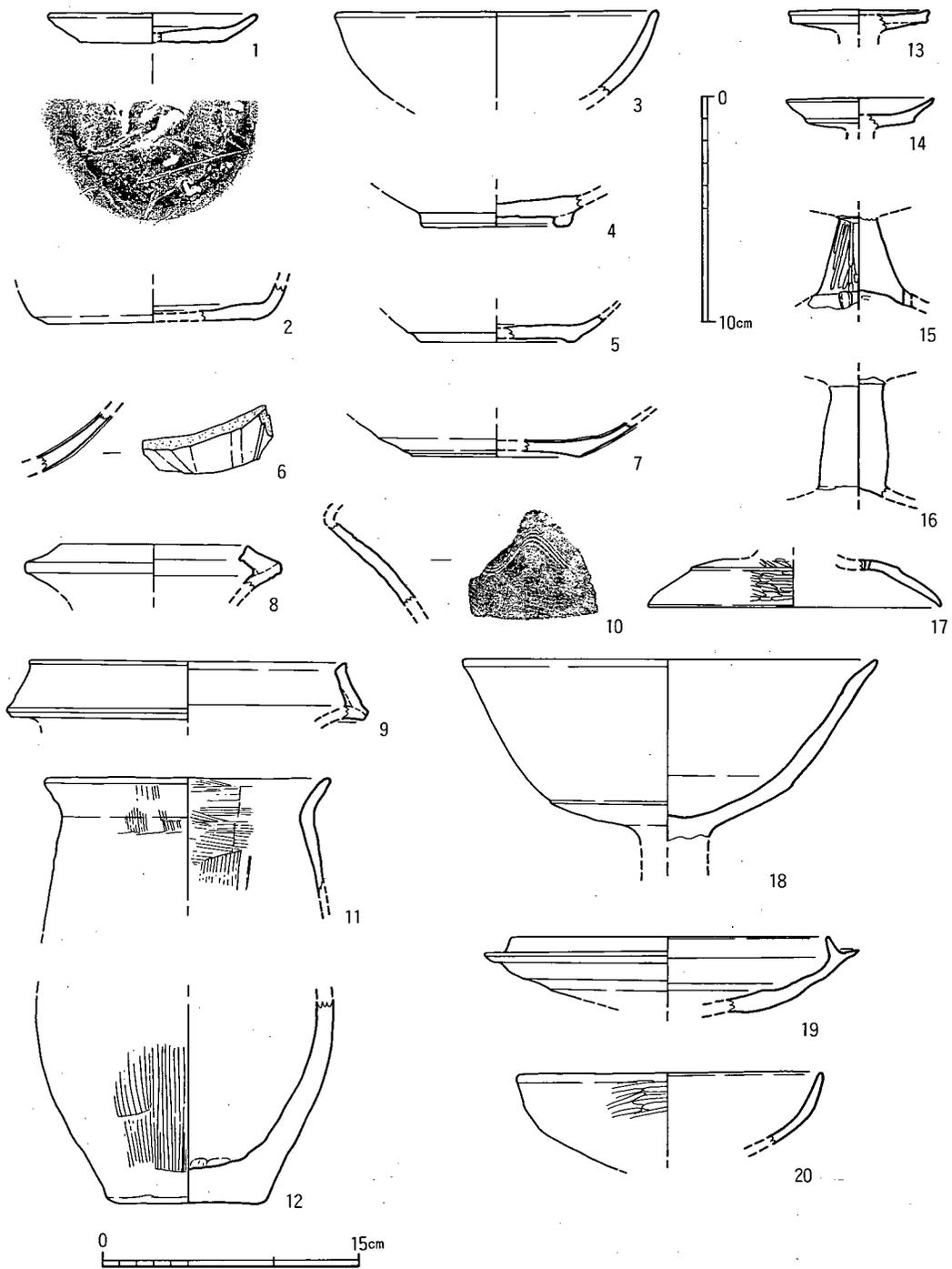
第132図 A-1・2号溝土層断面図 (1/40)

(4) 溝状遺構

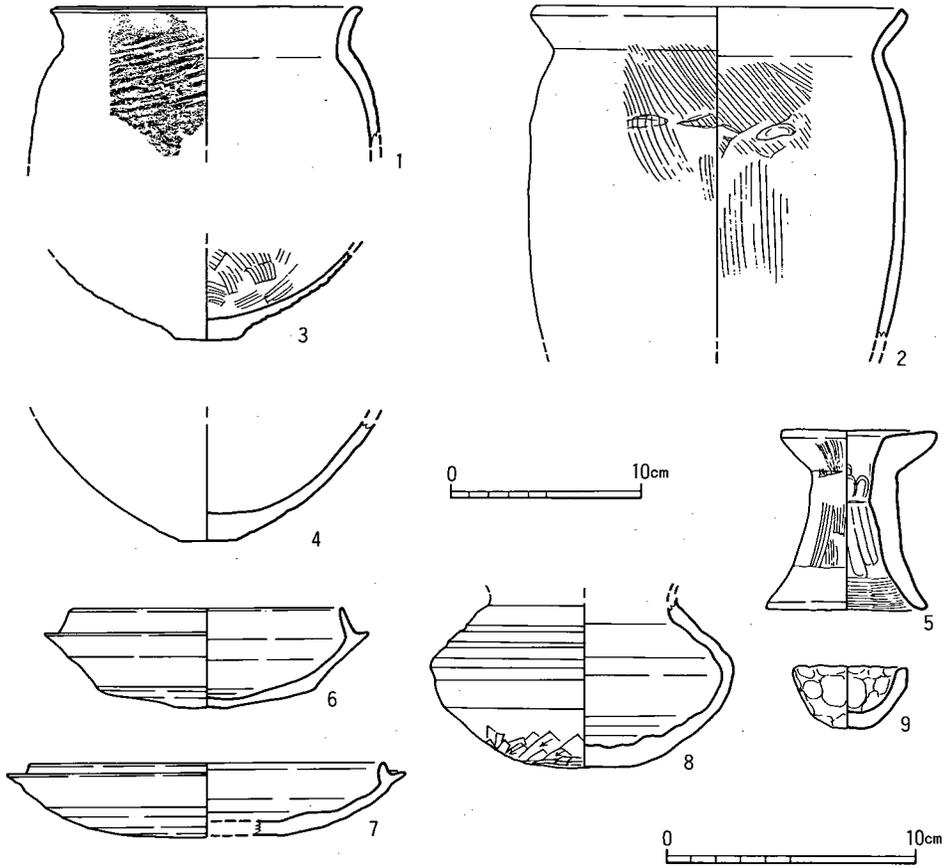
A-1・2号溝（第74・132図）

A地区中央部に、2条の溝が約0.9m～2.1mを隔てて東西に併走している。幅約0.6m～1.2m、深さ約20～42cmで、壁の立ち上がりは急である。西側で見られる南方への湾曲は、旧地形に合わせたものと思われ、現在の水路も同じように湾曲している。集落の中心部が立地する微高地の周縁に沿って掘られていたものと思われる。

溝の底は東に向かって下がっており、水はスムーズに流れていたようだ。溝の走る方向が現行の水路と同じであることから、この溝は用水路と考えられる。また、間隔を意識していることから、どちらかが掘り直したのではなく、同時期に機能していたと思われる。本遺構の出土遺物には混入品が多いため、遺構の時期が明確でないが、他の遺構からは出土していない12世紀前半代の遺物群が本遺構に伴うと思われる。



第133图 A-1号沟出土土器 (1/4)



第134図 A-2号溝出土土器（1～5は1/4・6～9は1/2）

A-1号溝出土遺物（第133図）

1・2は土師器の皿で、1は底部は回転ヘラ切りで、口径9.2cm、器高1.2cmを測る。2は底径9.0cmで灰白色を呈する。

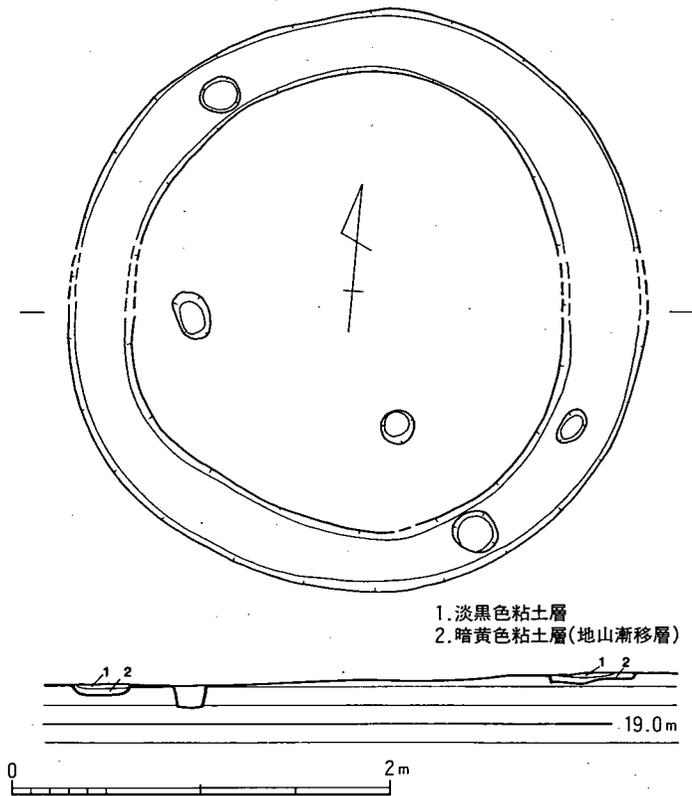
3～5は瓦器碗である。3は口縁部で、内外に丁寧なミガキが入り、口径14.2cmを測る。4・5は底部で高台は断面方形である。

6は龍泉窯系の鎗蓮弁文碗の胴部で、7は白磁皿の底部で、外底は露胎で、内面に界線が入る。

8・9は複合口縁壺の口縁部で、ともに口唇部が平坦で外傾する。

10は布留系甕の肩部片で、波状文が入る。

11・12は中型甕で、11は内外とも丁寧にハケ目が施されている。12は内面にナデが多用され



第135図 2号円形周溝実測図 (1/40)

ており、底部が分厚く作りが悪い。

13～15は器台で、15は外面にミガキが入る。16・17は東瀬戸内系高杯の柱状脚と据部であり、裾部外面には丁寧なミガキが入る。

18は布留系高杯である。

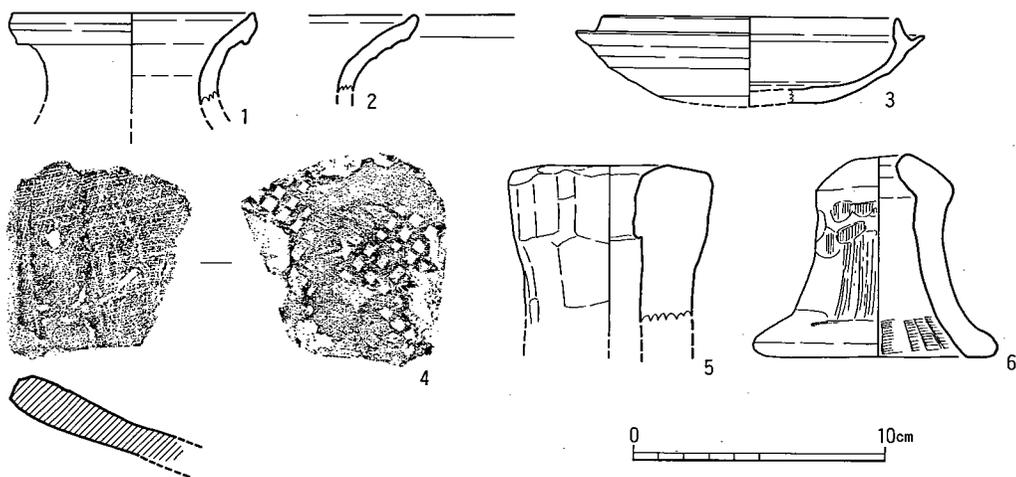
19は須恵器の椀で、口径12.5cmを測る。20は土師器の椀で、外面にミガキが入り、口径は12.5cmを測る。

A-2号溝出土遺物 (図版64、第134図)

1・2は中型甕で、1は直立気味の口縁とやや外反する口唇部をもち、口縁部にまで叩きが入っている。2は口唇部の先端が尖るもので調整はハケ目のみである。3・4は甕か壺の底部で、小さな平底をもち、その周りに叩きが施されることから外来系のものである。

5は鼓形かあるいは靴形器台である。1から5はいずれも弥生時代終末の遺物である。

6・7は須恵器の杯で、6は口径10.8cm、器高は3.9cm、7は口径14.2cm、器高は2.9cmであ



第136図 官道側溝出土遺物 (1/3)

る。8は須恵器の埴で底部に手持ちヘラ削りが見られる。

9はミニチュア土器である。

A-3号溝 (第74図)

A地区北東端部に位置している。調査区東壁から南西に延び、南端は足跡群の集中する黒色土帯に接している。幅約15cm～30cm・深さ約20cmと小溝で、37号住居跡に伴う可能性もあるが、湿地帯の水を流したものと考えたい。

出土遺物はほとんど無く、時期は特定できない。

(5) 2号円形周溝 (図版41-2、第135図)

A地区西端に位置し、2号溝の南側に近接している。平面形は正円に近く、周溝の外縁で径約3mを測る。溝自体は幅32cm～45cm・深さ約20cmと残りが悪く、時期を特定する遺物も出土していない。

弥生時代後期に見られる周溝状遺構と比較すると規模が小さく、平面形も正円に近すぎるので、これと同類とは考えにくい。A-1・2号溝に伴う祭祀的な施設の可能性を挙げておきたい。

(6) 道路状遺構 (第74図・付図2)

東西方向に直線的に併走する2本の溝が、A区北端をおよそ60mに渡って横断しており、この2条の溝と溝の間に、約20mにわたって礫石混じりの硬化面が見られた。このことから、これは2本の溝を側溝とする「道路状遺構」と考えられる。

「道路状遺構」の東半分は、削平のため残りが悪く、西半分も近世の石組暗渠や現代の水田

側溝と耕作機械の轍に切られている。

側溝と側溝の間の幅で6.1~6.9mを測り、想定される道路幅は6mである。

この道路上に検出された礫石混じりの硬化面は、径1~2cmの小礫が硬化した土層中に埋め込まれて検出されており、小礫の無い硬化面のみの部分では、小礫が外れた窪みがあることから、往来の結果硬化したのではなく、道路幅全面に人為的に叩き締められたものと考えられた。

こうした礫石混じりの硬化面は、路面そのものと盛土工法の下部構造の二つの可能性がある。これまでの調査例では、同様な硬化面に対して、路面と判断していることが多いが、ここでは下部構造と考えたい。

その理由としては、まず検出面が地表から約30cmほどしかなく、側溝も浅いことから、削平を受けている可能性が高いことが挙げられる。次に、後で足跡の項で詳しく述べるが、道路状遺構は泥湿地帯を通過しており、硬化土層はわずか5cm程の厚さなのでこのような浅い側溝では浸水を防ぐことはできないと思われる。さらに、検出された硬化面は非常に均一で、轍などの通行の影響が見られなかった。もちろん硬化面上に遺物はまったく無かった。

したがって、この硬化面は脆弱な地盤を強化するために用いられた盛土工法の下部構造と思われる。ただし、盛土工法はそれほど本格的なものではなく、本来の路面はもう少し高い程度であったらしい。なぜなら、硬化面が側溝内にもわずかながら及んでおり、これは側溝が埋った後、側溝上も道路として使われたことを示している。つまり、路面の高さは側溝の埋った部分の高さと大きく変わらない程度であったといえる。

溝の平面プランは、残りの悪い東側は直線的だが、西側は凹凸が激しい。道路側は直線的だが、外側が著しい。床面も道路側は深く立ち上がりも急だが、外側は緩やかで不整形な窪みがいたるところに見られた。これは溝が外側から何度も掘り直された結果であり、不整形な窪みは鋤先などの掘削痕と思われる。

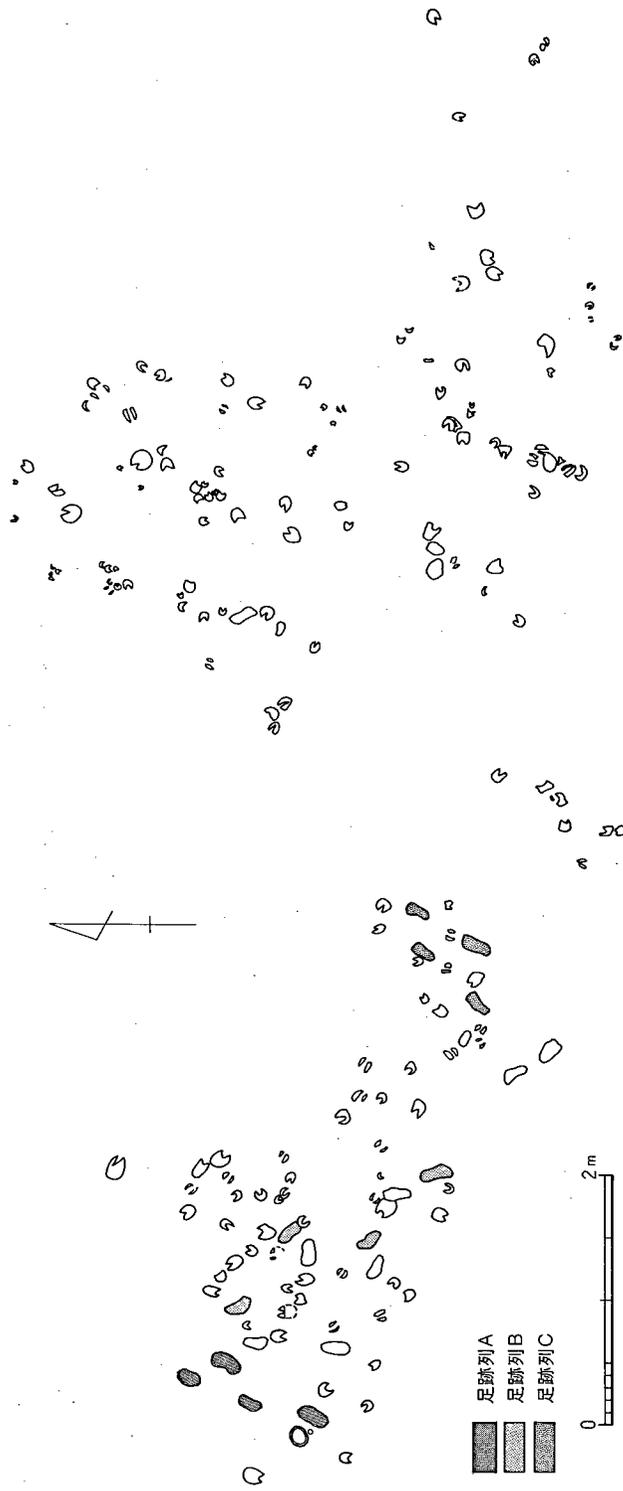
溝の幅は残りの良いところで約1.8m、深さは21.5cmだが、平均的には幅1m、深さ30cm程しかない。

溝の底は西に向かって下がっているが、水が流れることを意図したものとは思われない。

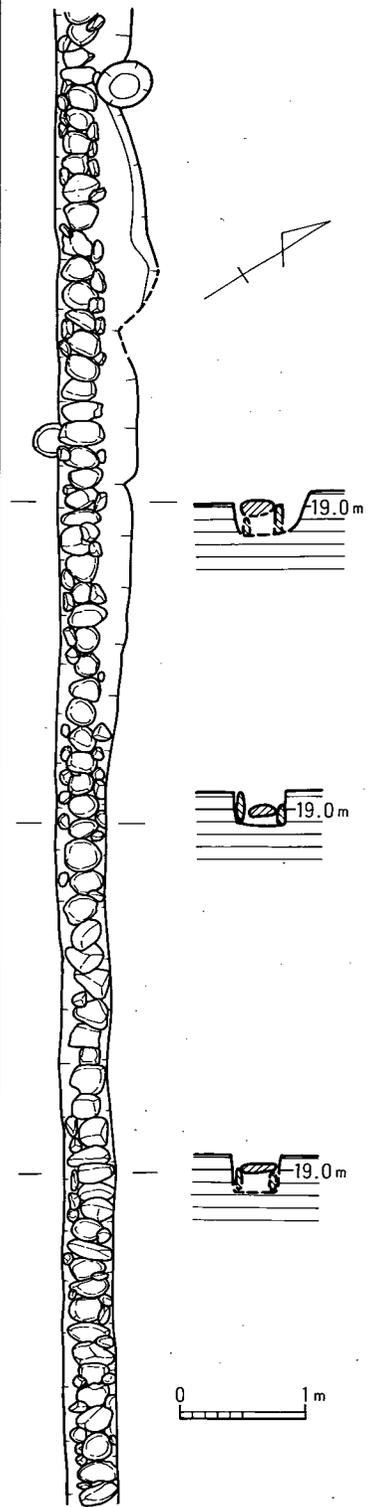
官道側溝出土遺物 (図版64、第136図)

1・2は須恵器の壺の口縁部で、1は口径11.8cmを測る。3は須恵器の杯で口径11.8cmを測る。4は平瓦片で、凸面には格子目文の叩きが入り、凹面に布目と模骨痕が見られる。5はフイゴの羽口で焼けて赤化している。

6は弥生時代末の器台で、混入したものである。



第137图 足跡群実測図 (1/60)



第138图 石組暗渠実測図 (1/60)

(7) 足跡群 (図版42、第137図)

足跡群はA地区北端部の一定範囲と道路状遺構の硬化面下に見られた。足跡の集中する範囲は不整形の黒色土の分布範囲であり、そこには足跡群とともに草の踏み込まれた痕跡があった。

足跡には、人のものよりも動物の足跡の方が多く、動物の足跡にはイノシシ・ウシ・ウマがあるものと思われる。ウシが最も多く、大きさはさまざまであるが、足跡の長さで大きく大中小の3種類に分けられる。大は約25cm、中は約20cm、小は約10cmで成体の大小と幼体の存在を示すものと考えられる。

次に多いのはイノシシだがやはり大きさの大小がある。

ウマの足跡は少ないこともあって大きさにそれほどの差がない。

足跡は密集度が高い上に、検出が難しかったため単位を捉えることはほとんどできなかったが、人の足跡列が3列確認できた。

A列は、足の長さが約24.5cmの人物が、北北東に4歩歩いたもので、泥湿地を避けようとしたのか端を通っている。歩幅は67~108cmで、最初の一步が長く、大股で泥湿地から出ようとしたものと考えられる。2・3歩目は足を取られたのか小刻みになっている。

B列は、足の長さが約25.0cmの人物が、南東に4歩歩いており、泥湿地の中央を通っている。歩幅は129~150cmとかなりの大股であることから走っていた可能性もある。

C列は、足の長さが約22.0cmの人物が、北東に4歩歩いたもので、A列と同じく端を通っている。歩幅は70~90cmで内股気味のようだ。

動物の足跡の単位がわからないことから、人に引かれて通ったものではないと思われる。また、農作業に従事しない子ウシの存在や、イノシシの足跡の多さ、足跡の分布の不均一さからみて、水場やヌタ場として使われた池か沼であったと想定できる。

足跡のついた時期を特定することはできないが、道路状遺構の硬化面下に見られることから、道路敷設以前のものが含まれることはまちがいない。

石組暗渠 (図版39、第138図)

石組暗渠はC区北西部にあり、調査区西端から南東方向に走り、中央で止まるものと、これから派生して北東に直交するものの2本がある。

暗渠の構造は、幅約40cmの掘り方内の両側に、大きさの均一な河原石を立て並べて側壁とし、これにやや大きめの石を蓋にして被せている。

暗渠の方向は、現在の水田区画と一致しており、水の流れる方向も西から東、南から北方向である。

暗渠が北西部に限って設置されているのは、この区域の土壌が他の場所と異なるためと思わ

れる。つまり、暗渠の設置された範囲は足跡が分布する場所でもあることから、以前は泥湿地であっただろう。そのままでは湿潤過ぎて水田内の水干ができないので、水田化する際に排水の目的で設置されたのだろう。

時期は近世から近代のものと思われるが、この暗渠は現在も使用されているという。

(8) その他の遺物

A地区出土石器 (図版65-2・3、第135図)

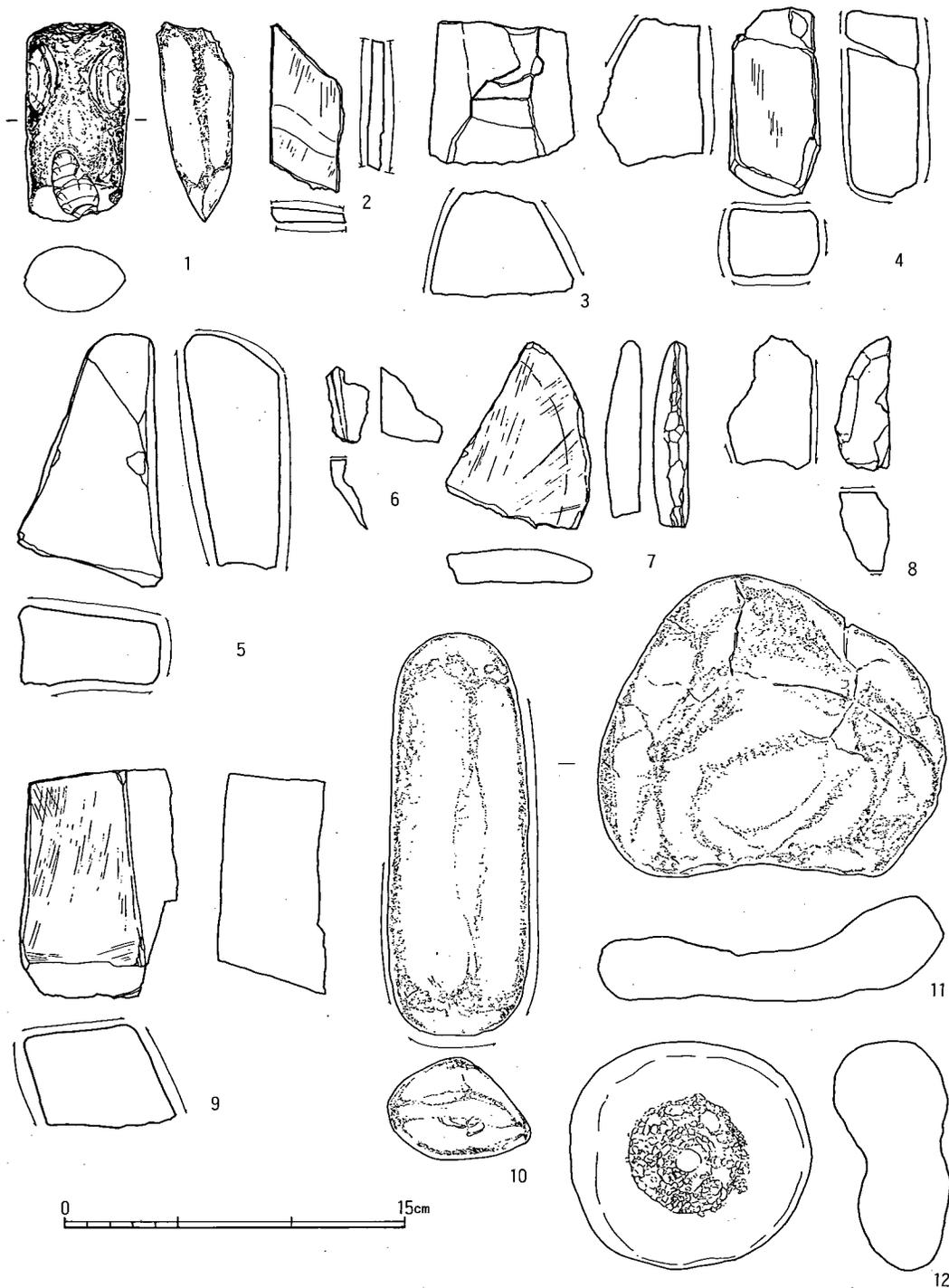
磨製石斧(1) 1は3号土壌より出土した。両刃の磨製石斧である。全体に面が風化して剥落しており研磨面はほとんど残っていない。残存計測値は長さ9.35cm、幅4.25cm、厚さ3.50cm、重190gを測る。安山岩製。

砥石(2~9) 2は採集資料で砥面は4面ある。22.3g、粘板岩製。3は29号住居跡より出土した。砥面は4面あり全て砥面同志でつながる。重さ260g、硬質凝灰岩製。4は23号住居跡より出土した。砥面は4面あったのだろう。磨滅著しい。重さ135g、砂岩製か。5は36号住居跡より出土した。砥面は3面ある。重さ350g、凝灰岩製。6は溝1出土、重さ13gで砂岩製。7は官道側溝より出土した。確実な砥面は一面である。重さ99g、砂岩製。8は溝1出土で重さ50g、砂岩製。9は29号住居跡より出土。確実な砥面は3面で一部節理面にまで及ぶ。重さ480g、硬質砂岩製。

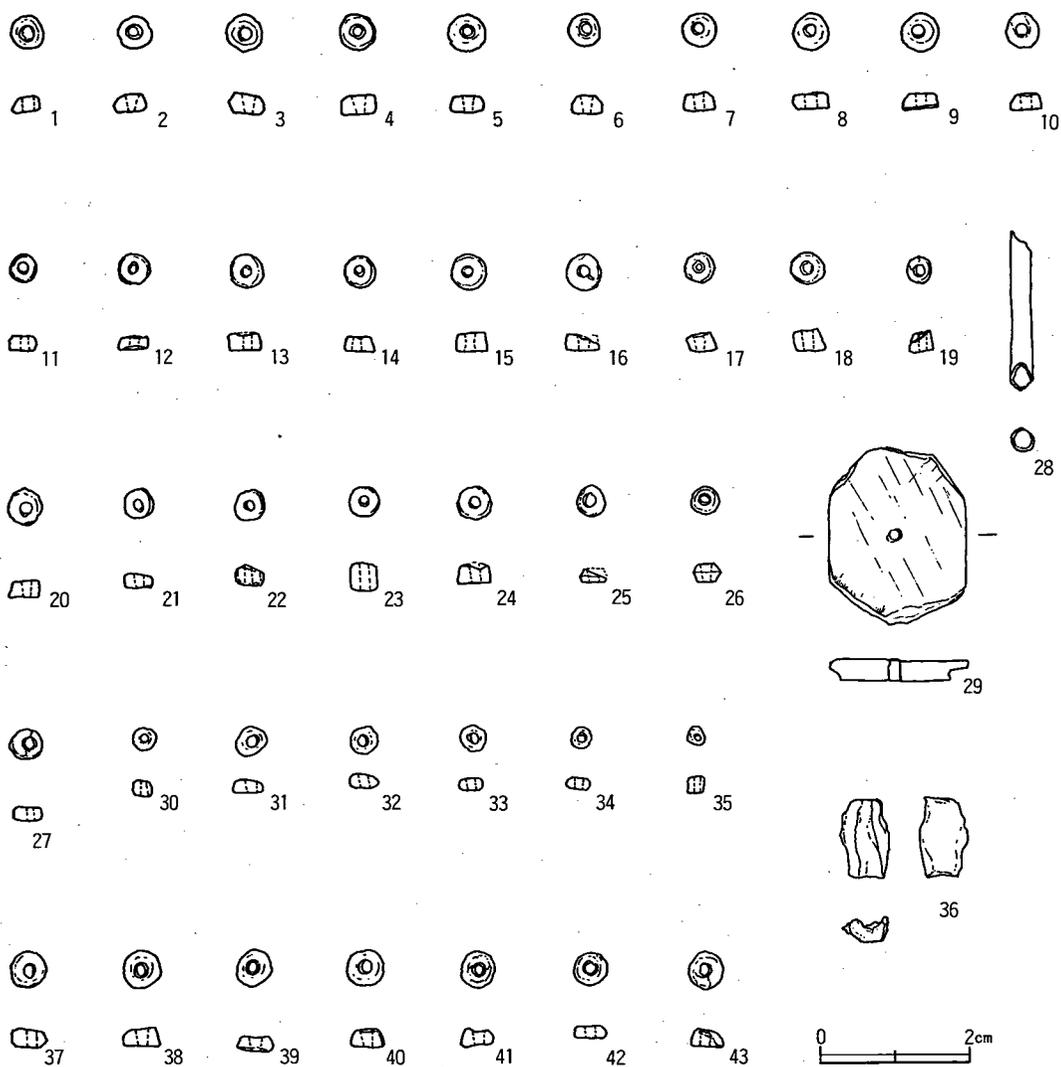
その他の石器(10~12) 10は柱状を呈するが器種不明。参考までに提示した。11は36号住居跡より出土した。作業台石であろうか、中央部が窪んでいる。重さ1015g、凝灰岩製?。12は25号住居跡より出土した凹石である。表裏面に凹部がある。重さ638g、凝灰岩製。



スナップ：官道路面剥ぎ取り作業



第139图 A地区出土土器实测图 (1/3)



第140図 A地区出土玉類実測図(実大)

A地区出土玉類 (図版64、第140図)

24号住(1~29) 1~26は滑石製の白玉である。径(幅)5mm前後、厚さ2~3mm、孔径1.5mm前後にほぼ収まる。28は、ガラス製の管玉で緑色である。外径3.5mm、残存長21mm。29は有孔の石製品で孔径は1mm強。石墨片岩製である。

25号住(30) 25号住居跡より1点出土した。コバルトブルー色のガラス小玉である。幅3

mm、厚さ2mmで孔径は1mm位である。

26号住 (31~36) 31・32はガラス小玉でコバルトブルーを呈す。大きさは4mm前後、厚さは2mm以内に収まる。孔径1.5mm強。33~35はスカイブルー色のガラス小玉。幅は2~3mm程度、厚さは2mm以内に収まる。孔径は1mm程度。36は用途不明遺物。

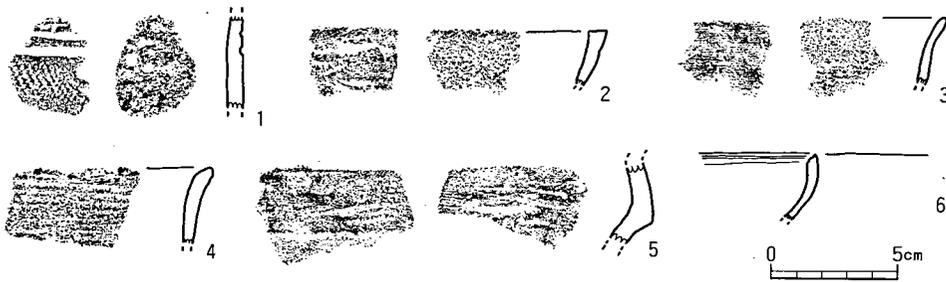
27号住 (37~43) 滑石製で幅は5mm以内に厚さは2.5mm前後に収まる。孔径は1.3mm以下。

(9) その他の時代の遺物

1. 縄文時代

(1) 縄文土器 (図版66-1、第141図)

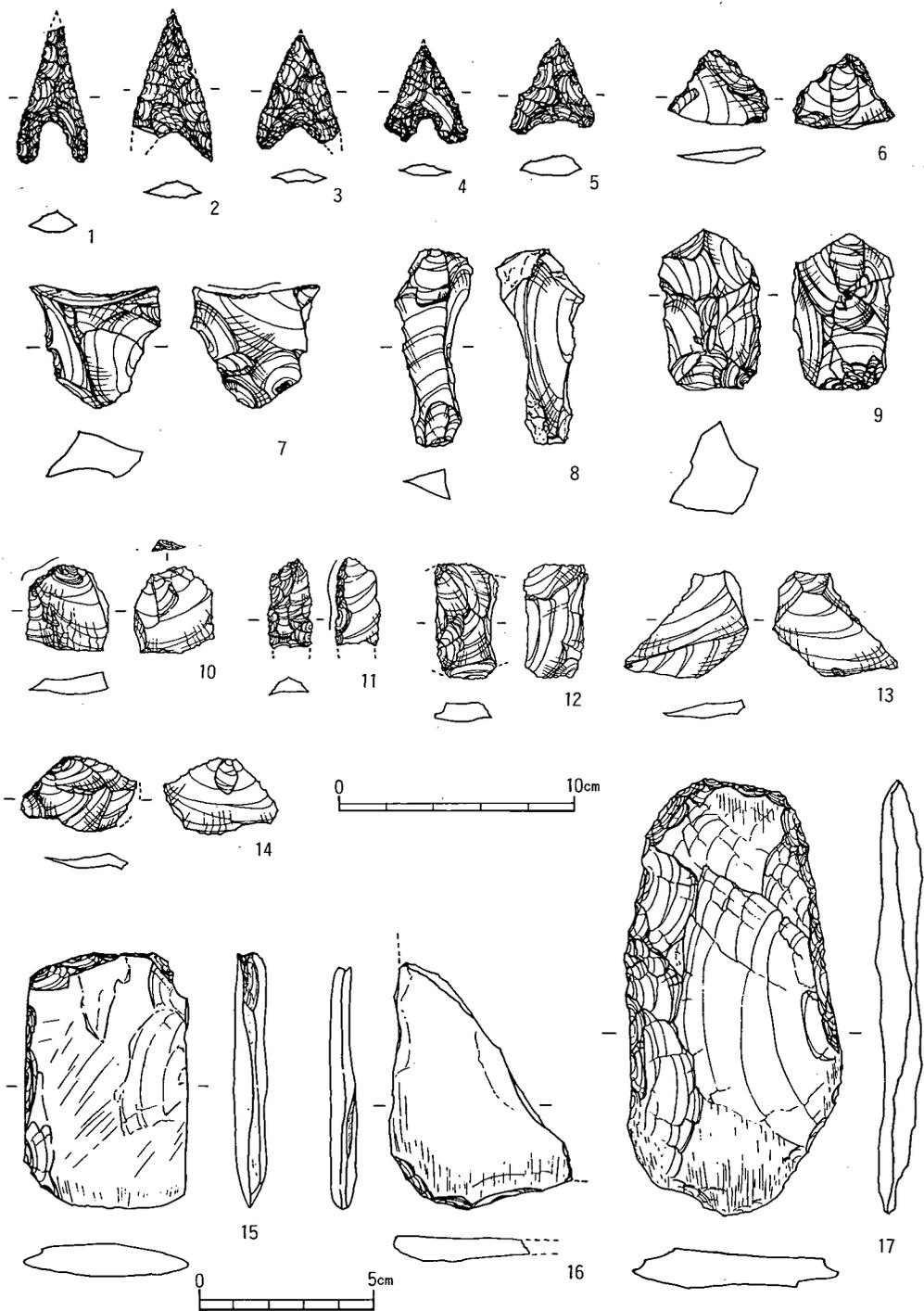
遺跡内で後世の遺構などから縄文土器が出土している。時期もおおむね後、晩期に落ち着くようである。1は後期で原体はR-L。3の内面は粗いナデ調整。3は晩期の鉢で内面は磨かれている。



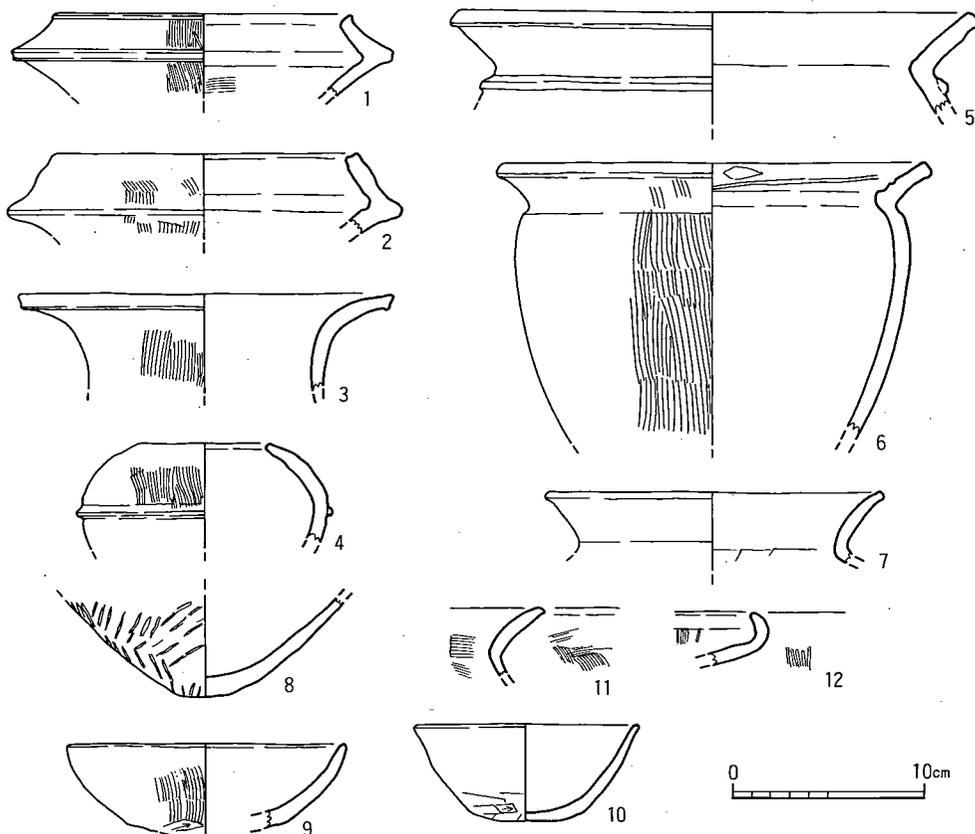
第141図 縄文土器実測図 (1/3)

(2) 縄文時代の石器 (図版66-2・3、第142図)

1はタンパク石製で基部は大きく逆U字状に挟れる。2の右基端は鋭く尖る。サスカイト製。3も2と同型式であろう。4は素材面を残す。背面・腹面共に同方向からの素材段階の剥離面あり。6は先端部に刃部加工を施したスクレイパー。7は両側縁に刃部加工あるスクレイパー。乳白色の姫島産黒耀石製。8は両極に剥離を有する楔形石器。9も楔形石器である。下端の剥離面には数度の加撃痕あり。10~13は微細剥離を有する剥片である。13・14は剥片。15~17は石斧。15は緑色片岩製の石斧で片刃を研ぎ出している。13号住居より出土。



第142図 縄文時代の石器実測図 (2/3・1/2)



第143図 黒色包含層出土土器 (1/4)

2. 弥生時代

(1) 黒色包含層出土土器 (第143図)

A地区中央付近には黒色の包含層があり、そこより土器片等が多量に出土している。1～13がそれである。

壺(1～4) 1・2は袋状口縁壺である。1の復原口径は16.0cmを測る。2も同様に16.0cmを測る。1のほうが屈折部は鋭い。3の口縁は大きく外反する。復原口径20.0cm。4は無頸壺で胴部に凸帯を有する。復原口径9.0cmを測る。

甕(5～8・11) 5は復原口径28.0cmを測る。口縁は「く」字状に開き、頸部下に突帯あり。6の復原口径は23.0cmで同じく「く」字状に開くが口縁内面には沈線あり。7の復原口径は18.0cm、11は内・外面にハケ目調整あり。

椀(9・10) 9は復原口径15cm。外底面は削り。10は復原口径12.0cm。底面は平底気味。

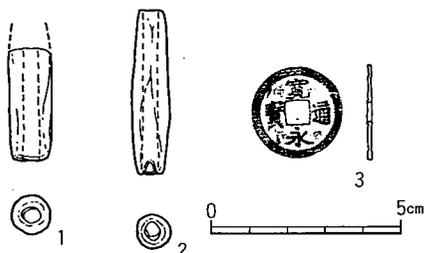
高杯(12) 12は高杯の口縁部破片。

これ等の出土遺物から黒色含包層に土器が“投棄”されたのは弥生後期中葉から終末、古墳時代初頭にかけてであろう。

3. 古墳時代以降

(1) 古墳時代以降の遺物 (図版64、第144図)

1・2は土錘である。1はA地区溝2より出土。2は官道南側溝上位である。下端の穴が抉れているのは使用のためであろう。3は寛永通宝で17世紀代のもの。



第144図 古墳時代以降の遺物 (1/2)

表2 縄文時代の石器観察表

No.	品 種	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備 考
1	石 錘	タンパク石	(2.90)	1.50	0.45	1.30	官道溝以西包含層 2次	尖端欠
2	"	姫島産黒耀石	3.15	1.75	0.40	1.30	表 採	左基端欠
3	"	サヌカイト	2.45	1.70	0.35	1.25	"	右基端欠
4	"	黒 耀 石	2.15	1.80	0.35	0.80	"	
5	"	姫島産黒耀石	1.95	1.75	0.50	1.20	6号住埋土	
6	スクレイパー	"	1.60	2.15	1.45	1.20	官道内包含層	
7	"	"	2.65	2.75	1.10	6.70	"	
8	楔形石器	"	5.25	1.70	0.90	4.30	官道西側	
9	"	"	2.40	2.10	1.95	12.00	官道北側溝	
10	微細剥離を 有する剥片	"	1.85	1.75	0.50	1.85	石組暗渠内	
11	"	"	1.95	0.95	0.50	0.80	8号住 P-6	
12	"	"	1.95	1.35	0.45	1.60	石組暗渠内	
13	剥 片	"	2.35	2.65	0.60	1.85	官道側溝西側	
14	"	"	1.60	2.45	0.40	0.95	官道西側溝	
15	打製石斧	緑色片岩	7.30	4.70	1.00	62.00	13号住居埋土	
16	"	"	(7.10)	5.20	0.80	40.00	35号住居埋土	上端欠
17	"	"	12.60	6.10	1.30	135.00	溝 1	

IV おわりに

1. 住居跡群について

本遺跡で検出された住居跡は、C地区3軒、B地区19軒、A地区17軒の計39軒である。住居跡の集中する地点は、B地区とA地区南側にある。この2つの集中地点が、それぞれ一時期にまとまるという状況は確認できず、各時期の住居跡が混在している。

ところで、池ノ口遺跡全体を概観して言えることは、各住居跡集中地点の空白地には、低湿地に起因すると考えられる黒色帯が形成されている。差こそあれ、集落形成期には、集中地点間に小谷が存在したのであろう。また、集中地点の住居跡群は、およそ南西から北東にかけて細長く分布している。この状況を先の低湿地の状況とあわせて考えると、西方を流れる黒川の河岸段丘より細長く派生した、舌状台地の端に住居跡が展開していると言えよう。この規制は、B地区で検出された、奈良時代に位置づけられるであろう、大型掘建柱建物2棟についても認められる。おそらく住居跡の分布は、南西方向のより高い段丘上に広がるのだろう。また、このような状況は、水の侵蝕作用を受けた舌状台地が多数存在する中津平野西部地域全体にもおむねあてはまるのであろう。

2. 弥生時代～古墳時代

豊前地域の弥生時代から古墳時代への移行を考える時、外来系土器の流入の問題がある。33号住居跡出土の土器群中には、直立する頸部に外反する口縁を持つ壺や、外面に叩き、内面に削りを施し、鋭く外反する口縁部を持つ甕等がある。甕の底部については、やや尖底気味に近いものがほとんどである。住居跡のプランは、ほぼ正方形の4本柱で中央炉を持ち、ベッドを3/4面持つ。出土土器群の内容とあわせて考えると弥生終末期に位置づけられよう。ただ、出土土器群を、“庄内期”の中でどう位置づけるかは、周辺地域の様相を把握した上で行いたい。

3. 古墳時代（5世紀代）

5世紀に入ると遺跡内にカマドを持つ住居跡が出現する。B地区6・9号住居跡、A地区24・26・27・30号住居跡等である。これ等の住居跡は正方形に近いプランを呈し、4本柱を持つ。カマドの位置は、皆北カマドで26号が左隅にある以外は、中央右側付近に設置されている。また、24・27・30号は煙道部がコーナーまで伸びており特異である。土壌については、カマドの対面や右奥壁付近に設置されている。

(1) カマド

本遺跡で検出されたカマドは、豊前地域では最古期に属する一群である。出土土器からその年代は5世紀前葉～中葉であると考えられる。これ等の中で、24・27・30号に見られる住居右壁にまで煙道部が伸びる特異な型式のカマドがある。この様な型式のカマドは、「オンドル」・「オンドル状遺構」と呼ばれている。オンドルとは、焚きつけた熱が、坑道（煙道）部に伝わ

り石の輻射熱で暖房する施設を言い、起源は朝鮮半島にある。日本における純粋な意味でのオンドルは、渡来系集団が残したと考えられている滋賀県穴太遺跡の例だけである。

27号住居跡のカマドは、住居北壁中央の右寄りに設置されており、両袖は直線的で長い。煙道部は、右壁に密着しており、断ち割ると外面に見える黄色土が下層の黒色土にのっている。この黒色土は、煙道の正面に見えており、多少色調は変わりながらも燃焼部まで続き、燃焼部の煙道側は激しく焼けて硬化している。また、燃焼部の奥には煙出しがあり、内面は焼けている。この2つの状況から、通常の奥壁に煙が抜けるだけでなく、右壁方向にも煙が流れた可能性が考えられよう。この時、右壁付近の床面の窪みは何らかの役割を果たしたかもしれない。30号も27号と同じく右壁付近が窪んでいる。24号については、右壁付近には土壌があり、煙道の煙の排出に対して何らかの役割があったのかもしれない。

(2) 祭祀について

カマドを持った、6・9・24・26号住居跡から須恵器片がそれぞれ出土しており、それ等が接合して、第90図53の大甕に復原された。6号住居跡では、カマド対面壁付近の床面より、この大甕の底部が出土している。分割されて、破片が出土する状況から、住居廃絶時に投棄されたと考えるのが妥当であろう。他方、26号住居跡ではこの甕の口縁部が須恵器の小型の壺と共に出土している。また、住居跡内より、炭化材がかなり出土し、出土土器片は2次加熱を受けている。このことは、破片が分割投棄された時期に口縁部付近は、他の土器片と共に投棄され、焼かれたと考えられる。これもある種の祭祀行為として理解できよう。何故大甕の破片が、各住居跡に分割投棄されるのか、理由はわからないが、この大甕は遺跡内で一点の出土であることから共同保有であった可能性は高い。また、当然大甕の機能は水を貯えることにあるだろうから、“カマド祭祀”が火に対する行為なら、大甕の分割破片投棄は“水の祭祀”として考えられないだろうか。

(3) 小 結

出土した須恵器は技術的にみるといずれも5世紀前半の年代が与えられる初期須恵器である。須恵器製作技術が半島からの渡来系集団によって我が国にもたらされたことは確かであるが、居住形態の流入という点では現在も不明な点が多い。ただ、一連の「オンドル」の検出と初期須恵器出土のセット関係から、これ等の住居に住んだ人々が何らかの形で渡来集団と関わりがあったことは間違いないであろう。

(杉原 敏之)

〔参考文献〕

小田和利「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』 1994

表3 竪穴式住居跡一覧表

No.	形状	辺長(m) (タテ×ヨコ)	面積(m ²)	主柱穴	主軸方位	竪跡 の位置	カマド の位置	時期	切り合い関係
1	長方形	37.0×(4.1)	(14.7)	4	N-80°-W	中央	—	—	—
2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5	長方形	5.70×4.57	(27.3)	2	N-18°-E	中央	—	古墳 初頭頃	住4—住5
6	長方形	4.60×4.00	16.8	4	N-5°-W	—	北	5C前～中葉	—
7	長方形	5.56×4.2	(23.6)	2	N-56°-E	中央	—	古墳 初頭頃	住7—建5
8	長方形	5.40×4.45	(22.7)	2	N-26°-E	中央	—	古墳 初頭頃	—
9	方形	4.90×4.80	(22.2)	4	N-2°-W	—	北	5C前～中葉	—
10	長方形	5.35×3.90	19.3	2	N-12°-W	中央	—	古墳 初頭頃	—
11	長方形	4.25×3.45	(14.3)	2	N-44°-E	中央	—	—	—
12	正方形	4.20×4.20	(18.7)	4	N	中央	—	—	—
13	長方形	7.0×4.45	(32.1)	2	N-44°-W	中央	—	—	—
14	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15	長方形	4.40×3.40	(15.4)	2	N-32°-E	中央	—	—	住16—住15
16	長方形	5.90×4.35	(26.7)	2	N-40°-E	中央	—	—	—
17	方形	5.50	—	4	N-31°-E	中央	—	弥生 後期末	住17—建6
18	方形	4.85×4.90	22.6	2	N-33°-E	—	—	古墳 初頭頃	住19—住18-21
19	長方形	6.50×4.20	(26.0)	2	N-65°-E	中央	—	—	住20—住21
20	長方形	6.25×4.75	—	4	N-13°-E	—	—	—	住20-18—住21
21	長方形	57.5×4.10	21.4	2	N-23°-E	中央	—	古墳 初頭頃	—
22	—	—	—	2	E	中央	—	—	—
23	長方形	5.00×3.75	(18.5)	2	N-61°-E	中央	—	弥生 後期前～中葉	—
24	方形	4.30×4.10	(16.2)	4	N-12°-W	—	北	5C前～中葉	—
25	長方形	4.00	—	2	N-88°-W	中央	—	弥生 後期中～後葉	—
26	方形	5.60×5.40	22.8	4	N-10°-E	—	北	5C中葉	—
27	方形	5.26×5.2	25.5	4	N-27°-E	—	北	5C前～中葉	—
28	—	—	—	—	—	—	—	弥生 後期初頭	—
29	a.長方形 b.長方形	3.50×3.00 5.60×4.70	(11.9) —	2 2	N-79°-E —	— —	— —	古墳 前期後葉 弥生 後期前葉	住29b—住29a —
30	方形	5.40×5.10	(18.6)	4	N-62°-E	—	北	5C前～中葉	—
31	a.長方形 —	4.70×4.15 —	18.4 —	2 4	N-43°-E —	中央 —	— —	弥生 後期後葉 —	住31a—住31b —
32	長方形	5.85×4.3	—	4	N-29°-E	中央	—	4C代	—
33	方形	5.15×5.05	(26.7)	4	N	中央	—	弥生 終末	—
34	方形	4.52×5.20	19.9	2	N-41°-W	中央	—	弥生 後期中葉	住34—官道
35	方形	4.15×36.5	(13.5)	—	N-70°-E	—	—	弥生 後期後葉	—
36	方形	5.20×4.20	(17.7)	2	N-66°-E	中央	—	弥生 後期中葉	—
37	—	4.70	—	2	N-44°-W	中央	—	弥生 後期中～後葉	—

表4 掘立柱建物跡一覧表

No.	間数	梁行×桁行	面積(m ²)	桁行方位	時期・切り合い等
1	1×2間	1.70×3.60	65	N-74°-W	—
2	1×2間	3.35×3.77	12.8	N-35°-E	—
3	1×2間	2.90×4.60	13.8	N-14°-W	住2—建3
4	1×2間	3.50×3.50	12.4	N-65°-W	—
5	2×4間	4.15×8.40	34.5	N-66°-W	住7—建5
6	2×3間	3.59×6.75	24.2	N-65°-W	住17-18—建6
7	1×2間	2.50×5.60	8.9	N-16°-W	—
8	1×2間	2.80×5.40	14.8	N-28°-W	—
9	2×3間	4.40×4.40	17.7	N-7°-W	—

4. 奈良時代

(1) 道路状遺構(官道)について

今回発見された「道路状遺構」は、その計画的な直進性と礫石混じりの硬化面を持つ構造、そして6mの道路幅が古代の単位である丈(3m)を用いている点から「官道」と考えられる。

また、この「道路状遺構」は、地形図や空中写真から「官道」に推定されている旧道から、^(註1)南に約40m離れて発見されている。この旧道沿いには、古代寺院の垂水廃寺や、奈良時代に建立されたといわれる八坂神社(牛頭天王宮)が存在している。これはこの旧道が当時の主要道路であったことを示しており、調査区の北に隣接する地区に「横道」の小字名が残っていることがそれを物語っている。

「道路状遺構」の時期を示す遺物はわずかであるが、8c前半には敷設されていたと思われる。廃絶時期を推定するにも材料不足であるが、少なくともA-1号・A-2号溝が掘られた12c前半には廃絶し、北に移動したと思われる。

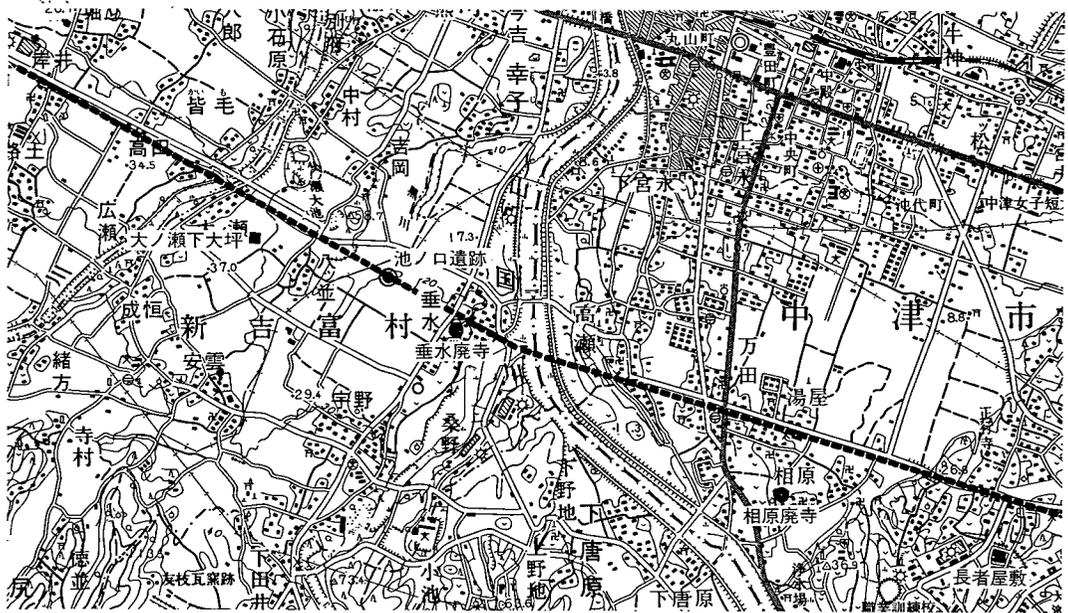
(2) 官道路線について

豊前国を通る官道は、「豊前道」・「豊前路」と仮称されているが、その実態はほとんどわかっていないといってよい。『延喜式』卷二十八(兵部式)に「社崎・到津・田河・多米・刈田・築城・下毛・宇佐・安覆」と豊前国内に置かれた駅名が記されているが、これらの駅家に比定される遺跡はいまだ発見されていない。「官道」自体も推定官道路線に隣接する「道路状遺構」が荒掘大保遺跡^(註3)で発見されているのみである。

発掘調査に依らない歴史地理学からの路線の研究も、福岡県側では部分的にしか行われていない。本遺跡周辺は路線が復元された地域であるので、この復原案を踏査結果を加えて若干説明する。

本遺跡から西に向かうと、すぐに黒川に至る。黒川は川幅がそれほど広くなく、対岸に同一直線上の道があるので、橋が架かっていたと思われる。黒川を越えると八ッ並地区の河岸段丘を上る。段丘の南側は大池を臨む斜面になっており、路線はそこをカットして通っている。この切り通しを抜けると郡衙の可能性のある大ノ瀬下大坪遺跡の北側を通って直線的な旧道に至り、旧道は豊前市岸井で県道1号線に合流している。

東に向かうと、垂水廃寺の寺域の北側に至ると思われるが、その間には本遺跡の立地する微高地のちょうど北端を通っている。この微高地北端にはいくつかの谷が入っており、路線内には



第145図 池ノ口遺跡と官道推定線

微高地を通る部分と谷を通る部分があるので、谷部では本調査区内で見られたような盛土工法が採られたものと推察される。

旧道は山国川まで直進しており、そこから渡河したらしく、対岸の路線はそれまでのルートから北に約14度北に振れて、県道663号線と合流している。さらに東進すると、古代寺院の相原廃寺や公的な施設と思われる建物の検出された長者屋敷遺跡の北側を通っている。

以上のように、豊前地域の官道路線の多くの部分は現在も幹線道路として機能したり、旧道として現存しているため、今回のように発掘調査で検出されることはほとんど無いものと思われる。それだけに歴史地理学的手法を用いた路線の総合的な研究の進展が望まれる。

5. 平安時代末

(1) 「冷え掘」について

A-1号・A-2号溝のように二本単位で長く延びる溝は「道路状遺構」の可能性もあるが、ここでは「冷え掘」に類する用水路と考えたい。

「道路状遺構」にしては道路幅が狭く、一人が通れる程度しかない。そのような規模の小さい道路に側溝を設けるとは考えにくい。同様な二本単位で長く延びる溝が新吉富村長田遺跡^(註2)でも見られたが、そこでもやはり約1m間隔で併走していたが、溝の掘り直しのために途中から二本の溝が接していた。このことから、長田遺跡検出の二本の溝は「道路状遺構」ではないと判断された。位置も近く、時期も大きく変わらない本遺跡のA-1号・A-2号溝も同様な性格を持つ溝と考えられる。

「冷え掘」は、寒冷地での冷水対策として用いられたもので、古くは8c代の検出例がある。溝に通水させている間に地熱と太陽熱で温水効果を上げるもので、取水口から水田までの距離が長いほど効果が上がる^(註4)。

溝の西端は黒川に向かっており、おそらく黒川に井堰を設けて取水していたと考えられる。溝の走る先に当時の水田があるはずだが、旧道の北側に広がる一段下がった低地に位置していたものと思われる。それについては今後、周辺地域の発掘調査が進めば明らかになるものと思われる。

また、「冷え掘」があることから、溝の周囲は水田化されていなかったことを窺い知ることができる。この区域が水田化されたのは、近世に石組暗渠が設置されてからだろう。

最後に「道路状遺構」については、太宰府市教育委員会山村信榮氏に多くの教授を受けた。深く感謝の意を表わしたい。 (秦 憲二)

註1 大分県教育委員会『宇佐大路一字佐への道調査一』大分県文化財調査報告 第87輯 1991

註2 平成6年に福岡県教育委員会により調査され、現在整理中

註3 『豊前市史 考古資料』豊前市 1993

註4 内田憲治「赤城山麓のヤト田を掘る」『よみがえる中世』5 平凡社 1989

圖 版

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

1 池ノ口遺跡C地区全景（北から）



2 C地区南半部全景（北から）



1 C地区中央部全景（北から）

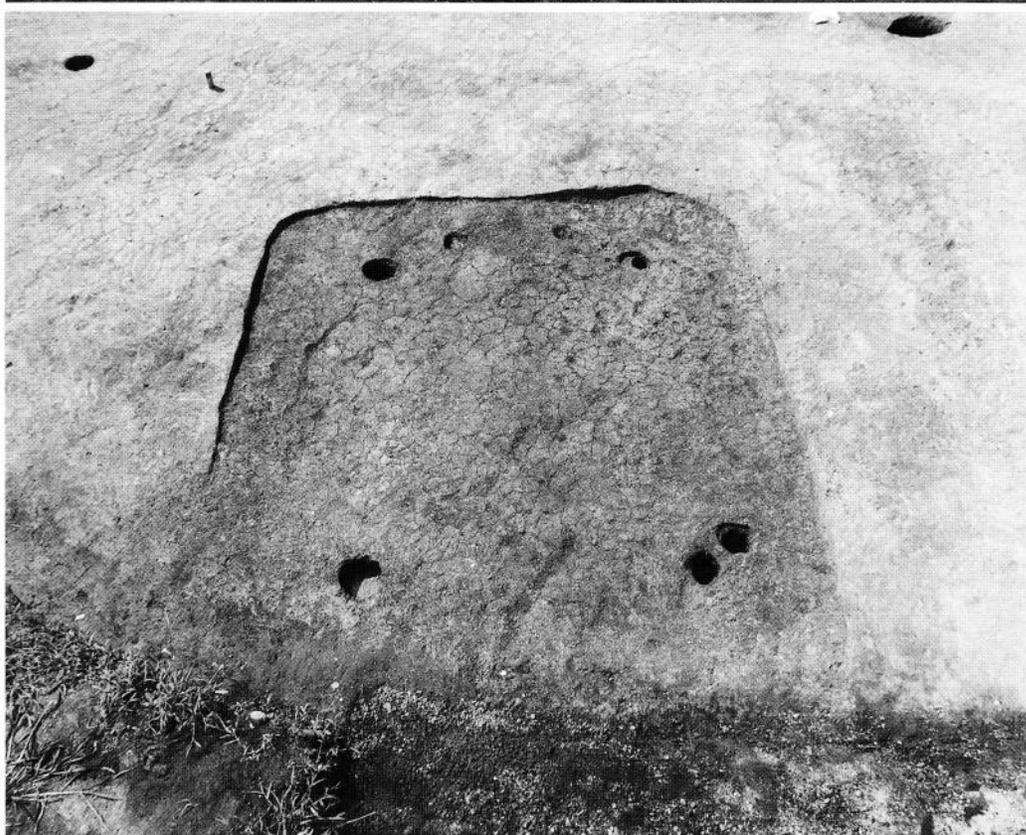


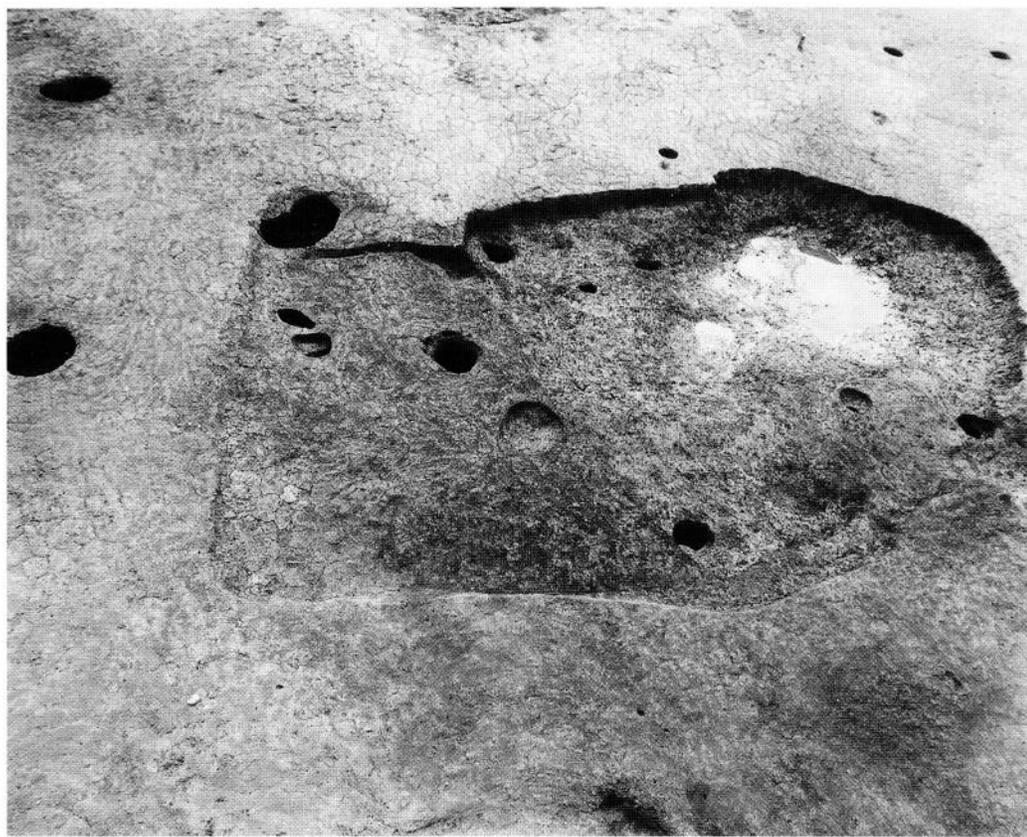
2 C地区中央部全景（東から）

1 C地区中央部全景(北東から)



2 1号住居跡(東から)

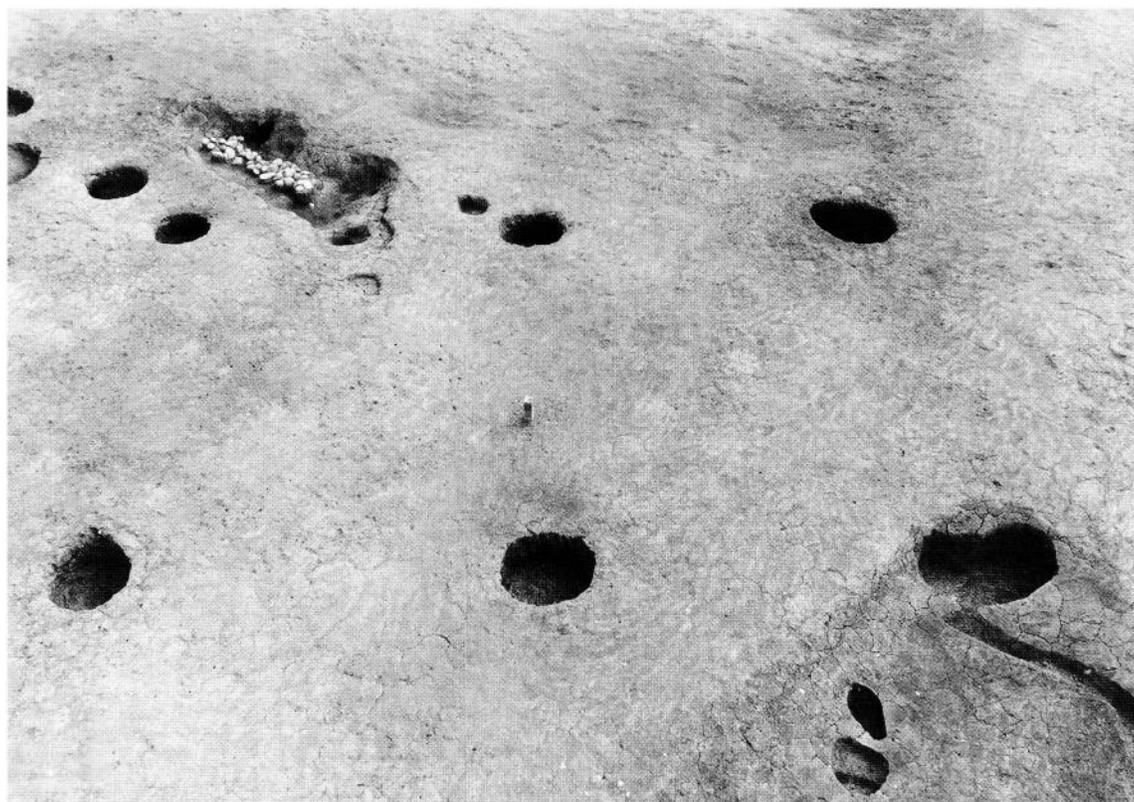




1
2・3号住居跡（西から）



2
2号掘立柱建物跡（北西から）



1 3号掘立柱建物跡（南西から）



2 4号掘立柱建物跡（北から）

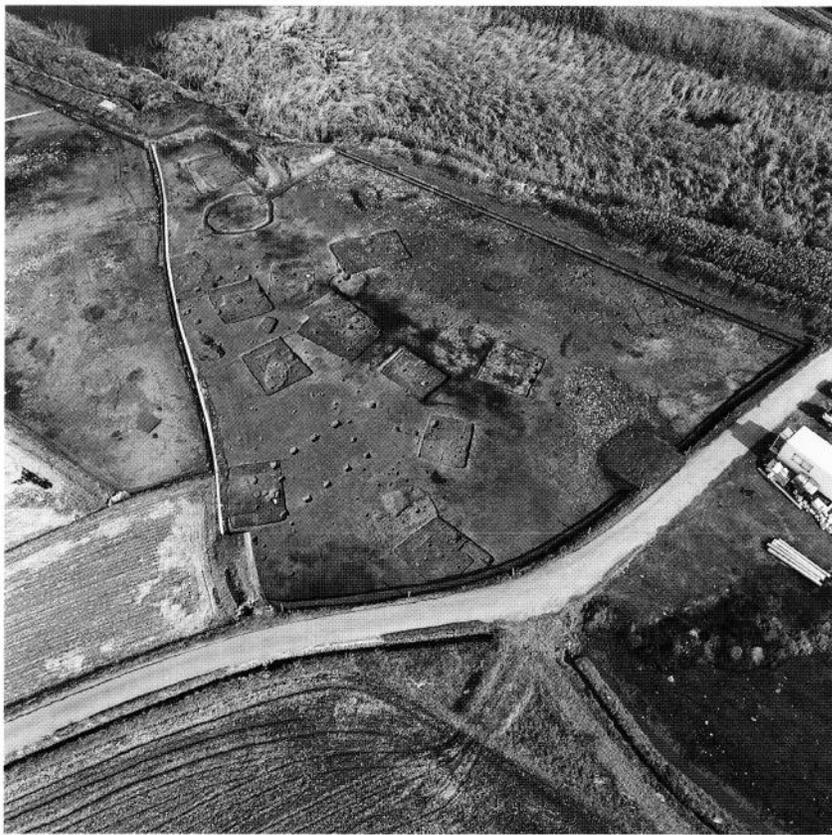


1 水田区画1 (北から)



2 水田区画2 (東から)

1 B地区全景（南西から）

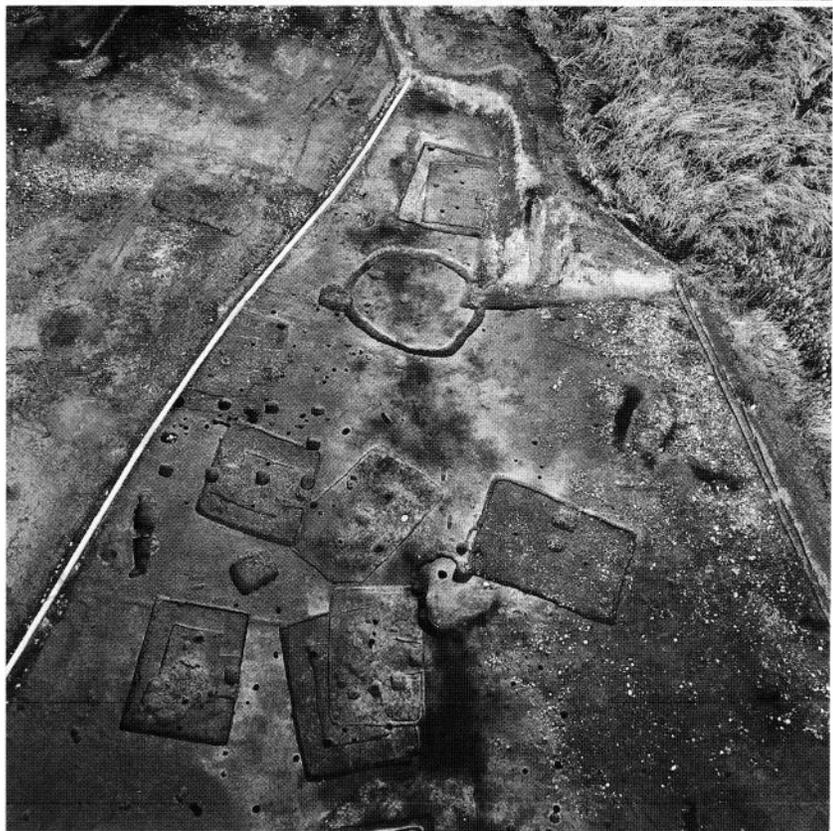


2 B地区全景（西から）





1 B地区全景(北西から)

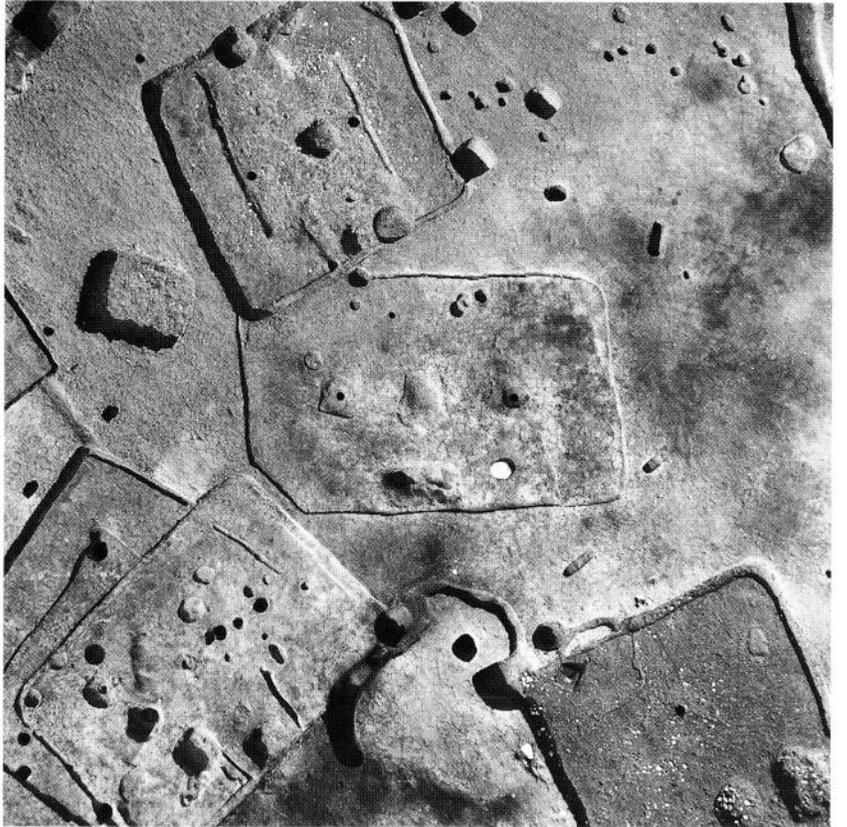


2 B地区北半部(南から)

1
B地区中央部

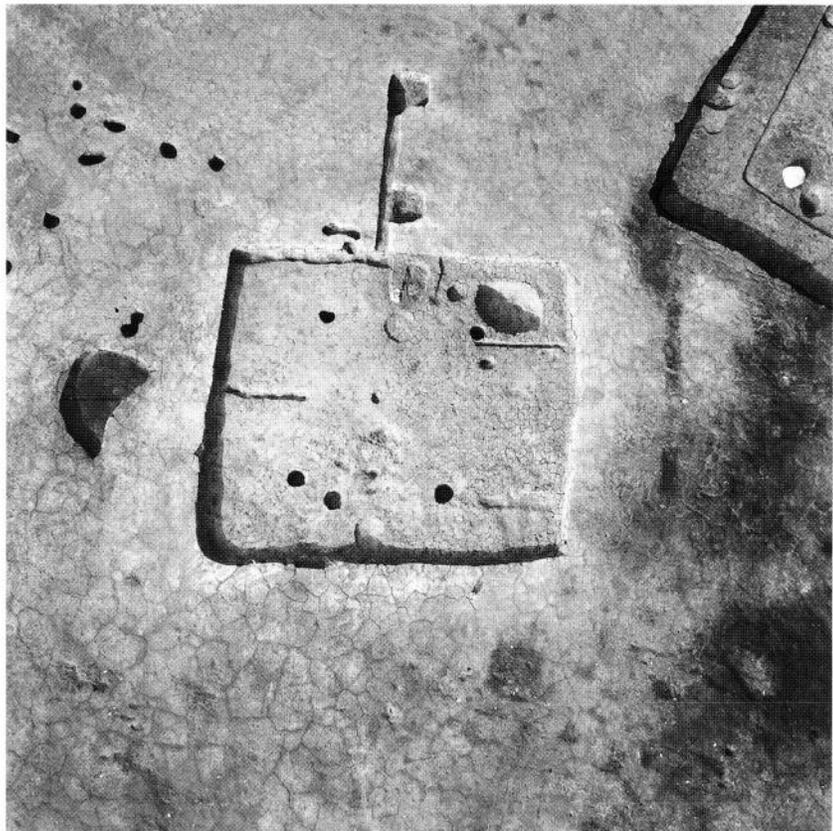


2
B地区中央部





1
4·5号住居跡

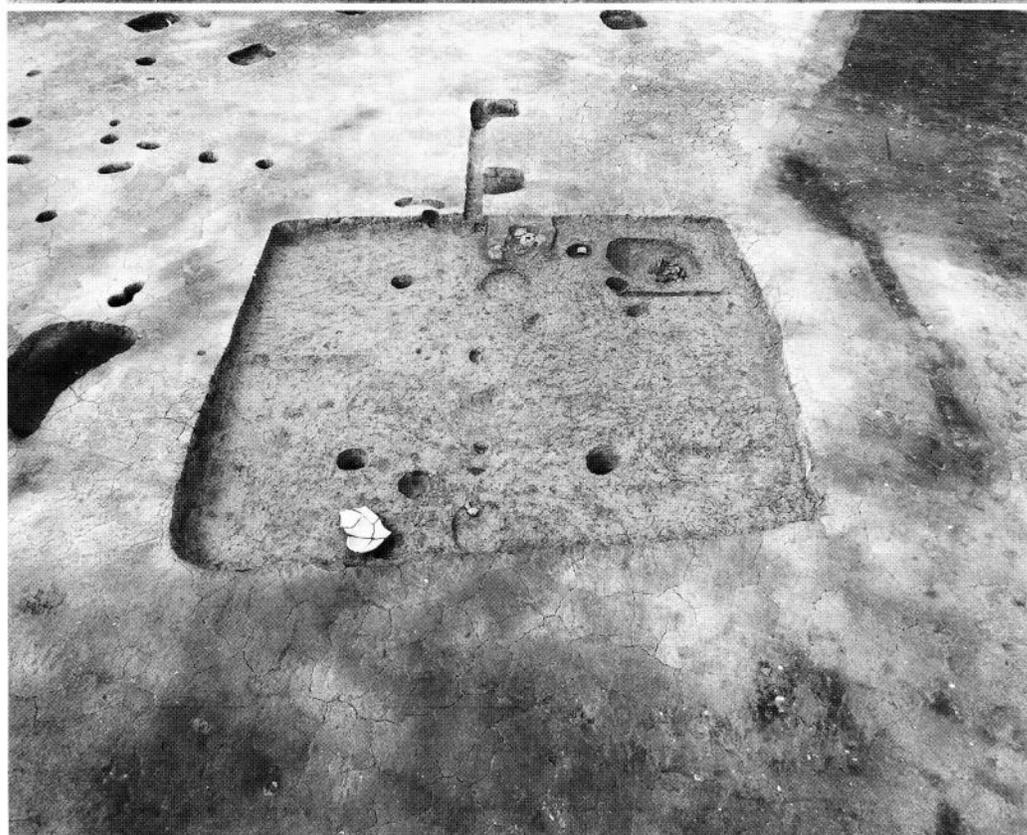


2
6号住居跡

1
5号住居跡（東から）

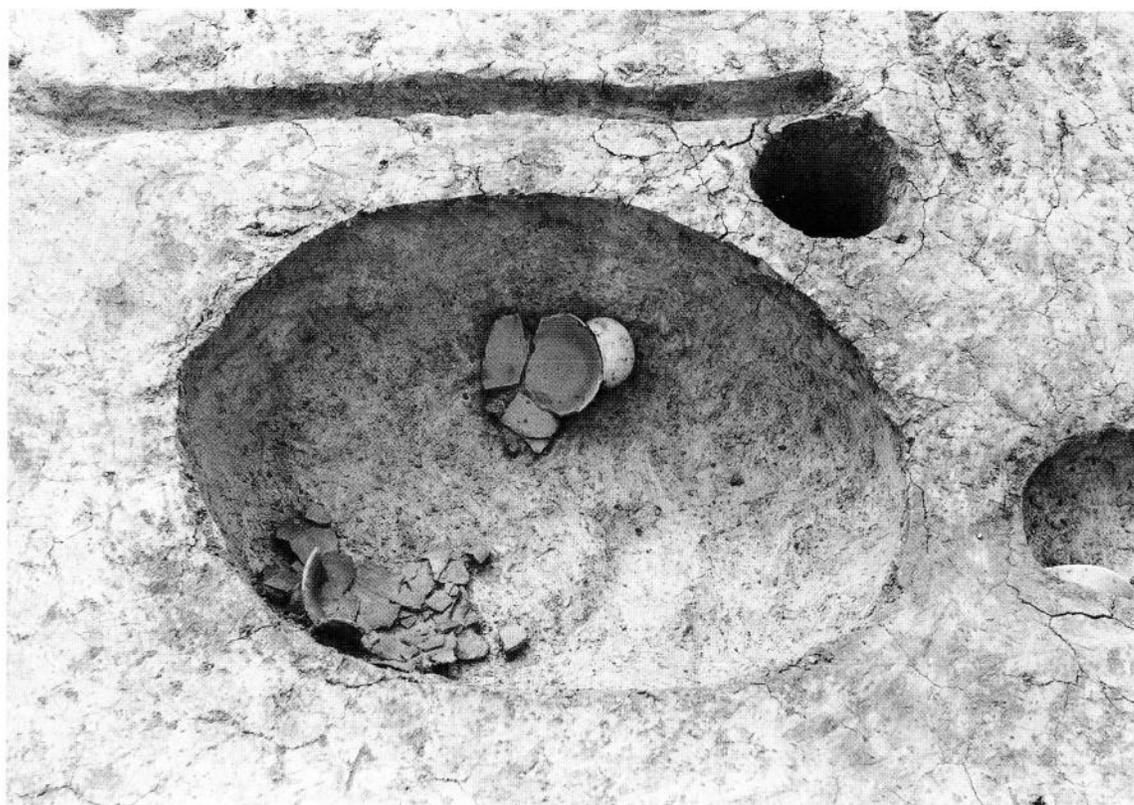


2
6号住居跡（南東から）



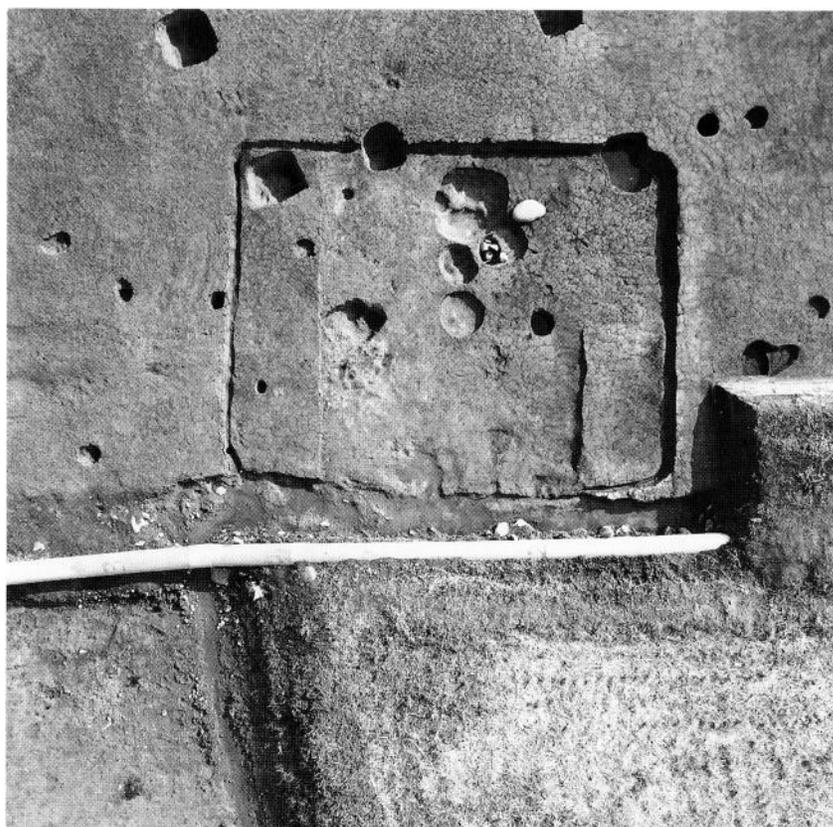


1 6号住居跡カマド



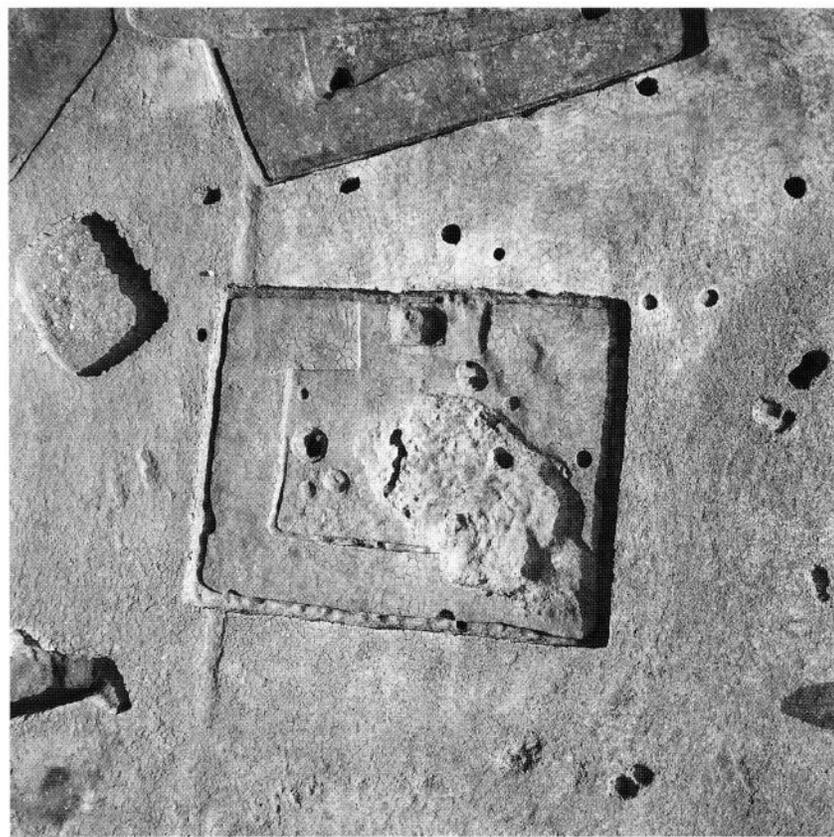
2 6号住居跡屋内土壌

1
7号住居跡

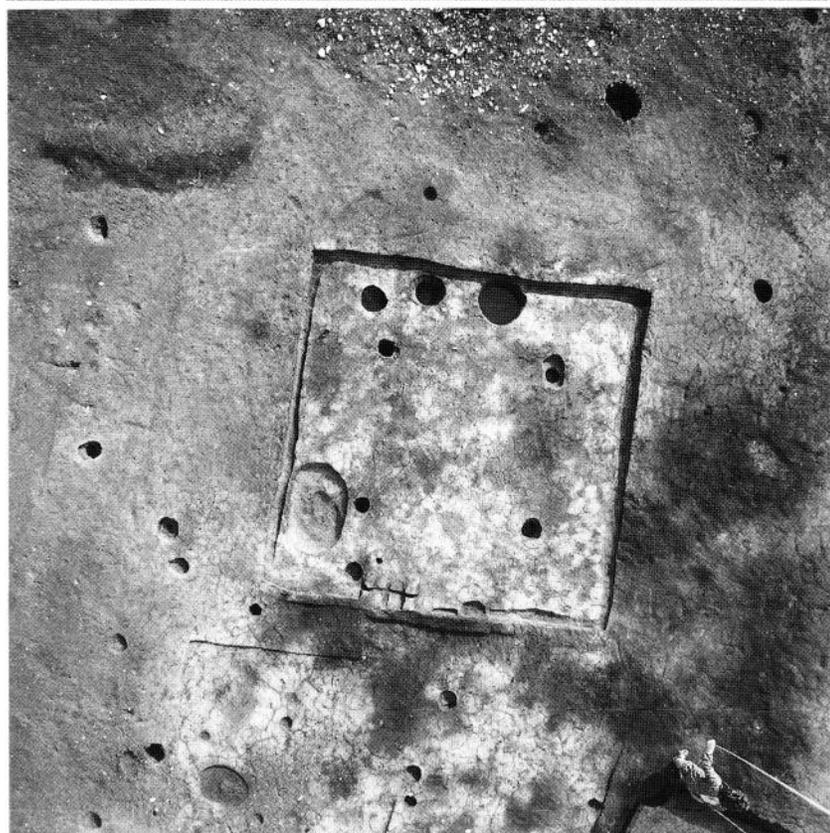


2
7号住居跡 (北西から)





1
8号住居跡

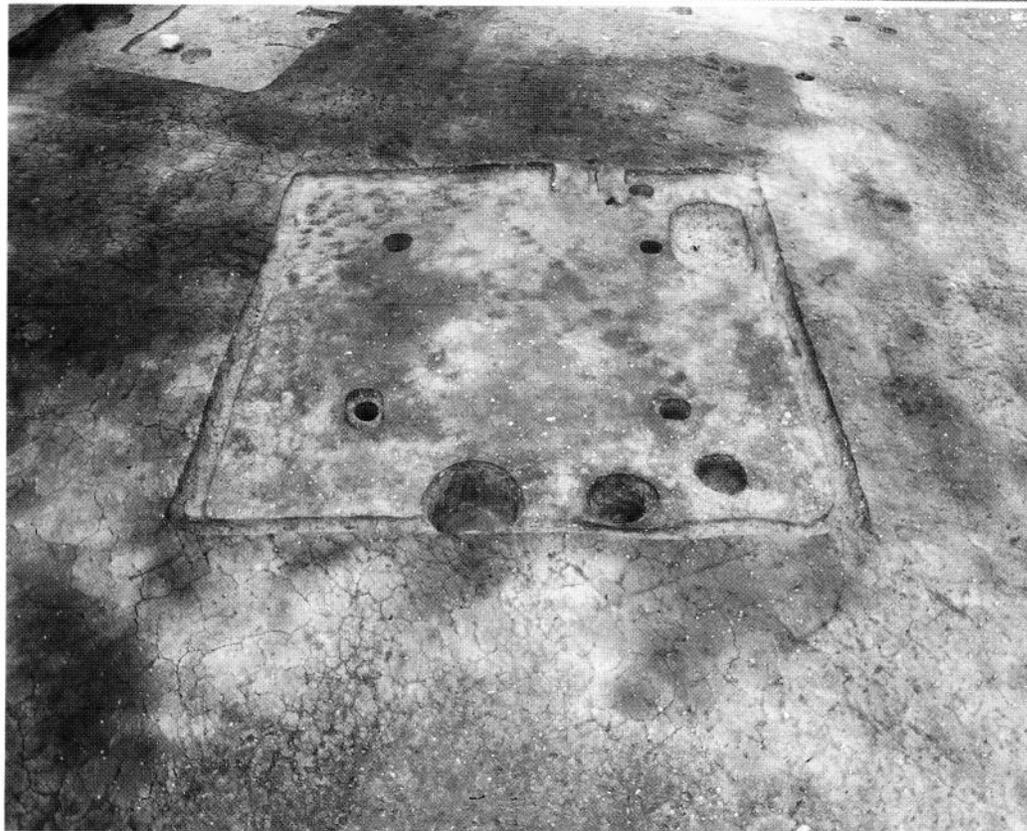


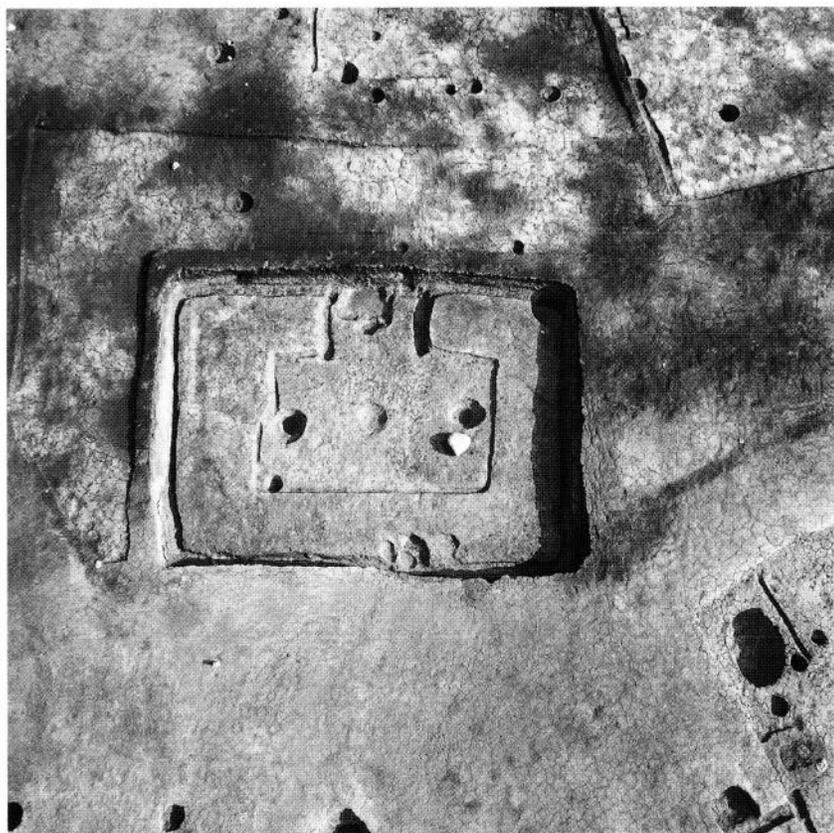
2
9号住居跡

1
8号住居跡（南東から）



2
9号住居跡（南から）

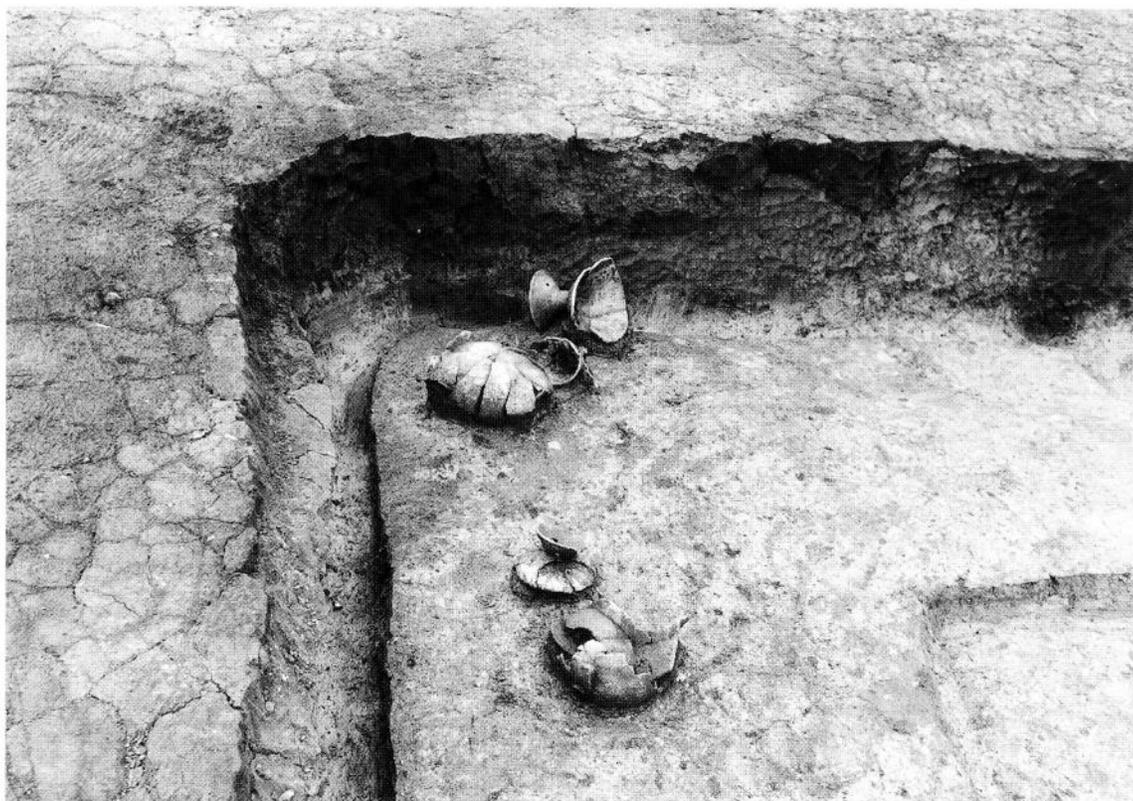




1
10号住居跡



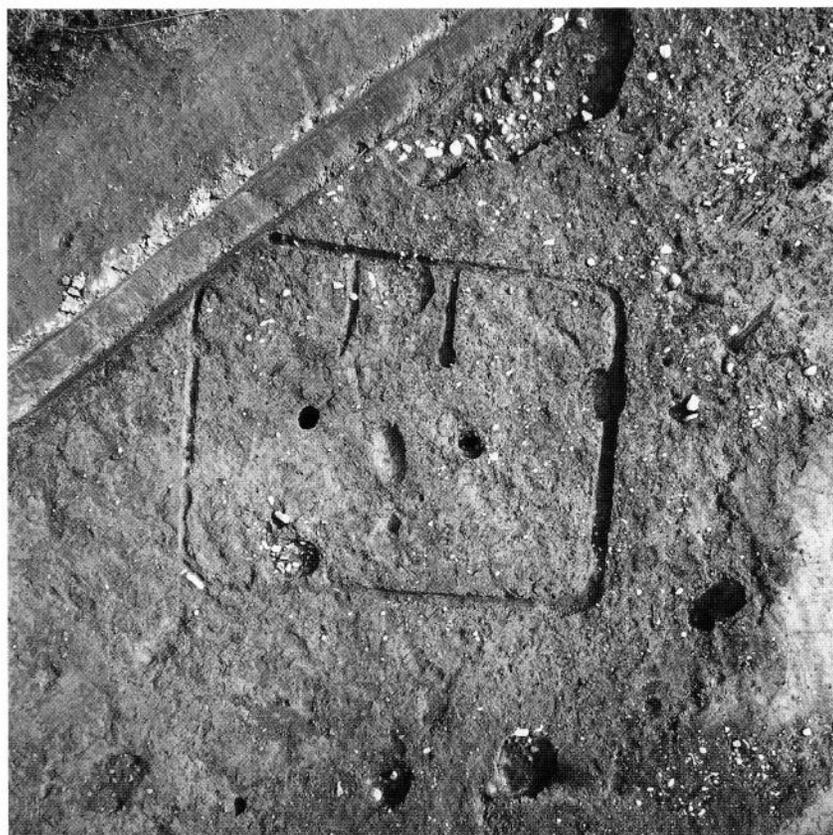
2
10号住居跡（西から）



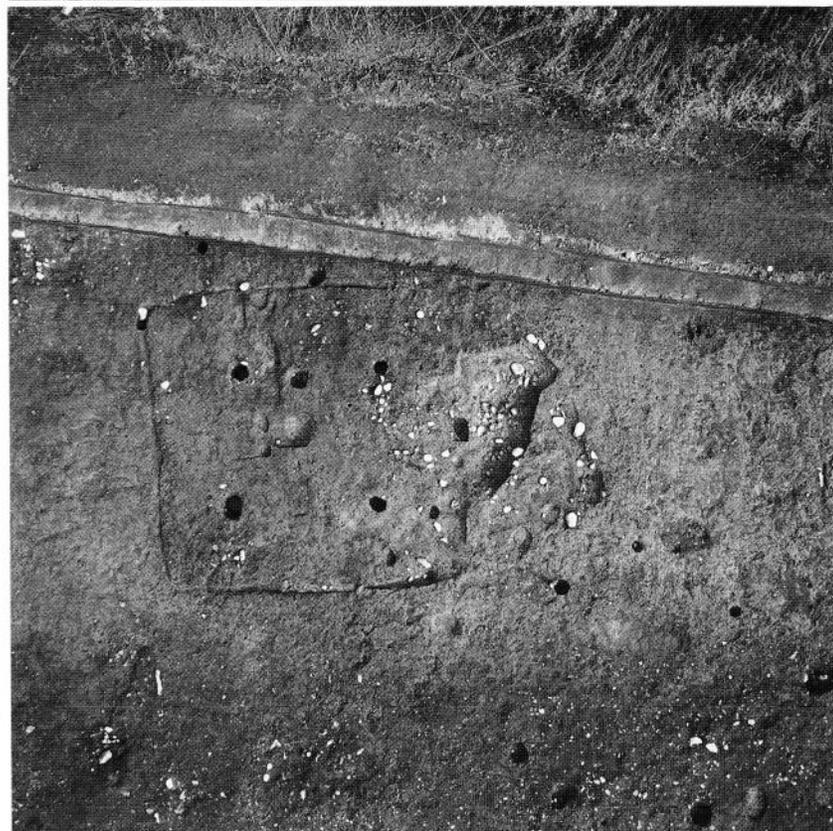
1 10号住居跡遺物出土状態



2 10号住居跡遺物出土状態

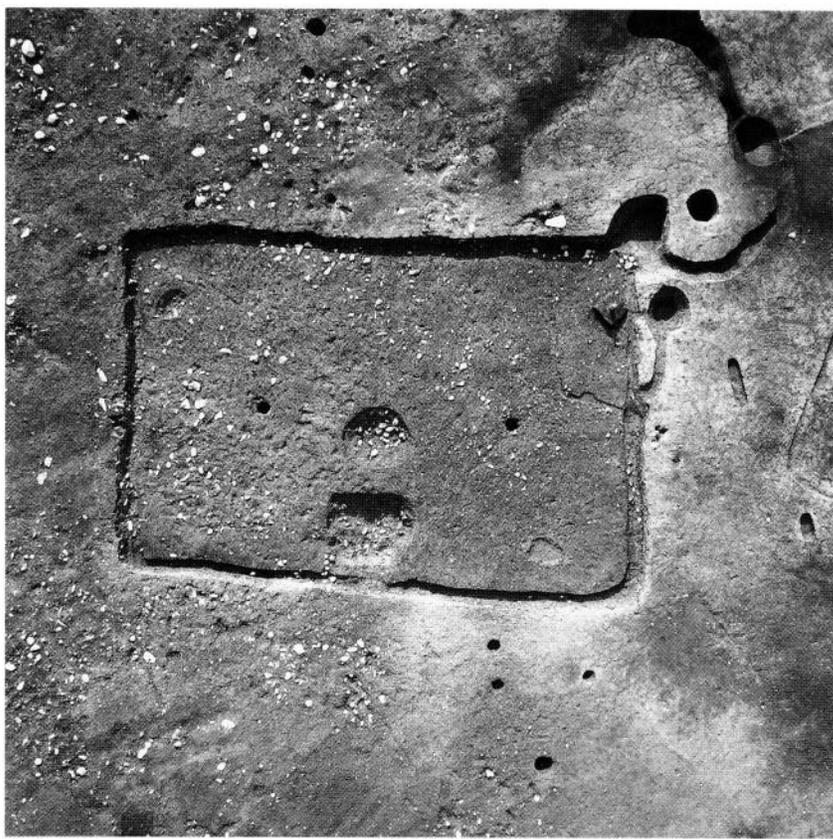


1
11号住居跡

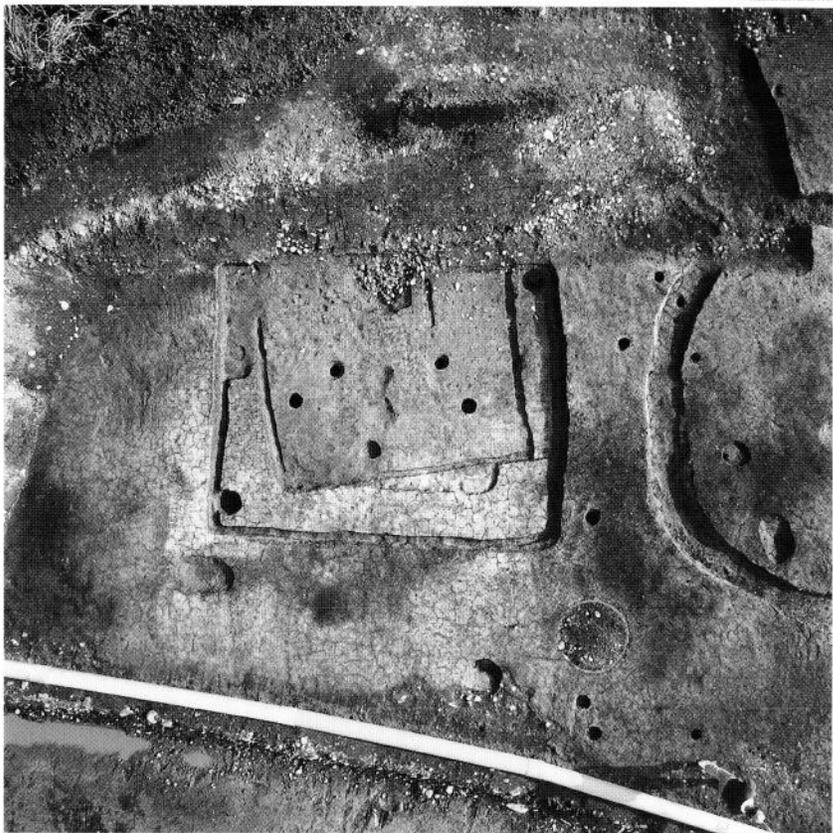


2
12号住居跡

1
13号住居跡



2
15・16号住居跡



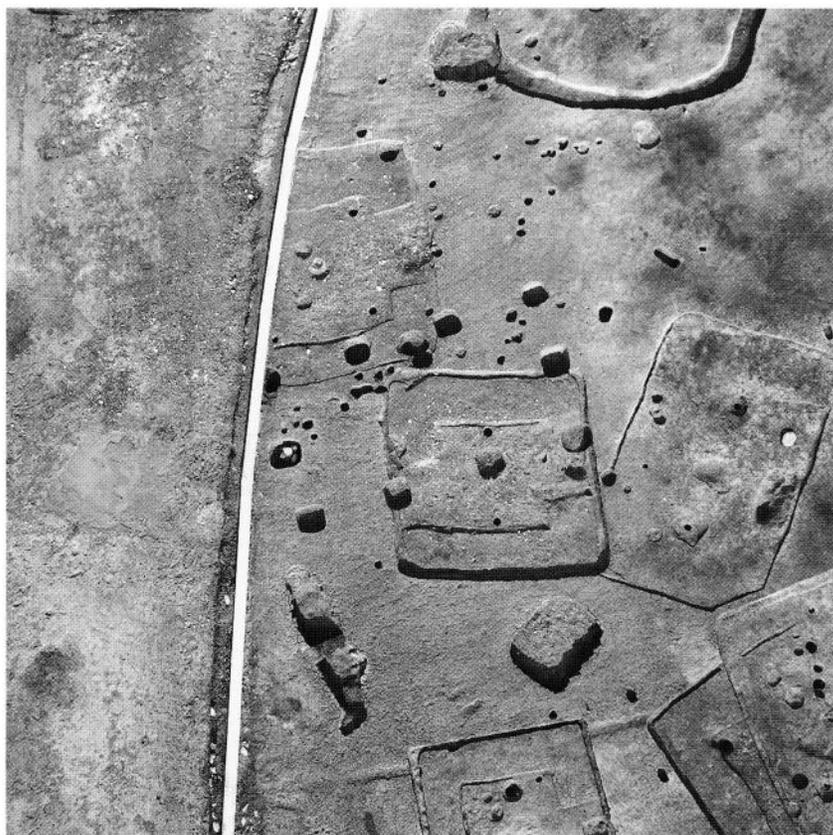


1
13号住居跡（北東から）

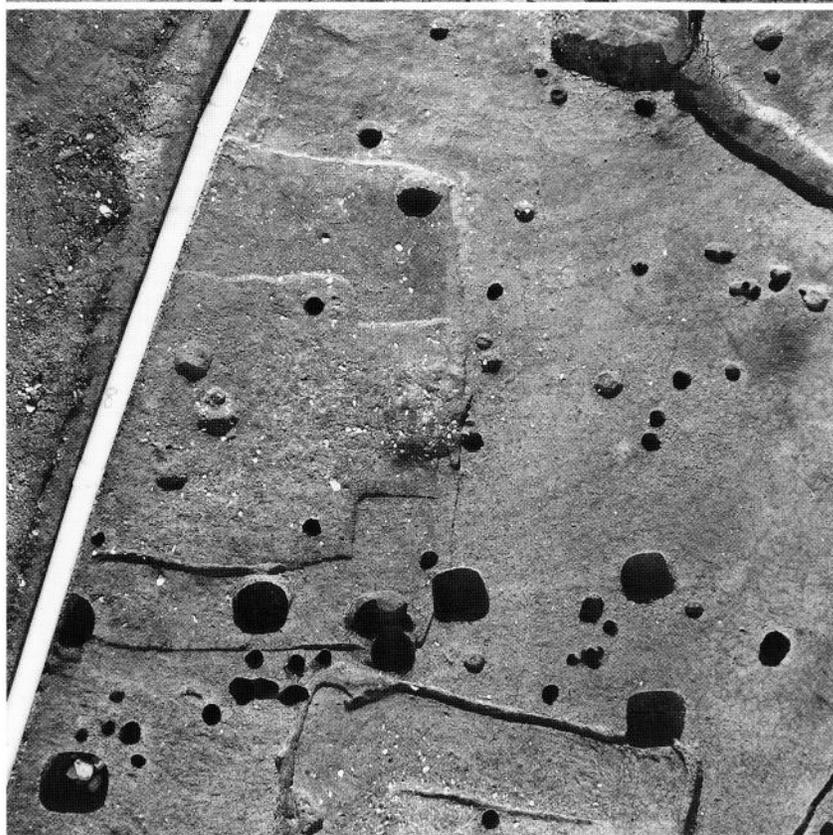


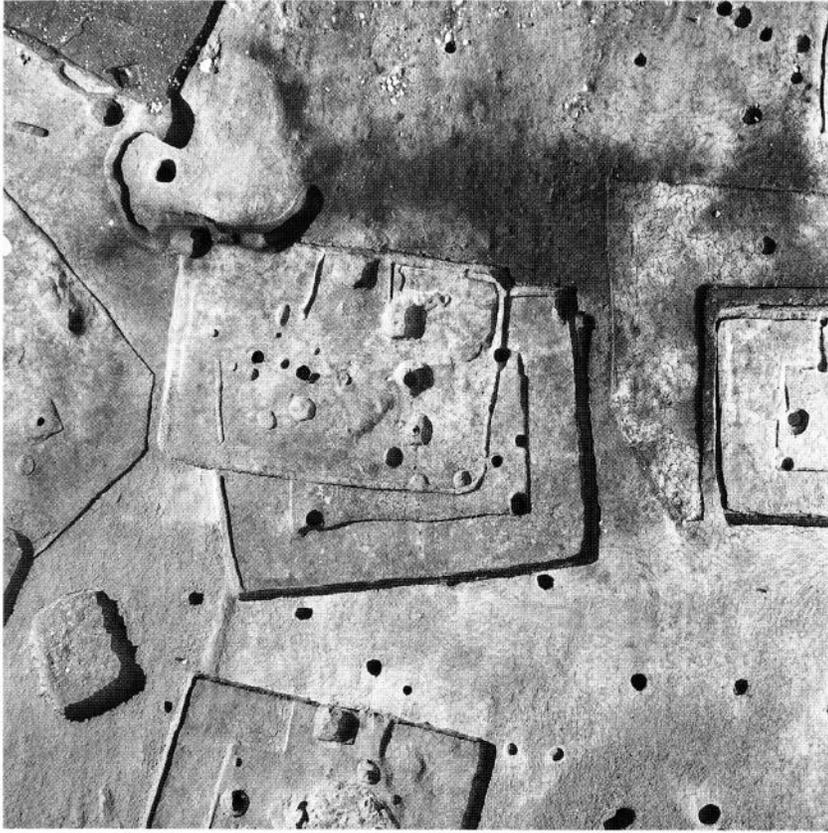
2
14・15・16号住居跡（北西から）

1
17・18・19号住居跡・6号掘立柱建物



2
17号住居跡





1
20・21号住居跡



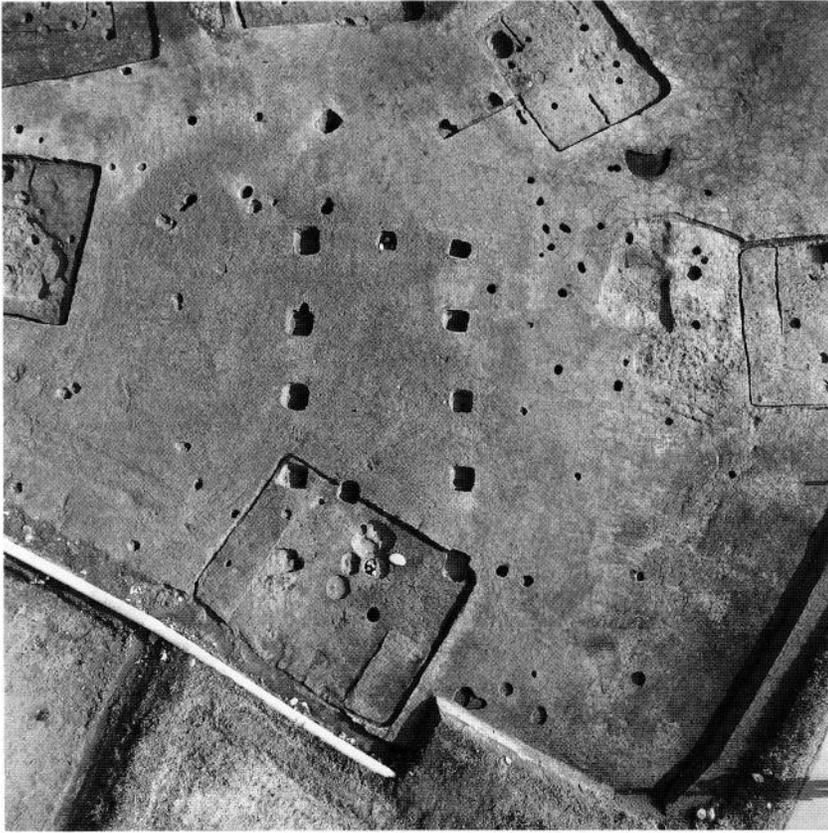
2
20・21号住居跡(東から)

1
18・19号住居跡（南東から）



2
22号住居跡（北から）





1
5・7号掘立建物跡



2
5号掘立柱建物跡（西から）



1 5号掘立柱建物跡 P 6



2 5号掘立柱建物跡 P 8



左 P 3 · 右 P 11

左 P 1 · 右 P 9

1
6号掘立柱建物跡（東から）

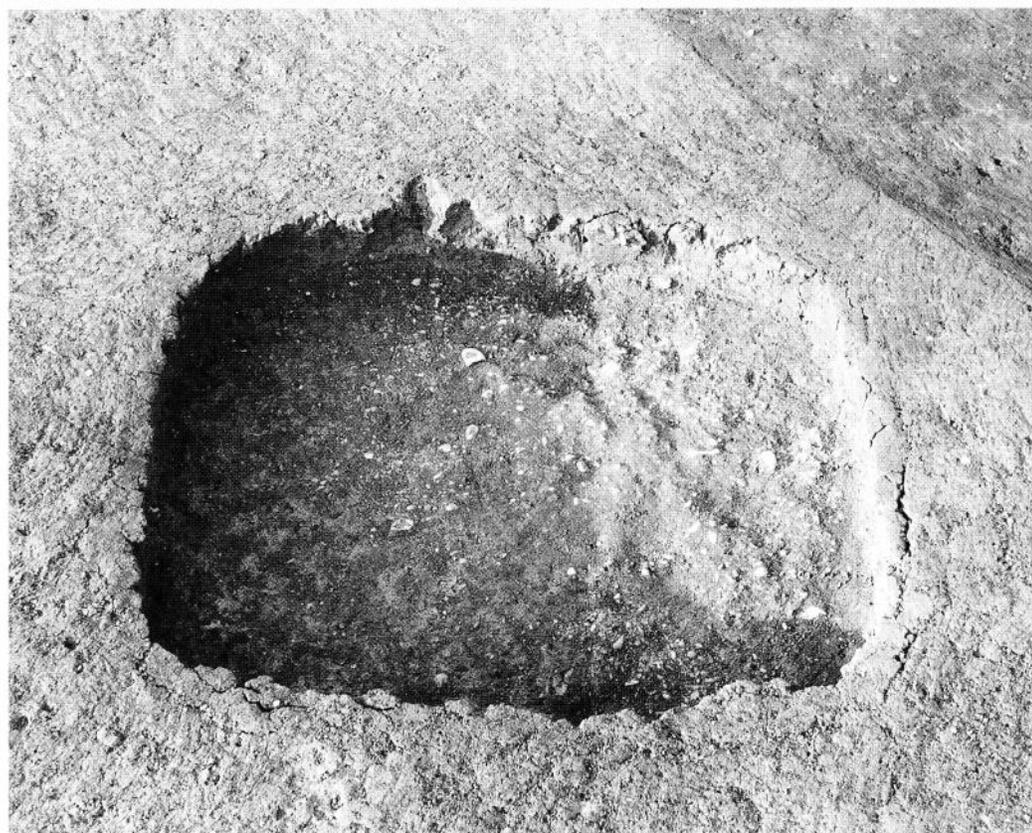


2
7号掘立柱建物跡（東から）





1
1号円形周溝遺構・2号土壇（北西から）

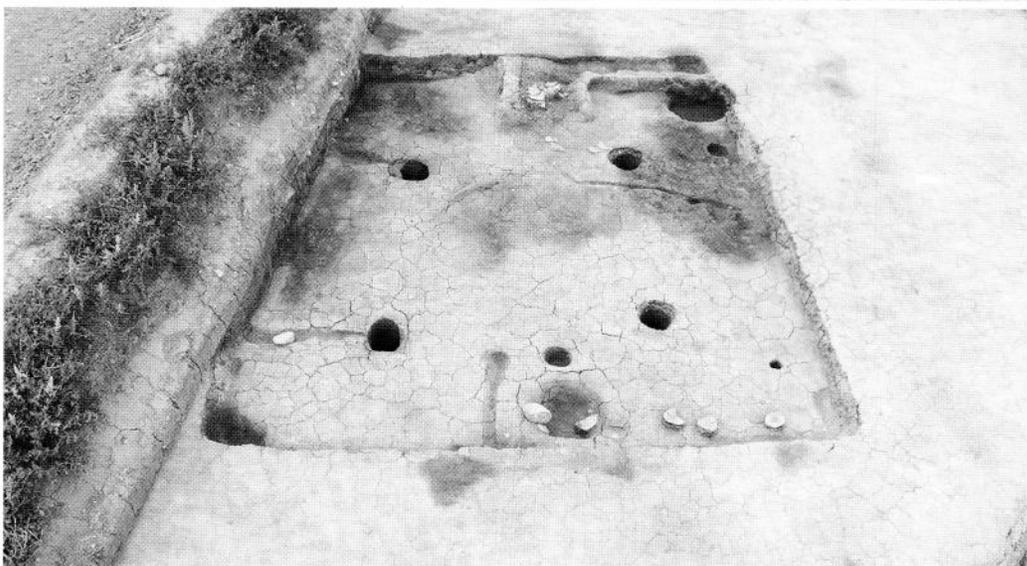


2
1号土壇

1
23号住居跡
(南東から)



2
24号住居跡
(南から)



3
24号住居跡カマド



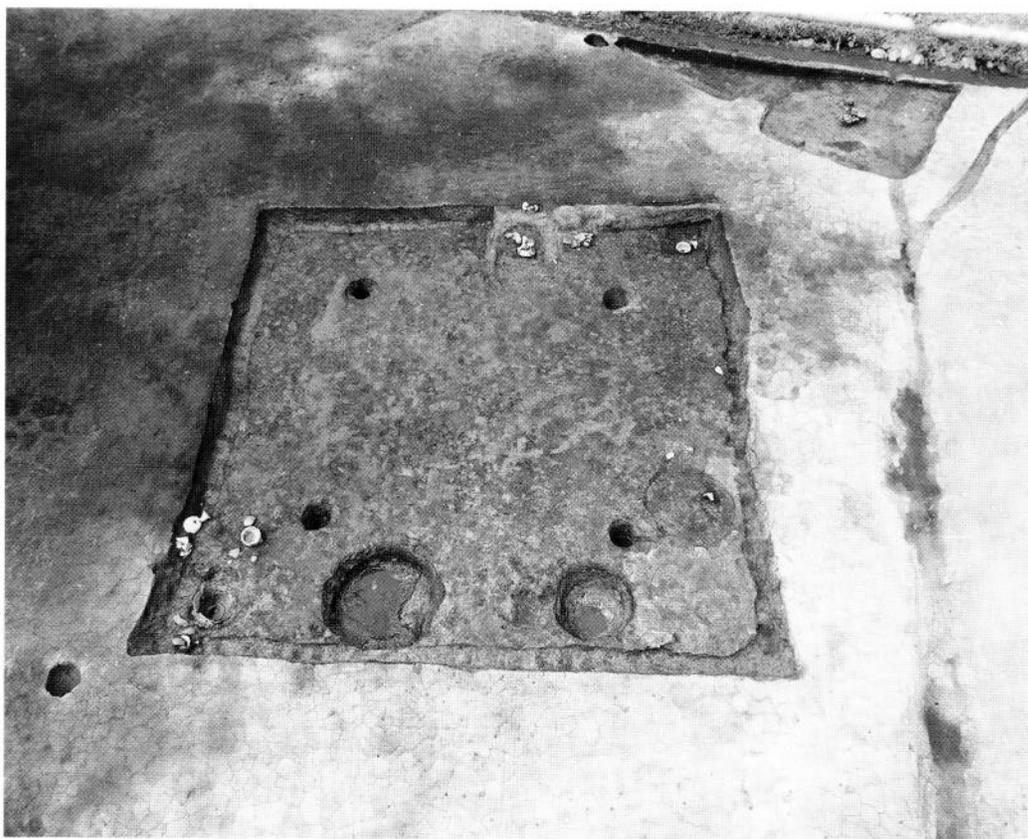


1
25号住居跡（東から）

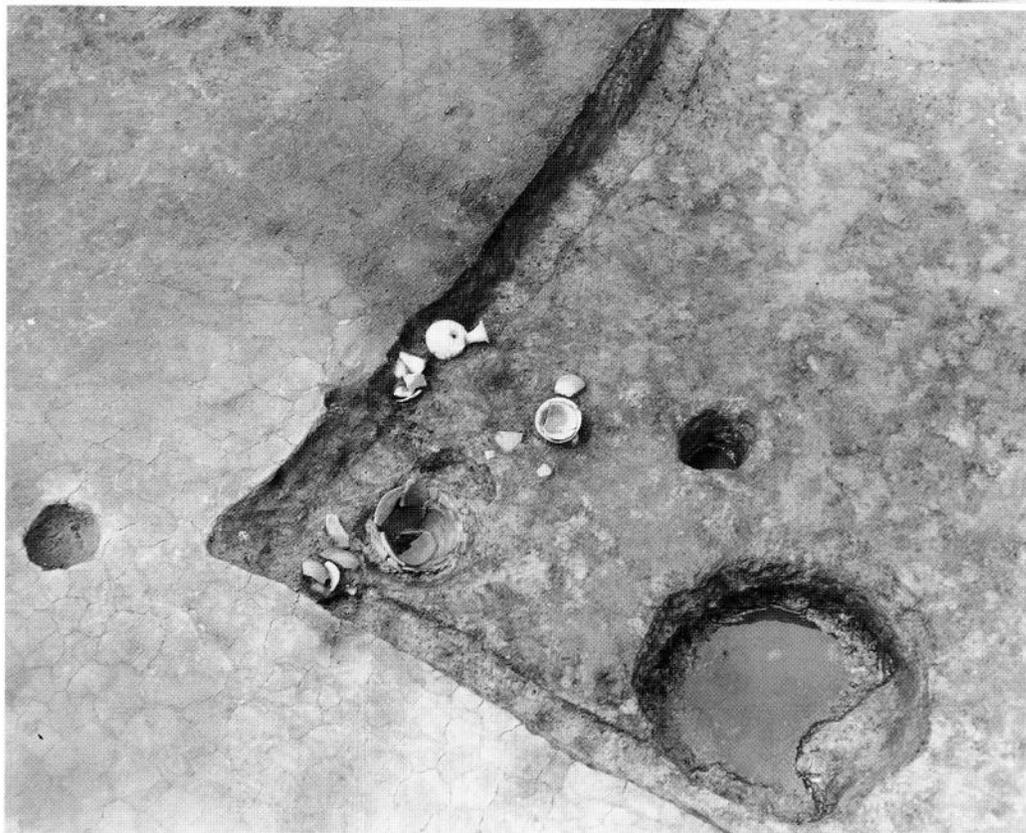


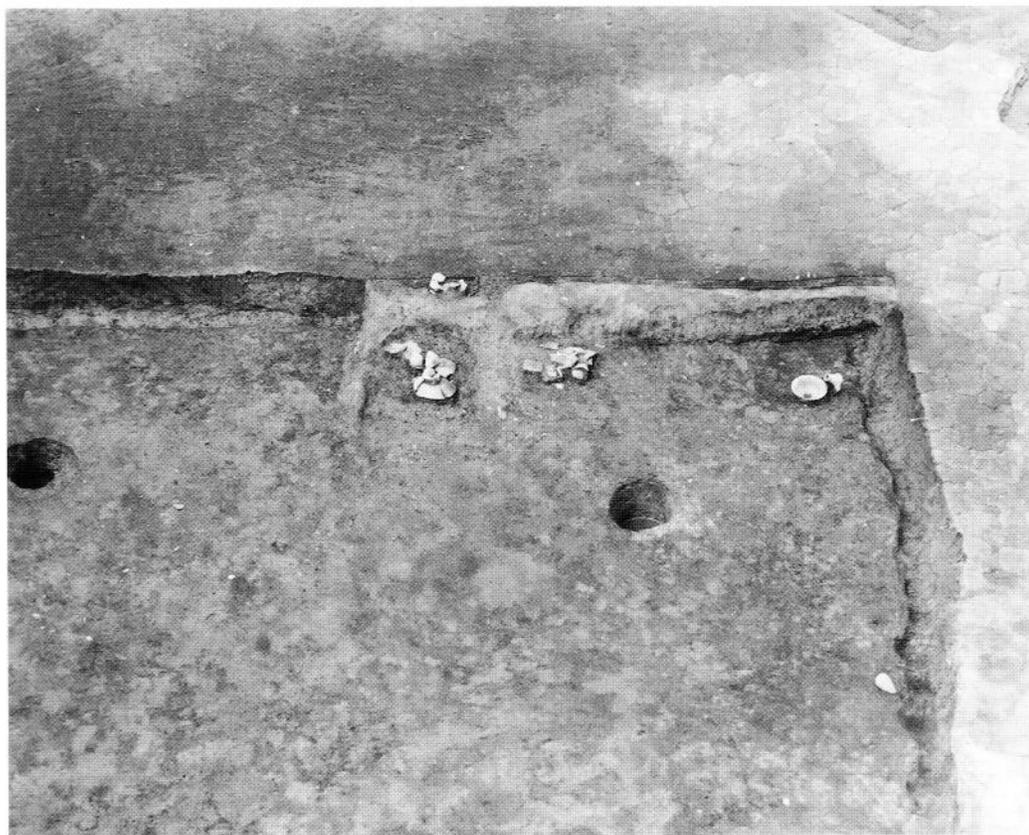
2
26号住居跡（南から）

1
27号住居跡（南から）

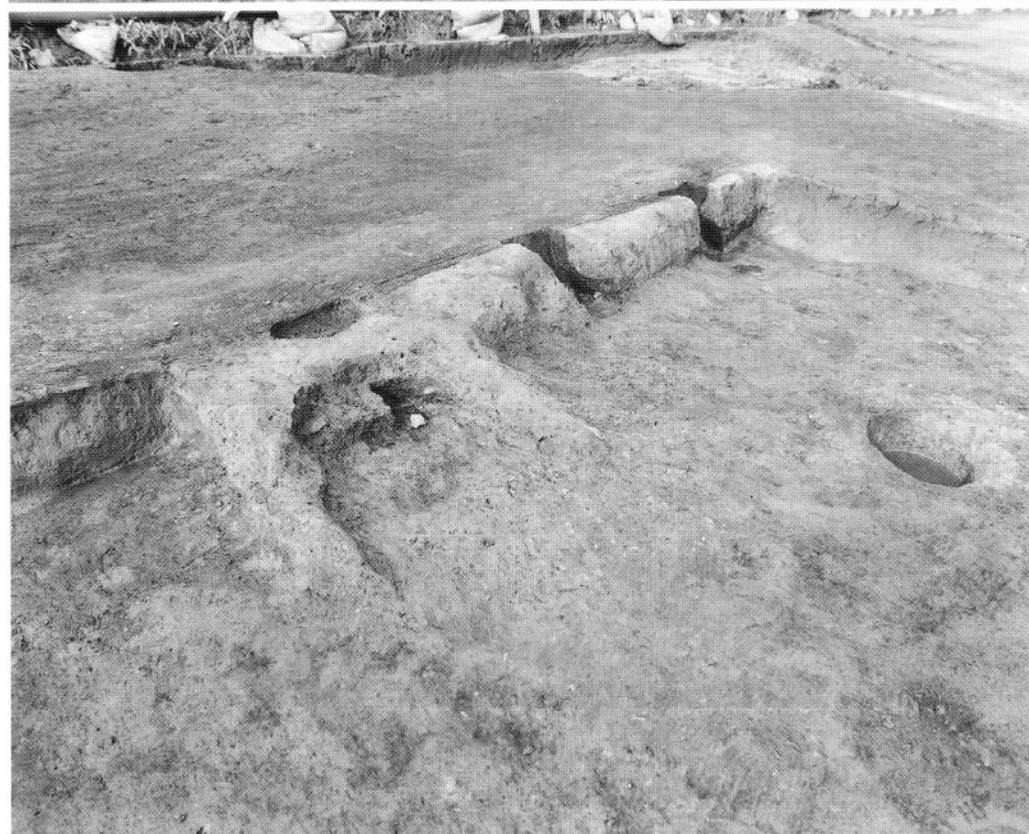


2
27号住居跡遺物出土状態





1
27号住居跡カマド



2
27号住居跡カマド

1
29号住居跡（南西から）



2
30号住居跡（南西から）



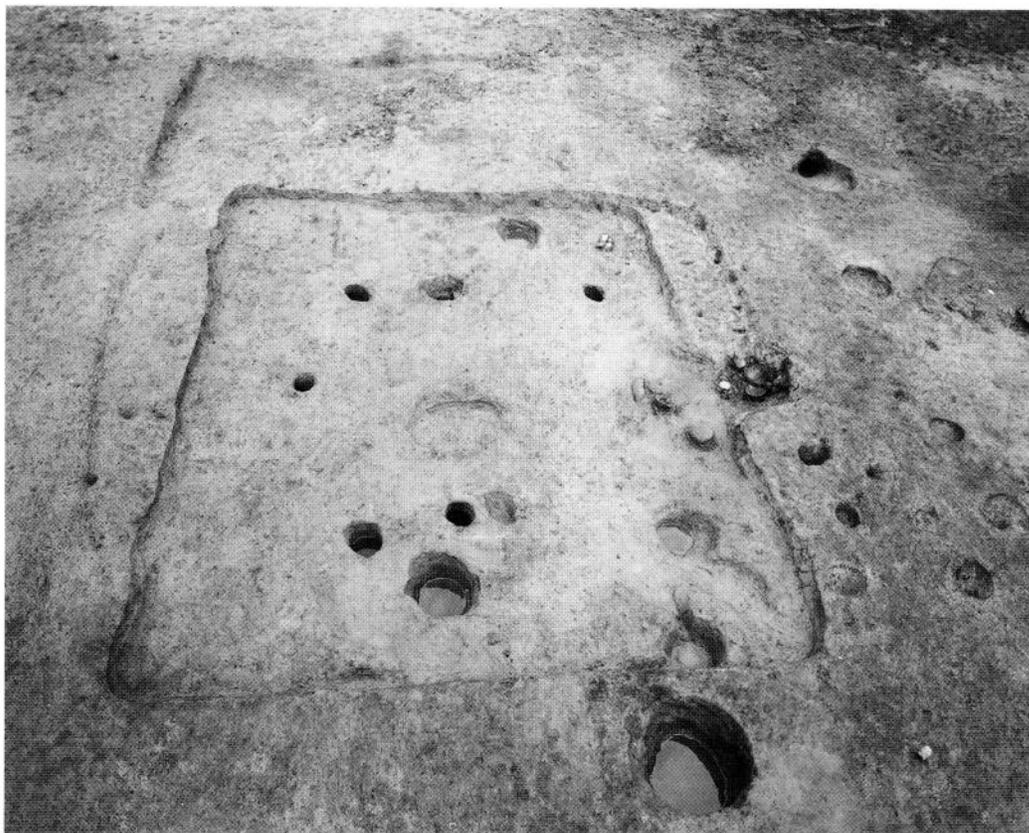


1 30号住居跡カマド



2 30号住居跡カマド

1
31号住居跡（南西から）



2
31号住居跡遺物出土状態



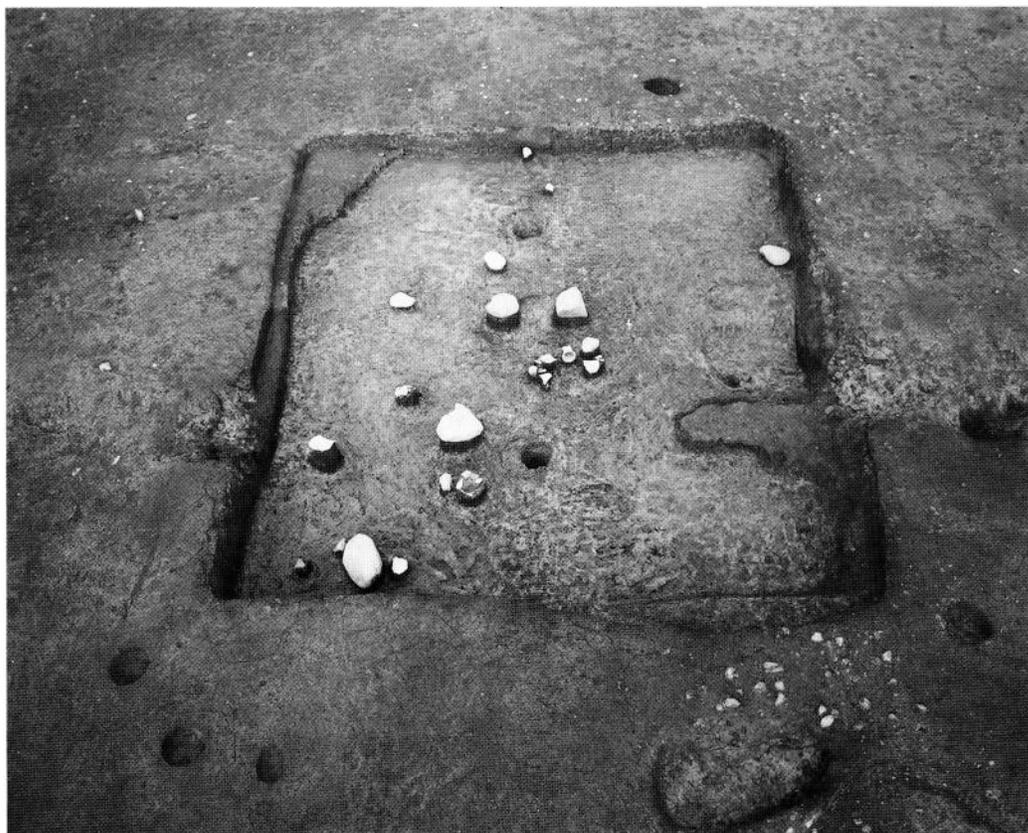


1
32号住居跡（東から）



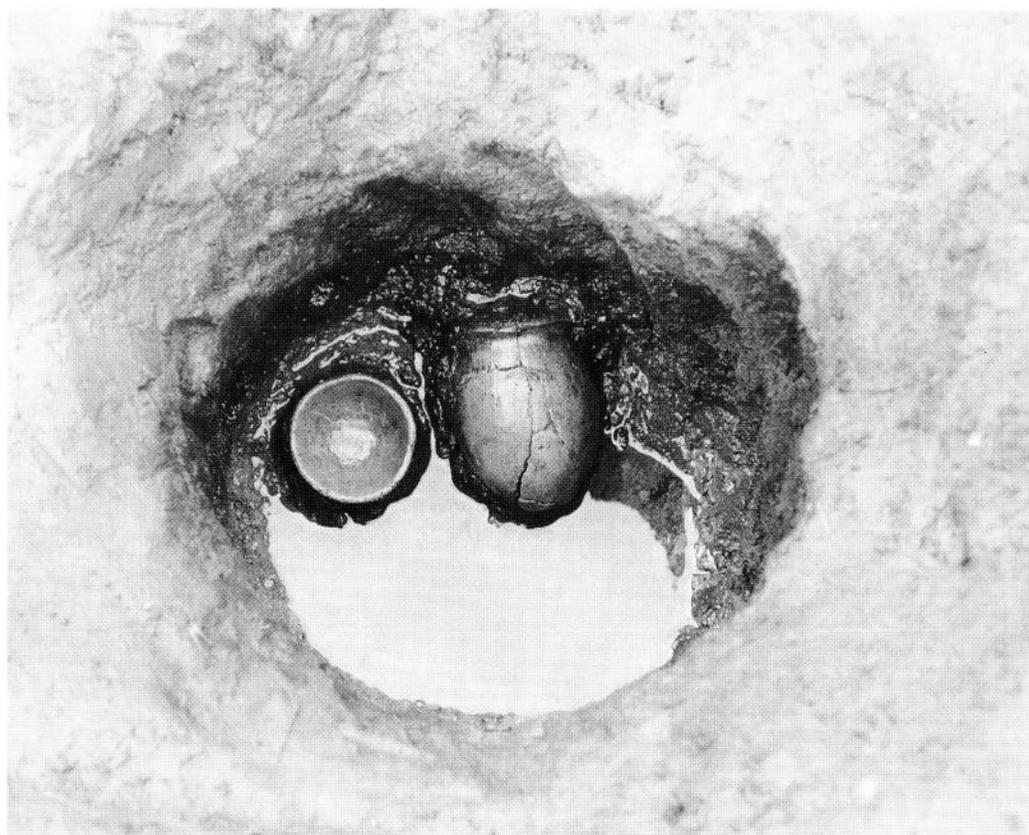
2
33号住居跡（東から）

1
34号住居跡（南西から）



2
35号住居跡（南西から）



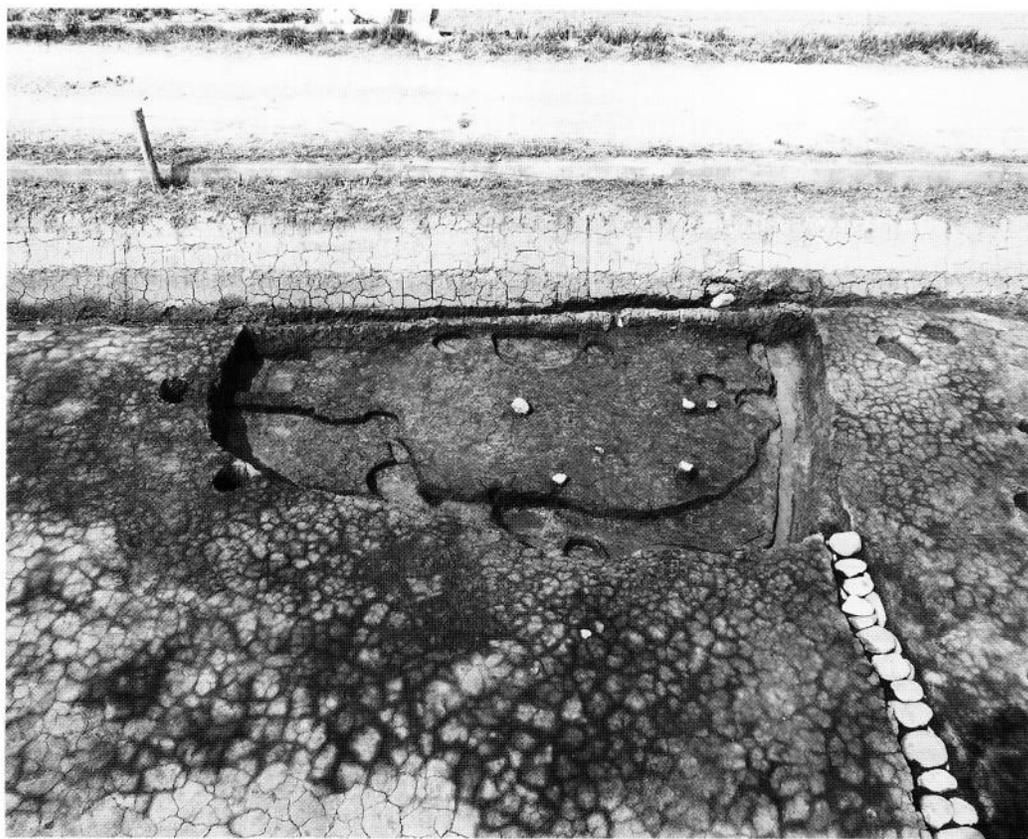


1
35号住居跡屋内土壌

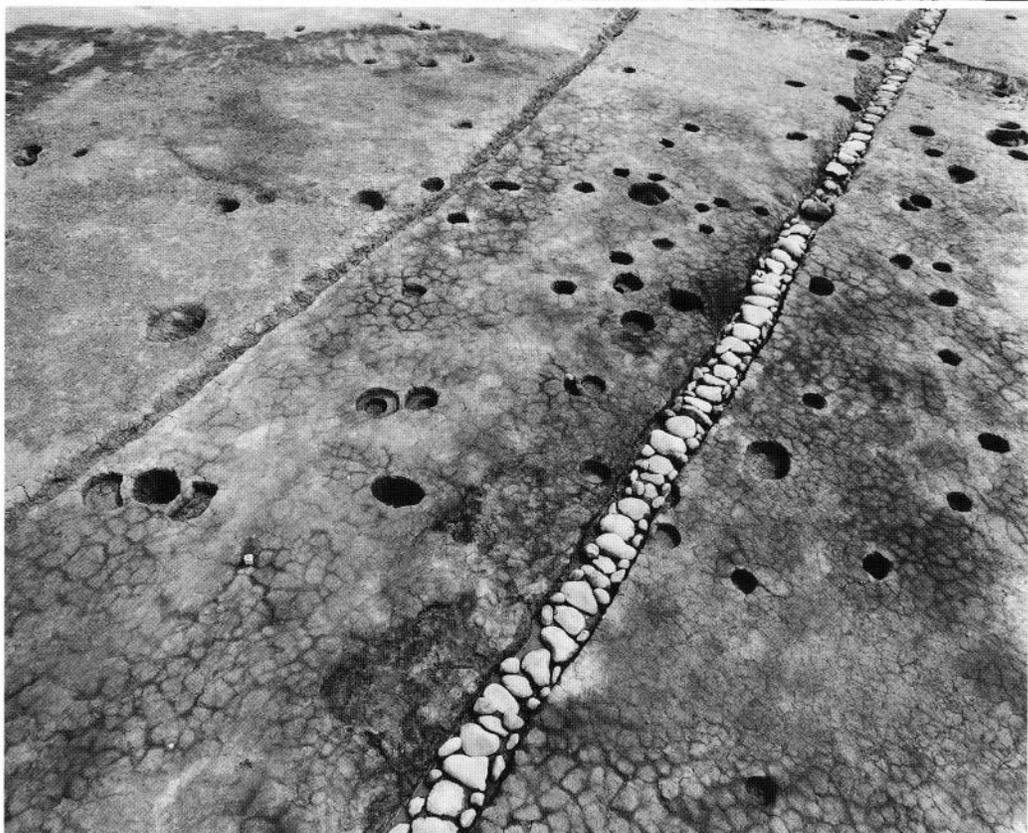


2
36号住居跡(北西から)

1
37号住居跡（南西から）



2
9号掘立柱建物跡・暗渠（北から）





1
3号土坑



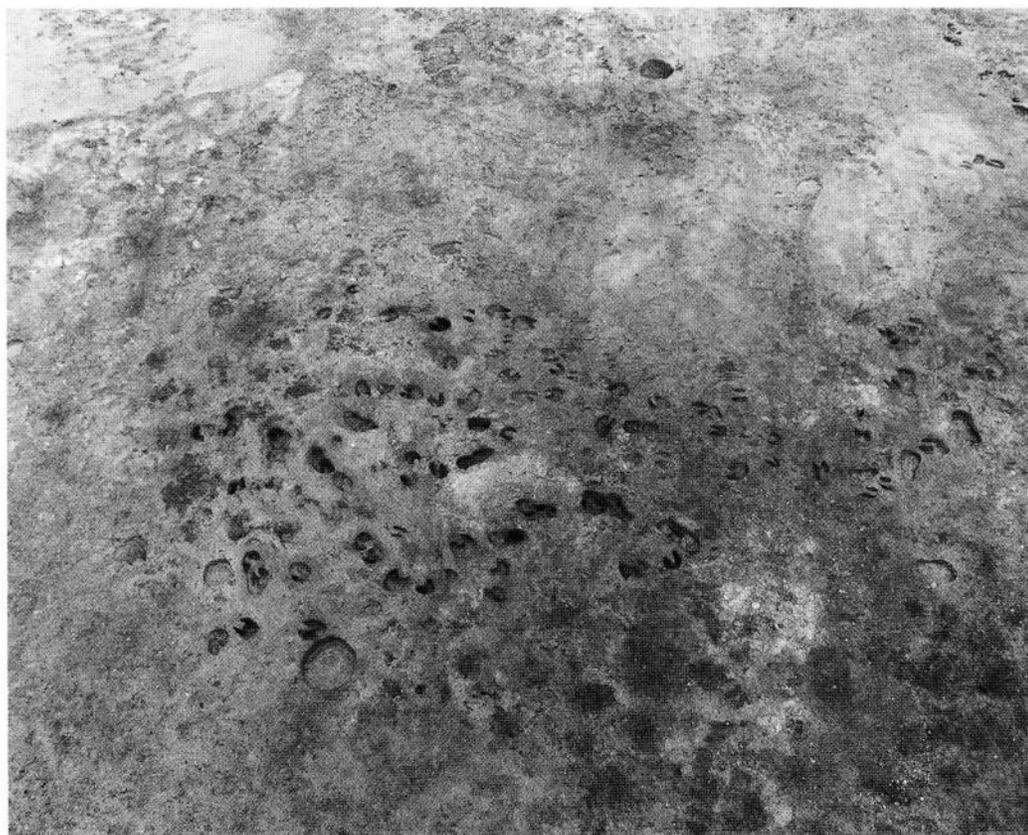
2
4号土坑



1 5号土壇



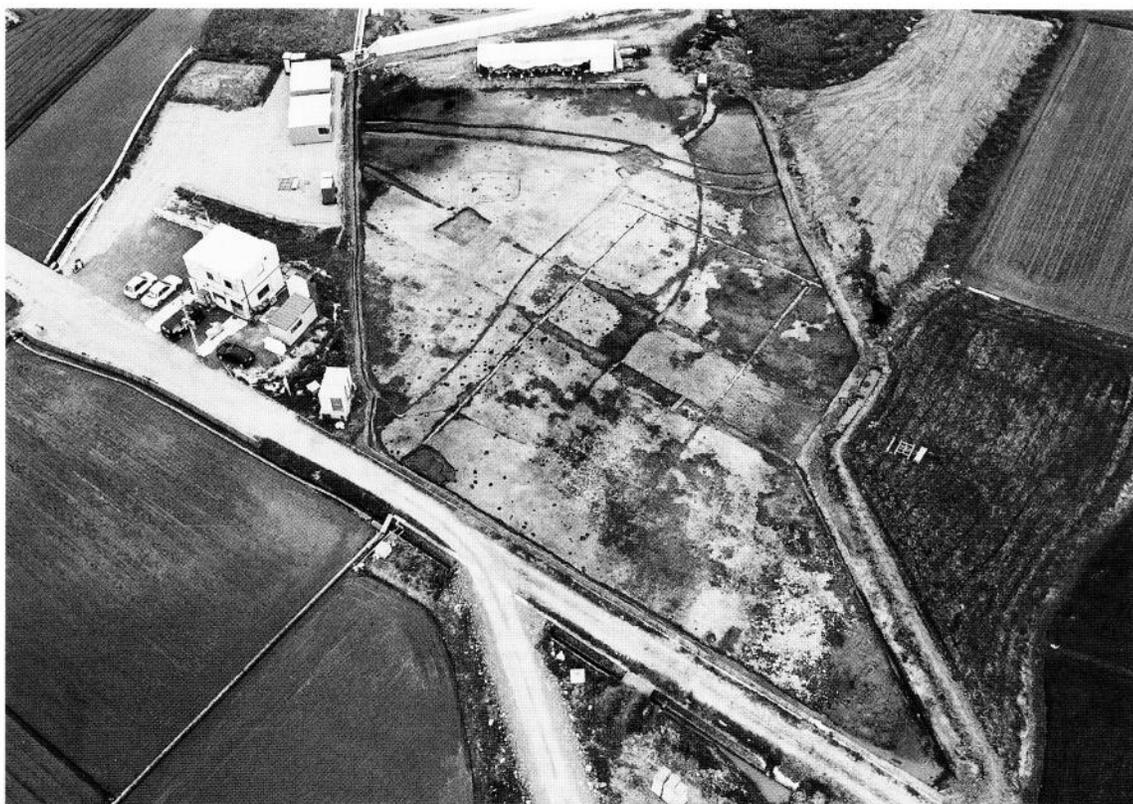
2 2号円形周溝(東から)



1 足跡群（南から）



2 足跡群検出状況（南から）



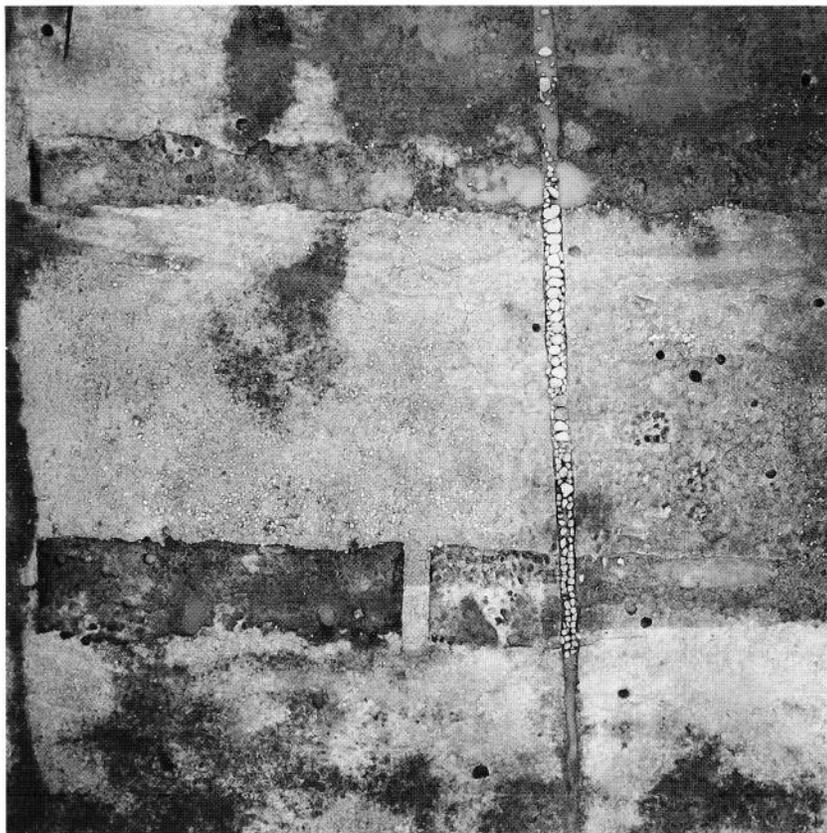
1 官道遠景（北から）



2 官道遠景（西から）



1 官道全景（北東から）



2 官道西半部

1 官道全景（西から）



2 官道全景（東から）

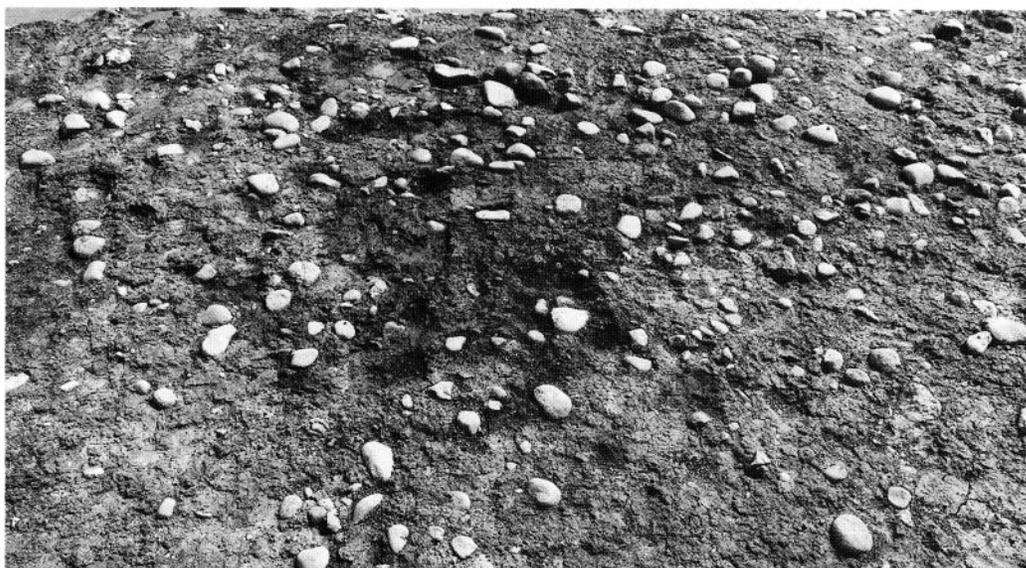




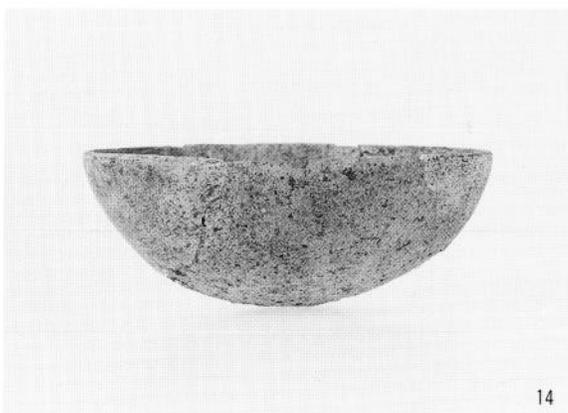
1 官道硬化面検出状況（北東から）



2 官道土層断面（北東から）



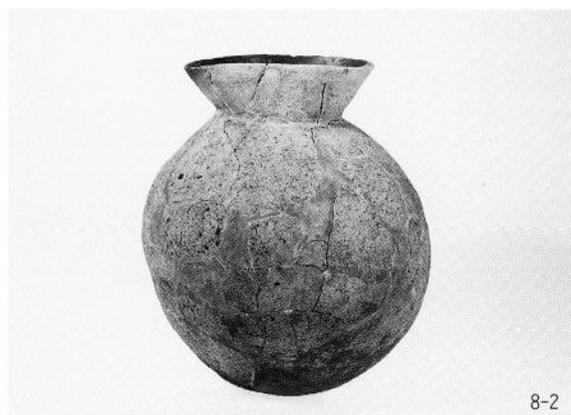
官道硬化面



5号住居跡出土土器



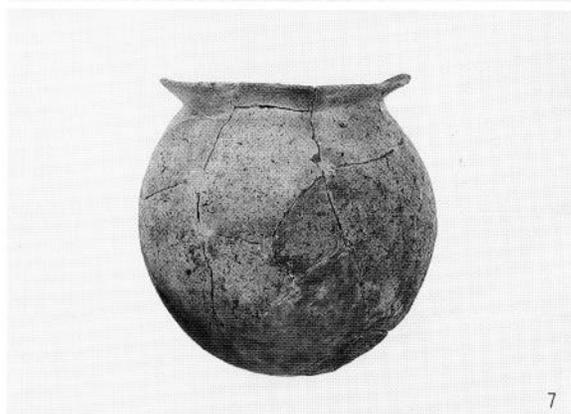
6・7号住居跡出土土器



8-2



19



7



20



9



10-17



11



18



10-20



36



23



37



27



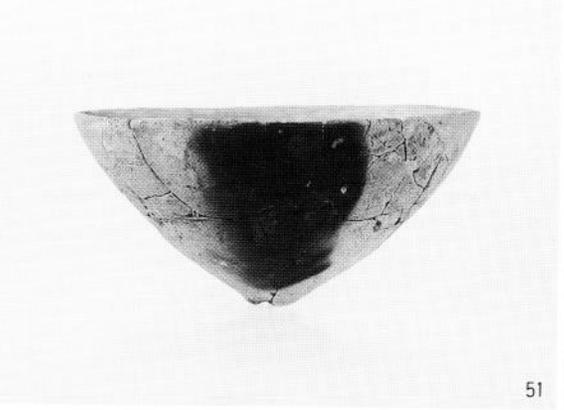
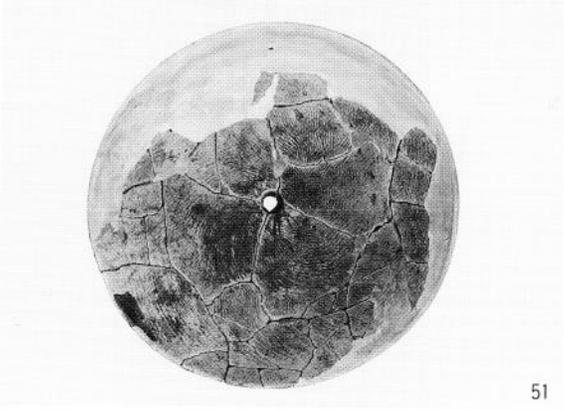
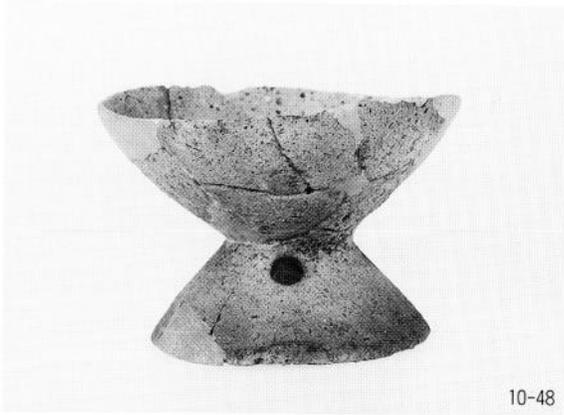
40

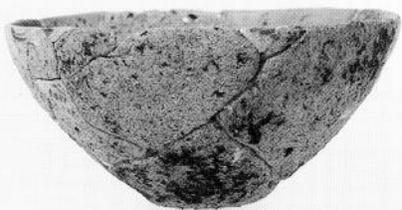


32



44





18-5



5



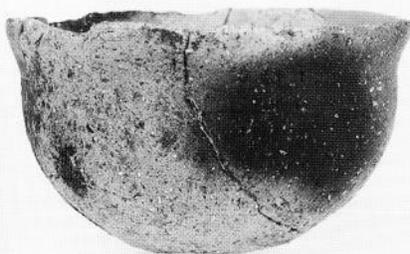
20-2



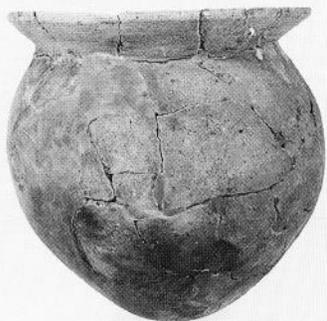
8



3



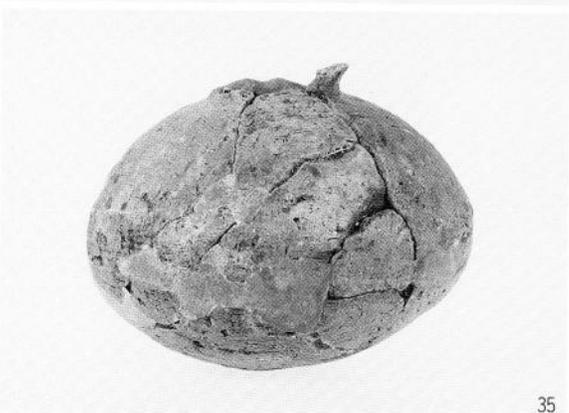
9

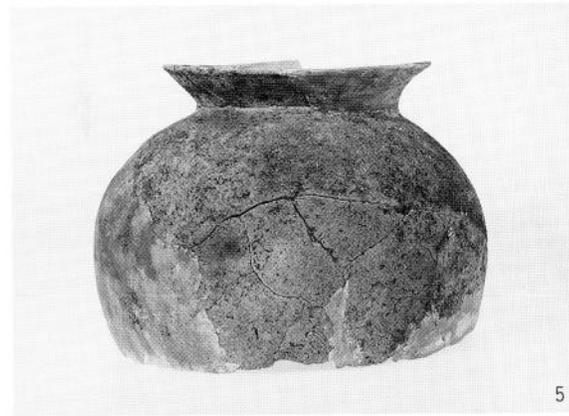


4



10





21号住居跡・2号土壙出土土器



23-2



8



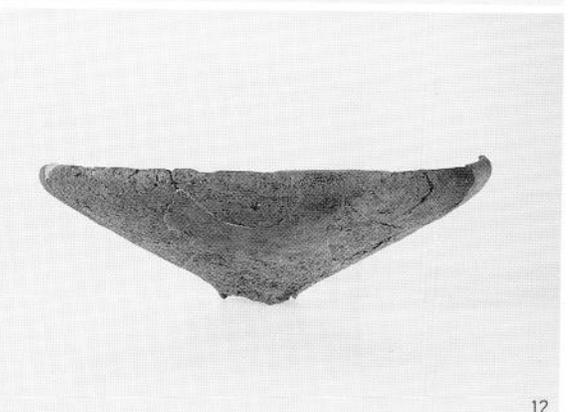
4



10



25-2



12



4



26-1



26-2



13



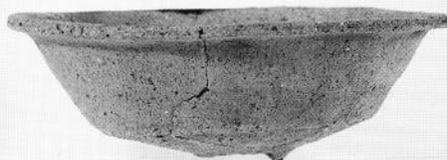
3



18



8



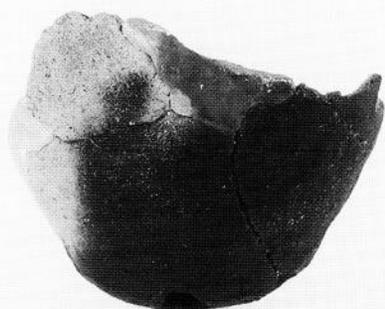
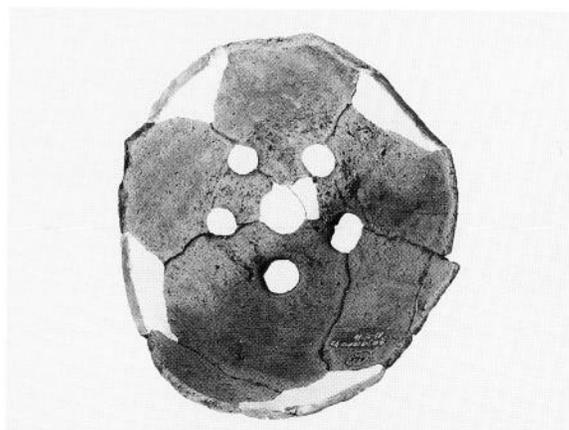
26



10



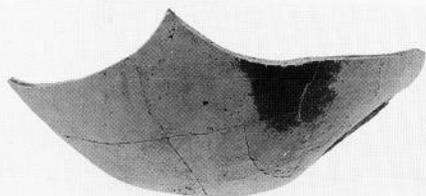
45



26-50



51



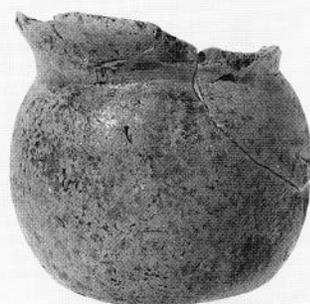
52



53



27-1



2



3



27-5



6



16



7



28-1



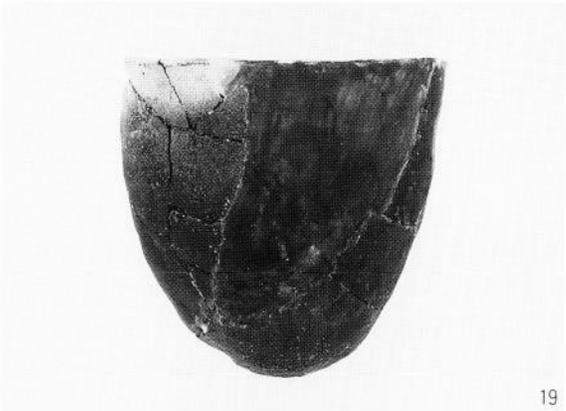
9

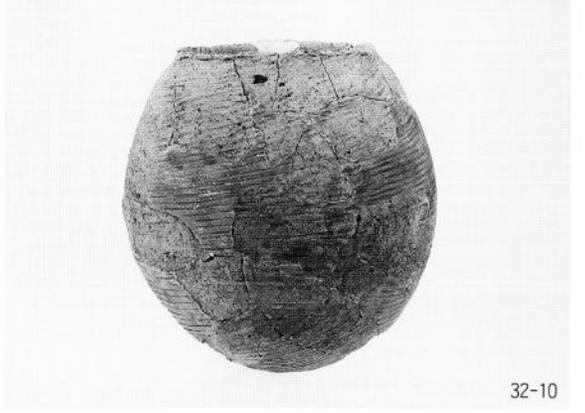
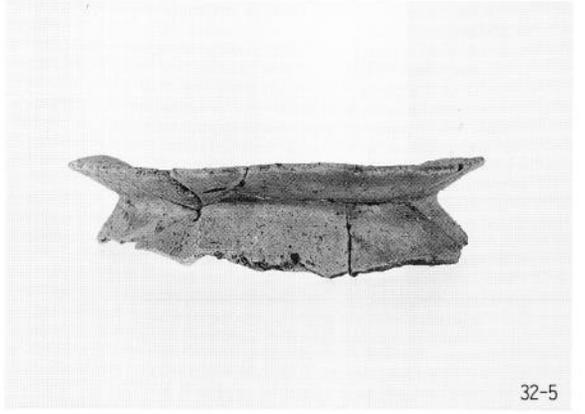


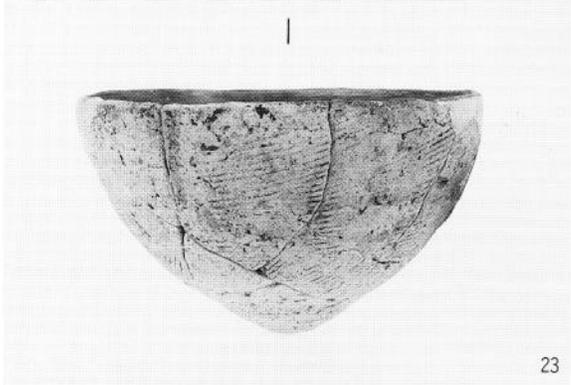
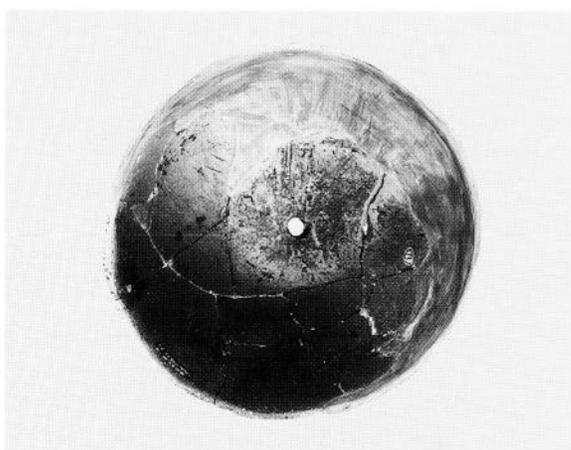
29-2



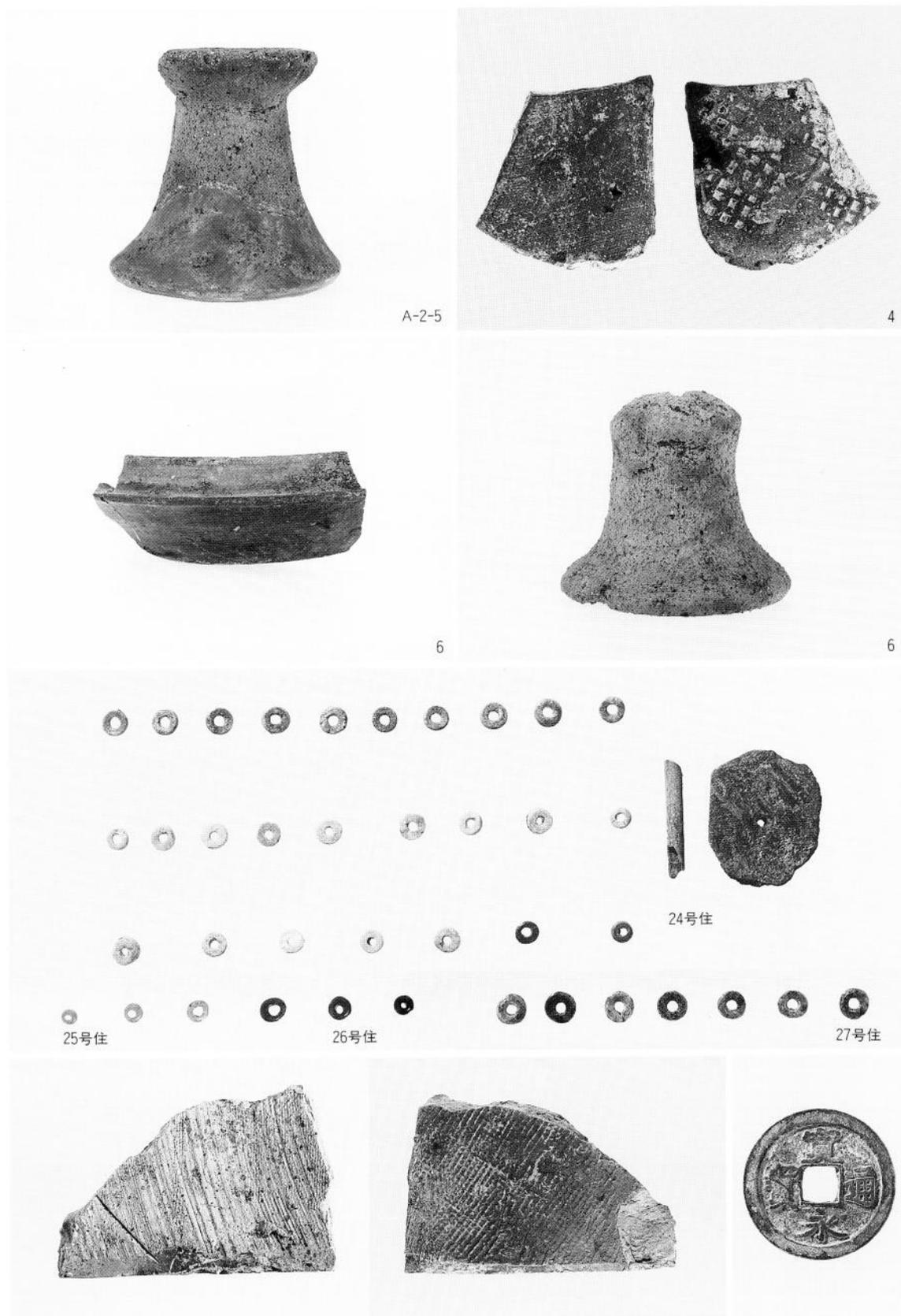
10



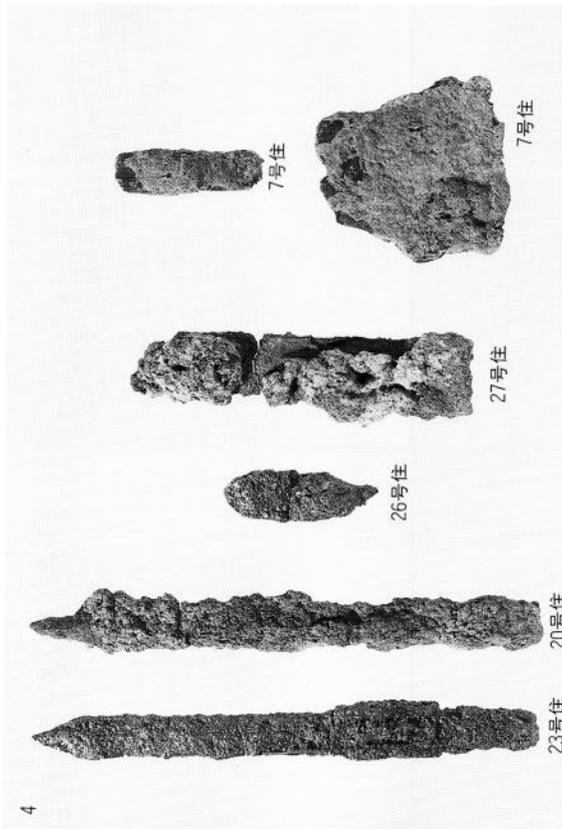
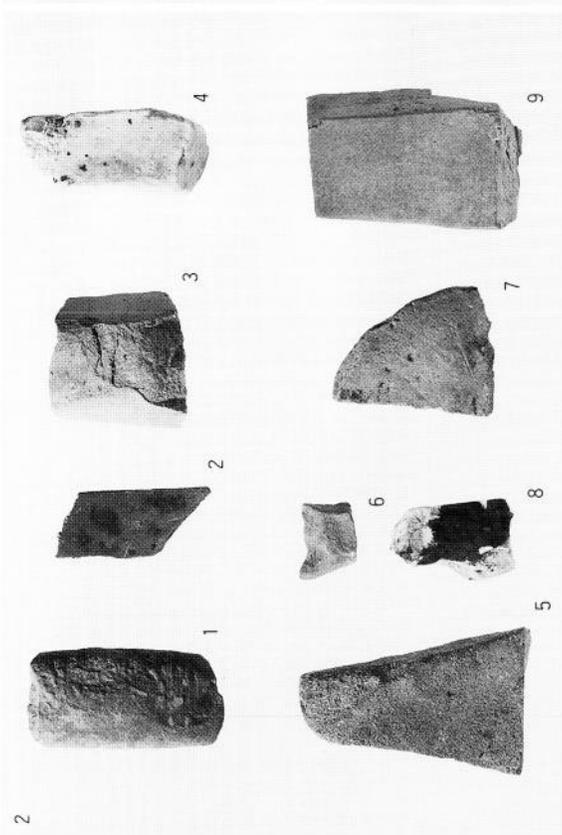
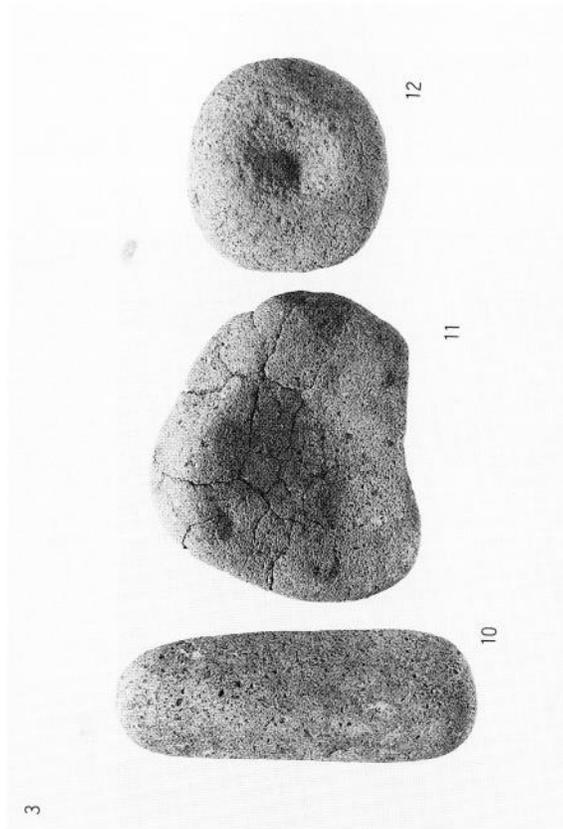
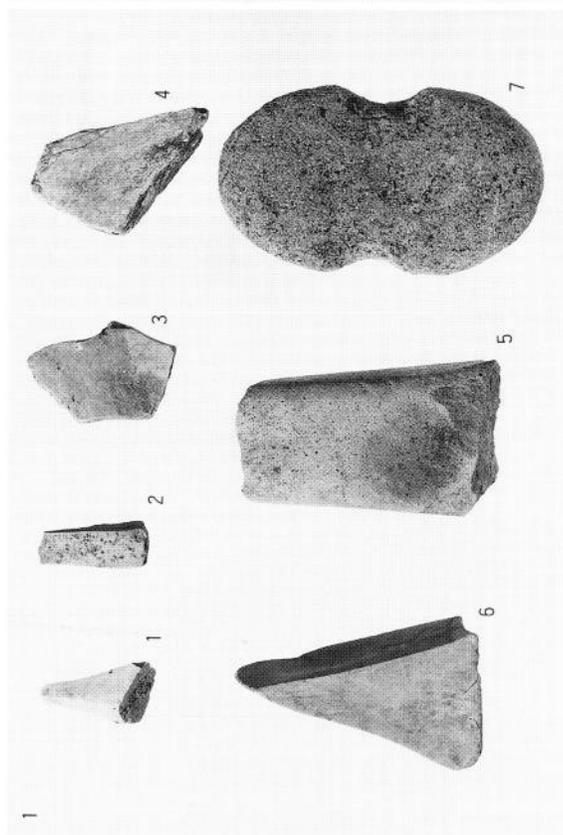








A地区溝A-2(上左)・官道側溝出土遺物(上右)、A地区出土玉類(中)、その他の出土遺物(下)

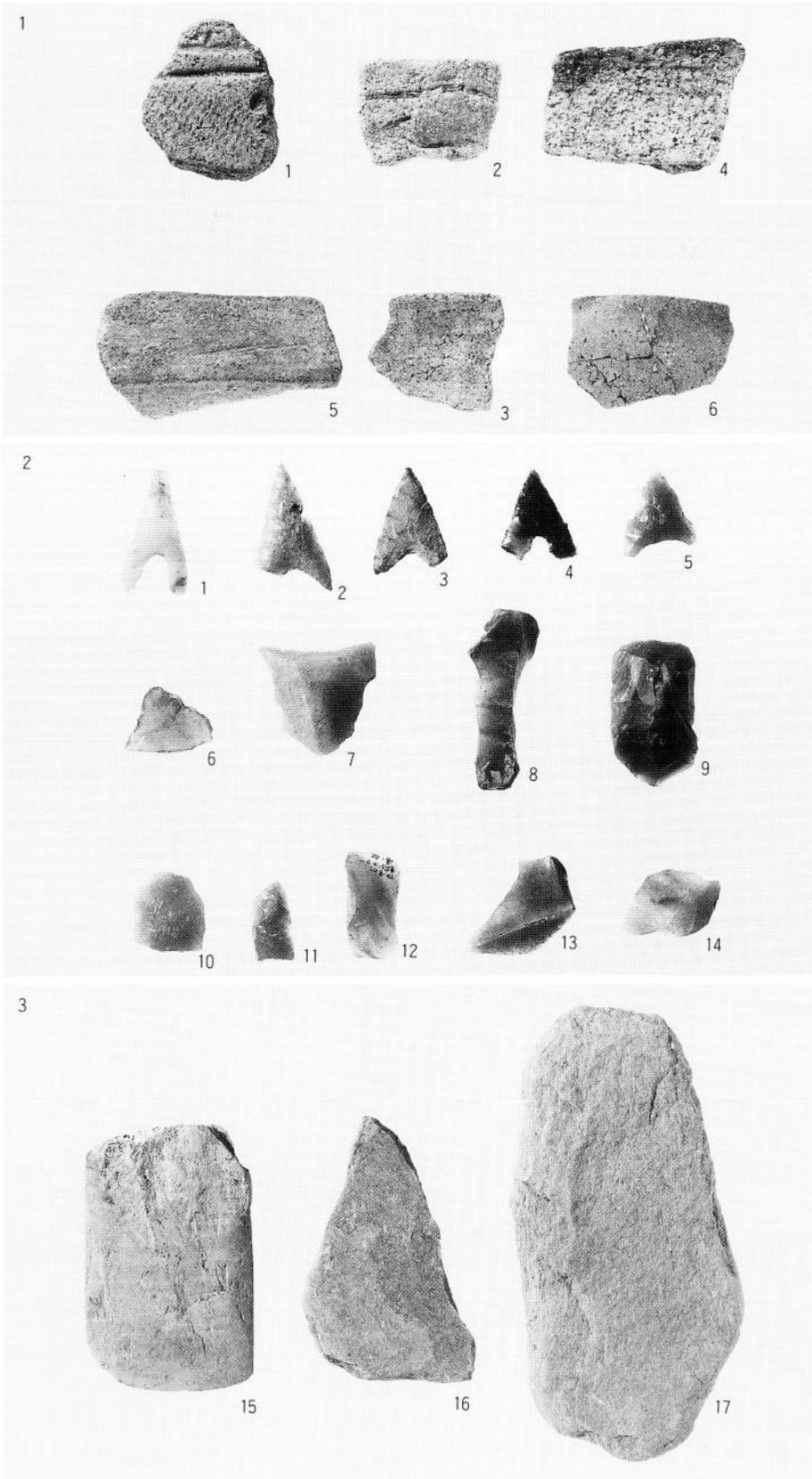


1 B地区出土石器

2 A地区出土石器①

3 A地区出土石器②

4 出土鉄製品



縄文土器(上) 縄文時代の石器(中・下)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いけのくちいせき							
書名	池ノ口遺跡							
副書名	福岡県築上郡新吉富村所在 池ノ口遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	池辺元明・秦 憲二・杉原敏之							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡市博多区東公園7-7 TEL 092(651)1111							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃	東経 〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いけのくち 池ノ口	ふくおかけんちくじょうぐん 福岡県築上郡 しんよしとみむらおおあざ 新吉富村大字 たるみ 垂水 あさみつみぞ いけのくち 字三ツ溝、池ノ口、 いけのした よこみち 池ノ下、横道	40644		33°34' 50"	131°9' 52"	19920901 19940624	14,500	豊前バイ パス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
池ノ口		・弥生時代 (後期～終末) ・古墳時代 ・奈良時代	住居跡 掘立柱建物跡 土壌 円形周溝 溝 道路状遺構(官道) 足跡群	39 5 2 12 1	弥生土器 土師器 須恵器 鉄製品 玉類	古墳時代5世紀前 半代のカマドが検 出された 古代の官道の一部 が検出された		

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 7	登録番号 13

池ノ口遺跡

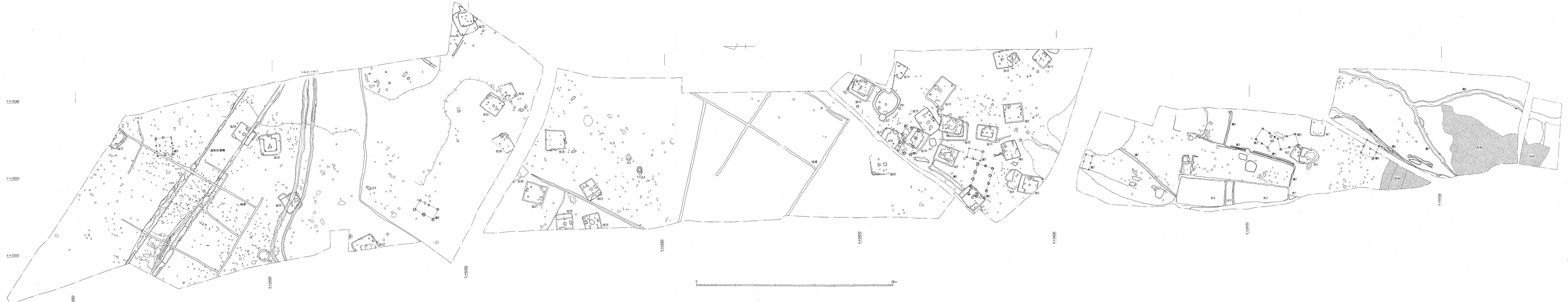
豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 3 集

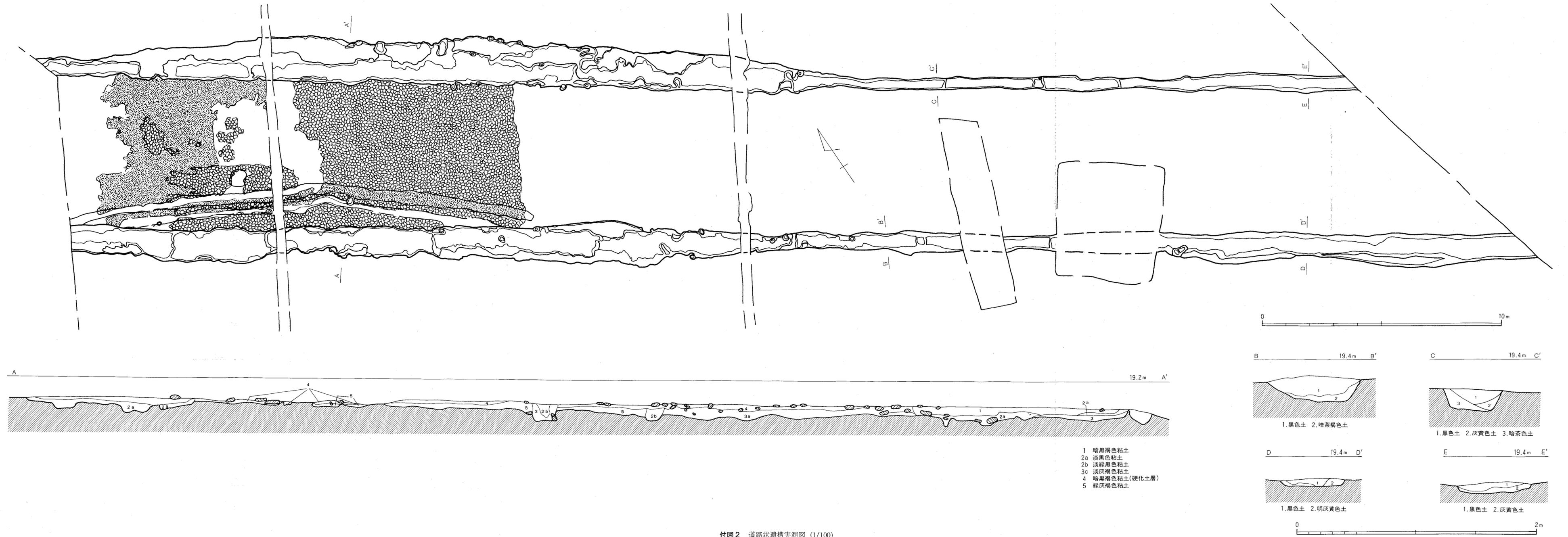
1996年（平成8年）3月31日発行

発 行 福岡県教育委員会
812 福岡市博多区東公園7-7
電話 (092) 651-1111

印 刷 株式会社 三 光
810 福岡市中央区大名1丁目2番20号
電話 (092) 731-6271



付図1 池ノ口遺跡遺構配置図 (1/300)



付图2 道路状遺構実測図 (1/100)